
異界を旅する者

ラク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界を旅する者

【Nコード】

N0592J

【作者名】

ラク

【あらすじ】

いつの間にか異世界に入り込んでしまった主人公が元の世界に戻るために奔走するというありきたりなお話です。暇つぶしに読んでもらえると嬉しいです。基本的に読んで楽しめるように先が気になるように書いていきたいと思っています。

空想（前書き）

初投稿です。色々と至らない点がありますでしょうが、頑張りますのでどうぞよろしくお願いします。

空想

子供の頃から夢見がちな子だとよく言われた。

様々な空想をしたり、それを実現しようと馬鹿なことをしたりして遊んでいた。

中学に上がり、世間の厳しさと現実を少しづつ理解していくにつれてそういう空想をすることはだんだん減ってきた。

そして高校生になり、電車に揺られながら、ふとそんな事を思い出していたのは認める。ああ、認めてやるとも。

『認めるけどさあ：流石にこういう展開はないだろ：』

そう、流石にこの展開はどう考えてもありえない：と心の中だけでツツコミを入れる。

動揺を抑えつつも周りを少し観察してみる。

周りの壁はなんか：ログハウス？みたいで木材で出来た壁みたいだ。少なくとも見慣れたコンクリートで出来ているわけじゃないみたいだ。

そして部屋の隅には、なんか：いかにもファンタジーまっしぐらという感じの見たこともない観葉植物が置いてある。

さらにRPGとかでよくある、いかにも薬草入ってますよ。と言わんばかりな木のタンスがベッドの傍に設置してあったり。

そのタンスの上には少し古そうなランプが置いてあったり。

今まで寝ていたらしきベッドは病院とかに置いてあるパイプ式じゃなくて木造だったりと：

もう、だんだんと自覚し始めているが…ここどこよ？

『…幻覚症状でも起こした…わけじゃないんだろうなあ…』

と軽く現実逃避しながら試しに自分の頬をつねってみる。

『…やっぱり痛い…よな…』

呆然としながら頬から指を離す。

しかし、ついさっきまで電車で揺られてうとうとしていただけなのに何故にいきなりフアンタジー？と当然の疑問を抱く。

とりあえず周りをさらに調べてみる事にする。

もしかしたらよくあるドッキリかもしれないし、と軽く希望を持ってベッドから降りて、そこで気づく。

…服装が制服のままだ。よく見れば学校の鞆もベッド脇にキチンと置いてある。

少し考えた後、鞆を漁って携帯電話を取り出してみる。

授業中に鳴ると即没収のような校則だったため、電源を切っていたのだが…試しに電源をONにしてみることにする。

『……………』

無言で待ち受け画面を見つめる。

案の定アンテナを示すアイコンは圏外となっていた。が、そこで一つ違和感に気づく。

『バッテリー減ってなかったっけか？』

最近充電していなかったので2か1ぐらいしか残ってなかったはずだが、表示されてるのはFULL状態。

おかしいなぁと思いつつもひとまず携帯は使えないと確信し、バッテリー温存のためにも電源をもう一度切る。

そして窓から外を見て、数秒固まる。

『あーあーあー…これはもうドッキリとかじゃなさそうだな、ホントどこなんだよここ…』

明らかに小説や漫画やゲームの中ぐらいにしか出てこないような形の家や塔、畑が見える。

見慣れた電柱やコンクリートでできた道路などがまったく見当たらない。

しかもこれが普通ですと言わんばかりに歩いている人の服装が全て現代の服じゃない。

思わず呆然としたあと、ゆっくりともう一度ベッドに腰掛けた。

空想（後書き）

そんなわけで初投稿です。ご意見ご感想等がありましたらコメントしてもらえると大変嬉しいです。

現状確認（前書き）

とりあえず1話だけじゃアレなので2話目だけでも入れておきます。

現状確認

『（おーけー、ひとまず落ち着け僕。そして現状の把握を最優先にして頭を整理しよう…）』

僕の名前は水城雪兎^{みずきゆきと}普通の高校に通う普通の高校生…だったはずだ。身長はこの前測ったから確か160cmぐらいだったか？

まあいいや、顔立ちは…うん、鏡を見ればわかるよね。普通のどこにでも居そうな顔してる…悲しくなんかこない…たぶん。

よし、とりあえず思い出せ今日の行動。

えーっと朝は朝食を摂って、電車に揺られながら30分ぐらい移動して、学校に着いて、友達と馬鹿話をしたりして、授業を割と真面目に受けて、放課後になって、帰りの電車に揺られながら…特に寄り道もせずに帰ったはず。

『（うん、特に変な事もしてないはず…至って普通の日常だ…）』

首を傾げながら上半身をベッドに投げ出す。

意外とフカフカだ、と言うかこれも素材違うんだろうなあ…やっぱり。

と、そんな場違いなことを考えながら布団らしきものを手で触っていると…唐突に部屋のドアが開いた。

『あ、起きたかい？。体は大丈夫？』

そう言って入ってきたのは20代ぐらいのポニーテールの青年。

ただし、日本人とは程遠い容姿をしていた。

髪の色がアニメや漫画とかでよく見かける変わった色…透き通るよ

うな青だ。

身長は、見た感じ結構高い：180cmぐらいはいつてそうだ。
服装はセーターみたいな服とジーパンのようなズボン、その上に白衣を羽織っている。

顔立ちは正直整っていてイケメンってやつだと思う。

外見だけを見ればファンタジー村のお医者様って感じがする。

だが：ケチャップだろう赤い液体が頬にべたーっと付いているのは
いかなものか…。

『うん？私の顔に何かついてるかい？』

『ええと、あえて言うならケチャップらしきものが頬に…』

頬に着いていることを指で指しながら指摘する。

青年は左手を頬に持っていき、指でぬぐって舌で舐め、あははと笑う。

『…あ、本当だ。ってそうじゃなくて…まあいいか。見たところ体に異常はなさそうだし…』

『えーっと、助けてもらった…のかな？僕』

『ああ、そうだよ。正確には倒れてたのを拾ってきたが正しいんだ
けどね』

『…倒れてた？』

『覚えていませんか？君は道の真ん中で倒れてたのですが…で、私
がここまで運んできたわけですね』

『……………』

全然まったく覚えがないのはどうしてなんだろう？

少なくとも気を失っていた感覚はまったくない…急に視界が変わった認識しかしていないのに、これはおかしい…でもまあ、とりあえずはお礼を言うべきだよね。

『あ、自己紹介が遅れたね。私はミスト。ミスト・ファラール。見ての通りこの村で医者やってるんだ』

『あ…えっと、助けていただいて？ありがとうございました。僕は…水城雪兎です』

『ああ、礼は構いません。こちらも君の荷物勝手に物色しちゃいましたので…』

『……………は？』

『君は珍しい格好してたからね…不審物が入っていないか勝手に荷物を物色させてもらいました。で、単刀直入にお聞きますが…』

『いや、ちょっと待った。人の物を勝手に物色って…』

いくら助けてもらったとはいえ、勝手に物色されるのは良い気分はしない。

まあ…見られて困るものなんて持っていないが…。

『申し訳ありませんがこちらも事情がありまして…それで、改めてお聞きますが…君は「異通者」でしょう？』

ミストさんにびしっと指を指されて少しびくりと体を震わせる……って異通者？

僕がよくわからずに首を傾げているとミストさんが顎に手をやりながら続ける。

『ふむ、そうでした。君はそれもわかりませんね。……えっと「異通者」っていうのは別世界から来た人の事を指します。……少なくともこっちの世界では』

『こっちの世界……もしかして別世界ってやつですか!？』

『そうです、君の居た世界では……その鞆に入ってた電子機器でしたね? そういうのがたくさんあるんでしょう?』

『ええ、まあ……』

日常的に使っていたので嘘ではない。

パソコン・携帯電話などは特に使っていたからなあ。と言うかノートパソコンと携帯電話はその鞆の中だし。

『で、私たちの世界……つまり、君が今いるこの世界ではそちらの世界から見たらちょっと変わった力が発展しています。こちらではコレです』

そう言ってミストさんが指を一本立てる。

次の瞬間。指の先端に赤い炎が灯り、僕は啞然とした。

なんだ……あれ? もしかしなくても……魔法とか言わないかな?

『まあ、ある程度予想できているかもしれませんが……いわゆる魔法

と呼ばれるものです。君には信じられないでしょうが』

『……うーわー……』

思わず額を押さえて天井を仰ぐ、正直ああいう得体の知れない現象を見るとワクワクするだろうと小さい頃は思っていたのだが、今では戸惑いのほうが大きい。

と言うか、ぶっちゃけ帰りたい。

なんか既に面倒ごとに巻き込まれてる感じがして非常に元の世界に帰りたい。

『まあ、信じられないのも判ります。私も似たようなものですし…』

『……ああ、なるほどそっち側から見れば電子機器も似たような気分になれる…わけですか』

口に出してみても納得する。確かに僕の場合は戸惑っているが…目の前のミストさんは逆に興味深いといった感じがする。

確かに電子機器がまったくくないこっちの世界の人から見れば興味が出るだろうと思っていると。

『いえ、そこまで驚いているわけではありません。こちらの世界でも電子機器はあるにはありますが、何分高価な品なのでこの村には一つもありません』

『なるほど、魔法が発展しているからこそ科学的文明が遅れてるわけですか…』

『そういう事です…それで？君どうしたいですか？』

『…どう？と言いますと？』

『やはり、元の世界に戻りたいですか？』

『そうですね…正直に言うのと帰りたいですね。妹も心配しているでしょうし…』

妹…雪菜のためにだけでも帰りたいと思う。

両親は…まあ、放任主義が徹底しているから絶対気になってない…つてよくよく考えたらそれってまずくないか？

あの両親の元に雪菜一人だけって…いや、今は考えないようにしよう。うん（汗）

『そうですか。それでは当面はしばらく私の家で暮らしますか？幸い部屋は空いていますから』

『えっと、いいんですか？』

『成り行きとはいえ関わりあいを持ちましたからね。それに、ちょうど助手があと一人欲しかったところですし。私は全然構わないですよ』

しばらく考えてみたが、よくよく考えると行く当てもないので当面お世話になることにした。

『…それじゃあ申し訳ありませんが、しばらくお世話になります』

『こちらこそよろしく願います…っと、そうでした』

『はい？』

『こちらの世界では君の名前はあまり馴染みませんからね、偽名を決めておいたほうが良いと思います』

：ああ、なるほど。こっちの世界じゃ水城雪兎って名前は異色過ぎるよなあ。

別にバレてはいけなくてわけじゃなさそうだし…このままでも良い気がするが、確かに馴染まないかもしれない。

それに、面倒ごとに巻き込まれないためにも必要そうだ。

『じゃあ…「ユキト」っていう名前は残したいんですけど…どうですかね？』

『ふむ…それは大丈夫だと思いますよ？流石にセカンドネームは…変えたほうが良いと思いますが。当面はユキト君でいいですか？』

『はい。それじゃあ、しばらくの間よろしくお願いしますミストさん』

『こちらこそよろしくユキト君。ところでお腹は空いていませんか？ご飯を一応用意しているのですが…』

『あ、じゃあ。お願いします。実は結構お腹空いてて…』

『そうですか。じゃあすぐに持ってきてきましょう。しばらく待っていてください』

そう言って少し笑ってからミストさんが部屋を出て行き、僕はベッドの上に体を投げ出す。

こうして僕は、ちょっと変わったこの異世界で、第2の人生を歩き始めることになった。

現状確認（後書き）

とりあえず2話目です。ご意見ご感想お待ちしております。

新生活（前書き）

3話目です。急にアップしたので慌てて誤字脱字修正かけたけど、間違いないですよね？（汗

新生活

現在、僕はめっちゃくちゃ無茶な格好で悩んでいた。
悩みの種は目の前に生えている草だ。

『うーん…本当にコレなのかなあ?』

目の前の薬草らしき物を資料集に載っている写真と見比べる。コレで本当に間違いないんだろうか?

微妙にどこかが違うような気がするんだけど、色や形は一緒のような気がしないでもない。

『ちょっと!まだやってんの?さっさと終わらせなさいよ!』

崖の上の方から今朝知り合ったばかりの少女の怒声が聞こえる。

そんな事言われても、僕は薬草なんてももの初めて見たんだから時間がかかるのは仕方ないと思うので抗議する事にする。

『…しようがないだろー?僕は初めてなんだし、それに薬草に詳しいのは君なんだから普通なら君が…』

『ほほう、か弱い女の子にこんな危ない崖にある薬草を摂って来いと?あんたはそう言うわけね?』

『……………』

か弱いねえ…と言おうかとも考えたが、ここで命綱となっているロープを放されると僕が危険なので何も言わないことにする。

…うん、正直死ぬだろうしね。この高さだと。
よし、これに間違いないと踏んだ薬草を少しだけ摘み取ろうと手を伸ばす。

『おつとつと…』

急な横風に体が流されそうになるのを何とか踏みとどまって耐える。
うーん。やっぱりこれ慣れているアイツがやるべきじゃね？と言う
か日常的にこの場所に来ているアイツのほうが適任な気がしてくる。

『だいたい…今日は風が強いんだから、アタシがそんな事したらス
カートが捲れちゃうじゃない』

いやまあ、確かに今のお前の格好…少し短めのスカートだと捲れる
かもしれないけどさ。

『…こんな場所じゃあ下から覗く奴なんていないんじゃない？…』

聞かれないように小声で愚痴りながらも崖に生えていた薬草を適当
に摂り、腰のバッグに仕舞うとロープを伝って崖を登りきる。

『ふう…まあこれぐらいで問題ないかな？』

『ほら、ぐずぐずしてないでさっさと次行くわよ』

『…あのさ、そろそろ少し休憩しない？』

『何、あんたもしかしてもう疲れたの？だらしないわねえ…男の癖
に』

『いや、そうじゃなくてだな…』

『何よ?』

ぐぎゅるるる…と申し合わせたかのように目の前の少女と僕のお腹が鳴る。

さつと顔を赤らめてお腹を押さえる少女…こいつ、絶対忘れてたな。

『ま、こんな感じでそろそろお昼ご飯の時間を大幅に過ぎてるわけだし、一旦休もうよロナ』

『くっ…このロナ・ポナルル。一生の不覚だわ…ユキにこんな恥ずかしいところ見られるなんて…』

ロナが顔を真っ赤にして悔しそうに言う。

いや、どうでも良いと思うんだが。生理現象なんだし…まあいいか。

そう、現在僕は今異世界で薬草探しの真っ最中だったりする。

昨日この世界に飛ばされ、今日はその村からちょっと離れた崖近くまで来ている。

目的はミストさんが必要としている薬草だ。

こちらの世界を知る意味でもこの辺りの地理を理解しておくのも良さそうだったので喜んで引き受けたのだが…。

『だいたい、モグモグ。ユキがゆっくりし過ぎなのよ。だからアタシが昼食摂る事も忘れるぐらい、モグモグ。頑張らないといけないんじゃない』

サンドイッチ（ミストさんお手製）を齧りながらロナが言う。

『うん、口に食べ物入れてる時に喋ろうとしなくていいから…喉に詰まるぞ?』

『もがっ』

忠告したとたんにロナが首を押さえる…こいつ狙ってやってるわけじゃないよな?

と、そう思いつつも表面上では少し呆れた表情をしながらも手元に置いてあった水筒からお茶をコップに注いで手渡す。

そう、目の前の変なおまけが着いて来た。

朝起きたあと診療所で薬草のリストと資料集を渡され、いざ行こうとした時に診療所に来たのが彼女だ。

どうやら件のもう一人の助手さんらしく、初めて見たときは女性関係にはまったく疎い僕でも素直に可愛いと思った。

髪はミストさんと違うオレンジ色で頭の横で二つに結んであり、服は青いTシャツに白いスカートそれにクリーム色の丈の長いジャケットを着ていて、

身長は僕より頭一個分ぐらい背が低く、華奢な体つきでおしとやかな印象を受けた。

だが、第一声でそのおしとやかな印象は即崩れ去った。

『こんなやつが新しい助手なの? ミストさん?』

…流石に初対面でこんなやつ発言は地味に凹んだなあ…。

で、なんだかんだ言われつつも薬草を朝からずっと探していたのだが、周辺の地理を説明されたり、資料集を見ながらの作業だったため時間がかかりすぎた。

そのため、こんな遅い時間の昼食となってしまうたわけである。

ようやく喉が通ったのか、ロナが僕に話しかけてきた。

『ふう：そういうえば、ユキって異通者なんだっけ？どうりで何にも知らないわけよねー使えないわー』

『む、使えないとは酷いな…まあ、事実だから反論もできないけど…』

実際ここまで足を引っ張ってるのは自覚していたが、仕方がないと思っていた。

最初は誰だって初心者で、例えそれがどんなことであっても大変だ。それが持論だったし、これからも変えるつもりはなかったんだけど…。

『…確かに、いつまでも足を引っ張ってばかりだと流石に焦るな…』

さっきから資料集と見比べながら薬草を採っているのでちっともはかどっていないのが現状だ。

僕は他人に迷惑をかけるのがあんまり好きじゃないから尚更気分が滅入る。

『あ、それは大丈夫よ？』

『うん？なんで？』

『最初っからユキに期待なんてしてないし、荷物持ちにでも回ったら？』

『おい…今、地味に凹んだぞ。そのセリフ』

これでも一応男なので女の子に負けてるのは微妙に悔しい。
それにいくら初心者と言えども、最初はちよつとぐらいは役に立て
るだろうと考えていた分だけ凹む。

『ま、はじめは皆そんなモンよ。それに薬草の見分け方はわかって
きたんでしょ？これから頑張ればいいじゃない』

『……………』

『な、なによ？』

『いや、初めてロナから優しい言葉を聞いたものだから感動してた』

『…あんた一回崖から転がり落ちてみる？』

『大変申し訳ございませんでした！』

襟首辺りを掴まれて慌てて謝罪する僕。

何せ崖の上から僕ぐらいの体重をロープで軽々と支えていたぐらい
だから、こいつの力は結構強い、なので早めに謝るのが吉である。

『まったく、素直にアタシを崇めれば問題ないでしょ』

『いや、崇めるってどうよ…素直にありがとうって言いたいだけだ
つてのに…』

お茶を飲みながら答える。

まったく…神にでもなりたいたのかこいつは？

とか考えているとロナの様子がおかしいことに気づく。

『うん？どうした？』

『い、いや。別に…なんでもないわよ？』

『って言うか顔がめっちゃくちゃ赤いけど…もしかして照れてる？』

『ニヤニヤしながら本人に聞いてくるんじゃないわよ！』

何気なく感謝されたことが恥ずかしかったのか、先ほどまで昼食が入っていたバスケットや菓草の詰まったケースを投げてきたので慌てて避ける。

うむ、うすうす気づいていたが、からかうと意外に楽しいかもしれない。これはいい暇つぶしになりそうだ。

そんなことを考えながらニヤニヤしているとロナが焦ったように立ち上がる。

『ほら！もう行くわよ！まだまだ集めなきゃいけない菓草はたくさんあるんだから！』

『りょーかい』

やる気のなさそうな声を出してから立ち上がる。

あとから少しずつ弄るのがこいつには効果的というのがわかりきっている。なので今は我慢だ。

なので僕は適当に思いついた話題を振っていくことにする。

『そういえばさ、ロナは魔法使えるの？』

『もちろん使えるわよ。と言うか、逆に使わない人が少ないんじゃないかしら?』

『…僕も使えるかな?』

そう言うってから自分の手のひらを見つめる。

昨日は戸惑っていたが、時間が経って徐々に冷静になってくると興味がわいてくる。

漫画やアニメや小説といった物語に出てくるような魔法が自分で使える。

そう考えるとだんだん興奮してくる。

『そうね、異通者って人達は大抵こっちの世界で能力が解放されるらしいし…ユキも案外凄い力持っているのかもね』

『ふーん…そうなんだ』

なんでも異通者たちは皆強大な力を持つらしいが…その理由はわかっていないらしい。

僕がこの世界に飛ばされた理由もわからないし、そこらへんの謎がまだ解明されていない。

『…試しに魔法使ってみる?』

『…いいの?』

『いいも何も消費されるのはユキの魔力なんだし、問題ないでしょ』

『じゃあ、なるべく簡単なやつ教えてくれよ』

わくわくしながら呪文を聞いてみる。

魔法って言ったらやっぱり呪文でしょ？詠唱でしょ？
と思うのは僕だけじゃないはずだ。

『簡単な魔法なら詠唱はいらないわ。ただ単にイメージするだけ。
あとは指先に力が集まるようなイメージも忘れないようにね』

こんな感じに、と付け加えてロナが人差し指を一本だけ立てる。

ぽっという音と共にロナの指先に小さい火が灯る。

これはミストさんが昨日も見せてくれたやつだ。

次の瞬間その火が凍り始め、氷の結晶が指先を舞う。

『…とまあこんな感じね。ほら、ユキもやってみなさいよ』

そう言われて、僕も改めて人差し指を一本だけ立てて頭の中で先ほどのロナのような火を思い浮かべる。

が、

ぽうつという音と共に現れたのは先程見た小さい火より大きな火球が生み出された。

ここまではいい、別にいいんだが…その後が問題だった。

『え？ちよつまっ…』

指先に力が集まるような感覚のあと一気に火球が2〜3倍の大きさに膨れ上がる。

既に野球ボールぐらいの大きさから1m程の大きさになっている。

『きゃっ！ちよつとちゃんと制御しなさいよ！』

慌ててロナが叫び、少し距離をとる。

『そ、そんな事急に言われても…』

そう言っているうちに徐々に火球の大きさが増してくる。

既に頭上で3〜4mの大きさになりつつある。

『ちよつちよつと！制御しなさいってば！イメージで火が小さくなるように思うのよ！』

『いや、さつきからそうやってるんだよ！』

これは…ヤバイ。何故か制御がきかない。このままだと森に火がついて森林火災に発展しそうだ。

『せめて、これが凍ってくれば…』

そう嘆いた瞬間。ピシリという小さい音と共に火球が一気に真っ白になり、凍りつく。

あ…そっか、イメージを切り替えればよかったのか…と今更ながらに気づく。

そのまま指先の大きな氷の塊が小さくなるように念じながらイメージすると徐々に氷の塊は小さくなり、最後には消えてなくなった。

『ふう…嫌な汗かいたよ…』

『それはこっちのセリフよ…まったく。でもちゃんと使えたでしょ』

？
』

『…ちゃんとかは怪しいけどな…』

表面上では少しげんなりしながら答えていても心の中では結構興奮していた。

これなら小さい頃から色々と空想していた事も現実を起こせてしま
うんじゃないかと思ってしまう。

が、それと同時に魔法の使い方には本当に気をつけようと僕は心に誓った。

新生活（後書き）

見てくれる人が居るってかなり嬉しいですね。これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

魔法学校（前書き）

今回はちょこっとだけ長めです。

魔法学校

魔法といえは万能の力と思える。と言うか実際に僕はそう思っていたのだが、現実はどうでもないらしい。

まあ先の一件で実際にやってしまった様に、制御を失敗すれば大惨事にもなりかねないし、悪用されれば犯罪の増加にも繋がってしまう。

そのために魔法学校という専門の魔法教育機関がある。

ちなみに一口に魔法と言ってもさまざまな種類があるらしい。

昨日ロナに教わった一般生活で使える魔法から、国を一つ消し飛ばすような魔法まで多種多様らしい。

もちろん、便利な魔法を使用するには魔力が必要であり、呪文が必要だ。

だが、一般市民でも使える魔法は少なく限られており、頑張ってもせいぜい魔物を軽く吹き飛ばすぐらいが限界だ。

そこで魔法学校では、魔法を正しく勉強し、使いこなせるように育てられるらしい。

と、まあ。ここまで「らしい」と言う説明すれば察しのいい人は気づくだろう。

何でこの世界に来たばかりの僕がこんなに詳しいかと言うと：

『今日からこの魔法学校に入学する事になりましたユキト・ウォンスールです。よろしくお願いします』

面接と簡単な基礎知力のテストを受けて、渡された黒色の制服に腕を通して、

1年生用のクラスに入れられて40人ぐらいの人に見つめられながら僕は頭を下げる。

そう、この世界の魔法学校に編入することになった。

ついこの前いきなりこの世界に飛ばされ、だんだん状況を把握し、先日魔法という未知の力を使ってみて、僕はもっと使ってみたいと思った。

そして昨日集めた薬草を様々な魔法で薬を作っていくミストさんを見ていて、僕もやってみたいなあと思わず嘆いたところ。

『じゃーユキト君も魔法学校行きかな？』

と割とあっさり宣言された。

実はこのミストさん。意外と顔が広いらしく魔法学校の保健の先生もやっているらしい。

なので結構簡単に入学試験を受けることが出来た。

最初はこの手早い展開に完全に戸惑っていたけど、頑張るしかないという考えもあった。

僕が元の世界に帰るためには必ず魔法の力が必要になるだろうとも思ったからだ。

元の世界に戻るためには僕はこの世界をある程度知らないといけない。

ミストさんにも尋ねてみたが、元の世界への帰り方は知らないらしい…が、帰る方法があることだけは知っていた。

だが聞いたところによると、この村はかなり辺境の田舎の部類に入るらしいので、そんな方法が見つかるわけもない。

それならば搜索範囲を広げるしかないという結論に至った。

幸い、村から近くてそこそこ大きな街：『エルクワール』には魔法学校があり、そこに通いながら情報を集めるのはどうだろうという

話になった。

で、僕は今もみくちゃんにされていたりする。

理由は簡単で、どこの世界でも転校生の扱いはある程度一緒なわけ
で…。

『ねえねえ、君どこから来たの？』

『魔法使いランクは？歳は？』

『得意な魔法は？好きなタイプは？』

などと言ったクラスメイトからの質問が山ほど押し寄せてきた。

基本的に喋るのが苦手という訳でもないので無難に質問に答えてい
く。

『（雪菜なら苦労しただろうなあ…あいつ引っ込み思案だったしな）』

と、そこまで考えて軽く寂しいと感じて慌てて頭を振ってその感覚
を追い払う。

どうやら軽くホームシックになりかけていたらしい。

よくよく考えてみると毎日会話していた人間といきなり別れたのだ、
そりゃ寂しくもなる。

だが、ふと気づく。

放任主義が徹底している両親と家事があまり得意ではない雪菜での
3人暮らし。

…これ、割とやばいんじゃないだろうか？…と言うか絶対途中で崩

壊するだろうという予測。

『(こりゃ早く帰らないとな…)』

寂しいという思いが心配するという思いに変わった瞬間だった。

さて、ここらで一度この魔法学校の制度とあり方について説明しようと思う。

基本的には学びたい・入学したいという理由があれば学校への入学試験自体は簡単にできる。

これはこの学校に限ったことではなく、全ての魔法学校がだ。これだけ聞いた時、僕は緩い条件だと思ったのだが、これにはちゃんと理由があるらしい。

ぶっちゃけた話。学校側や社会から見れば魔法を使えるという人間は社会的にも使えるのだ。

魔法が使えるとそれだけで選択の幅が広がり、様々な職業に就職しやすくなり、社会に貢献できて優遇される。

そして単純に人手不足も原因となっている。

どうやら、1年ほど前に終わった戦争のせいで地方によっては治安が悪くなっているところもあるらしい。

らしい。と言うのは全部ロナから聞いただけだからだ。

まあ聞いていた限りではあながち間違っではないと思う。

実際に僕が受けた試験も面接も簡単なものだったし、ミストさんもロナが話している間、横で聞いてて何度も頷いていた。

うん、ロナ一人だと説得力が薄いがミストさんなら信用できる。

『(うーん、元の世界ではそんなに苦勞してなかったけど、こっちでの勉強は最初からなんだよなあ…大丈夫かな?)』

とりあえず言語は違うらしいが何故か読めるし、書いたはずの日本語もちゃんとこっちの言語に変わっているらしい。

ここら辺もかなり謎だ…まあ助かってるから別に文句はないけど…とそんな事を考えながら階段を登る。

右手には職員室で渡された鞆、左手には学園が指定している学生用の黒色のローブを抱えている。

今は午前の座学が終わり昼休みに入ったため、3Fの食堂を目指している。

ちなみに鞆やローブなどの荷物は別に教室に置いておいてもよかったのだが、昼食を食べた後少し復習しようと思って持ってきたのだ。

『（ま、授業でよくわからなかったところはあとでロナにでも聞くとして…）』

周りにいる人間も同じで殆どが3Fの食堂を目指して階段を歩いている。

ある者は友人と喋りながら、ある者は少し笑いながら…ふと歩くのをやめて窓の外を眺める。

美しい自然かどうかは僕にはわからない…けれど、心休まるような森の色と、茶色や青色などの色とりどりの屋根が見え、微かだが街の活気ある喧騒が聞こえる。

先日の村の周りを歩いた時も感じたことだが良い所だと思う。

『（平和だねえ…）』

本当に心からそう思う、それから元の世界の事を思い出して風景を比較し、軽く苦笑する。

酷かったわけではないが、あれも日常だったのだ。

元居た世界では科学が発達しすぎて、温暖化やら、環境汚染やらで日常的に天気が悪かったし、自然もそんなに残っているわけじゃなかった。

だから、こっち世界のほうが断然環境がいい。

『（でも僕だけ良い目にあってもなあ：雪菜にも見せてやりたいし、簡単に行き来できたらいいんだけどなあ）』

とか考えながら歩いているとようやく目的地の食堂に着き、とりあえず荷物でも置いて席を確保しようと空いている席を探していると、見知った顔が見えた。

『あら？ユキも学食？』

蕎麦を啜っていたロナがこちらを見て聞いてくる。

と言うか日本文化の蕎麦がこっちにも伝わってるのにちょっと驚きつつも、ちょうどロナの前の席が空いていたので座る。

『おう、と言うか他に選択肢ないだろ：』

購買はここに来る前に少し見てきたが、断然学食のほうが安くて量が多そうだった。

お金の心配はしなくていいとミストさんは言ってくれているが、あまり負担をかけたくないのが心情だ。

：はて？さっきからなんか視線を感じるけど、転校してきたばかりで目立ってるからかな？

『まあ確かにね。ところでこの学食のルールは知ってる？食べたい食券を持っている人から食券を奪ってカウンターに渡すのよ？』

『奪う？』

買うじゃなくて？

『そ、奪うの。ほら、あれが良い例よ』

そう言ってロナが指差した先には、何故か食券を持った熊と戦っている男子生徒…っておい、普通にあんなのがいるっておかしいって絶対！

明らかに熊のほうが強そうだが、男子生徒が放った右アッパーが熊の顎を叩いた瞬間。熊がずるりと崩れ落ちる。

『よっしゃー牛丼セットゲットー！』

勝利したらしい男子生徒が食券を持って嬉しそうな雄たけびを上げている…うん、あれだ。

文化の差異って本当に恐ろしいと思う。

ここで食事していいのかと本気で考察していると、ロナが突然笑い出す。

『あははっ！…と言うのは冗談で、普通にカウンターで注文すればいいだけよ』

ロナが先端に青く丸い小さな水晶が付いた杖を取り出して軽く振ると、男子生徒の姿が普通にトレーを持っている姿に変わる…これってもしかして？

『…幻術魔法ってやつ？』

『ううん。幻術じゃなくて幻覚魔法よ。初級のけどね』

『いや、それ以前にそんなもん人にかけるな、マジでここで食事するの考え直そうかと思ったぞ…』

『えーだって、昨日は誰かさんのおかげで色々酷い目にあったからねえ、軽く遊んであげようかと思ってね』

『クックック…』と怪しく笑いながら蕎麦を啜るロナ…くっ僕も早く食事買ってこよう。いい加減腹が減った。

牛丼を見てたら僕も食べたくなったのでそれを買い、ロナの対面に座る。

ロナは食事に集中しているのか、こちらを見ることもなく蕎麦を啜る。

僕も食事中に喋るのは行儀が悪いと思っているので、なるべく喋らないようにしていたが、この空気に耐えられそうにない。

…なんか、妙にプレッシャーを感じるのだ。

何でそんなこと感じてるんだかと思いつつ適当に話題を振ってみる。

『そういえばロナ一人だね。友達はいないの？』

『あんた何気に失礼よね？まあいいわ。今日は休みなんだ。だから一人』

『ふーん、あ、そだ。ちょっと聞きたいんだけど』

『何よ？』

『僕さ、まだ全然魔法使った事ないんだけど午後の実技授業大丈夫かな？』

『大丈夫よ。先生には話は通してあるってミストさん言ってたし、それにユキぐらいのレベルなら杖なしでも全然問題なしよ』

『そっか：でも戦闘訓練とか大丈夫かな？』

聞いた話だと戦闘を前提とした訓練もあるらしいのでちょっと不安だ。

前にも言ったが、昨日ちょっとだけロナに教えてもらった魔法ぐらいしか使ったことがないのだ。

そういえば、さっき何もない空間から杖を取り出してたけどそれも魔法なのかな？

とか思っていると、

『失礼。ちょっといいかな？』

『はい？』

声が聞こえた方に視線を向けてみると、ミストさん並に背が高い青年が一人テーブルの横に立っていた。

髪の色はミストさんと同じブルーなのだが、こちらのほうが幾らか濃い。

さらさらヘアーというよりはツンツンしている感じがする。

ああ、ボキヤブラリーが低いのが目立つなあ、でもまあ僕がそう感じたのはホントなんだし、誰かが聞いてるというわけでもないので無視する。

身長は170cmぐらいで、顔立ちはさわやか系だ。

僕と一緒に黒色の制服の上に黒いローブを羽織っている。

腰につけてるのは：結構長い茶色の鞘で、どうやら剣のようだ。

しかし、剣かあ。やっぱり実際に見てみると結構カッコイイもんだ

なあ。

ゲームとか小説とか漫画とかでしか見たことないけど、やっぱり重
いんだろうか？

『はじめまして、転校生君。ボクはアイズ。アイズ・ルートラだ。
以後よろしく』

『はあ…はじめまして、ご丁寧にどうもです。僕はユキト・ウォン
スールといいます』

『どしたの？アイズ』

どうやらロナと顔見知りらしい。

『いや、ロナが転校生と仲良さそうに話していたから気になってね』

『あの…全然仲良くないんですが？』

僕がそう口を挟むと、ロナも何度も頷く。

親しいとは言えるかもしれんが間違っても仲が良いとは思えない。

『そうかい？少なくとも楽しそうに会話してるのは見てるんだが…』

さっき感じた視線はあんただったのかと納得する僕。

『（…ふむ。こっちでも使えるかな？）』

そして、ゆっくりと彼の目を見る。

瞳の奥の感情を真っ直ぐ覗くと「好意」の感情を読み取れた。
と言うことは…なるほどロナ目当てですか。

ちなみに僕。この手の初步の読心術が使える。
まあ使えると言っても初歩だから信憑性は低いし、表層意識しか汲み取れないので重宝するほどじゃないけど。
って：あれ？「好意」ってことは、今現在ロナと食事をしてる僕は結構邪魔者じゃね？

『ぜんっぜんっ！仲良くなってるわよ？』

わざわざ強調してロナが宣言する。うんうん、僕達の関係はこうでなくっちゃ。

でもロナさん。もうちょっと感情隠そう。なんか怒のオーラがびんびん全身から放たれてますから。

ほら、周りで食事してたり、雑談してたりしてた他の生徒達が青い顔して速やかに別の席に移って行ってるじゃないですか。
不憫で仕方ないんだが。

『ふむ、そうだウオンスール君』

『あー：僕のことでしたらユキトでいいです。セカンドネーム呼ばれ慣れてなくて…』

偽名だから違和感バリバリなんだよね。

一応念のためについてことで適当に付けたけどさ。

『わかった。じゃあユキト君。ロナをかけて勝負してくれないか？』

『『はあ！？』』

アイズの思わぬ発言に僕とロナの声が見事にハモる。

と言うか今までの会話でなんでそんな思考に思い至ったんだ？

『ちょっと待ちなさいアイズ。アタシは別にこんな奴好きでもなんでもないんだけど？』

『君の気持ちはこの際関係ない。大事なのはボクが好きなロナの近くにユキト君がいるところが問題なんだ』

おおー…本人を前に堂々と言ったなあ…あ、ロナのやつ軽く照れてるや。

ちよつと顔赤くしてそつぽを向いてる所がなんか新鮮だ。

しかも満更でもなさそうだし、うんうん。いいなあこういう恋愛。見てる分にはものすごく楽しい。

巻き込まれるのはすごく不愉快だが。

『…言っちゃなんですけど、僕もロナの事はあんまり好きじゃないんですが…』

面倒ごとは勘弁してほしいのでさっさと否定する。
まあ勝負なんてやってられるかと言うのが本音だけど。

『いや、ボクの目はごまかせないぞユキト君。君は彼女の事が好きなんだろう？』

『だから違うって言ってるでしょう』

と言うか異性として認識してもいませんが、何か？

『…ちよつと、あんた今すつごく失礼な事考えなかった？』

ギリリと睨んでくるロナ：おー怖い怖い。というかなんでわかったんだろう？読心術とかか？

僕じゃあるまいし、そんなことあるわけないか。

『まあ、どちらにしてもロナと一緒に食事しているだけでもボクは許せないんだ』

『そっちが本音だろお前…』

思わず口調が変わる、昔からイライラすると感情が口調に乗っちゃうのが僕の悪い癖だ。

まあ、食事中にこういう風に邪魔されて少しイライラするのは仕方ないと思う。

『という訳で、勝負：いや試合を申し込む。では午後の訓練の時に…』

そう言って返事を待たずに颯爽と去っていくアイズ。

うえー。あんな奴と戦うの絶対嫌なんですけど、と言うか面倒だなあ：サボりたくなってきた。

『ご愁傷様。ユキ』

『それだけかよオイ』

そうツツコミを入れたあと、最後のお肉を口に放り込む。

喋っている合間にも口と箸だけは動かしていたので牛丼を食べ終わる。

ご馳走様でした。学食にしては本当にお世辞抜きでかなり美味しかったです。

『まー実際アイズは一度決めたら考え方曲げないからねー素直に一
刀両断されてきたらいいじゃない、いい気味だし』

ロナも食べ終わったのか両手を合わせて挨拶したあと、空になった
食器を脇に寄せて話しかけてくる。
くそっ完全に遊んでる目だなこれは…。

『でもさーこれ実際僕が勝っても何の得もないんだよねー』

そうなのである。例え勝ったとしてもロナと堂々と一緒に居れるく
らいでまったくもって利益がない。

『あら、アタシと毎日食事できるじゃない。それが不満だとしても？』

食器を魔法で返しているのか、ロナが杖を軽く振ると空になった食
器が宙に浮かんでカウンターに戻される。

それを興味津々な目で僕が見ているとロナがさらに続けてくる。

『それに、勝つのは無理よ。ユキがいくら異通者でも流石にランク
Aのアイズに勝てると思えないし』

『ランクAって？』

『うーん。まあ、簡単に言えば魔法使いの強さのランクよ』

なんかのゲームみたいだなとか思い、適当にふーんとだけ答えるが
ふと嫌な予感がして聞いてみる。

『…もしかして高レベル？』

『高レベルよ。少なくとも学年の5本指には入るんじゃないかしら？』

…午後の訓練。マジでサボろうかなと思った瞬間だった。

試合（前書き）

PVが1800超えて驚きました。皆さん読んでくださってありがとうございます。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

試合

はい、こちらレポーターのユキトです。

現在僕たち1年生のクラスは校庭に集まっております。

何故校庭に集まっているのか：理由は簡単。午後の実践訓練のためでございます。

でもですね。

『これさ、一種のいじめじゃないかなあ？』

思わずぼやく僕。

目の前には佇んでいるアイズ。

そして周りの観客席には僕のクラスメイトたち。

『では、練習試合を始めるっ！異議がある者はいるか？』

担任の先生が高らかに宣言する。

ギャラリーがいるのは仕方ないでしょう、この際クラスメイトぐら
いは覚悟してた…だが。

『はい！先生っ！ここに異議を求める生徒がいます！っていうかな
んでこんなに人が集まってるんですか！』

なんか学園中の人間集めたんじゃないかってぐらいに人が多いん
ですが？

校庭と言っても1年生用に設営されている魔法の実践訓練スペース
なのだが、サッカーのグラウンドのように観客席があり、クラスメ
イトだけとは思えないような人数が座ってこちらを眺めている。

正直…注目されているので非常に恥ずかしいし、降参しづらい。

『よし、誰もいないな。じゃあ二人とも所定の位置につけ』

『華麗にスルーされた!?!』

担任のありえない反応に愕然としつつも少し離れたところにある白いマークがついている地面までしぶしぶ歩く。

まあ正直、この先生は当てにしちゃいかんと会った時に感じてはいた。

そもそもここに着てから、ちょっと思うところがあって心を読んでみたのだが。

「だるい」と言う心の発言を聞いて、これはもうだめだ、自分の身は自分で守らないと…と判断した次第である。

『（しかし、こっちの世界に来たばかりの一般人だっていうのに…試合とか無理じゃないかなあ?）』

と言うか魔法も碌に使ってもいない。使ったのはこの前のロナに教えてもらった一件だけだ。

しかも相手は帯剣しているっていうのに僕は購買部で念のために買っておいた10cmぐらいのナイフ一本だけとか…。

結論、勝てるわけないやん☆

…うん、今僕かなり壊れたな。

言語機能が軽く崩壊してたぐらいだし、まあとりあえず壊れたせいがある程度落ち着いたし、本格的にどうしようか考えようか?

『それでは…試合はじめっ!』

合図と共に鞘から剣を引き抜き、一気に距離をつめてくるアイズ。
うーん：合図とアイズって読み方一緒だからなんか上手いこと言っ
た気がするなあ。

と、そんな事を考えている間にもアイズが目の前まで迫ってきてい
た。

腹部への右から左へ薙ぎ払うような一撃が襲ってくる。

その一撃を屈んで避け、同時に足に力を入れて後方に飛んで距離を
取る。

が、その行動を読まれていたのかすぐに距離を詰められ、縦に剣が
振り下ろされてきた。

うん、これを避けるのは難しいな：とりあえナイフで受け止めるよ
うに見せかけて構え、受け止めずに受け流して攻撃を逸らす。

アイズは小さいナイフで受け流すなどとは思っていなかったのか、
驚愕して一瞬硬直する。

『（：あ、隙ありっと）』

間髪いれずにアイズの側面を狙って左足を軸にして右足で蹴りを入
れる。

『ぐっ：』

蹴られたのが意外だったのかうめき声を吐き、少しだけ後方に飛び
退ってから膝を地面に付けるアイズ。

ありゃ？ 案外打たれ弱い：と言うか、弱すぎない？

まあ10cmぐらいの小さいナイフなんかで、身長ほどはないがそ
れなりに大きいロングソードの強力な一撃を受け流せる僕も僕だけ

どさ。

でもおっかしいなあ、喧嘩なんて数えるぐらいしか経験ないし力も強いほうじゃない…というよりむしろ弱いほうなんだけど。

…まさかとは思うけどこれも異通者の能力？

小説とかでよくある世界を渡ると身体能力の向上するとかか？

だとしたらこんな能力あっても面倒なだけだなあ…下手に目つけられるのも嫌だし。

穏便に元の世界に帰りたい身としては邪魔なだけな気がする。

ああ、でも元の世界に帰るためにはそこそこ実力が必要だろうし…

『ならば！【我が魔力よ、顕現せよ、形状は槍、その役は破壊！】』

等と考えていると第2波が来た。

いや、来ると言い換えていいだろう、相手は準備段階のようだ。

頭上に左手を掲げて早口で呪文らしきものの口走るアイズ、その手にはいつの間にか1mぐらいの青白い槍が出来上がっている。

今度は魔法っぽい…なんだろう、槍みたいな攻撃なんだろうか？

『行けっ！』

アイズが手を振り下ろすと同時に青白い魔法の槍が一直線に向かってきた。

しかし、こんな見え見えで避けやすい魔法攻撃ってどうするつもりなんだろう？

などと思いつながらそれを避けようと左へ一歩踏み出した瞬間その考えを改めることになった。

僕の直前で槍が弾け、全方位から襲い掛かってきた。

当然、そんなの予想もしてなかった僕は咄嗟に避けられるわけもな

く、細かい槍を何十本と食らう。

『うあっつ』

体中に激痛が走って思わず苦悶の声を出す。

学校から支給されたローブ。つまり今着ているローブは魔法ダメージをある程度軽減してくれるらしいが、痛い事に変わりはない。

しかも細かい槍は結構勢いがあって、そのままごろごろと地面を転がる。

『ふむ、最初の身のこなしには焦ったけど、大した事ないようだね』

剣を構えなおすアイズ。

『そりゃあ、まだまだ素人ですからね僕は…』

とりあえず起き上がってナイフを構える。

適当にやって降参しようかと思っていたのだが、まだよくわかってもない魔法で攻撃されたのでちよっとむかついた。

なので、一矢報いてから降参するかと考え方を変える。

『まだやる気かい？そろそろやめといたほうがいいと思うんだけど？』

『まあまあ、もうちよっとだけ付き合ってくださいよ』

そう笑って答えた後。

『ちよっと驚かせるぐらいはさせてあげますから』

僕が手を掲げた瞬間、ついこの前教わったばかりの一般魔法…小さな火を灯す魔法をイメージする。

ただ、今回は前回と違って明確な大きさをイメージする。

『なっなんだ？』

一瞬で7〜8mはありそうな火炎球が僕の手の先にできあがる。

うん、やっぱり思った通りだ。イメージの大きさをきちんと決めておけば勝手に反映される。

『一般魔法…なのか？それにしてもあの大きさは…』

アイズの驚きは当然だろう。

ロナに聞いた限りだと一般魔法はこんな大きさを攻撃に転用しようとする人間はいない。

そんなことをするぐらいなら素直に攻撃系の魔法を使えばいいだけだ。

それでもアイズが呆然としながらも剣を斜めに構える。

どうやら降参する気はないらしい、まあこれだけじゃ脅しにしかならぬしなあ。

振り下ろしたとしても元々火をつけるだけの魔法で攻撃用じゃないから、ゆっくり飛ぶぐらいが限界だろうし…それじゃあ、まあ、盛大に驚いてもらいましょうか？

前回やったように頭上に掲げている火炎球のイメージを切り替える。

『一般人に容赦なく魔法攻撃なんかしてくるやつは潰れてろ』

硬い氷を明確にイメージして、頭上の火炎球が質量を持った氷の塊

に変わる。

僕の発言と、頭上の氷球を見てアイズの表情が驚愕に変わるのをじっくりと見届けたあと。

僕は躊躇いなくその手を振り下ろした。

ただの火炎球では質量がまったくないからスピードは断然遅い、ならば明確な質量を持った氷の塊ならどうだろう？

という考え方から導き出した僕理論の一般魔法の攻撃方法だったんだけど…。

流石はランクAと言ったところか、直撃する寸前で構えていたロングソードで一閃。

見事に真っ二つになった氷の塊が轟音と共に地面に落ちる。

おーすげえ、漫画の展開みたいだーとか思いつつ。

『チェックメイト…かな？』

7〜8mの大きさの氷の塊を真っ二つになんてしてたら隙の一つや二つできるわけで、

その隙を最初から狙っていた僕は身体能力が向上していた分も合わさって簡単にアイズの背後からナイフを突きつける。

『ちっ……………』

『…あ、下手な動きしないようにね？ 問答無用でその首にナイフ突き刺す予定だから』

距離をとって振り返ろうとするアイズに忠告する。
もちろんただの脅しだ。実際血なんて見たくないし。

『ああ、早々言い忘れてたけど魔法もね。その剣を持ってない左手もちゃんと把握してるから』

僕がそう言うたびくりと左手を隠すアイズ：やっぱりか、適当に勘で言ってみただけだったんだけど、言っておいて本当によかった。流石にさっきみたいな魔法の槍をこんな至近距離で食らいたくない。

『で、どうする？もう詰みだと思っただけど？』

『ぐっ……………』

アイズが悔しそうに呻く。

『…わかった…降参する』

…ふう、よかった…ここで降参してくれなかったら正直こっちが詰みだった。

何せ、もう手札がない。

さっきの一般魔法もどこまで戦闘に使えるかが不明だし、実際に動いてみてわかったけど身体能力も向上はしているが力押しができるほど上がってるわけじゃない。

『そこまで！』

審判をしていた先生の声で僕はすぐさまナイフを引く。

ぶっちゃけ、いつまでもそのままにしておくのと刺す気がなくても刺しちやいそうで怖かった。

『ふう…って』

一息吐いて、そこでようやく気づく、いや、僕が勝っちゃだめじゃん。

普通に勝っちゃダメじゃん、と言うかそんなことしたら…。

『すげえ!』

『嘘だろおい…あのアイズが負けるなんて…』

『うん、久々じゃないかな?すごいね彼』

ほら、やっぱり…観客席にいたクラスメイトたちが口々に騒ぎ始める。

まずい、これは非常にまずい。平穏な生活を望んでただけだなあ…と残念に思っていたが、まあやっちゃったもんは仕方ないかと頭を切り替える。

『ユキト君』

『…何?アイズ?』

剣を収めたアイズが声をかけてくる。

『君…実は結構強いだろ?』

『はい?そんなわけないだろ、僕はこっちの世界に来てから3日か4日ぐらいしかたってないんだから…』

前にも言ったように武道等をやっていたわけでもない。

友達に巻き込まれて喧嘩を何回かしたことがあるぐらいだ。

まあ、その友達にこういう時はこう立ち回ったほうがいいのか、喧嘩のレクチャーみたいなのは毎日受けていたが…世間話の感覚で。

『こっちの世界？君はもしかして…』

『そ、異通者と呼ばれる人間ですよ』

驚いた顔でこちらを見るアイズ。

あんまりバラすと面倒ごとに巻き込まれるかもしれないというミストさんの忠告があったが、アイズは大丈夫だと思ったので言うておく。

アイズは何か言いたそうな顔をしていたが、すぐに表情を元に戻すところ宣言する。

『ま、君が何者でも構わないさ、これからよろしく。ユキト・ウオンスール』

そして差し出された右手、笑ってから僕も右手を差し出す。正直、柄じゃないけど。礼儀としてだ。

『こちらこそ、どうぞよろしく。アイズ・ルートラ』

そして、握手をしながら2人揃って笑いあう。

なんかこっちに来て初めて仲のいい友達が出来そうな気がした。

試合（後書き）

初戦闘です。ぶっちゃけ手探り状態なので読みにくい点やよくわからない点があったらご指摘していただけると助かります。

ご意見感想もお待ちしておりますのでよろしくお願いします。

勉強（前書き）

説明回です。完璧に説明回です。

読む人によっては好き嫌いが分かれるだろう説明回です。

正直この回で読む人減るんじゃないかと危惧してるぐらいに説明回です（苦笑）

そういえばPVが3000超えててかなりびっくりしています。

この調子でさらに頑張っていこうと思うので、応援等よろしく願います。

勉強

『あのさ、魔法公式って何なの？魔法なの？』

『魔法公式っていうのは、その名のとおり魔法を通す式のことよ』

『純正魔法・精霊魔法を使っている人に関係なく使えるから使い勝手がいいし、初心者でも使いやすい魔法だよ』

僕の質問に答えてくれるロナとアイズ。今、僕は学校の図書室に来ている。

そして、その護衛として二人がついて来てくれている。

最近、何かとこの二人と一緒に居ることが多い。

まあこの前の実践訓練の一件が原因なんだろうけど…別に構わないかと思いはじめている。

勉強する上では頼りになるし、それに口にするのが少しだけ恥ずかしいが、友達になってくれてるかもしれないからだ。

『ふーん、なるほどなるほど…じゃあ二人とも使えるわけか…ってもしかしてさっき使ってたのも？』

『そうね。さっき魔道書が飛んできたときにアイズが使ったのが防
御の盾ね』
シールド

『まあ、その魔道書を打ち落としたのは、公式じゃなくてロナの精霊魔法だけだね』

そう言いながら二人が辺りを警戒する…そうなのである。

さっきも言ったが今回二人には護衛としてついて来て貰っている。
実はこの学校の図書室は半ばダンジョン化しており、時たま魔道書
が魔物化して人を襲う。

しかも、この図書室は別次元と繋がっていて、下に下りれば降りる
ほど珍しい本が置いてあるらしいが、それに伴い危険度も増すらし
い。

でもまあ、そこは強いお二方がいるから心配はないと踏んでいる。
深く潜ると流石に二人でも危険だそうだが、そもそも初歩がわから
ない僕にとっては浅いところの本で十分だ。

：一応元の世界に帰るための本があるか深い所で探る必要があるが、
今は絶対に無理だろう。

と言うわけで、今は初歩を覚えることだけを考えることにする…あ、
良さそうなの発見っと。

「よくわかる魔法公式」というタイトルの本を本棚から抜き取って
適当に開く。

『ふむふむ…じゃあ魔法公式は放出・防御・拘束と3種類覚えてお
けば大丈夫かな?』

『そうね、それだけ覚えておけば大丈夫でしょ。わたし達まだ1年
生だからそんな高レベルの魔法なんて覚えなくてもいいだろうし』

『じゃあそろそろ引き上げようか…本は揃ったかい?』

アイズがそう言いながら背後に剣を一閃。

どうやらまた魔道書が飛んできたらしい。

ばさりという音と共に床に落ちる魔道書。

：この時々飛んでくる魔道書なのだが、正式名称は【人食い魔道書】
と言う。

人間が持っている魔力を狙ってくるので結構頻繁に出会う。

形は本の形をしているのだが、白い翼が生えていて、人が近づくと大きな口を開けるかのように本が広がって襲ってくる。

ちなみにここに入った瞬間、僕も一回噛まれて魔力を吸われた。

しかも一回噛まれるだけで魔力が半分以上持っていられるらしくて非常に迷惑である。

一応、魔力が吸われるだけで害はなさそうに見えるが、噛まれるとこれがまた本の癖に結構痛い。なのでかなりむかつく。

：まあ、僕が食われた瞬間を見ていたロナが大爆笑してたのがもつともつとむかついたのだが：あんまり気にしないでおう。

来た道に戻りながら、他に良い本がないか見て回るが一度見た棚なので特にめばしいものはなかった。

そのまま「初級魔法教本」や「1日10分で驚くほどよくわかる魔法」などの本を5冊持って図書室の出入り口脇にあるカウンターに置く。

『あ、目的の本は手に入りました？』

カウンターのの中にいた女性が声をかけてくる。

この人、名前はフィナ・レストナさんは今日初めて会ったのだが、この図書室の利用方法を教えてくれた人だ。

：ちなみに教えてくれたのは僕たち三人とも今日初めて図書室を利用したからである。

ちよつと大人びた感じの印象を受ける女の人で容姿は綺麗より可愛いに入るだろう顔立ち、腰辺りまで伸びた金髪、学園指定の黒い制服の上にクリーム色のフード付きローブを着ている。

どうやら2年生以上の学年はローブの色は自由らしい。まあ別に黒でも僕は構わないから気にしてないけど…。

『はい、助かりました。本当にありがとうございましたフィナ先輩』

ロナがそう声をかけると嬉しそうに顔を綻ばせるフィナ先輩。

ちなみにファーストネームで呼んでいるのは先輩の意向だ。

親しい間柄ならファーストで呼んで欲しいらしい：今日会ったばかりで親しいとも思えないが：まあこれもあんまり気にしないほうがいいだろう。

『よかった。本当なら私達上級生が手伝ってあげたいんだけど、私達もちよつと仕事が詰まっちゃっててね』

『いえ、お忙しい中教えてくださってありがとうございますフィナ先輩』

頭を下げてお礼を言う、実際カウンター内部ではもう一人の図書委員、克蘭・フォレスティナさんが忙しそうに働いている。

この人からはこの図書室の危険性を教えてもらった。

学園指定の制服の上に白いローブを着ているのでわかりにくいが、アイズよりは体を鍛えているように見える。

身長はフィナ先輩より少しだけ高い。

その克蘭先輩がフィナ先輩に向かって本を差し出しながら話しかけてきた。

『おーい、フィナ。この本って処分行きだったか？』

『あ、違うよ克蘭君。それは再生済みの本で処分行きは2つ下の本だよ』

『…忙しそうですね』

アイズがカウンター内部に大量に積まれた大小様々な魔道書を見て言う。

それを聞いてクラン先輩が大きくため息をつく。

『まったくだ、面倒な図書委員なんかになるつもりなかったんだがな俺は…』

『図書委員を決める時に寝てたんだから仕方ないでしょ？』

『…ほう、その寝ていた間に勝手に推薦した人がよく言うなあフィナさんよお？』

『だ、だって去年も一緒にやってたから大丈夫かなあって思ったんだもん』

『そりゃ確かに去年もやってたけどさあ…あれは単に調べ物があったからであって、好きでやっていたわけじゃ…』

『…………仲良さそうですね』

借りた本を鞆の中に入れ終わった僕がそう言うと、嬉しそうにフィナ先輩が食いついてきた。

『え？ホント？仲良さそうに見える？わー嬉しいなーそう言ってくれると。ほらほらクラン君。私達仲良さそうだってー』

『後輩…お前こうなる事わかってて言っただろ…』

明らかに嬉しそうなフィナ先輩とは対象的に恨めしそうな感じのク

ラン先輩。

うん？何のことですか？克蘭先輩？

別にわかってませんでしたよ？フィナ先輩から貴方に好き好きオーラが出まくってたなんて気づいてませんよ？

会った時にフィナ先輩の心読んだら、せっかく二人つきりだったのに…とか聞いてませんよ？僕は？

『じゃあ、僕たちはこれで…二人つきりでお仕事頑張ってください』

『ありがとーそれじゃあ三人とも勉強頑張ってねー？』

『ああ、今度来た時は「歓迎」してやるぞ？』

克蘭先輩が頬をひくつかせているのを見てやりすぎたかたちよつと反省する。

そして克蘭先輩の気持ちはどうなのかなあと図書室を出る瞬間少しだけ心を覗いてみる。

だが。

『…あれ？』

『ん、どうしたんだいユキト君？』

『あ、あーいや、別になんでもないよ』

僕の疑問の声にアイズが声をかけてくるが、なんでもない風を装って軽く笑う。

心を覗いたはずなのに…気持ちが伝わってこない？

おっかしいなあ、大抵の人は気持ちがわかるんだけど、克蘭先輩

のは伝わってこないと言うより：読めない？

：この人何かあるのかな？

と思いつながらクラン先輩をもう一度見る。

先輩はちょうどカウンター内の棚に左手で本を戻しながら首の十字架チヨーカーを右手でいじっていた。

まあ悪い人じゃないみたいだし、どうでもいいかと思いつく。

ロナが最後に図書室のドアを閉めてから、僕とアイズに話しかけてくる。

『じゃあ護衛もこれで終わりね。この後どうするの？』

『うーん。特に考えてなかったし解散でいいんじゃないかな？僕はどっかで勉強してから寮に帰るよ。護衛ありがとな二人とも』

『いいや、役に立てたのならよかったよ。何かわからないことがあったらまた聞いてくれユキト君』

『アイズ：やけにユキのこと構うのね、珍しいわ』

確かに、それは僕も気になっていた。

ロナのことが好きで僕に勝負を挑んできたぐらいなのに最近は妙に優しくかったりするのがちょっと気になる。

『いやいやいや、ボク達はもう友達だからね。友を助けるのは当然のことだよロナ』

そう言って僕の肩に手をまわすアイズ：うーん。もしかしてだけど：

『アイズ：お前もしかして、ロナに友達想いなところを見せたいか

ら、僕に優しいとかじゃないよな？」

ロナとの距離が近いので聞こえないようになると、小声で聞いてみると、アイズが妙に焦った様子で僕から離れる。

『な、何を言ってるんだユキト君！ボクはそんな打算的な考えで行動しているわけじゃあ…』

『あーうん、わかった、僕が悪かったから、落ち着け』

ごめん、アイズ。今心読んだら「すまん」っていう言葉が聞こえたんですが…まあいいか、あんまり気にするようなキャラじゃないしね僕。

『それじゃあ二人とも、また明日なー』

そう言って先に歩き出して二人の返事を待たずにその場を後にする。…まあちよつとだけ二人に気を使って早めに退散したのだが…上手くいくといいなああの二人。と思いながら廊下を歩く。

さて、教室で読もうか…それともどこか別の場所探してみるかなあ？とそんなことを考えながら廊下の角を曲がって目に入った階段を見上げる。

『屋上って開いてるのかな？』

僕が通っていた高校では危険だからという理由で屋上は出入り禁止になっていたのを思い出し、せっかくだから行ってみることにした。

『お、開いてる開いてる。しかもご丁寧にベンチつきか』

屋上のドアは外側に押してみると簡単に開いた。

誰か居るかとも思っていたが、予想外に誰も居なかった。適当に日当たりの良さそうなベンチを見つけて腰掛ける。

『さてさて、それじゃあお勉強開始といきますか』

鞆の中から適当に借りてきた本を一冊引き抜く。

タイトルは：「よくわかる初級魔法」だ。

ちなみに、既に放課後なので時間は気にしなくて良い。

たっぷり勉強できそうだと思いつながらページを捲っていく。

正直なところ、午前の座学はギリギリなんとかなっている状況だ。

ただ、中途半端な時期に入学したとはいえ、流石にまだ1年生。初歩的なことばかりなのが唯一の救いだ。

それでも、僕だけが遅れているのは確かなので、ロナとアイズに相談し、それなら図書室で本を借りたらどうかという話になって冒頭に繋がる。

『ふーん…なるほど…』

どうやらこの世界での魔法はやはり多種多様のようなのだ。

まず、ロナに初めて教わった魔法でもある一般魔法。

これは一般人でも使える簡単な魔法のことを指していて。

明かりなどに使う光源魔法。物質を浮かべるための物質浮遊魔法。

簡単な物を飛ばす転送魔法。

頭の中だけでの会話法でもある念話。書物等に使われる翻訳魔法。あとは簡単な治癒魔法などが挙げられる。

実生活でも使うことが多いので生活魔法とも呼ばれているらしい。

次に純正魔法。

これは自分自身の魔力をそのまま利用し、簡単な呪文詠唱により様々な形を作り上げる魔法だ。

用途は様々で剣や槍などの攻撃的な物を作り出し武器として使う魔法から、一時的な身体能力の向上などの使用法がある。

形を作り上げることができると、器用な人間は精巧なものも作れる。

自由自在に様々な形を作り上げることができるので汎用性が高く、自身の魔力を使うため制御が簡単らしい。

呪文も短いため発動が早い。

ただ、自分自身の魔力が必要なため、魔力の消耗が激しい点だ。たぶん、アイズが試合で使っていたのはこの魔法だろう。

そして精霊魔法。

これは火・風・水・土・光・闇の6つの精霊から力を借りて、命令をする・能力を発動させる等と様々な力が使える魔法だ。

自身の魔力を使う純正魔法と違い、精霊の力を借りるため自分自身の魔力があまり必要としないところが特徴だ。

しかし、精霊の力を借りるため制御が非常に難しく、そのため長い呪文詠唱が必要となり発動が遅いのが難点だ。

さらに一人一人適性があり、全種類を使える人間は少ないらしい。その中でも光と闇は使い手が特に希少で5万人に1人ぐらいの割合だそうだ。

この理由は簡単で、光と闇は他の魔法と比べて力が強く、純正魔法以上に魔力を消費する上に制御が難しいらしい。

最後に、神聖魔法。

これははっきり言って、僕には使えない魔法と言っているだろう。先天的な素質が必要らしく、その上理論的に原理がわからないらしい。

どうやら先に挙げた純正・精霊よりも高度な魔法らしいが：まあ使えないならこれ以上読む必要もあるまい。

とまあ、はっきり言って多すぎる。

こんなの覚えられるのか？とか思いつつもページを読み進めていく。そうこうしているうちに大分時間が経ち、日が傾いて辺りが赤くなり、そろそろ寮に帰ろうかなと思い始めたところで一冊読み終えた。知識として吸収はしているが、実際に試してはいない：なので。

とりあえず寮に帰る前に一番安全そうな魔法公式の防御魔法を使ってみることにした。

これは、主に相手の攻撃を受け止めたり弾いたりするのが目的だ。

これができるだけでも現状を打開できるだろう。

：実は午後の実践訓練では、魔法がほぼ使えない僕は主^まに的として授業に参加させられてるため、こういう防御魔法は今一番欲しい。正直なところクラスメイト全員からの魔法攻撃はなかなか怖い。

まだ1年生だから魔法攻撃の軌道が甘いのと僕の身体能力が上がってるからなんとか捌けているが、徐々に厳しい状況に追い込まれているのは自覚している。

：いじめじゃないよねこれ？

『うん、これ以上考えないようにしよう。えーっと、手を前に出して意識を集中して形をイメージしてっど：【汝、力を糧に我が前に
シールド
示せ！盾！】』

唱えた瞬間。ブーン！という音と共に手の先に白い円形の魔方陣が出来上がった。

自分自身の力でこういった魔法が発動したことに軽く感動する。さて、魔方陣は適当にイメージしてたんだが…うん、なんだろこの魔方陣。

よくわからない文字が円の淵にそって書き込まれ、中央に三角や四角が綺麗に配置されている。

僕としては星型とか某有名漫画の錬金術の錬成陣とかゲームに出てくる魔法陣を想像してたんだが…まあ別にいいか。

そういえば錬金術とかあるんだろうか？…漫画みたいにあるわけないよなあ。

でも技術レベル的にはありそうだし、意外とあるかもしれない。まあアレとは絶対に方式が違うだろうけど…って話題が逸れた。

『…って実際に攻撃を防いでみないと成功してるのかわかんないぞこれ…』

実際に攻撃を受けてみないとこの魔法の真価はわからない。

形だけ成功しても小石一つをぶつけられて破壊されてしまっただけは意味がないのだ。

『はあ、まあ今は出来ただけよしとして破棄するか…』

魔力を止めて破棄しようとした瞬間。

急に変な感覚がしてその方向に素早く展開していた盾を向ける。

『？』

盾を向けながらその方向を見る。

特に変化はない…何かが居るわけでもないし、普通の屋上が広がっ

ている。

『…気のせいかな？』

視線みたいなものも感じたんだけど…と、もう一度辺りを見渡すが特に変わったところはない。

『ここに着てから休んでないし、本ばかり読んでたから疲れてるのかな？』

そう独り言を呟いたあと、魔力を止めて防御魔法を破棄するとベンチに置いておいた鞆を拾い上げ、屋上のドアを開ける。
最後に背後を振り返るが、やはり何もない。

『やっぱ、気のせいかな』

そのまま何も考えず階段を下りた。

依頼（前書き）

次話が完成してから更新する予定だったのですが、一応誤字脱字の修正は済んだので更新します。

依頼

『じゃあ、これやるとするか』

『そうだな。期限は3日後だからゆっくりできるな』

『ねえ、こっちの依頼受けてみない？簡単そうだし』

『でも報酬少ないよ？お姉ちゃん』

早朝、校舎内の下駄箱から中央エントランスに行くと掲示板の前でざわざわと言葉を交わす多数の生徒達の姿があった。

それを僕は横目で見ながらエントランス部分を抜け、教室に行くために階段に向かう。

『（前から思ってたけど、なんなんだろ…あれ）』

階段を登りながら首を傾げる。

今までにも何度かこういう光景を見かけたのだが、時間がなくてじっくり見たことがなかった。

気にはなっていたが、実生活に特に害があるわけでもなかったので放置してたのだが…。

『（あとでロナかアイズにでも聞いてみるかな？）』

あの二人なら何か知ってるだろう。

伊達に僕より早く学校に通ってるわけじゃないだろうし。

と、考え事をしながら階段を登っていると降りてきている生徒に肩がぶつかってしまった。

『あら、ごめんなさい』

『いえ、こちらこそすいません…ってフィナ先輩？』

ちょうど昨日図書室で会った先輩がそこにいた。

『あ、昨日本を借りに来た…えっとユキト君だったよね？おはよう』

『おはようございます。フィナ先輩』

階段の踊り場で軽く挨拶。

ちょうどフィナ先輩の右肩後ろに先ほどの掲示板が見えたのでちょっと聞いてみることにした。

『あゝ依頼掲示板ですか』

『依頼掲示板？』

『ええ、学内・学外から生徒達に処理して欲しい事柄を紙に書いてあの掲示板に張るんです』

『ふむふむ…』

『その紙を個人または複数のメンバーで向かい側の…ほら、あそこのカウンターに居る人に渡すんです』

『たしかに居ますね、かなり暇そうですが…』

『この時間帯は人が少ないですからね〜と話を戻しまして、あの依頼は学校側で判定されて、報酬が貰えるという仕組みです』

『報酬…やっぱりお金ですか？』

『それもありますけど、成績や個人の魔法使いランクの向上にも繋がります』

『ああ、なるほど…失敗した場合は？』

『もちろん報酬は出ませんし成績も少し落ちます。あ、でも依頼者によっては報酬が貰えたりもしますね』

なるほど、報酬は依頼者の気持ちってところかな？

『わかりました。色々と教えてくれてどうもでしたフィナ先輩』

『いえいえ、それじゃあまたね。ユキト君』

そう言ってウィンクした先輩はとてと階段を降りていく。

うーん。才色兼備ってああいう人を言うのかなあ。

年下の僕達にも優しいし、美人だし、いつも笑顔だし、その笑顔も素敵というより可愛いの種類に入るだろう。

スタイルも…まあ、僕は詳しいわけじゃないからよくわからないけど良い方だと思う。（何がどう良いのかは置いておいて…）

ああいう人がモテるんだろうなあとか思いつつ階段を振り返る。

『ふーん、ユキってああいう人が好きなんだ？』

いつの間にかニヤニヤ顔のロナが目の前に居た。

そして、なんとなく癪だったので記憶上のフィナ先輩の笑顔と見比べてみる。

『ぶはっ…』

『何よその「ぶはっ…」って』

『いやあ、フィナ先輩と比べるのも失礼だったと思ったただけだ』

『あんたのほうが失礼よね』

怖い笑顔を作りながら僕の頬を掴んで左右に引っ張り始めるロナ…
痛い。

『やゝめゝろゝ引きちぎれるうゝ』

『いや、そこまで強く引っ張ってないし』

『これ以上ゝやったらゝ』

『これ以上やったら？』

『18禁になるゝ』

『いや、だから、頬引っ張ってるだけでそこまでグロい展開にはならないと思うわよ？』

『あ、お前！馬鹿にしてるだろ？お前の力は意外と強いからグロい結果になるぞ？そういう展開ありえるぞ本気で！』

『うん、なんか非常に腹立たしいけど間違っていないって言えるわね。とうっ』

『ぎゅえっ』

限界まで引っ張られて指を離された。

『ううう…ロナに弄ばれたー』

『ちよっと！人聞きの悪いこと言わないでよ！』

『あ、ホントだ。そうだったね』

『ようやく気づいたわね…』

『弄ばれたぐらいじゃなかったね』

『全然気づいてない！？と言うか、むしろ悪化してる！？』

『まあ、それは置いておいてそろそろ教室行くか…いい加減このやり取りも飽きたし』

『うーわー、アタシ今ユキのことすっごく絞殺したい…』

俯いたロナの顔が黒い…じゃないなこれ、どす黒い。

うん、これ以上からかうのはやめところ。

流石に僕も朝っぱらから死亡フラグは立てたくない、朝じゃなくても嫌だが。

とりあえず話題を元に戻すことでこの状況を脱しようと試みる。

『まあ、実際否定はしないよ。良い人だし』

『へ〜。そうなんだ。否定しないんだ？ふ〜ん。男の子はああいう人好みなんだ〜』

『…と言っても、人の好みなんて千差万別だし、あんまり気にしないほうがいいぞ？』

『ちょ、ちよつと！ア、アタシは別に気にしてるなんてことないわよ？』

『ん〜？そうだったか？』

はて、ちよつと心を覗いてみたら「嫉妬」や「憧れ」みたいな感情が見えたんだけど、本当に気のせいでしょうかねえロナさん？さっきの仕返しにじ〜つとニヤニヤ顔で見つめてやる。

『うー…とにかく！アタシ、もう教室戻るからっ！』

顔を赤くしたロナが足音を響かせながら階段を登っていく。怪獣みたいだな、あのドスンドスンって足音。とか思いながらも一応手を振る。

『おう、またな〜』

うん、今の考えは怪獣に失礼だったかもしれないな。ごめん怪獣さん。会ったことないけどごめん。

『（さて、僕もいい加減教室行かないと遅れるな…）』

僕も階段を登りきって教室に向かって歩き始めた。

『依頼？』

『そう、依頼』

喋りながらアイズが振り下ろしてきた剣を既に展開していた盾で受け止める。

うん、ちゃんと機能してるっぽいな。よかったよかった。

『ボクも何度か受けたことあるぞ。はっ』

『そうなんだ。っと』

時間は午後の実践訓練。

今日の訓練は1対1の自主訓練で訓練相手はアイズだ。

実は、アイズの対戦相手がクラスの中には居ない。

理由は簡単で、アイズが1年生の中ではかなり強いいため、クラスメイト相手では訓練にならないからだ。

その結果。この前の試合で唯一勝った僕に白羽の矢がたったのだ。

適当に会話をしつつも、空いている左手に注意する。

アイズは剣も魔法も素早く使ってくるから油断できない。

だからまあ、本当はこんな会話してる場合じゃないんだけど、今は詳しい情報が欲しいので気にしない。

エルクワール
『まあ、この町近辺の魔物退治や近くの村までの警護だけなんだからね』

『ふーん。やっぱり依頼にも色々種類があるんだな』

ふと元の世界でやっていたゲームのクエストを連想してしまう。

うーん。ゲームは確かに結構やってたけど、こういうのって実際にあるんだなあ：などと考えていたせいか一瞬気を逸らしてしまったため盾が歪む。

こういった常時魔法式を展開するような魔法は常に魔力を流し込むことで形状を維持できるのだが、一瞬でも魔力が途切れれば途端に維持できなくなる。

僕の盾が歪んで消えるのを見て、アイズが一度剣をおろす。

『よし、だいぶ盾の使い方に慣れたみたいだし、次は魔法も織り交ぜていくよ?』

『おう。いきなりかよ：まあ別にいいけど、必ず手加減はしてくれよ?』

そう答えながらも、僕も昨日読んだ本の中で使える魔法を検索しながら表情を引き締める。

僕の表情を見て嬉しそうに笑うアイズ：あー、死亡フラグだったかも。

『それじゃあ行くよ?』
【汝、弾丸となりて、敵を弾け、弾!】
ショット

『あいよ了解。』
【汝、力を糧に我が周囲に示せ、壁!】
バリア

お互いに使ったのは自身の魔力を使った純正魔法の魔法公式。

アイズの周りに形成された合計5つの大小様々なキューブが様々な軌道で迫ってくる。

それに対して僕は、足元に展開された魔方陣に魔力を注ぎ込み、円に沿って周囲に壁を作る。

次の瞬間、キューブが壁に激突して爆発した。

アイズが唱えたショットは魔力を特定の形にして相手に飛ばして攻撃する魔法公式だ。

形は個人により様々だが、主にスフィア型・キューブ型らしい。

それに対して僕が使ったのは防御魔法のバリアでこれは全方位と周囲を防御できるシールドだ。

アイズの攻撃がどんな軌道で攻撃してくるかわからなかったからこちらは全方位を防御してみたのだが：

『やっぱり維持魔力がかなり負担かかるな…』

バリアはシールドに比べると負担が大きい、これは全方位を広範囲を防御するために維持魔力が大量になるからだ。

まあ、その分全方位を広範囲にカバーできるので：結構大変だぞこれ…と内心冷や汗を掻く。

キューブの爆発によって砂埃が舞っていたが、徐々に晴れてくる。

視線を正面に居たアイズに移すが、見当たらない。

『せいっ』

『つとお!?!』

ガシャンッという花瓶やガラスが割れたような音と共に、背後からアイズが飛び出してくる。

どうやらバリアを剣で突破してきたらしい。

いつの間にか足元の魔方陣が消えてるし、魔力を流し込んでも手ごたえがない。

『（接近戦に持ち込む気か…ってアイズとの距離が近すぎてナイフなんて取り出してる暇がない！？）』

本来なら魔法を唱える前にナイフを取り出しておくべきだった。

後悔しながらも慌てて今居た所から全力で体を投げ出し、両手を使って地面を掴み体全体をバネにして跳ねる。

十分に距離を取ってから周りを見渡してアイズを探す、また姿が見えない。

今のうちにと、すぐに腰に付けていたナイフに手を伸ばしたところで後頭部に衝撃が走り、僕の意識はそこで途切れた。

『あ、気がつきましたか？ユキト君』

『…ええ、一応…』

ベッドから起き上がって周りを見ると、どうやら保健室らしい。

机に向かっていたミストさんがこちらを向きながら聞いてくる。

うん、よく寝た。そして、アイズめ…あんだだけ手加減しろって言うたのに…本気で向かってきたなあ野郎。

大方、この前の試合で負けたのが悔しくて本気を出したに違いない。少しベッドの上で殴られただろう頭を動かしてみる…うん、特に痛みはないし大丈夫だな。

『運ばれてきた時はびっくりしましたよ』

『あははは…アイズはなんか言っていましたか？』

『「まだまだだなユキト君」って言っていましたよ』

『……………さいですか』

あんにゃろいつか絶対泣かしたる。

まあ思うの与实际やるのでは、かなり幅の広い一線があるから出来ないだろうけど、一応心の中で誓っておく。

『そういえばユキト君。次の土日空いてますか？』

ベッドから降りる僕を見計らってミストさんが声をかけてくる。

『ええと、予定は特にないですけど…』

『じゃあ、私の依頼受けてもらえませんか？』

『依頼…ですか？別に構いませんけど、また薬草摘みでしたら依頼じゃなくて、いつもの手伝いで良いですけど…』

この前の土日はミストさんの手伝いでロナと薬草摘みに行ったのだが、薬草がなくなったりしてはかどらなかった。

天候や森の動物たちが関係してるってロナは言ってたけど…実際はどうだかわからない。

それに薬草摘みぐらいならいつもやっているし、わざわざ依頼にしないでいい筈だ。

『いえ、実は必要な薬品を切らしてまして、この街では手に入りにくいので帝都まで行ってもらえませんか？』

『…帝都、ですか？』

『そうです。帝都ウィンベル。そこにある魔法店で必要な薬品を購入入してきてもらえませんか？』

思わず壁に貼ってあった周辺地図のほうに僕は目を向ける。

エルクワールは大陸の西南に位置している。

ここから北に行くと帝都ウィンベルがあり、そこまでの道はある…あるにはあるのだが。

『あの…行くのは全然構わないんですけど、どう考えても2日で行って帰ってこれる距離じゃないですよ？列車を使っても余計時間がかかりますし』

そう、確かに土日を使って帝都ウィンベルまで行くことは可能だろう。

だが、帰ってくるのにも移動にかかった日数がかかるからどう考えても土日中に帰ってくるのは無理だ。

ここから東にある別の街…シーエという街まで行って列車に乗るという道もあるが、それぐらいならここから歩いて向かったほうが早い。

『ええ、わかっています。ですから学校に依頼届けを出して行ってもらいたいのです』

『依頼届けって…もしかしてそれを出しておけば授業に出なくていいんですか？』

『そうです。実際ユキト君にもメリットがあると思いますよ？』

ニコリと笑ってこちらを見るミストさん。

『メリット…ですか？』

『帝都では異世界から英雄を呼び出す英雄召喚の儀式が昔行われているのです』

『ってことはもしかして？』

『ええ、そうです。ですからお城の図書館に行けば有力な手掛かりが掴めると私は考えています』

『そうなんですか…わかりました。その依頼お受けします』

もう断る理由はなかった。

まあ、元々ミストさんが手伝って欲しいことには手伝う心構えだったので、むしろこうして依頼として提案してくれたミストさんに感謝するべきだ。

ただ、一つだけ僕は気になることができていた。

英雄召喚…ね、まさか…な。

依頼（後書き）

もしかしたら次話以降はちょっと更新感覚が長くなるかもしれませんが、どうかお付き合いよろしくお願いします。

旅路（前書き）

今回はちよつと短めです。本当は次の話と合わせて投稿しようかと思つたのですが、長くなりすぎるため切りました。

旅路

元の世界に居た頃は、TVで国内の有名な場所や海外の観光地などがたくさん紹介されていた。

それを見て、実際に行った事もないのに行ってしまった気がして、仕舞いには行く気がなくなってしまい、旅行するということに興味もなくなってしまうていた僕だったが、まだまだ全然行ったことも見たことも聞いたこともない場所がたくさんあるこの世界で旅をするということは正直なところかなり楽しみだった。

だが、だ。

『なんで二人までついて来るんだ？』

『なんで……って言われてもなあ』

『アタシ達も同じ依頼受けたからとしか言いようがないわよね』

苦笑しながらアイズとロナが携帯食料の干し肉を袋から取り出しながら口々に言ってくる。

そう、何故か二人がついてきた……いや、別に嫌ってわけじゃない。むしろ助かるので喜ばしいことなんだけどね、夜の見張りとかは人数が多い方がいいし。

そんな事を思いながら道中に集めておいた枯れ枝に魔法で火をつけ、僕も鞆から取り出した干し肉を火で軽く炙る。

辺りはもうすっかり暗くなっており、今日はここ……エルクワールと帝都ウインベルのちょうど中間に位置する森の中で野宿だ。

『…ミストさんからの薬品購入の依頼？』

『そ。だいたい、今のご時世一人旅は結構危険なのよ？街道沿いはまだしも、森の中とか魔物が出て結構危険なんだからね？』

ロナが人差し指を立てながら言うてくる…うーん。そこまで危険なのかこの世界？と、正直なところ僕はまだ実感できていなかった。

これでも学校に入学しても土日には僕が最初に来た村…レント村にはたまに行って、ミストさんの手伝いで周辺を結構歩き回ったが、魔物らしき姿を見たことはなかった。

その事をロナとアイズに話してみると意外そうな顔をされた。

『珍しいわね。そこまで魔物に会わないのも…確かにレント村はどちらかと言うと平和だけど、まったく見かけないのはおかしいわよね？』

『そうだね。もしかしたらユキト君自身に何か理由があるのかもしれないな…』

『僕自身に理由って…異通者だからか？』

確かに二人にはなくて僕だけにある理由だが…本当にそのせいなのか？

むしろ僕は逆だと思う。この世界の人間じゃない僕はこの世界から見たら完全に異物でしかない。

だから魔物には余計襲われそうな気がするんだけどなあ…まあこの辺りは推測でしかないから全然わかんないんだけど。

『異通者…って言うか英雄って恐れられる者なの？』

そういえばミストさんも言ってたけど、確かに英雄だったら魔物に恐れられてもおかしくはないと思う。

『それはわからないな。英雄はここ最近：何百年も呼ばれてないし、歴史書にもそういう話は載ってなかったと思うよ』

アイズがそう答えるのを聞いてちよつと安心する僕。

もしかして僕が英雄として呼ばれたんじゃないだろうかと、ミストさんから聞いた時一瞬思ってしまったからだ。

まあ、よくよく考えると当たり前だよな、僕なんかが英雄として呼ばれるはずないしと、そこまで考えてめっちゃくちや恥ずかしくなった。

一瞬でも僕が英雄なんじゃないかと思ってしまったことが既にアウト過ぎる：自重しよう。

『そ、そうなんだ：ってことは何百年か前に英雄って居たの？』

話題を変えるために英雄について聞いてみる。

そこはミストさんに聞いた時からちよつと気になっていたところだ。まったく関係ないとはいえ、同じ異通者だったんだからどんな感じの人だったのか聞いてみたかった。

『うん？ いや、ボクにはよくわからない。何しろ何百年も前の話だからね』

ありゃ、意外と歴史書とかに載ってるかと思ってたんだが…。

英雄なら歴史に残るような大事件を解決してる気がするし。

『アタシもその頃には魔物を凶暴化・大量発生させる魔王ってのが

居たらしくて、その討伐のために呼ばれたってぐらいしか知らないわね』

げ…魔王って居たのかよ。どんだけ王道ファンタジーなんだよこの世界。と心の中だけでツツコム。

口にはしない。実際この世界の人達には切実な問題だっただろうし。と言うか…討伐されたんだよね？その魔王…（汗

『そういえば…その人、元の世界に帰れたのかな？』

『……………』

『……………』

僕の何気ない呟きに二人が押し黙る。

しまった、失言だったな今のは。そんな事二人にはわかるはずもない事だし聞いていい事じゃなかったな。

僕がそう後悔しながら苦し紛れに干し肉を齧る。

その様子を見てロナが少し慌てたように木々の間の空を見上げて話しかけてくる。

『そ、そういえば今日は満月で助かったわね〜』

『そ、そうだな。月明かりが結構助かるし』

『魔物も大人しくなって一石二鳥だからね』

『え？満月だと魔物が大人しくなるの？』

初耳だったので思わずアイズに詰め寄る。

対するアイズも驚いたような顔で逆に聞いてきた。

『ユキト君：君、知らなかったのかい？まあ、魔物に遭ったことがなかったから当然かもしれないが…』

『あー：うん。図書室で借りた本も全部魔法関係の本だったし、授業でもそんな話聞いたことないし…』

『あはは。まあ、アタシ達にとっては当然の事実だからね。ユキが知らないのも無理ないでしょ』

ロナが苦笑しながら近くにあった枯れ枝を火の中に投げ入れて言葉を続ける。

『月には魔力があって、魔物はその魔力を嫌うっていうのがどこかの偉い学者さんの説らしいわ』

『まあ、たとえば満月でも一応用心はしたほうがいいと思うけどね』

『そうなんだ：じゃあ二人とも今日は先に休んでいいよ。僕が見張りやるから』

干し肉を食べ終えたので手近な木に腰を下ろしながら寄りかかる。もちろんいつでもすぐに使えるようにナイフも抜いておく。

その様子を見ていたアイズが首を振って話しかてくる。

『いや、ボクがやろう。見張りには慣れないと大変だろうし…』

『じゃー早く慣れるためにも僕がやらないとね』

『う…』

アイズが言いよどむのを見計らって側に置いておいた袋から毛布を取り出して適当に投げつける。

『ほら、余計なこと考えてないでとっとと寝ちまえー』

『…わかった。でも5時間経ったら起こしてくれ。流石にそれ以上は譲れない』

『はいはい。わかったわかった』

適当に答えながら苦笑する。

いくらなんでも気を使いすぎだとも思うが、心遣いは嬉しかったので心の中だけでお礼を言っておく。

アイズはまだ何か言いたそうだったが、不承不承といった感じで毛布に包まる。

それを見届けた後に背後を振り返るとロナが呆然としていた。

『って、ロナどうかしたか？』

『え…ううん、二人とも妙に仲いいなあって思ってた…』

『…そうだったかな？別に普通だった気がするけど…』

特に変な事も言っていないし、普通の会話だった気がするけど。

すると、よっぽど呆れたのかロナがため息をつきながら干し肉の骨を焚き火の中に投げ入れてこう呟く。

『はあ、ユキって本当に鈍いわねえ…』

『…やっぱり鈍いのか僕…』

そう嘆いてからちよつとだけ凹む。

事実、元の世界でも妹の雪菜や学校の友達にも「お兄ちゃん（お前）鈍すぎ」と何度か言われたことがあるからだ。

僕は今後どうしたら鈍くなくなるのかを割と真剣に考察していると、ロナが欠伸をして眠そうに目をこする。

『それじゃあ、アタシもそろそろ寝ようかな？』

『あ、うん、お前はずっと朝まで寝てていいからな』

『…ありがと。ユキ』

そう微笑してロナが答えるとすぐに焚き火の近くで横になると、すぐに寝息が聞こえてきた。

実は、ロナは夜に弱い。気を使ってやらないとこっちが大変な目に遭うぐらいだ。

ちなみに、一番最初に夜に弱いという事に気づいたときは大変だった。

その時は僕とロナがミストさんのお手伝いでレント村の外を回っていたのだが、薬草が見つからずに時間がかかり、夜になってミストさんの診療所に帰る途中で急に眠りだしたのだ。

『あの時は大変だったなあ…』

立ち上る火の粉を目で追いながら苦笑する。

歩いている途中で急に倒れそうになったロナを慌てて支え、呼んでも叫んでも揺すっても起きなかったため、結局背中におぶさって帰

ることになり、かなり大変だった。
まあ、今となっては笑い話としか思えないけど。

『さてと…』

ここから5時間は常に周囲に気をつけないといけない。
居眠りしてて起きたら天国でした、というオチだけは避けたい。
となるとこの待つだけの時間は退屈になるだろう。

『ま、今回は退屈はしなさそうだけど…』

そう溢してから空を見上げると木々の間に綺麗な星空が広がっていた。

前にも言ったが、元の世界では常に天気が悪かったので夜の間もほぼ雲に覆われていて星空は見えなかった。
だから、こういう星空は初めて見る。

『本とか写真とか映像とかで見たことならあったけど、実際に見てみると凄く綺麗だなあ…』

満天の星空を見上げていると、不意に雪菜の顔が思い出された。
あいつにも見せてやりたいと心から思う。

僕と一緒に本が大好きだったが、とりわけ星座が描かれた本が好きだった。

実際にこの星空を見せたら本当に喜んだだろう。

『…自由に行き来できたらなあ…』

できたらいいなあ…とは思うが、その前に僕自身が戻れないとどうにもならない。

帝都に世界移動の核心とまでは行かなくてもヒントぐらいはあるといいなあ…と思いつつ鞆から本を取り出す。

一応、周りに気をつけなければならないが、居眠りするよりは良いと思うし、流し読みするぐらいなら大丈夫だろう。

『さてさて、星空も十分堪能しましたし適当に時間潰すとしますか』

そう呟いてから僕は本を開いた。

魔物（前書き）

いつの間にかPVが一万超えてました。

この調子で頑張りたいと思っています。

あと、一言でも感想とか指摘したい点があったらコメントしてくださいと嬉しいですよ。

魔物

見張りを始めて4時間ぐらい経っただろうか？

ふと時間が気になり、この世界に着てからはずっと身に付けていた腕時計で時刻を確認すると深夜の1時をちょっとまわったところだった。

…たぶんだが、この様子だと向こうの世界とこっちの世界の時間の流れ方は同じのようだ。

『（もうちょっとしたらアイズ起こして交代してもらおうかな？）』

欠伸を噛み殺しながらそんな事を考える。

ちなみに今まで特に変わったところはなかった。

たまに夜行性の鳥だかコウモリだかよくわからない大小様々な大きさの影が空を横切ったこともあったが、特に問題はなかった。

だが、

『……………？』

ふと、変な匂いを嗅いだ気がして辺りを見渡す。

目に見えて変わったところは…特にない。

森の匂いという独特の匂いにもここに来るまでの間に慣れてしまっていたし、ここに腰を落ち着けてからも匂いは嗅いでいた。

だが、今微妙に違う匂いを嗅いだ気がした。

元の世界でも喧嘩のとき、たまに嗅いでいた血の匂いだ。

『（…嫌な予感するなあ）』

そんな事を漠然と感じながら、読んでいた本を閉じて鞆に投げ入れ、アイズを無言で揺する。

すると、慣れているのか揺すられた瞬間アイズが目を見開き、すぐに目でどうしたと無言で問いかけてくる。

手馴れた様子のアイズを見て頼もしいなと思ったのは秘密だ。

とりあえず僕は先ほど感じた感覚をなるべく小声で囁き、ちょっと辺りの様子を見てくると伝える。

アイズに様子を見に行つて貰うほうが僕的には安心なのだが、万が一ここで戦闘になった場合僕がロナを庇わなくてはならなくなる。だが、前回の実践訓練で僕のバリアは簡単に破られるような習得具合だ。

ならば少しでも実戦経験があるアイズにロナを守ってもらったほうが安心だと思ったからだ。

『念話は使えるかい？』

『：：：どうだろうね？』

アイズに問われ、微妙な表情をする僕。一応知識としてやり方などは覚えてはいる。

だが、試す機会もなかったので今までやったことがなかった、なので即席で試してみる。

念話というのは、見えない糸電話と思ってくれれば良い。糸は魔力で作られ出し、それを相手に繋ぐだけだ。

ただし、あまりにも相手との距離が開きすぎると糸が途切れやすくなり、最大距離は街と隣の街の間を繋ぐぐらいが限界らしい。

『（えーっと、確か自分の魔力を糸の様にイメージして、相手の顔を思い浮かべて…魔力の糸に言葉を乗せるんだっただけ？）』

一応一般魔法に分類されているので簡単らしいが、相手の顔を思い浮かべるという作業が意外と難しいらしい。

『（…こんな感じかな？）』

『（うん、これなら大丈夫そうだ。それじゃあ気をつけて）』

『（おう、そっちもロナのこと頼むな）』

しかし、頭の中だけで会話って便利だけど変な感じだなホント。そう思いつつ、ナイフを構えながら森の中をゆっくりと慎重に進んでいく。

10分ぐらい森の中を歩き続けたが、特に変わったところはない。匂いも注意深く嗅いでいるけど、これも変わらずだ。

気のせいだったのかなあと思いながらもさらに辺りを歩いていく。

『（アイズ、そっちは変わったことない？）』

『（こちらは特に変わったところはないな、気のせいだったんじゃないかい？）』

『（んーそうだったのかなあ…）』

でも、確かに嗅いだ気がしたんだけどなあと、そこまで思ってから違和感を感じてすぐに息を潜める。

『（…どうしたユキト君！）』

『(ごめん。ちょっと黙ってて)』

僕の異変を察知したのかアイズが問いかけてくるが、答えている余裕がない。

そのままゆっくりと周囲の気配をゆっくりと探る。

『(…二人? いや、一匹と一人って感じだなこれ…)』

僕の現在居る場所から西南の方角に微かにだが何かの気配を感じる。そして、足音をなるべくたてないように慎重にその方角に向かう。

『……………えいっ!……………』

『……………ガアッ……………』

足を進めていると徐々に人の声と獣の鳴き声が聞こえてきた。僅かにだが、血の匂いもする。

『(ここか?)』

そう思い、さらに慎重に木の後ろに移動してこっそり覗いて見る。まず、最初に見えてきたのは大きな狼。体長が3mはありそうなきな狼だ。

そして、その狼の視線の先には足から血を流して座り込んでいる小柄な少女。

服装は白いローブを羽織っているせいでよくわからない。

だが、遠目から見てもわかるほど綺麗な黒髪が背中まで伸びていて女の子だということだけはわかる。

その様子を観察していたところ、少女と目が合った。

『あ…』

『……………』

『…助けて下さい!』

『っ』

その瞬間、僕は迷わず狼の目に向けてナイフを投擲していた。すると、狼もこちらの存在に気づいたのか、顔をずらしてナイフを避けようとする…が。

『ガウツ!?!』

こちらの手のほうが僅かに早かったらしい。狼の目蓋辺りを切り裂いてナイフが地面に落ちる。

『(よし!今のうちに!!)』

蹲る狼の横を通り抜け、急いで少女の元まで走る。

立てるか?と声をかけようとして足の怪我の酷さを見て無理だと即判断する。

『ごめん。色々言いたい事あるだろうけどちょっと我慢して!』

『ふえ?』

一瞬運びやすいお姫様抱っこしようかと悩んだが、この状況で両手が塞がれるのはまずすぎる。

同じ理由で背中に載せるのも駄目だろうと思い、小脇に抱えることにした。

少女が割と小柄だったからできる行為で、正直僕と同じ体格ぐらいだったら絶対無理だっただろう。

いや、この世界に着てから身体能力上がってるし、案外出来るかもしれないが今はどうでもいいことだ。

『逃げるよ！舌嚙まないように口を閉じておいて！』

そう声をかけたあと、未だに蹲る狼に背を向けて走り出す。

まだ相手は完全に立ち直ってない。

だが、いくらなんでも僕だけでこの魔物に勝てるとは思っていなかった。

まだまだ駆け出しの魔法使いだし、攻撃系の魔法はまだ一度も練習したこともない。

魔法を練習していないってことは発動するかも怪しいってことで、そんな状況で戦うのは無謀すぎる。

そして一番痛かったのが…ナイフを投擲してしまっただけで回収できなかったことだ。

せめてナイフがあれば、もう少しはあの狼に手傷を負わせる事もできたかもしれないのだが…しくじったな。

『あのっ！どうして逃げるんですか！？貴方は…かなり戦闘に手馴れているように見えるんですけど！』

口を閉じておけと言ったのに声をかけてくる…一々説明するのが面倒だと感じながらも、走りながら簡単に説明することにした。

『僕はまだまだ駆け出しの初心者魔法使いなんだ。戦闘なんて全然無理だって！』

一応喧嘩の経験はあったが、これは喧嘩なんていう生易しいモノじゃなくて、生き残るための命と命を賭けた戦いだ。

そんな経験あったまるかと思うし、やるつもりもないのが僕の本音だったりする。

森の中を走り続けていると一際大きな木があったので、根っこで転ばないように気をつけながら飛び越えて一度足を止め、少女を降ろす。

そして、気配を探してみると徐々にだが先ほど感じた気配が近づいてきているのがわかった。

『…さすが狼。目を失っても鼻は効くか…』

これからどうするかなあ？と自分自身の不甲斐なさに呆れながらも、少女の足の怪我に応急処置をすることにする。

あの場でもう少し痛めつけて追われないようにするぐらいはナイフが無くてでもするべきだったのだが、慌てていたせいかすっかり頭から抜け落ちていた。

その事に悔やみながらもポケットに入れていたハンカチで傷口を覆い、きつくならない程度に縛って止血しながらもこれからどうするか考える。

アイズたちと合流する…というのはまずいだろう。確かにアイズやロナなら勝てるかもしれないが、今は寝ているロナがいてまともに戦える状況じゃない。

『…君、他の仲間は？』

もしこの少女が他の人間と一緒に居たのだとしたらその人達と合流

したほうがいいんだけど…僕の命的にも。

『すいません。わたし一人です』

『…そっか。じゃあ攻撃系の魔法は使える？』

ならせめて、僕が前衛に出て後衛として少女に頑張ってもらおうかと考える。

徒手空拳になるが、元の世界でも喧嘩をしていた時は、特に武器を使っていたわけではないので多少は戦えるだろう。

だが、決め手に欠けるので後衛として少女に頑張ってもらおうかと考えたのだが…。

『一応使えるんですが、あの魔物の前にも他の魔物と戦っていたので…魔力がもう殆ど残ってないんです』

『あー…だよねえ、でなきゃ僕に助け求めることなんてなかったもんなあ』

『あう…すいませんです』

本当に申し訳なさそうに言ってくる少女に「僕も似たようなもんだから気にしないでいい」とだけフォローしてからもう一度少女を小脇に抱える。

こうなったらもう逃げきるしかない。幸い、相手は手負いだからこの森を抜ければ追ってこないだろう。

なのでアイズに連絡だけしておくことにする。

『（アイズ、聞こえる？）』

『(ユキト君!今、大丈夫なのかい?)』

『(まあ、今のところはなんとかね…たださ、女の子が魔物に襲われて一緒に逃げてる最中なんだ)』

『(…倒せそうにないのかい?)』

『(不甲斐ないことだけど、ナイフ投げちゃってて手元に武器がない)』

『(攻撃系魔法は…覚えてなさそうだね君)』

『(悔しいけどご名答。ちなみに連れの女の子も魔力切れ)』

『(…君、そんな状況で逃げ切れるのかい?)』

『(…………たぶん)』

まだ体力には余裕があるし、この森がどれだけ続くか検討もつかない。

だが、地図で見た限りはそこまで深い森じゃなかったはずなので、全力で走れば抜けられそうだと考えていた。

現在位置も大まかにだが把握してるし、方角を間違わなければ帝都までは行けるだろうと踏んでいる。

まあ、問題としては…あの狼が血の匂いで追ってきてるかどうかでいつまでも追われるんじゃないかという問題だった。

止血したとはいえ、血の匂いは簡単に消えるものじゃない。

『(ま、どうにかしてみるよ。だからこの森での合流はちょっと無理だと思うんだ)』

『(そうだね：わかった。じゃあ帝都で会おう。死なないようにね?)』

『(：縁起でもない言葉の応援をありがとうアイズ。一応そっちも気をつけてね)』

そう返した後、魔力の糸を切る。

さて、逃げると思ったからにはもう少し相手を攻撃しておきたかった。

ある程度攻撃しておいて追撃の手を躊躇わせるためで、倒すつもりは元から無い。

だが、そうなるとこの少女をどうにかしなくてはならない。

流石に背後に庇いながら戦うのは無理がありすぎる：なので。

『飛び移れるかなっつつ!』

少し足に力を入れてその場から飛び上がってみる。

もちろん少女を抱えたままだ。

『きゃあっ?』

小さく悲鳴が聞こえたが、気にせず頭上の木の枝の上に着地する。

しかし：飛び上がったからなんだけど、僕の身体能力ここまで上がってるのかとちょっと呆然とする。

ゆうに3〜4mはジャンプできたぞ? しかも女の子抱えてる上に助走なしだっというのに：まあこの子の体重が軽いつていうのも理由だけどさ。

まあ、とりあえず無事に木の枝に飛び乗れたので安堵する。

『じゃー君。ちょっとじっとしててね？すぐに終わるから』

『え？あ、あのっ！どうするんですか？』

すぐに少女を木にしがみつかせて、僕は飛び降りる。

上から少女が聞いてくるので、簡単に短く答える：そろそろ相手も到着しそうだからだ。

『んー？ちょっと手傷負わせておこうかと思ってね』

そう言って気配が感じられる方向に2、3歩ほど歩くと、前の茂みからガサガサという足音。

視線を向けてみると、先ほどの狼がゆっくりと近づいてきていた。

改めて見てわかったけど、先ほど投げたナイフは右目の目蓋を少し切っただけのようで、両目ともに健在だ。

せめてもの救いは目蓋を切ったせいで血が流れて右目が使えそうに見えない点ぐらいだった。

相手もこっちがやる気なのに気づいたのか警戒するように唸りはじめる。

『ガウウウウウ…』

『……………』

この様子ならカウンターの一撃で決められるかな？そう判断して、両手を握り締めて構える。

構えると言っても拳法をやったこともないので我流だ。

漫画やアニメなどの見よう見真似で、型も形式も何もない。

『ガアアアッ』

『ほんと』

飛び掛ってきた狼より半歩を横に避け、すれ違う瞬間アッパーカット気味に狼の胴体を殴る。

身体能力の上昇のせいかな、もしくは相手の目の怪我のせいなのか、相手の動きがよく見えるので簡単に拳がクリーンヒットする。

思ったより早く片付いたな、と安心したのだが…。

『グウウウ…』

『あ、あれ？』

かなり力も入れて殴ったので、一撃で沈むかと思ったのだが、大して効いてないかのように体制を立て直した狼がこちらを睨む。
おっかしいなあ…手加減したつもりなかったんだけど？

『ガアッ』

『わったった』

さらに連続で飛び掛ってくる狼を右へ左へと避けながらも先ほどと同じように拳で打撃を加えていくが、まったく効いてないかのように狼の動きが衰えない。

『（…なんかおかしいなコイツ…）』

いくらなんでもおかしいと思い始める僕。

既に5〜6発は胴体にクリーンヒットさせたのだが、効果がでない。

魔物ってこんなに体力あるのか？ いや、それはおかしいよなあ…。それに…なんか、殴った瞬間が壁を叩いたときみたいな感触がするけど…もしかして？

『あのっ！ その魔物は打撃が効かない魔物なんですっ！』

木の上にいた少女からそんな叫びが聞こえて僕は愕然とする。

打撃が効かない？ おいおい、そんな特性っぽいのもあるのかよ魔物って、ナイフの予備は…もちろん無いし攻撃系の魔法は…使えないし。

…あれ？ 僕結構ピンチじゃね？

『ガアアアッ』

『こりゃあ、やばいな』

努力しても無駄だぞと言わんばかりに吼える狼。

その辺の木の枝を折って叩きつけても打撃として防がれるだろうし…かと言って他の刃物も持ってないし。

一般魔法の…この前使ったような氷で刃物みたいな物作れるか？…いや、ダメだ。あれは凍らせるのが目的で形の形成はほぼ無理だ。火炎球もスピードが絶望的で絶対無理だし…どうしよう？ と考えていると少女が焦ったかのように聞いてくる。

『な、何か武器はないんですか！？』

『いやー、君を助けるときに投げたナイフだけしか持ってきてなくて…』

『そ、そんな…わたしも何も持ってませんよ！？』

『うーん。どうしょっか？』

『わ、わたしに聞かないでくださいよ…ううう、ひっく』

『ちよっ、泣くのだけはやめてくれ』

この状況で泣きたいのは僕だったりする。いや、ホント手詰まりも
いいとこだよこの状況。

とりあえず、無駄に体力を浪費するわけにもいかなかったので必要最低
限の動きだけで狼の攻撃を回避していく。

『…あ』

『お、何かいい案浮かんだか！？』

何か思いついたような少女の声に笑顔を向ける僕。

さっきから狼からの攻撃を避けてるけど、どうしようもないこの状
況から一刻も早く抜け出したいと思っていたところだったりする。

『…でも、ちよっと不安なんですけど…』

『いや、この状況でこれ以上の不安も何も無いと僕は思うんだが…』

負ければ仲良くこの狼の胃袋行きだ。

案があるならなんでも試してみるべきである。

少女も覚悟を決めたのか、こちらを真剣に見つめてくる。

『…わかりました。今だけ貴方を信用します！』

『おう！頼んだぞ、名前も知らない少女よ！』

冗談半分で言ったのだが、少女が物凄く何か言いたそうな目でこちらを見つめてくる。だが、諦めたのか口を開く。

『【深紅の精霊よ、我が友の手に宿り、力を貸したまえ、炎腕！】
フレイムエンチャント』

詠唱が終わった途端に、僕の両腕が赤く染まる。

染まると言っても、なんだか暖炉の暖かい光を受けているような感じだ。

『…えっと、何？これ…』

『精霊…魔法の…一種…です。その状態なら…障壁が…抜けるはず…です。すいません、わたしには…これが…精一杯…みたい…です…』

ふらふらし始める少女を見て、あのままだとマズイと思い、すぐに襲い掛かってきた狼の顔面に遠慮なく本気で拳を叩きつける。

殴った瞬間。バキンッという壁を抜く音とボウウッという炎の音と共に狼を焼いていく。

『ギャウウウッ』

『うわっ、何この威力アップと、エグイ効果！』

狼の悲鳴と目前の光景に慌てて距離を取る僕。

だが、炎で少し焼かれたのと打撃が通ったせいか、大慌てで逃げていく狼。

そして、こちらも慌てて両手を振ってかかっていた魔法効果を破棄

すると、すぐに木の枝の上でふらふらしている少女を地面に降ろす。

『だ、大丈夫？』

『だいじょぶ…です。ただ…魔力を…使いすぎたんで…ごめんなさい…ちよつと寝ます…』

ふらりと倒れる少女を慌てて支えると共に、健やかな寝息が聞こえてきた。

そういえば魔力使いすぎると意識が遠くなるって本に書いてあったけど…こういう事かと納得する。

ああ、だから不安がってたのか、僕がどんな相手かわかんなくてこんな状況になるのが怖かったわけね。

その事に苦笑しながらローブを外して少女にかけてから木に寄りかからせる。

そして僕もその場に腰を下ろす。

『はあ、死ぬかと思ったよ』

とんでもない初戦闘だったなあと実感しながら、いつの間にか出ていた額の汗を拭い、ため息を吐く僕だった。

魔物（後書き）

ちよつと今までの話で手直ししたいところがいくつかあるので来週は手直しだけになるかもしれませんが、ご了承くださいませ。

誤解（前書き）

PVが14000超えててびっくりしました。皆さん本当にありがとうございます！この調子で頑張っていきますので、お付き合いよろしく願います。

誤解

帝都ウインベル。

街と城を大きな白い城壁と水が張られた堀で囲まれている国だ。

交易も盛んで、国内の治安も国王がしっかり纏めているのでかなり良い。

その治安と不法入国を守る策として、この国に入るためには跳ね橋を渡るしかない。

いくら戦争が終わって平和になったからとはいえ、犯罪者が減ることはない。

そのため、唯一の入国手段である跳ね橋は厳重な警戒態勢が敷かれていて、入国審査がある。

武器の携帯は基本的に許可されているが、国内で問題を起こせばすぐに牢屋行きとの事だ。

と、ここまでが2〜3度来たことがあると言うロナの言葉で説明だ。

そう、問題を起こせば牢屋行きだ。

つまり、何も起こさなければ牢屋に入る事も見ることもない。

普通に国に入れて、ミストさんに頼まれた依頼は簡単にこなせるし。元の世界に帰るための情報探しは…まあ、簡単にはこなせないかも知だが、ある程度は判ると思っていたのだが、どうやら現実ってやつはそう優しくできてるわけではないらしい…と言うより、非常に理不尽である。

だって…今僕は…。

『なんだって牢屋に居るんだよーっ!?!』

力の限り叫ぶ。

牢屋番の兵士が「やかましい！静かにしろ！」と言ってくるが、気にしない、と言うか気にしている余裕がない。
だって！理不尽すぎるから！この状況！

『（：しっかし。どうしてこうなったんだっけ？）』

僕は何か悪いことしたっけかな？とゆっくりとここに入れられるまでを床に腰を下ろして思い出してみる。

『ほれ、着いたぞ坊主』

『よ、ようやく着いたんですか？』

道中に偶然出会った商人のおっちゃんに思わず聞き返す。

ある程度覚悟はしていたのだが、いくら小柄な少女とはいえ、背負ったままこの長い距離を徹夜で歩くのは結構きつかった。

だが、僕はやりとげたんだと実感する。

視線の先には大きな白い城壁、そして澄んだ水が張られた堀を渡るための跳ね橋：話に聞いていた通り、帝都ウインベルだった。

『しかし：坊主は意外と根性あるな。あの森からその嬢ちゃん背負ってここまで来るとは：』

『た、体力には自信あるんで：』

曖昧に笑ってごまかす。

ぶっちゃけ異世界移動での身体能力の向上が原因だとわかりきっているのに、素直に喜べない。

異世界移動前の僕では背中にこの子を背負ったままこの距離を歩くのは絶対に無理だっただろう。

そう、僕はいつまで経っても起きないこの少女を背中に背負ったまま帝都に向かって歩き始めた。

あの場にいつまでも居るわけにも行かないし、少女の足の怪我はきちんとした施設で早めに治療すべきだと思ったからだ。

：ちなみに、背負う際に：その、女の子特有の身体的特徴：みたいな所はなるべく触れないようにローブで包んである。

いや、いくら僕でもそのまま背負うのは抵抗がある：興味が無いわけじゃないけど。

『：とは言ったものの、流石にちょっと疲れたかな？』

『今のうちに休んでおいたほうがいいぞ？何しろ時間がかかるからなここの入国審査』

『やっぱり、どこの世界でも入国審査って時間かかるんだなあ：まあ仕方ないんだろうけど』

そう小声で独り言を呟いた後、背負っていた少女を道端の草原に寝かせ、僕もその隣に座る。

急がなければならぬが、少しだけ休ませてもらうことにした。

流石に僕が動けなくなってしまうては少女には悪影響しか出ない。

『じゃあ坊主。俺は先に行くぞ？悪いが急ぎの仕事なんでな：』

『あ、はい。それより、途中で道を教えてくれたり、食料を分けて貰ったりして色々とありがたいございました』

『いいって事よ。困ってる時はお互い様って言うしな！』

豪快な笑みを浮かべるおっちゃんに片手を上げて答えて後姿を見送る。

うん、良い人だったな。今度会ったらお礼できたらいいなあ…と考えるながらゆっくり辺りを見渡す。

この草原も見ただことない鳥や小動物、木々、草花が普通に群生しているのは正直見ていて飽きない。

森の中でも感じていたことだが、もの凄く楽しい。

天気も良いし、こういう所で昼寝したら凄く気持ちいいだろうなあと思う。

『…こういうのが旅の醍醐味ってやつなのかな？』

そう呟いてから苦笑する。ちょっと前までは修学旅行に行くのも億劫だったので現金な物だ。

『さてと、十分休憩できたし、そろそろ行くとしますか』

まあ、十分休憩したと言っても5分も経ってないけど、と自分にツツコミながらゆっくりと少女を背中に負ぶさる。

ここに居ればロナたちと合流できるかとも一瞬考えたが、もしかしたら既に先に行ってるかもしれないし、少女の治療も早めに済ませておきたかったので先に進むことにした。

そのまま歩き続け、跳ね橋に近づいてきた。緑色の甲冑を着て槍を持った二人の兵士の姿も見える。

あの人達が入国審査する警備の人かな？とか思いつつ、さらに近づ

く。

『そこで止まれ。旅の者』

少女を背負ったまま跳ね橋を渡ろうとさらに橋に近づくと、左右から兵士が近づいてきた。

『…なんだ？その少女は？』

『あ、えっと。途中の森で会って…』

『ん？…お、おい！この人は！』

左に居た兵士が少女の顔を覗き込んで慌てて右の兵士を手招きする。怪訝な顔をしながら右の兵士も少女の顔を覗き込み、慌てて槍を僕に突きつけてきた。

『貴様っ！その場を動くな！』

『は、はい！』

何かなんだかわからないまま直立して両手を挙げようとしたが、両手は少女を支えるのに使っているものでどうしようもできない。

とりあえず、動かなければいいと判断してピクリとも動かないようにする。

『（い、一体なんなんだろう。この子もしかして…）』

指名手配中の犯罪者？…うん、ありえねえ。

こんな小さな女の子が犯罪者とか余程のことが無い限りありえない

し。

それに森ではちょっとしか会話してないけど、悪い子って感じはしなかったし。

じゃあ、この国で行方不明になってた人？…あ、これは結構ありそうだ。

でも、そうなる何故一人であの森に居たのかがわからなくなるけど…誘拐でもされてたのかな？

もしそうだとしたら、僕…誘拐犯として疑われてる？

そこまで考えて、「いやいやいや。ないわ。流石にそれはないわ」と自分の考えを否定する。

いくら動転してるとはいえ、一国の兵士。それなりに頭は良い筈だ。誘拐犯が誘拐した人を背負って連れ去った場所に戻ってくる？絶対ありえないって。

『（うん、とりあえず動かなければ悪いことにはならないはずだ）』

そう自分を安心させて兵士の動きを見してみる。

最初に少女の顔を覗き込んでいた兵士が跳ね橋の脇にある控え室みたいな小屋に慌てて入っていく。

この少女の親とかに連絡でもしてるのかな？と僕は考えた。

だが、数分して跳ね橋の向こう側から来たのは安堵の笑みを浮かべた両親ではなく、緊張した面持ちの兵士達総勢18名だった。

彼らはすぐに僕の周りをぐるりと取り囲む…あ、あれー？僕、何か選択肢間違えましたか？

『動くなよ、少年』

先ほどからずっと槍を突きつけている兵士がそう声をかけてくる。

いや、言われなくても動けません。貴方自身と持っている槍から殺気がひしひしと伝わってきてますから下手に動けません。

取り囲んでいた兵士たちが僕に近づいてきて、僕の体の所々に槍を突きつけつつ。

兵士が2名囲っていた輪から外れて少女を脇から支え、僕から引き離す。

ほっとしたのも束の間、リーダー格っぽい少し豪華な鎧を着た兵士がこう告げてきた。

『…よし。少年、事情を聞くために一時身柄を拘束させて貰う。付いて来い』

『…は？』

啞然とする。いや、正直これで終わりと思っていたので、この展開は読めていなかった。

『聞こえなかったのか？一時身柄を拘束させて貰う』

『いやいやいや！僕、何もしてないし！無実だから！こんな理不尽あつてたまる…』

抗議の言葉を途中で飲み込む。

槍の矛先を喉元に突きつけられたからだ。

『それも含めて事情を聞くために拘束させて貰う。とりあえず付いて来い。下手な真似はするなよ？』

『……………はい』

ここまできて僕はもう諦めることにした。
たぶん、何を言っても耳を貸さないだろうし。
この場で悪あがきとばかりに、事情を話して嘘とか思われるのも嫌だし、ここは素直に従うことにした。

『…で、ここに入れられたんだっけ？』

ようやく落ち着いてきた頭で情報の整理整頓し、整える。
でも、この理不尽な扱いには腹がたっているので、もう一度叫ぶことにする。

『だからって、真っ直ぐ牢屋に入れんなっ！』

『静かにしろと言っているだろうが、この犯罪者がっ！』

叫んだ瞬間牢屋番に怒鳴り返され、とりあえず深呼吸して少し落ち着こうと思い何度か深呼吸する。

すーはー、すーはー、すーはー、すーはー…よし。ちよつと落ち着いた。

『（…うーん。このままここに居て処刑とかならないかな？）』

流石にその展開はない…とは決して言い切れないのが、ここ数週間の出来事を思い出してからの結論だった。

だが、逃げようにも魔法では何も出来そうになかった。

この牢屋に入れられる際、両手に枷をはめられたのだが、この枷は

どうやら魔法使い対策のために魔法を封じる効果が付与されているらしく、魔法が使えない。
ちなみに、試しに使おうとしてみたところ小さな火花が散るだけだった。

『（まあ、こんなチャチな錠前ぐらいなら魔法なんか使わなくても簡単に外せるんだが…）』

そんな危ない発言を心の中でしながら、腕時計の裏に仕込んでおいた少し固めの針金を取り出してまっすぐに伸ばす。

実は、今までに何度かこのような錠を開けたことがあるのだ。
こう言う泥棒してるのかと思われるが、これにはちゃんと理由がある。

：いや、ちゃんとした理由ってどんなのだよっていうツツコミはなしの方向で頼みたい。

元の世界に居た頃、友人に仕込まれたのだ。

最初は何故こんな事できなきゃならんのかと尋ねたことがあったが、友人の答えはこうだった。

『あん？覚えておいて損はないだろう？』

うん、確かに損はないかもしれないが、問題は増えそうだぞ？と世界を越えて当時と思ったことと同じ言葉を心の中だけで友人にツツコム。

カチャカチャと小さい音を出しながらで錠穴を弄くっていると牢屋部屋の入り口のほうが騒がしくなった。

その騒ぎに気づき、すぐに針金を袖に隠す。これを取られちゃ本当に何も出来なくなる。

『（…まさか、もう処刑にしろって命令が下ったか？）』

だとしたら笑えない話だと思い、少し緊張して牢屋番の声に耳を傾けてみる。

と、誰かが大慌てで今僕が居る牢屋の前まで来た。

『し、失礼しましたっ！今すぐここから出てください！』

駆け込んで来たのは、あの時のリーダー格っぽい少し豪華な鎧を着た兵士：なのだが、顔が妙に青い。

なんか、押したらすぐに倒れるんじゃないかと思うぐらいガクガク震えているし、声も緊張している。

なにかあつたんだろうか？

『え、えと。とりあえず、ここを出ればいいんですよね？』

『そ、そうです…』

妙に慌てている兵士が震える手で牢屋の錠前に鍵を差し込み戸を開ける。

そしてよくわからないまま牢屋を出る僕。

『か、枷も外しますので両手を出してください！』

さらに大きな声で言ってくる兵士：一体何が起こったんだこの人？
としばし呆気に取りながらも両手を前に突き出す。

銅色の鍵が枷の錠前に入り、カチャンツという音と共に枷が地面に落ちる。

それと同時に兵士がすばやく頭を下げてきた。

『この度は大変失礼しましたっ！』

『え、えーっとすいません。本当に事情がよく飲み込めてないんですが…』

『そ、それにつきましては後でご説明させてもらいますので付いて来て下さいませっ!』

『は、はあ…』

兵士…もう兵士さんでいいか。は妙な勢いがあってすぐに歩き出したので、少し慌てながら着いていく。

だが、余程慌てていたのか足元に転がっていた柵に足を引っ掛けて盛大に倒れる。

…まじで大丈夫かこの人？

『あ、あの…大丈夫ですか?』

『だ、大丈夫です!ご心配ありがとうございます!』

慌てて立ち上がって先導し始める兵士さん…ホント何があったんだろうこの人…と首を傾げながら、あまり驚かさないように静かにこの人について行く事にした。

誤解（後書き）

一言応援、一言意見。なんでもお待ちしております。)

対話（前書き）

今回は大慌てで書き上げたのでもしかしたら誤字脱字や至らない点が多いかもしれませんが、ご了承ください。あとコメントでそういった点も指摘して貰えると助かります（苦笑）

対話

『（うーん。なんで僕はこんなところに居るんだろう？）』

牢屋の中でも思っていたことがもう一度頭にリフレインする。

いや、頭ではわかっている。ただ、認めたくないと言うか…受け入れがたいと言うか…まあ、察して欲しい。

ホントに先の言葉を誰かに問いかけたい気分だ。

と言うか、たぶんロナかアイズかミストさんがこの場に居たら迷わず問いかけていただろう。

今、現在僕が居るかなり豪華ではあるがどこかスッキリとしている大きな部屋には…側に、先ほどまで僕を先導してくれていた兵士さんが膝をついていて。

壁際には、たくさんの兵士達がキチンと整列している。

そして、僕の目の前には…。

『では、貴殿が例の人物か？』

偉そうには決して見えない、だが妙に威厳が漂っている老人。

身長とか体格とかは椅子に座っているせいでよくわからないけど、年齢は…50歳前半ぐらい入ってそうだ。

深紅のマントを羽織っており、豪華ではないがサッパリとした服。そして黒髪にいくらか白髪が混じった頭には金色の王冠。

どうやらこの国の王様らしい。

もう一度、はっきりと言う。僕の目の前にいるこの老人は帝都ウィンベルの王様らしい。

『（…なんでやねんっ！）』

思わず心の中で普段使わない関西弁式のツツコミを入れる。
何がどうなったら一般人の僕がこんな王様と会話するための部屋――
――謁見の間なんて入れられるんだよ。
絶対別の人と間違えてる。すぐにそう思い、王様自身に聞いてみることにした。

『え、えっと。すみません王様…人違いじゃありませんか？』

『何？貴殿は我が娘を助けたのじゃろう？』

『娘さん？えっとお姫様…ですよね？生憎、そういった格好の女の子は助けた覚えは…』

そこまで否定して、女の子というワードに一件だけごく最近そうだった覚えがあり、冷や汗が全身をだらだらと流れ始める。

…いや、ちよっと待て。まさかとは思うけど…いや、流石に出来すぎてるだろ。

その展開はありえないって、でも、もしかして…そう思いつつ、この予測が間違いではありますようにと願いながら確認してみる。

『…あの、もしかして長い黒髪の…少女ですか？』

『うむ、やはり貴殿が助けてくれたようじゃな』

『（ビンゴだったー！）』

思わず心の中で頭を抱えて絶叫する。
表面上は平静を装うとしていたが、焦りの色は濃く出ていた。

全身がガクガクと震えだし、着込んでいるシャツが汗を吸って冷たくなっていく。

『（く、くそっ！完全に予想外だった！）』

確かに、この国の姫様の容姿なんて依頼内容に入っていないし、気にもしてなかった。

王政なんだーやっぱりファンタジーなんだなあとは思っていたけど、会う事なんてないだろうと思って完全に油断してた。

もう、認めるしかあるまい…完全に面倒なことに巻き込まれたフラグがたっていた。

…まあ、森で少女を助けたときからが既に面倒なことに巻き込まれていたのかもしれないが…もう今となってはどうでもいい。

『とりあえず、名前を問うてもよろしいかな？』

『あ、はい。ユキト・ウォンスールといいます』

『そうか、ではユキト。貴殿に我が娘を助けた御礼と謝罪をしたいと思う』

『い、いえっ！御礼を言われるほどの事は何も…って謝罪、ですか？』

はて、何かされたっけ僕？

『うむ、慌てていたとはいえ、確認も取らずに牢屋に入れたことじや、真に申し訳ない』

『あ、あー…すっかり忘れてました』

真面目に忘れてた、そういえば居たね、ついさっきまで。

いや、ホントに忘れてたんだよ。その後の展開に驚きすぎて。

だが、その反応が意外だったのか、王様が目を丸くして聞いてくる。

『忘れておったとな？』

『あ、はい。実際拷問とか受けたわけじゃありませんし、全然気にしてませんでしたので…』

なんか、急に恥ずかしくなってきた。

確かに僕、理不尽な展開で牢屋に入れられて、驚いてはいたが、怒ってはいなかった。

入れられている事に理不尽は感じていたが、これも人生経験かと思っていたぐらいだし。

すると、その答えが面白かったのか、王様が笑い始めた。

『ふ、ふはははは…珍しい人間もおったもんじゃ。牢屋に入れられて全然気にしてませんとは』

『あはは…恐縮です』

思わず苦笑しながら答える。

『しかも、娘の事も紳士的な振る舞いだったと聞き及んでいる』

あー…ローブで体覆ってたことかな？

まあ、意識がない女性の体に触るなんてとてもじゃないが相手も嫌だろうし、僕も嫌だ。

…って言うか今思ったけど、お姫様の体触ってたら処刑コースだっ

たんじゃなかるうか？…笑えねえ。

『そこで、貴殿に何か褒美を与えたいのじゃが…』

『あ、そういうのはいららないです』

『…は？』

周りで控えていたたくさんの兵士達と王様の声が見事にハモる。
あ、やば。流石に即答はまずかったか？

『…褒美はいらんな？』

『あーすいません。真にありがたい事なのはわかっているんですが…』

王様の怪訝な声に苦笑しながら答える。
これ以上、王家と関わりたくないというのが僕の本音だったるする。
ここで褒美なんて貰って、変に関係作るのも嫌なので、つい即答してしまったのだが…なんとか誤魔化すか。

『ほ、ほら。お姫様を助けられただけで僕としては十分に光栄でしたので…』

『ふむ…しかし、それでは国王として示しがつかん…何かないのかね？』

『うーん、そう言われましても…あ。じゃあ、この城に資料室みないなところありますか？』

『城の離れにある図書館のことかの？』

『はい、僕はまだ勉強中の身です。ですからその書物を読ませてほしいのですが…』

まあ、本当は元の世界に戻るための資料探しののだが。

これは言わなくてもいいだろう。言ったら確実に流れがやぶくなりそうだし。

『そうか、ではそれを褒美としておこうかの。どれ、兵士に案内させ…』

『お父様っ！』

王様が兵士に指示を出そうとした時、僕の背後の扉がバタンツという大きな音を立てて開かれたと同時に少女の大声が響き渡った。

扉出した盛大な音にビクリと振り返る僕と側に居た兵士さん。

視線の先には僕がこの国まで運んできたお姫様。

今はグリーンのドレスを身に纏った黒髪のお姫様…だが、顔がこれ以上ないって位に怒って真っ赤になっていた。

『どういことですか！わたしを助けてくださった方を問答無用で牢屋に入れるなんていくらなんでも酷すぎます！』

『これ、ユリア』

『いいえ！言わせてくださいお父様！流石にわたしも黙ってられません！』

『じゃからな、ユリア。まずは聞きなさい』

『お父様は最近強引過ぎます！この前もわたしに断りも無く婿候補とか言って知らない男性をお城に招き入れてたりしてましたし！』

『聞きなさいユリア、それは…』

『あ、あのー『貴方は黙っててください！』：はい』

人を挟んで口喧嘩しているので煩いというより喧しい。

なので、ひとまずヒートアップしてるお姫様を落ち着かせようと声をかけたのだが、見事に遮られた。

うん、この子すごい。っていうか凄い変わりようだな…口調も格好も。

最初見たときはおっとりした口調だなあって感じたんだけど、今は全然キビキビとした印象を受けるし、昨日見たときはローブ羽織ってたからわからなかったけど、今は綺麗で清楚なグリーンのドレスに首から銀色の十字架を下げている。頭には銀色の額冠ってやつか？王冠じゃないカチューシャのようなやつを付けていた。

一つ一つの動作に淀みが無くて、たくさん兵士達に注目されているというのに緊張しているような感じがしない…まあ王族だからこそ慣れてるのかもしれないが…まあ僕の観察眼なんて当てにならないって事か。

『だいたいですね！』

『わかった！わかったからひとまず落ち着きなさいユリア！』

流石に王様もうんざりしてきたのだろう。

顔に疲れの色が見える。目も合ったのでついでに心の声を聞いてみると『最近気苦労が絶えんわい』という声が聞こえた。

…本当にご愁傷様である。

『なんですか！』

…鬼の形相ってこういうの言うのかな？般若っぽく見えてきた。

『その青年なら既に牢を出て、目の前におる』

『……………え？』

今気づいたかのようにこちらを先ほどとは違って静かにじっと見つめるお姫様。

しばらくこっちを見つめてから事態を把握したのか、急に顔が真っ赤に染まる。

『し、失礼しました！』

『うん、わかっていただけたようで何よりです』

げんなりしながらもお姫様の変わりっぷりに苦笑する。

『えっとじゃあ、僕はこれで…』

そのまま部屋を出ようと出口に足を向ける。

だって空気がいたたまれないもの、こんな空気の中に何分も居たくないし。

『あの…どこに行くんですか？』

『え？とりあえず、このお城の離れにある図書館に行こうかと…』

お姫様の問いに何気なく口にしてから、しまったと慌てて口を押さえる。

だが、遅かったらしい。答えを聞いたお姫様がキラキラと瞳を輝かせ始める…終わった。

『それじゃあ、わたしが案内します！』

ほらね、やっぱり…だが、しかし！ここで負けてはいけないぞ僕！これ以上面倒ごとフラグ立ててたまるもんか！

『いや、この兵士さんに案内してもらうからだいじょう『…ぐすつぶじゃないのでお願いします』』

『はい♪わかりました！』

お断りの言葉を口にしようとしたが、すぐに訂正する。

と言うか断ろうとした瞬間泣きそうな顔するのやめて下さい…うう、僕何も悪くないはずなのになあ。

もうなるようにしかならんか…仕方ない、いくら譲歩しよう僕も。

『じゃあ、僕はこれで失礼します…』

『うむ、貴殿も頑張りたまえ』

王様に挨拶してから、お姫様と一緒に謁見の間を出る。

そういえば…王様が妙にお姫様の対応に慣れてたなあ…ってまさか日常茶飯事なのかよこの事態！と王家の日常に愕然とする。

まあ、仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。王家って色々と面倒ごと多そうだしなあ…そりゃ慣れもするか。

そのまま、無言で先導するお姫様のあとを追う：なんかこっちもこっちで空気が重い気がする、会話して少しでも軽くしてみるか。

『えーっと、姫さん：でいいか。離れて言ってたけど遠いのですか？あと足の怪我は大丈夫なのですか？』

『いえ、そんなに離れてはいませんよ。あと足の怪我はおかげさまで、すっかり完治しましたし。でも「姫さん」はちょっと他人行儀過ぎませんか？』

『：確かにちょっと他人行儀ですけど、これぐらいが普通じゃないですか？』

振り返ってからにつこりと笑われながら言われ、僕もそれに苦笑しながら答える。

『とりあえず、改めまして自己紹介を：学生のユキト・ウォンスー ルっていいいます』

『こちらこそ、はじめまして。帝都ウィンベルの第一皇女ユリア・ホワイト・ウィンベルです』

『よろしくお願いします：ってあーうん』

どんな風に呼べばいいんだろ「姫さん」じゃダメだって言ってたし、呼び方なんて考えたことも無かったなあ。

そんな考えを読まれたのか、お姫様も苦笑しながらこう告げてきた。

『普通にユリアで結構です。敬語とか使われると逆に疲れますから』

『…いや、名前はまだよし…じゃないよな、敬語も外せないですよ普通』

王家の人間に対して敬語なしとか、いくら僕でもそこまで言葉を碎けない。

『むー。最初に会った時は完全に同い年ぐらいの対応でしたのに…』

ふくれっ面をしながらお姫様が不満そうに言う…そうは言ってもなあ。

あの時は相手がお姫様とは思ってなかったし。

『…まあ、努力してみます』

『うむ、頑張りたまえユキトさん』

『…その発言もなんか色々と混ざりきってる気がしますけどね』

お姫様の変わった発言を指摘して、二人で笑いあった。

対話（後書き）

最近忙しいので更新ペースが乱れると思いますが、どうかご了承くだされませ。

歴史（前書き）

投稿が少し遅くなりました、楽しみにしていた方々申し訳ありませんでした（＞＜

歴史

人間集中するとどうなるんだろう？

1. 周りが見えなくなる。

2. 喋らなくなる。

3. 返事が曖昧になる。

…とまあ、パツと思いついたのは3つだ。

集中すれば周りが見えなくなるのは当たり前だ。人間は一つのこと
にしか集中できない。

いや、一応^{マルチタスク}1並列思考なんていう便利な特技を持っている人がたま
にいるが、まあ殆ど人間は一つのことにはしか集中できないだろう。
僕だって並列思考はできない…と思う、やったことないからわから
んが。

で、だ。

そんな特技を持っていない僕が真剣に本を読み始めれば自然と3つ
の事項が当てはまるわけで…。

『……………』

『……………』

『…あの、えっと…（汗）』

『…うん？なんですか？』

ずっと字を目で追っていたところ、ここに一緒に来ていたお姫様に
声をかけられ、本から目をはなしてそちらに視線を向けてみる。
すると、その顔は最初戸惑いが見て取れていたが、視線が合うと苦

笑いに変わった。

『…いえ、やっぱりなんでもないです』

『そうですか？』

答えてから本のほうに目を戻す。

…実はさっきからずっとこのやり取りが続いていたりする。
何か話したい事があるんだけど、話しかけにくい…そんな印象を受ける。

目が合ったときに心も読んでみたが、「どうしよう？」という心の声しか聞こえない。

何をどうしよう？と思ったのかは知らないし、あんまり知ろうとは思っていない。

現状、それよりも大事なことがあった…それは…。

『しかし…ここに来た時も思いましたけど蔵書量が半端じゃないです
すね、ここ』

思わず天井を見上げながら呟く。

謁見の間から日が差し込んでいる廊下を通り、庭園らしき場所を通り抜け、着いたのがここだった。

この図書館は円柱状の建物になっていて、視線を遥か頭上に向けると円形の鮮やかなステンドグラスが詰め込んである天井が見えるのだが、そこから今僕が居る一番下の閲覧用の机が何台か置かれている階までの壁には大量の本が所狭しと並んでいた。

その数…1万冊以上あるとかないたか。

とてもじゃないが全部読みきれない。まあ全部読む必要があるわけじゃないから別に総量は関係ないのだが、気が滅入ることは確かだ

った。

『なんでも帝都が出来た頃からずっとあると言われているぐらいの場所ですから、その分蔵書量も半端じゃないんですよ』

くすくすと笑いながらお姫様が説明してくれる。

『ところで、どんな本を探しておられるのですか？見たところ歴史書ばかり読んでいらっしゃるようには見えるのですが』

『うん、正解です。この国のことはまだあまり知らないので、まずは成り立ちから知っておこうかと思ひましてね』

まあ、もちろん本当のところは英雄召喚関連の情報収集だ。

いくらなんでも何も問題がない状況で英雄を召喚するはずはない。何かしら問題があつて、それが国で対処できないから呼ばれるはずだ。

過去何度も呼ばれていたのなら、そのたびに何か問題があつたはず。その過去の問題を現状と比べれば、僕がこの世界に來た理由もわかるかもしれないと思ひ、調べているのだ。

『あ、それでしたら。わたし歴史が得意ですからご説明しましょうか？』

お姫様の嬉しそうな顔で下から見つめられる。

うーん、笑顔がいいなあ：なんというか、無邪気な子供っぽくて。いや、失礼なのかもしれないけど、身長と小柄な体格が相まって子供っぽく見えちゃうんだよなあ：ってそういえば何歳なんだろお姫様って。

よし、本ばかり読まずにここは一つ、望みをかけて話を聞いてみ

るかな？

『それじゃあ、お願いしますお姫様』

『はいっ！…って呼び方はお姫様で確定なんですか？』

『うーん、流石に呼び捨てはおかしいでしょう？ほら、これでも小市民の一般人ですし』

『で、でもでも！森では殆ど同い年ぐらいの対応だったじゃないですか！』

『あの時はお姫様だって知らなかったし…それに切羽詰ってたから敬語使ってる暇がなかったというか…』

人と喧嘩したことは何度かあるが、魔物という未知の生物との喧嘩は初めてだったため必要以上に緊張していたのは確かだ。

まあ、もつとも一番緊張した理由は彼女の血を見てしまったせいでもあったが…。

『あの…どうしても、ダメ…ですか？』

『う……』

「ダメです。」と答えようかと思ったのだが、お姫様の瞳が滲みながら見上げてくるのを見て言い淀む。

こういう顔で見上げてくるのは卑怯だと思う。

何故だか僕が悪いことをしているような罪悪感が沸いてきてしまう。少なくとも、僕は悪くない…断じて悪くはないはずである。

『（あくもう、我ながら弱いなあ…）』

思わず心の中でそう嘆いた後、ぎゅゅと抱きしめたくなる衝動に一瞬駆られる。

まあ、本当にやったら処刑コースに入りそうなので自重する。

僕は元々子供の相手をする事が好きだったため、小さい頃から妹や近所の子供の面倒を任される事が多かった。そのため、こういう相手に本当に弱い。

なので…基本折れるしかないのだが、最後まで悪あがきはしてみることにする。

『はあ…わかりました。では、せめてユリア姫で…』

『あの、もう少し崩して貰えませんか？』

『ああもう、じゃあユリアで！』

『はい♪』

ううう…やっぱりこうなるのか。

相手はお姫様なのになあ…と思いつながら腹を括ることにする。どうせ本を読む間だけだし、そんなに長く続かないだろう。

でもせめて二人だけの時だけにしておこう、お城の関係者に見られたら完全に詰みだと思いつ、処刑コースは免れないと思う。

あれ…？おかしいなあ、僕は元の世界に戻る為に本を読みに来ただけなのに、なんで死亡フラグばっかり立ててるんだろ？

…もう考えないでおこう。これ以上考えると本当に鬱になりそうだ。

『では、早速お話ししますね…まずは国の成り立ちから…』

お姫様…いや、ユリアが嬉しそうに語りだし、しばらく歴史話が続いた。

流石に全部説明してもらおうと長いので所々はしよって説明してもらった所によると、なんでも一人の若者が家を作り、家が村になり、村が街になり、最後には国となったと言うらしい。

まあ、この辺は特に変わったところはなかったが、次の話が問題だった。

『…ですね。では次は800年前に起こった魔王降臨と英雄召喚です』

魔王と英雄…ね。いよいよファンタジーっぽくなってきたなあ…。

『800年ほど前に各地で様々な災いが起こりました、ある地方では野生動物の凶暴化、ある地方では魔物の大量発生、ある地方では度重なる天災が起こったと言われています』

小説とかでよくあるテンプレート的な展開だなあと思いつつ、話を聞きながら頷く。

『その様々な災いを起こしていたのが、当時圧倒的な魔力で世界を支配しようと企てた一人の人間です』

『…うん？人間だったの？魔王って』

『はい、文献によると元は人間だったのですが、様々な人体実験を行ない人の道から外れ、最後には自らの体を改造して圧倒的な魔力を得たらしいのですが、人としての人格が崩壊して魔王となったようです』

ふむ、人間だったのか…ちよっとほっとした。

いや、これで魔界とか天界とかから出てきていますとか言われたら、もうどこのゲームの世界だよとツツコミをいれるところだった。

『当時の世界の魔法文明は今のよう高度化されていなくて、野生動物や魔物を抑えきることができなかったそうです。そこで生み出されたのが…』

『英雄召喚？』

そう僕が言ってみると、途端にユリアの目が輝きだす。

『そうです！800年前のこの国の王妃様…つまり、わたしのご先祖様は英雄を召喚することになったのです！』

『きゅ、急にテンション高くなったなユリア』

若干ひく様なレベルだぞ、そのテンションの高さ。

『だって、小さな頃から伝説の英雄のお話を聞いて育ってきたんですよ？好きになるに決まってるじゃないですか！』

『そ、そうですか…』

これは、あんまり気にしちゃいけないんだろう。そう、人間誰にだって欠点がある。ユリアの場合これだったんだろう。そう思うことにしよう。だから、気にするな僕。さっきまで大人しかったユリアが、なんか酔っ払った親父みたいに近くにあった椅子の背を勢いよくバシバシ叩いてるところが見えてもここはぐっと我慢して無視するんだ！

一通り椅子の背を叩いて気が済んだのか、ユリアが説明を続ける。

『その英雄召喚は異世界から人を呼び出す神聖魔法でした。その神聖魔法は代々この国の王家…つまり、わたし達の家系にしか使えないんです』

『神聖魔法…か』

うーん、まずいな。まさか英雄召喚魔法が神聖魔法とは思わなかった。

これじゃあ僕が元の世界に帰る事が厳しいってことになる。

いや、僕じゃなくても他の人間が使ってそれで送り返して貰えればいいのかな？

…例えば目の前のお姫様とか。

『ユリアも使えるの？』

『え？わたしですか？…うーん。試したことないんでわからないですけど…』

『まあそりゃそうだよなあ…』

試していたら英雄が出てるかもしれないし…ってなんか英雄の扱い軽くないか？

ってそうだったそうだった。肝心な事聞き忘れてた。

『そういえばその英雄って魔王を倒した後どうなったの？』

この反応によっては僕の今後がかなり厳しいことになる。

『うーん。そこなんですよねえ…』

だが、予想に反してユリアは苦笑いだ。

『実はその辺りの歴史が巧妙に隠されているんですよ。その後にも英雄は何度も呼ばれているんですが、どの歴史書にも虫に食べられたみたいにそこだけ抜けてて…』

『隠されている？』

『これなんかが…典型的な例ですね』

そう言ってユリアが魔法で呼び出したのか一冊の古そうな本が僕の目の前に飛んでくる。

それを掴んで適当にページを捲ってみると、不自然に何箇所か破られていた。

他の似たような歴史書を何冊か取り出し、そのページに符合する場所を探してみると、その符合するページだけが不自然に破られていたり、燃やされたような痕があったりと徹底して隠している感じが伺える。

最近作られたと思われる真新しい歴史書も開いてみたが、そこだけ不自然に空いていた。

これは既に参考になる部分が消えていたからだろう。

『…なんで？』

『さあ？当時からこうなっているらしいんです…』

『……………』

…なんでだろう？英雄自身が知られたくないと思って故意に隠した？
それとも、ここに書いてはいけないような出来事が起こった？

でも、過去の英雄達が皆揃ってっていうのはいくらなんでもおかしいし、別に英雄が元の世界に還ったことぐらいは書いても何も問題はなかったはず…それなのに書かれていないということは何か問題があったのだろうか？

と、いうことは…英雄ではないとはいえ、同じ異通者である僕が元の世界に還るのも相当面倒なことになりそうだ。

『（こりゃあ…帰るの大変そうだなあ）』

そんな事をぼんやりと感じ、ため息を吐きながら持っていた歴史書をパタンと閉じた。

挿入話：二人旅（前書き）

大変お待たせしてしまって申し訳ありませんでした。今後もしっかり頑張っていきますので応援よろしくお願いします。

挿入話…二人旅

アタシ、ロナ・ポナルル16歳は現在、普段住んでいるエルクワールという街と帝都ウィンベルという国の間に位置する森の中に居る、加えて言うならば…。

今現在、非常に不機嫌である。

それを必死に宥めようとしているのは同じ学校の友達のアイズ・ルートラ。

少し濃い色のブルーの髪がツンツンしている青年だ。

顔は結構カッコイイのだが…今彼の顔は苦笑いに染まっている。

その理由はもちろんアタシが不機嫌だからだ。

もちろんアタシが不機嫌な理由は彼が原因ではない。

理由はもちろん…。

『あーもう！あの馬鹿！心配ばかりかけて！』

どうやらアタシが眠っている間に、何かトラブルがあったらしく、その様子を見に行ったユキが戻って来ていないのが主な理由だ。

イライラを手元にあるパンに八つ当たり気味に齧る。

バリバリと少し固めのパンが音を立てて口の中に吸い込まれていく様を眺めていたアイズが苦笑いする。

『まあまあ、そのおかげでボク達はゆっくり出来てるわけだし、感謝しないと…な？ロナ』

『…わかってるわよ…そんなこと。でも簡単に納得いくようなこと

じゃないの』

『仕方ないよ。それにユキト君も君を心配してボクを残したんだよ？』

『…そこが一番気に入らないのよ』

まだ中途半端な力しか持っていないやつを行かせなければならなかったこと事態がむかつくのだ。

そして、その時寝ていて何も出来なかった自分にも少しだけ腹が立っている。

『そこは納得して貰うしかないなあ』

あはは。と少し笑いながらアイズも口にパンを運ぶ。
その様子を見ながら、アタシもパンを齧る。

『納得いくもんですか』

肉でも引きちぎるかのようにパンを口で裂く。

女の子らしい食べ方じゃないけど、そんなこと今はどうでもいい。
いい加減イライラが頂点に達しそうになっていた。

『それじゃあ、ユキト君に早く追いつかないとね』

『…まだ生きてるかもわからないの？』

『案外、彼は強いから大丈夫だと思うけどね。そこらの魔物に後れをとるような人間じゃない』

『ま、腐っても異通者だし…ね』

確かにユキは強いと思う。思いはするが、まったく心配する必要がないわけではないし、不安なのは確かだ。そんな事を思いながら、食事を終え、焚き火の後始末をして、自分の荷物を背負う。

『じゃあ、そろそろ出発しようか？ ロナ』

『そうね。忘れ物、ないわよね？』

そう言って、辺りを見渡すと木の根元に置いてあった小さい鞆が目についた。

鞆の傍まで歩み寄り、左手で持ち上げる。

『…これってユキの？』

『そうじゃないかな？』

はあ、あいつ何も持たずに様子を見に行ったのかと呆れてため息を吐き、ユキの鞆を左肩に提げる。

『とっとと追いついて、一発殴るわよ。あの鳥頭！』

『…なるべく手加減してやりなよ？』

苦笑いしながら言ってくるアイズの言葉を聞こえなかった振りをして歩き始める。

だが、しばらくして足を止める。いや、止めざるをえなかった。その様子を見て、アイズが訝しむ。

『うん？どうかし…』

そこまで言いかけたアイズも何かに気づいたのか、すぐに腰に挿していたロングソードを引き抜く。

アタシも転送魔法を使って愛用の杖を取り出す。先端に青く丸い小さな水晶が付いた、普段から愛用している杖だ。

転送魔法というのは、主に物質を転送することが出来る一般魔法だ。物質を別の空間に仕舞い込んだり、A地点からB地点に飛ばすなんてこともできる。

ただ、物の大きさによっては扱いが難しくなったり、A地点からB地点に飛ばす時の距離が伸びれば伸びるほど魔力を大量に食う上に、先天的な素質が必要なのか人によっては使えたり使えなかったりする。

一般魔法に分類されてるくせに、だ。

ちなみにアイズがいつも腰に剣を挿しているのは彼には使えないからである。

まあ、本人はあんまり気にしていないらしい。

なんでも「いつも持ち歩くことで訓練にもなるし…何よりカッコイイじゃないか」だそうだ…って今はそんな事どうでもいい。

風がざわざわと木の葉を揺らす音を耳にしながら周囲を油断なく観察する。

変わったところは…一見ないようにも見えるのだが、勘のようなのが訴えかけてくるのだ。

なんというか、嫌な予感というものを。

ボタリ。

その時、目の前の木の上から一匹の大きなイモムシのような物が落ちてきた。

正式名称は【フォレストワーム】

主に森に生息しているイモムシ型の魔物で、体長は1mほどしかないが、ぶよぶよした緑色の表皮が気持ち悪い。

それを見て、ほっと気を抜く。こいつは安全だ。

主に腐った木の葉が主食で、人を襲うことは滅多にない。こちらから攻撃しなければ攻撃されることもないのだ。そう思っていた。

『きゃあっ』

だが、急に後ろに居たアイズに服を掴まれ、一気に引き寄せられる。一瞬だけ首元が絞められ呼吸が止まりつつも、後ろに引きずられ尻餅をつく。

『けほっけほっけほっ…何するのよアイズ』

当然、思いっきり不機嫌な声で抗議する。だが、アイズは大きな声を出して逆にアタシを責めてきた。

『油断するなロナ！』

『何言ってるのよ、こいつ無害じゃ…』

『目の前をよく見てみる！』

視線をフォレストワームの方に戻してみると目の前までの地面から煙が出て、青々と茂っていた雑草が溶けていた。

フォレストワームの主な攻撃は口から吐く弱酸性の粘液なのだが、怒っていると強酸性の粘液に変わる。

嘩然としながらもフォレストワームをよく見ると、どうやら怒っているらしい。

こつちをじっと見つめてずりずりと近寄ってくる。

『ちょ、ちょっと！なんでこんなに怒ってるのよ！』

『知らないよ！それより、攻撃魔法の準備してくれロナ！』

そう言われて慌てて立ち上がり、アイズの後ろに立って呪文を詠唱しようと杖を構えて口を開く。

『水よ、その荒ぶる力で我が敵を押しつぶせ、水圧！』
ウォータープレッシャー

『【汝、弾丸となりて、敵を弾け、弾！】
ショット』

アタシが魔力をあまり消費しない初級水魔法で攻撃し、アイズも接近戦は危険だと思ったらしく、純正魔法を魔法公式に通して攻撃する。

まず、先に詠唱が短かったアイズの放ったショットがフォレストワームに当たって爆発して近くの木に叩きつけられる。

その後、アタシが詠唱した初級水魔法が発動し、頭上に現れた三つの水球が一直線に伸びたウォータープレッシャーがフォレストワームに当たる。

ギィィィ！と鳴き声を上げて水で押し潰されるフォレストワーム：正直見ていて結構グロイ。

あんまり見ないようにして、他にいないかと周りを見渡す。

すると、最初の一匹は囵だったかのように、周りの木々から次々と

フォレストワームが落ちてきた。
その数：10匹ほど。

『…多い、わね』

『確かに：ちよつと多すぎるね』

『ま、このストレスを解消するにはもってこいだけど』

『…えー？』

今なんて言った？言外にそう言っているかのようにアイズがこちらを振り返るが、その表情が若干怯えているように見えるのは気のせいじゃないだろう。

たぶん、今アタシの顔は凄いことになってると思う。

『ロナ：とりあえずボクにだけは魔法当てないように気をつけてね』

『努力はするけど、保障はできないわねえ』

につこりと黒い顔で笑いながら、杖を頭上に掲げる。

いい加減、さつきから進行の邪魔ばかりするこの虫にイライラしていたのだ。

こちらら、これでも急いでいるのだ。

『じゃ、アイズ。頑張って避けてね♪』

『……………はい』

ぐったりとした様子で肩を落とすアイズを見ながら、詠唱を開始するアタシだった。

『ま、こんなところかしら？』

杖を軽く振りながらアイズに話しかける。

だが、アイズはぐったりとした様子で剣を支えにしていた。

…たったあれだけのことで情けない。

『なによ。ちゃんと避けられるレベルだったでしょ？』

『…その割には際どい瞬間が多かったのはボクの気のせいだったのかなあ？』

『気のせいよ』

一言で切り捨てて、ゆっくりと辺りを見渡す。

最初のような嫌な感覚はない。どうやら辺りの魔物を一掃したらしい。

まあ、周りは死骸だらけで正直気分の良いものではないが…ストレス解消にはなったのでよしとしておく。

出しておいても邪魔なので杖を転送魔法で仕舞い、アイズに話しかける。

『じゃ、イライラもある程度収まったし、行きましようかアイズ？』

『うん、魔物のほうが問題だったのにいつの間にかストレス解消の
ほうが主体になってたのが問題だけだね』

まあ、その辺は気にしないでもらいたい。

何度も言うように、いい加減ストレスが溜まっていたのだ。
とりあえずこの場にいつまでも居るわけにはいけないので、帝都に
向かって歩き始める。

『そういえば、念話は通じないの？』

『…それが、どうも繋がらないんだよなあ…』

『…そっか』

ホント死んでなきやいいんだけど…。

と、思ったところでアイズが改まった様子で話しかけてくる。

『ところでロナ』

『うん？なによ。アイズ？』

『ずいぶんとユキト君を気にするんだね…やっぱり…』

『違うわよ！』

アイズの言いかけてた言葉を先読みして思わず怒鳴る。
なんか、顔が妙に暑い気がするが、気にしていられない。

『ただ、その、ユキが妙に気になるだけよ…』

『…その反応は十分に好意に当たるとボクは思うんだけどなあ』

『絶対ありえないから！妙に気になるのも心配してるだけなんだから！』

そう、ユキを異性として好きになることなんて…ないと思う。たぶん。

いや、まあ確かに友達として一緒にいる分には楽しいと言えば楽しいんだけど…なんかそういうのとは違う気がする。

それに…アタシにはもう好きな人がいるし…ってそういう話じゃなくって！

『もう！馬鹿なこと言ってないでさっさと追いつくわよ！アイズ！』

『そうだね。ボク達も少し急ごうか？』

一応は納得したらしいアイズが笑みを見せ、それに頷き返してから帝都への道を少しばかり急ぐことにした。

挿入話：二人旅（後書き）

書き終わって読み返してみると後から気づく事…アイズ君の言葉使いがなんか女の子っぽくないか？というツツコミは禁止です。

お転婆姫（前書き）

おかげさまでPVが3万を超え、ユニークが6千人超えました！
この調子で頑張っていきたいと思うので応援等よろしく願いします！

お転婆姫

もうこれ以上収穫はないだろうと判断して僕とユリアは図書館を出た。

まあ実のところ、この国の歴史をユリアからあらかじめ聞いたので、もういいですと答えて出てきたんだけどさ。

異世界転移、英雄召喚が神聖魔法なら、僕自身では使えないのでどうしようもない。

：協力してくれる人がいればいいんだけどと不安には思うが、考えでも仕方が無い。

異世界転移の構造がわかっただけでも収穫だった。と、そう前向きに思うことにしている。

腕時計をユリアに見られないようにこっそりと見てみると、時刻は12時をちょっと過ぎた頃だ。

そういえば、朝おっちゃんに食料を貰った時に食べただけで、結構お腹すいたなあと思いながらユリアに話しかける。

『それじゃあ、僕は街に行くから』

『街に出るんですか？』

『うん、ユリアと出会う前まで一緒にいた仲間と合流しないとね』

アイズもロナも心配しているだろうが、特にロナとは早めに合流しないとまずいと思う。

あいつは特に心配していると思ったからだ。

『それじゃあここで…またどこかでな、ユリア』

『あのー、わたしも一緒に行っていていいですか？もしかしたら、お友達になれるかもしれませんし』

『あー…もしかしてだけど、やっぱりお城暮らしだと友達とか出来にくいかな？』

お話とかでのお姫様にありがちなことだ。

そう思っ言ってみると、凶星だったのかユリアは苦笑いだ。

『出来ないわけじゃないんですけどね、やっぱりどうしても壁というか溝みたいなモノを感じちゃうんですよ…』

『…そっか』

どこか寂しそうに言うユリアを見てどうにかしてやりたいと思い、一緒に行くぐらいいいかと思う。

それに、あの二人なら王家とかそういう問題も全然心配ないと思う。

『まだ、仲良くなれるかはわからないですけどね』

『そこは大丈夫だと思うぞ？あの二人とは僕もいつの間にか仲良くなっただくらいだし…』

よくよく考えてみると、どうやって仲良くなったわけ？と出会いを思い出してみる。

『…あれ？悲しくないのに涙が出てくるや…』

『?』

思わず目頭を押さえる僕を見て、ユリアが可愛らしく首を傾げていたが、それを気にしている余裕はなかった。

よく思い出してみると、ロナには出会い頭に馬鹿にされ、アイズには試合を申し込まれてボロボロにされた。

はつきり言って、どうして仲良くなれたのかと今更になって疑問を感じる。

だが、いくら考えても仕方ないと前向きに考え、その話題を頭から追い出す。

決して考えるのが面倒になったからではない。

『も、いいや：とりあえず連絡届くかやってみるかな?』

アイズに連絡を取ろうと、念話のための魔力の糸を伸ばしてみると、すぐに繋がった。

『(アイズ?)』

『(おお! ユキト君! 無事だったか、今どこに居るんだい?)』

明らかにほっとした様子が感じられたため、もっと早くに連絡すればよかったと後悔するが、よくよく思い出してみると牢屋では枷のせいで魔法が使えなかったかと思い直す。

『(心配かけてごめんアイズ。今色々あってお城に居るんだ)』

『(お、お城?なんでそんな所に：とにかく無事でよかった。今すぐ合流できそうかい?)』

うん、すぐ行けるよ。と答えようとしたが、隣のユリアを見て少し悩んだ後、こう答えた。

『（ちよつと用があるから少し経ったら向かうよ、どこに行けばいい?）』

『（依頼先でもある魔法店の「エフォニエ」で待ってるからそこに来ればいい）』

『（わかった…あと、さ）』

『（うん?）』

『（ロナ…どうしてる?）』

『（カンカンだよ。頑張りたまえユキト君）』

そう笑いながらアイズが答えて念話が切れ、僕は思わずその場で頭を抱えて思わず嘆く。

『…終わった』

『あの…何か不都合でもありました?』

『いや…色々なことに絶望してるだけだよ』

心配そうに聞いてくるユリアに苦笑しながら肩に手を置き、首を振る。

意味がわからないのか、首を傾げていたが、連絡が取れたことだけ

はわかったようで、にっこりと笑う。

『それじゃあ、早くお友達と合流しましょうか？』

『ああ、でもその前に…着替えてきなさい』

流石にそのドレス姿で街に出るのはまずいだろう。

その格好で行けば目立つだろうし、大騒ぎになるだろうし。

だからこそ、ちょっと遅れるってアイズに言ったわけだったりする。

『あ、それもそうでしたね…では、少しここで待っていてください…ユキト、さん…？』

気づいてなかったのか、ぽんと両手を合わせてから、首をかしげながら聞いてくるユリア。

『…何故に疑問系？』

『いえ…その、今更なんですけど、さん付けで呼んでいいのかなあ
ってずっと思ってる…』

『あー図書館の中でずっと言おうとしてたのって、その事だったのか…
そういえば今の今まで名前で呼んでなかったな。って自己紹介の時にさん付けしてなかったか？』

『…あれはその場のノリというかなんといえますか…』

『つまり勢いだったわけで、後になってどんな風に呼べばいいのか
真剣に悩み始めた…そういうわけか？』

『…その通りです』

そんなのどうでもいいのになあと思う反面、こういう所で悩むのは世間知らずなんだなあと実感する。

なので、それを教えるためにも、僕なりの考え方を言ってみる。

『まあ、いいんじゃない？好きな呼び方で。たとえば、お姫様でも人の呼び方は自由なんだしさ？』

『じゃあ、ユキト様でもいいんですか？』

『ごめん。僕が悪かったからそれだけはやめてくれ』

どこか嬉しそうにそう宣言するユリアに、即座にやめてくれと抗議する。

とてもじゃないが、元々一般人で偉くもないし貴族でもない僕が様付けされて呼ばれると鳥肌がたつ。

…っていうか今たってます。

『ほら、さん付けでいいから早く行ってきなさい』

『はーい♪じゃあ、少しだけ待っててくださいねユキトさん』

くすくす笑いながらそう言ってドレスの裾を少し持ち上げて早足でお城の中に消えるユリア。

しかし…今の仕草お姫様っぽかったなあと思いながら、僕はどうするかと辺りを見渡す。

と、ちょうどいい所に腰掛けられそうなベンチを見つけたのでそこに腰掛けて思わず呟く。

『…………やばいな、やっぱり結構眠いや』

思わず出てしまう欠伸。

図書館で本を読んだときは集中していたからあんまり気にならなかったが、そもそも昨夜寝てないので非常に眠い。

そして今、する事が何もなく、ただユリアを待つだけなので暇でしようがない。

加えて、女の子の着替えはやたらと時間がかかる。というのは妹を見て育ってきたので嫌でもわかる。

『……………ちょっとだけ寝るか？』

ちょこっただけならいいかと思い、ゆっくりと目を閉じようとするが、ふと思いとどまる。

唐突に嫌な予感っていうか、そんなものが頭を走り抜けたからだ。

『…うん、なんかよくわからんが、やめておこう』

あっはははは…と自分でもよくわからないまま心の中で笑っていたところ、唐突に頭上に嫌な気配を感じてベンチから飛び出す。

その直後にドカッという音がベンチから聞こえた。

なんだなんだ？と思いつつ振り返って視線を向けてみると、着替えたユリアだった。

ふわりと空色のワンピースが少し広がっていたが、幸いなことに中は見えない。

それよりもっと言うべき事があった。

『お待たせしました!』

『…ってお前はどんなところから来たんだよ!?』

相手がお姫様である事も忘れてツツコム。

先ほどの音は明らかに高所から飛び降りて着地した音だ。

視線を背後の塔の上のほうを見ると、7〜8mぐらいの高さのところに開いた窓が見えた。

カーテンが風に揺られてひらひらと靡いているのが見える。

つまり、あそこから飛び降りた…そういうわけですか? お姫様? そう心の中で問いかけると、件のお姫様は自信満々に頭上の窓を指差し、堂々と宣言する。

『もちろんあの窓からです!』

『お転婆にも程があるだろ!?』

明らかに行動がお転婆過ぎた…ていうか絶対怪我する高さだろ!? と言うかそれ以前にそんなひらひらした服であんな場所から飛び降りるな!

とにかく、今後ああいうことはしないように一通り説教することにして、ユリアをベンチに座らせた。

『…んじゃ、そろそろ行くか』

『…はい』

憔悴しきったユリアが力無く返事をする。

ふむ、ちょっと説教しすぎたか。

だがまあ、この子には良い薬だ。絶対に損にはならない。

少なくともお姫様がこんなにお転婆だったらお城の人が困るだろう。

…と言うか、たぶん普段からこのお転婆ぶりだと思うので、困っているのだろう。日常的に。

だから絶対損じゃない。

でも、ちょっとだけ可哀想だと思ってしまったので別の話題を振って無理やり会話を試みてみる。

『そういえば、ユリア』

『…なんでしょうユキトさん』

『なんで、あの森の中に居たんだ？普通、お姫様があんな所に居ること事態おかしいだろ？』

『…ああ、そのことですか』

自嘲的な笑みでユリアがベンチに座ったまま空を見上げる。

『はあ…家出ってやつですよ、わたしの場合は城出って言うほうが正しいのかはわかりませんが』

『城出？』

『…ちょっと、色々ありましてね。お城に居たくなかったんですよ』

『…そっか、じゃあ僕は悪いことしちゃったかな?』

ユリアにとっては、せっかくお城から逃げてきたというのに、いつの間にか連れ戻されていたという認識だろう。

そう思って僕が思わず聴いてみるとユリアが首を左右に勢いよく振りながら否定する。

『いえ、そんなことはありません!あのままだったらわたしは死んでたかもしれませんが、文句なんかないですよ!』

『そう言ってもらえると少しは気がまぎれるよ』

苦笑しながらそう答えると、ユリアは何が納得いかなかったのか、詰め寄ってくる。

ってこの距離近すぎないかと、危惧しながらも嫌な予感を感じる。

『ホントにホントに感謝してるんですよ?』

『あーわかった。わかったってば』

『もう!ホントにわかったんですか?』

『わかった!わかったから!ちょっと距離取ろう!この距離は勘違い…』

されるから!と続けようとしたとき、強い声が聞こえた。

『お姉ちゃん!そいつから離れて!』

刹那。先ほど感じたような嫌な気配が一気に強まって、僕はほぼ無意識に早口で詠唱して左に向ける。

『【汝、力を糧に我が前に示せ、盾！^{シールド}】』

直後、盾に衝撃が走り…粉々に砕け散った。

『ちょ…ぐっああ！』

盾を貫いてきた”何か”が僕の胸に直撃して思わず口から声が漏れる。

勢いを受け止めきれず、そのまま吹き飛ばされ、地面を転がる。

『ユ、ユキトさん！？』

『いっつつつつつ…』

ユリアが慌てて駆け寄ってくるが、気にしてる余裕がないほど…胸が痛い。

見た所、出血はないようだけど…めちゃくちゃ痛いんですが？
痛みを堪えながらも何かが飛んできた方向を見ると、そこには
デカイ銀色のハンマーを構えた白髪の青年。

『お姉ちゃん！危ないからそいつから離れて！』

『クール！？貴方何してるの！』

…誰？と声が出ないので目でユリアに問いかけてみる。
すると、非常に言いにくそうに目を逸らしながらユリアが言う。

『お、弟…です』

『……………おとうとお!?!?』

思わず痛みを忘れて叫ぶ僕だった。

条件（前書き）

ちよこつとだけ展開が強引な部分があるかもしれませんが、温かい目で見守ってくれるとありがたいです。

条件

僕はなんでこんな事されたんだろ？と未だに痛む胸の辺りを右手で擦りながら現実逃避しつつ思う。

そしてなんか既視感を感じるのは、たぶん、気のせいではないだろう。

アイズのときもこんな風に吹っ飛ばされたしなあ…あっはっはっはっはっは…。

って言うか。

『僕は何か気に障ることにしましたかねえ！？』

思わず視線の先にいるユリアの弟…クール皇子に大声で問いかける。一応相手が皇子らしいので敬語を使うのも忘れない。

だけど、問答無用でこんなことする奴に礼儀なんてかける必要は果たしてあるのだろうか？

いや、まったく無いはずだ。少なくとも悪いことをした覚えはないし。

だが、聞かれた皇子は胸を張って堂々と叫び返してくる。

『姉ちゃんに近づいただろお前！』

『いや、まあ、客観的に見ればそうかもしれないけど…近づいてきたのユリアのほうなんだけどなあ…』

『そう…なんです…けど…』

はあ…と溜息をつきながらユリアがこめかみに指を当てる。

『うちの弟…その、ちょっと色々ありまして…』

『あーうん、なんかそうらしいな。言動からある程度推測できたけどさ』

絶対シスコンだと思う。それはもう100%間違いなく。

いくら鈍いと言われている僕でも簡単にわかる。

決して、同じシスコンだからというわけではない。断じて。

『…大変だろ？』

『…色々苦労してます』

やっぱりか。ちょっと姉に近づいたぐらいで攻撃してくるような弟さんだ。

本当に色々大変なんだろう。

相当な苦労が伺えたので同情の視線でユリアを見ると、

『だから！離れろって言ってんだろ！てめえ！』

皇子がそう言って来た瞬間。

持っていた銀色のハンマーが横に一薙ぎされ、また”何か”が飛んでくる。

流石に今度はこういう反応をするだろうと予想していたので、座り込んでいた場所からすぐさま飛び出し、なんとか避ける。

でも、予想していたとはいえ、攻撃されるのはたまったもんじやないので抗議はしておく。

『問答無用で攻撃してくるのやめてもらえませんかねえ!?!?』

『お前が姉ちゃんから離れたらな!』

ううむ、身の安全は最優先事項かもしれん。

あの見えない攻撃は避けにくすぎる。

先ほどはなんとか避けられたが、勘で避けただけで正直まぐれだし、見えない攻撃だからどんな形状で飛んできてるのかもわからない上に、スピードも結構速く感じる。

『（とりあえず、ユリアから離れば安全…だよな？）』

そう思い至り、ユリアから距離を取ろうと一步下がる…が。

『……………』

『……………』

うん? と思いながらも、もう一步ユリアから離れる。

『……………』

『……………あの、ユリアさん?』

『なんですか?』

『何故に僕が一步離れるごとに近づいてくるのですか?』

一步二歩と離れようとしたのだが、足を動かすたびにユリアが近づいてくるので、距離が変わっていない。

すると、苦笑いしながらユリアが呟く。

『クールにもいい加減、わたしが男の人と一緒にいても大丈夫なようになつて貰わないと困りますので…』

『僕の時に限ってそんなことするなよ!』

思いもしないユリアの行動に思わず涙目になりながらツツコム。

冗談じゃない。なんで僕が弟さんのシスコンを治す為に犠牲にならないといけないんだ。

しかも治るかもしれないという予想だし、僕に被害ばかりくるというおまけ付きだ。

だが、ユリアも引けない理由があるのか、慌てたように言ってくる。

『だ、だって! ユキトさんさっきクールの攻撃避けたじゃないですか。結構凄いことしてるんですよ?』

『9割がた勘に頼って、必死に避けただけなんですけどね!?!』

『俺を無視して楽しそうに会話してんじゃねえ!』

『これが楽しそうに見えるアンタも凄いなオイ! あと無視なんてしたら殺されるけどな!』

皇子に対しては敬語を使っていたのだが、僕もいい加減イライラしてきたせいか感情が口調に乗りはじめる。

それに、どうやら相当な筋金入りのシスコンみたいだ。

まあ、問答無用で攻撃された時点である程度予想していたが、まさかこれほどとは…。

『（ああ、もう！最近面倒なことが多いなあまったく！）』

そう思いながら、クールという青年をよく改めて見てみる。

背は僕と同じぐらいで、顔がどこか先ほど会った王様と似ている。髪は白なのだがユリアの髪の色のような黒が混じったせいかな、見方によっては灰色にも銀色にも見えるため若干綺麗に見える。持っている銀色のハンマーは柄の先には黒い魔法石が詰め込まれており、ハンマーの頭部はかなりデカイ。

あんなデカイのを簡単に振り回せるところを見ると、かなり肉体を鍛えているのだと思う。

とりあえず、このままだとまた攻撃されかねないので会話を試みてクールダウンしてもらうことにする。

：別に上手い事言った覚えはないよ？

『えーっと…と、とりあえず自己紹介を…』

『てめえの事なんて聞いてねえ！』

『いや、いつまでも「てめえ」って呼ばれるわけにも…』

『てめえはその呼び方で十分だ！』

『十分で…』

もうなんていうか、酷いの一言しか思い浮かばない。

一見会話も成り立っているように見えるかもしれないが、拒絶の色が濃すぎて泣きたくなってくる。

『とにかく！てめえはさっさと姉ちゃんから離れろ！でないと…今度は直接ぶち当てるぞ！』

『わ、わかった。わかったからちよつと待て！』

慌てながらも今度こそユリアから離れる。

今度は追われたりしないように素早く離れ、長く距離を取る。

…なんかユリアが物凄く不満そうな顔しているが、全部無視する。こちらら、命狙われてるんだ。勘弁して欲しい。

『…これでいいか？』

『…ああ』

頭に上った血がいくらか下がったのか、ようやく皇子が構えていた銀色のハンマーをおろす。

その様子にほっと一息を吐きながら、今度こそ大丈夫だなと思っていると皇子から話しかけられた。

『で？てめえは誰だ？また姉ちゃんの婚約者の一人か？』

『…婚約者？』

そう問われて思わずユリアを見ると、なんか凄く恥ずかしそうに顔を真っ赤にして目を逸らすユリア。

ああ、なるほど。城出した理由はそれか。そりゃしたくなるわ、城出。

僕が同じ状況だったらたぶん、同じことしてると思う。

そして、皇子が攻撃してきた理由もわかった。

大事に想われてるじゃん、ユリア。

まあ、問答無用で攻撃してくるのはいただけないが…とりあえず、また怒られても困るのでさっさと誤解を解くことにしておく。

『うん、絶対間違いなく違います』

『…そうなの？姉ちゃん？』

『えーっと、その…婚約者じゃない…よ？』

いや、そこはハッキリ言ってもらわないと僕が困るんだけど。

『ユリア、ちゃんと事実をハッキリ言え』

『わかりました…違うように見えて実は合っています！』

『なんでこの場面で誤解を招くような発言をするんだろうなあ！？』

『くすくすくす…まあ冗談はこれぐらいにしておいて、クール？この人は違いますよ？』

『…本当に？』

『うん』

ユリアが頷くと、ようやく婚約者じゃないと判断したのか皇子が持っていた銀色のハンマーが突然消える。

恐らく転送魔法を使ったのだろう。

やれやれと言った具合にクール皇子が肩をすくめて呟く。

『まったく：姉ちゃんは天然過ぎるんだよ：だからそうやってよくわからない男が近づいてくるし！』

『て、天然ってなによ？それにこの人はよくわからない男の人じゃないんだよ？：その、大事な人だし：』

『：大事な人？』

『うん、森で助けてもらった命の恩人なのよ？』

『成り行きだけだな』

ホント、成り行きである。

って言うか、なんであの場で出会っちゃったんだろう僕たち：。

と思わなくもないが、そうなるとユリアが大変な目にあっていたかもしれないので、あまり嫌とは言えない。

それに結果的にはお城の図書館に入れたからプラスに働いてるし：ああ、でもこの弟さんに目を付けられたことを考えるとマイナスにしか思えないのが痛い。

そんな事を考えていると、皇子が姉に問いかける。

『：姉ちゃん？』

『う、うん？なあに？クール？』

『まさかとは思うけど：惚れた？』

『ち、違うわよ！全然惚れてなんて：』

『えーっと皇子？それは絶対にありえないかと思われるのですが：』

たぶん、惚れた惚れられたの話があまり聞きなれてないせいか、顔を真っ赤にして否定するユリア。

それに対して僕もありえないと言って否定しておく。

うん、だってありえないって絶対。

中身はアレだけど客観的に見たら綺麗なお姫様が僕に惚れるだなんて、世界が崩壊してもありえないっすよ？

でもユリアそういう反応はやめてくれ。何も知らない人間が見たら勘違いされるぞ？

『てめえには聞いてねえ』

『ですよー』

皇子の冷たい反応に僕も適当に流す。まあ、わかってたけどね。一応ツッコミ入れたかっただけだし。

って言うか皇子もそんなことありえないってわかってるだろうし。と、適当に思考していると皇子が僕に話しかけてきた。

『おい、てめえ。名前はなんていうんだ？』

『…はい、ユキト・ウォンスールといいます』

『そうか、俺の名前はクール・リミリア・ウィンベルだ。ユキト、俺と今すぐ戦え』

『嫌です』

即、拒否する。

って言うか、なんか唐突に「戦え」と申し込まれたけど…何故にそ

んな思考に陥ったのか理解しかねる。

『なんで戦わないといけないんですか？』

『姉ちゃんがお前に気をかけてるから：理由はそれだけで十分だろ？』

いや、十分じゃないし。それ、とぼっちり意外何者でもないんだが…。

そして、なんか既視感が一気に強くなった。
この展開、前にもあった気がする。

『それに、ユキト。お前はさっき俺の攻撃避けただろ？十分戦えるはずだ』

『いえ、さっきも言ったように勘でしかないんですが…』

『悪い話じゃないだろ。お前が勝ったら姉ちゃんと一緒にいても攻撃しないようにしてやるんだしよ』

『いや、別にそんなのどうでも『それ、本気なのクール！？』…うおーい』

会話している最中に強引にユリアに割り込まれ、思わずよくわからない声をあげる僕。

だが、ユリアは相当興奮してるのか、なんとも思わないらしい。

『だって！クールがそんなこと言うの初めてですよ！？』

『えー…？』

なんか…凄く納得いかない。

そんな初めてのことが起きたのが何故僕るときなんだろうと思う事もだけど、今までそんなこと言わなかったということは、ユリアに近づいた男は問答無用で攻撃され、撃沈されてるということだ…主に弟のせいで。

恐らくお城の兵士も例外じゃないだろう…ご愁傷様だ。

…ってそれってイコール姉弟揃ってお城全体に迷惑掛けてるのかよ…笑えねえなあホント。

などと疲れた思考をしていると、ユリアが詰め寄ってきた。

『ユキトさん！戦ってください！そして勝ってください！』

『えー…』

『なんで乗り気じゃないんですか！』

『いや、ユリア？落ち着いて考えてみようよ。勝ったら僕達がカッブル認定だよ？しかも家族認定』

『…あ』

僕の指摘にユリアもある程度冷静になれたのか、徐々に顔を真っ赤に染め上げていく。

やっぱり気づいてなかったか。まあ、そんなことだろうと思ってたけど。

『…それはそれで…もしかしたらいいかも？』

『あー、クール皇子。その案じゃ乗り気になれないんで、こういう

のはどうです？』

ユリアの反応は無視してクール皇子に話しかける。

『『どんな（だ）？』』

ユリアとクール皇子が同時に同じ事を問いかけてくる。こういうところは姉弟なんだなあと思う。

『僕が勝ったら、クール皇子。貴方は今後一切ユリアの近くに男がいても攻撃しないこと：それでいいです』

『…それでいいのか？』

『ええ、攻撃しなければ別に態度は変えなくても構いません』

『ちょ、ちよつとユキトさん！』

慌ててユリアがさらに近づいてきて耳打ちしてくる。

：この状態では攻撃してこないよねクール皇子？と少し不安な距離なんだけど。

『もっと好条件を提案したほうがいいんじゃないですか？』

『うーん、ユリアの言う事もわかるんだけどさ。あんまり無理言つてこの決闘自体がなくなっても困るかなあと思ってさ』

そう、大事なものは現状を変えることだが変化は少しだけいいと思う。

急激な変化はクール皇子も大変だろうし、何よりユリアも落ち着か

ないと思う。

『わかった。それでいいぞ』

『あと、付け足しで。決闘は今日じゃなくて一週間後ぐらいにして欲しいんだけど』

『なんでだ?』

『生憎と武器が無いんです』

ナイフは森で投げたままだし、使える戦闘用魔法は盾シールドだけ…どうやって勝てというんだか。

その旨を告げると、クール皇子も納得する。

『じゃあ、一週間後。この城の訓練広場に来い。楽しみにしてるぞ』

そう告げてクール皇子は去っていった。

条件（後書き）

最近仕事が忙しくて執筆する時間が少ないため、来週辺りから更新間隔がおかしくなると思われます。どうか、ご了承くださいませ（>><）

寄り道（前書き）

大変お待たせしました。16話目です。

寄り道

ひとまず、クール皇子との話はついたので当初の予定通り、ユリアと共に城を出る。

もちろんロナとアイズに合流するためだ。

合流場所の魔法店の「エフォニエ」はユリアも知っているくらい有名ならしく、場所も結構わかりやすい場所にあるらしい。

そのため、城を出てからはユリアが案内役として先導してくれていた。

だが、そこに向かっていく途中で一つ問題が発生する。
それは…。

『うーん。ここ、どこらへんなんだろうな?』

『さ、さあ?』

二人揃って道に迷っていた。

それはもうあっさりと。

周りを見渡してみても、先ほどまで人通りが賑やかな路地を歩いていたはずなのに、今は薄暗く人通りが少ない路地に入ってしまったている。

『しかし、さっきまで普通に市場っぽいところを歩いてたはずなのにな?』

『ですねえ…』

『ってかユリアは道わかるんだろ? 生まれ育った街なんだからさ』

『そう言われましても…確かに生まれ育った街ですけど、そんなに街を出歩くことなかったんですよ?』

『あー…これもテンプレか』

『てんぷれ?』

『…悪い、なんでもないから気にするな』

箱入りお姫様。

そんな単語とデフォルメ姿のユリアがダンボール箱に入っているイラストが頭に浮かんだが『何馬鹿な事思いついてるんだ』と、即座に頭のゴミ箱に投げ入れる。

迷ったことは気にしてもしょうがないしな。

さて、本格的にどうしようかと考える。

あまり二人を待たせたくもないのもあるが、お姫様が路地裏こんなどころに居ていいもんじゃないだろう。

ユリア自身も一応着替えてはきてはいるが、顔まで隠してるわけじゃないし、いつかバレて騒ぎになるかもしれない。
と言うか…。

『…そういえば、なんでローブ着てこなかったんだ?』

『え?だって、街中は安全ですし…』

『いや、そういう意味で聞いたんじゃないんだけど…まあいいか』

『あ、こっちの道行って見ませんか?まだ行ってませんし』

『そうだな、そっちの方行くか』

僕的には既に方向感覚もわかんなくなりつつあるので唯一土地勘がありそうなユリアが先導する。

まあ、それでも先ほど言ったように道が判るわけではないので土地勘も何もないが…。

『…あ、あれ？』

別の路地に入った瞬間。

先を進んでいたユリアが足を止めたため、危うくぶつかりそうになる。

急に止まったことに怪訝に思いながらも問いかける。

『うん？どうした？』

『い、いえ…そのう…』

『なんだ？この先進むんだろ？』

『…こ、ここを通るんですか？』

『はい？』

何やら言いにくそうなユリアを見て、訝しみながら先を覗き込んでみて、足を止めた理由がわかった。

『…あー…なんか…ごめん』

『…いえ、わたしこそ…すいませんでした』

その…なんか僕たちが来るのはちょっと早い区域だったらしい。路地は先ほどと比べて、人が行き交う数が多くなり、左右の店舗が大小さまざまな宿らしき店舗が並んでいる。

宿の前や小さな路地の入り口には露出の多い鮮やかな色の服を纏った女の人達が行く男の人達に声をかけたりして誘っている。女性がつける甘い香水が辺りを漂い、この通り全体に妖しげな雰囲気を出していた。

ユリアがその通りを少し見渡して思わずといった調子で呟く。

『…もしかして、これが噂の娼婦通り？』

『…っておいおい、この通りって城でも噂になってるレベルなのですよ？』

『ええと、その…お恥ずかしいことですが…お城のメイドさん達がたまに話してることあるので…』

『あー…そうなんだ…』

だいじょぶかこの国？と一瞬思ったが、こういう情報を知っているのもメイドとして当たり前かもしれないと自分の認識を改める。それにこういう類の商売も人間の生理的なものだから仕方ないだろうし、そういうのが盛んでも別にいいんだけどさ…まだ昼間なんだけどなあ…。

『…わー…見てくださいユキトさん。あの人凄い服着てますよー』

『うん、ジロジロ見るもんじゃないから、そういう視線で見るのはやめようなユリア』

『うっ…だって目に入っちゃいましたし…』

『まあ、気持ちはわからんでもないがな、目のやり場が困るし…っ
て言うかちよっと香水の香り強いなあ…』

母や妹とかで少しは香水の匂いには慣れてたつもりだったのだが…
やはり、こう女性が多いと全然違う。

って、何ぼけっとしてる場合じゃなかった。

こんなところお姫様がいていいわけないんだから、早くここから離れないと。

『ユリア。とにかくここから離れよう…っていない!?!』

さっきまで隣に居たはずのユリアに視線を向けるといつの間にか姿
が消えていた。

慌てて辺りを見渡してみるが、どこにもいない。

『おいおい…この場所で迷子はまずすぎるぞ…』

呆然としながらも、まだ近くに居ないかとゆっくり歩いて探してみ
る。

道すがら歩いていると小さな小道をいくつか見つけたので覗き込ん
でみたが、すぐに顔を戻す。

…なんか、見ちゃいけないところをいくつか見た気がするが、あま
り思い出さないようにしておく、と言うか記憶を封印する。

『（路地に入ったわけじゃない…とは思うけど、どうしたもんかなあ）』

本格的に頭を抱えなくなってきたところで、一つ名案が思い浮かぶ。

『あ、念話すればいいんじゃない？』

っていうか一番最初に思いつくだろう、その選択肢…と後悔しながらも、ユリアの顔を思い浮かべて念話を繋げてみる。

『（ユリア？）』

『（ユキトさん？）』

『（どこに行ったんだ？結構探してるんだけど…）』

『（あ、すいませんでした。ちょっとお店の人に呼ばれちゃいました…）』

『（…お店の人？）』

『（はい。あ、ユキトさんの後ろ姿見えたので合流しますね）』

そう念話で言われ、後ろを振り返ってみるが、ユリアの姿は見えない。

どこだ？と思いながらキョロキョロと来た道を探してみるが、一向に見つからない。

『ユキトさん？』

『うん？』

『あの…何見てるんですか？』

『いや、ユリア探してるんだけど…』

はて？ 声は聞こえど、姿は見えぬ…。

『あ、魔法使ってるのか？でも、透明になる魔法ってあるのか？』

『魔法なんて使ってないですよ！透明になる魔法もないです！って言うかい加減認識してください！』

いや…だって、ねえ？

数分前まで空色のワンピース着てたくせに、何故か周りの女の人みたいに露出が多い服着たユリアがいるなんて、誰が認識できるかって言うんだ。

それに何より…。

『ぶふっ…くふふっ…』

『って、急に笑い始めないでくださいよ！』

思わず僕が噴出すとユリアがぶんすか怒り始める。
いくらなんでもその格好はなかった。

『いや…だって、ねえ？奥さん？』

『何ですか奥さんって!?!』

『こんな小さい子が背伸びし過ぎたかのような露出の多い服着てるだなんて…くはっだめだ。笑いが止まらない…』

今ユリアの着ている服は正直かなり露出が高い。背中では腰の辺りまで開いているし、胸元は少し厚めの布に綺麗な刺繍が施されているが、肩から袖までは薄く透き通るような布で構成されている。腰から足元もギリギリ見えるか見えないかの微妙な透明感がある。

だが、先ほども言ったように背の小さい子には似合わないと言断言している。

なんだか「小さい子供が母親の服を無理やり着た」といった感じがしてしまい、扇情的に見えるというより、おしやまな感じがするのだ。

『ひ、ひどいですよ!結構頑張ってるのに!』

『いやまあ、言いたい事はよくわかるけどさ…流石に背伸びしすぎだろ?』

ニヤニヤしながら僕が指摘すると、やはり自分自身でもある程度気づいていたのか、頭を抱えてぶつぶつ言い始める。

『ううっ…確かにわたしもちょっと背伸びしすぎたかなーって思いましたよ?でも、もうちょっと褒めてくれたっていいじゃないですか…』

『あー悪かったってば、で?なんだってそんな格好になってるわけ?』

『まったく：もういいです。この服は、そこのお店の人に勧められて着てみたんですよ』

『：店があるのか？こんなところに？』

『ええ、そこに：』

そう言ってユリアの指を挿した先には確かにお店はあった：だが、

『：露店で、明らかにこの場所専用の服：って感じなのばかりだな』

近づいて露店に飾ってある服を眺めてみるが明らかに露出が高い服ばかりだった。

『おう、姉ちゃん。その格好で彼氏には気に入って貰えたかい？』

服を見ていると露店商のおっちゃんが元気よく声をかけてくる。
30代ぐらいの人かな？

『うう：ダメでしたー。おじ様！もう少し派手なありますか？こうなったら徹底抗戦するつもりなので：』

『おお。手強い彼氏だな：これでダメとは：おっしゃ！おっちゃんのとっておきで勝負してみな！』

『いや、これ以上派手なの着なくていいから。って言うかおっちゃんノリ良すぎだろ』

思わずツツコミつつおっちゃんの手渡そうとした品を掴んで止める。おっちゃんの手に乗っていたのは明らかに布地が少なそうだったので広げる前に止める。

たぶんだが…広げられたら直視する自信がない予感がする。

『あつはつはつは。彼氏さんちやんとご機嫌じゃねえか。よかつたな嬢ちゃん』

『ううん。この人の場合これが普通かもしれないのでご機嫌なのか微妙なのですよ』

『もういいから…さて、おっちゃん。この服いくら？』

『お、話が早いね兄ちゃん。銅貨30枚でどうだい？』

キラリと目を輝かせるおっちゃん…やっぱりか。

『え？え？え？』

一人何もわかっていないユリアが首を傾げつつ、僕とおっちゃんの顔を交互に見るが気にせず懐の財布からお金を取り出す。

『声かけられて、服着せられた時点でもう負け試合だよ…はい、銅貨30枚』

ちなみに通貨は銅貨・銀貨・金貨が使われており、銅貨100枚で銀貨1枚になり、銀貨10枚で金貨1枚になる。だいたい銅貨一枚で100円ほどの価値がある。

つまり、この服一着で3000円ほど…まあ、よしとするか。

『ユリア。こういう露店で買ったことないからわかんないんだろうけど、普通はいきなり試着させて表歩かせたりしないからな?』

『え?じゃあ、なんで…』

『一度着ちゃったら、また着替えるのが面倒だろ?そうなるを買ったほうが早い。で、僕たちはどちらかというと急いでるほうの間だから、元の服に着替えなおすのはありえない…そうになると、このおっちゃんには絶好の獲物ということなんだよ。ま、宣伝にもなるんだろうけどさ』

『いやー、兄ちゃん物分りが良すぎて好きになっちゃいそうだよ』

本当に嬉しそうに銅貨を受け取るおっちゃん。

それを見て溜め息を吐きながらも、ついでおっちゃんに尋ねておく。

『あ、おっちゃん。ついでに聞きたいことあるんだけど…魔法店の「エフォニエ」って場所知ってる?』

『ああ、この路地を進んで途中の横道を左に行けば見えてくるはずだよ』

『そっか。サンキュおっちゃん。行こうユリア』

『おっと、忘れもんだぜ嬢ちゃん』

そう言ってユリアに紙袋を投げ渡すおっちゃん。恐らく前の服だろう。

『え？あ、はい。ありがとうございます。それじゃあ、わたし達
はこれで失礼します』

『またどこかでな』

手を振るおっちゃんに手を振り、路地を進む。

『…そういえば寒くないのかその格好？』

少し進んだところでユリアに問いかける：時期的には寒くないかもしれないが、ユリアが今着ている服は全体的に布が薄いため寒いかもしれない。

『あ、これ少し魔法がかかってるみたいなんで寒くないですよ？』

『…なるほど』

恐るべし、魔法社会。こんな服にも魔法技術が使われているのかと軽く戦慄する僕。

でも、よくよく考えてみると、僕が今羽織っているローブには防御魔法がかかっているのであまり珍しい技術でもないのかもしれない。

『（だんだんこっちの世界のほうが技術的に勝ってる気がしてきたな）』

元の世界では科学は発展していたが、こういうオカルト的な恩恵はまったくない。

せいぜい、繊維を改良して、少し動くと暖くなる機構が備わっているぐらいだった。

と、そこまで考えたところで件の魔法店が見えてきた。

看板には大きな緑色の文字で「エフォニエ」と書かれており、左右に黒いコウモリのような看板。

軒先には大小様々な色のツボが置いてあり、中を覗いてみると、色とりどりの液体が入っている…。

『つて、虹色はどうやって出してるんだよ!?!?』

と、ツボの中身の異様にツツコミながらも絵本に出てくる魔法の館みたいだな。と印象を受ける。

ユリアが看板を見上げながら呟く。

『…もうお友達さんは来ていらっしやるかもしれませんね』

『ここまで結構時間かかったからなあ。ま、平手一発は覚悟しておくか…痛そうだけど』

そう言って僕は魔法店「エフォニエ」のドアを内側に引いた。

合流（前書き）

大変長らくお待たせしました＞＜ 最近忙しくて小説書く暇がありませんが、これからもちまちまと頑張っていく予定なので、どうか見捨てないでください（笑

合流

『こんな小さな子にあんたはなんて服着させてんのよ!』

その叫びと共に勢いよく繰り出されたロナの鉄拳ナックルが僕の顔に直撃した。

ドアを開けたままだったので、ぐしゃあつという音と共に店の軒先に吹っ飛ばされる僕。

一応、手で受け止めようとか魔法で受け止めようとか頭を逸らして避けようとかは考えたのだが、そんな事をしたら火に油を注ぐ…いや、ガソリンを注いで爆発させるようなものなので素直に顔面で受け止めた。

『い、痛ええ…もうちょっと手加減してくれてもいいはずだよなあ…』

涙目で殴られたところを擦る。

まあ、当然のようにもの凄く痛いわけですよ。

殴られたところもだけど吹っ飛ばされたときに地面にも激突したようなものだったため、全身がくまなく痛い。

あいつはホントに女の子という種類に入るのだろうかと思わず考えってしまうほど、力が強いから殴られたほうはたまったもんじゃない。と言うか店内に入って挨拶した瞬間って酷すぎないか？弁明する暇もなかったぞ？

『あわあわあわあわ…』

吹っ飛ばされる直前に巻き込まれないようにと、咄嗟に脇に突き飛ばしたユリアがドアから出てきたロナと僕を交互に見ながらブルブル震えている。

まあ、当然の反応である。

ロナの後ろを見ると苦笑いしているアイズがいるのだが：彼も若干怖いのだろう。

なんか遠目から見ても汗の量が尋常じゃなかった：気の毒に。

『さて、ちよつとはスッキリしたし、言い訳を聞きましょうか？』

『ふおっふおっふお：とりあえず喧嘩するなら外でやってもらえんかねえ、ロナちゃん』

ロナがそう言った時、アイズの後ろから別の声が聞こえ、朗らかに笑っている白髪のお爺ちゃんが出てきた。

年齢は7〜80ぐらいだろうか？結構歳をとっている様に見える。背中を丸めているため、ユリアと同じぐらいの背丈に見え、元の世界のTVでたまに見た民族衣装に似たような衣装を着ている。

『店のドアを壊されちゃあかなわんからねえ』

『あう：ごめんなさい。エフォニエお爺ちゃん』

しおらしくお爺ちゃんに謝るロナを見て、僕は愕然とする。

『：あの、ロナが謝る：だと：！？』

『あんた、どんな目でアタシのこと見てたのよ！？』

僕が思わず嘆いた途端に鬼のような形相でこちらを睨むロナ。

うおお…怖いなアレ。そして続けて思ったことをつい呟いてしまう。

『どんな目って…そんな目？』

『…殴られ足りないみたいね…ユキ…』

手を組んでパキパキと関節を鳴らしながらこちらに歩いてくるロナ。それを見て、流石にまずいと思い、手だけで後ろに後ずさる。たぶん、僕の表情は青くなってるだろう。

『あ、あのっ！わ、わたしが自分の意思で着たものですから！それ以上ユキトさんいじめないでください！』

今まで様子を見ていたユリアが、慌てて僕とロナの間に割って入ってくる。

『そ、そうそう。ロナもそろそろ落ち着いて、な？』

アイズも一瞬躊躇したものの、ロナの前に両手を広げて立ちはだかる。

その様子を見て、流石にやりすぎたかと思ったのか、またはようやく気が晴れたのか、ロナが溜息混じりに呟く。

『はあ…いじめてないし、アタシは落ち着いてるわよ…まったく…』

『…いじめてたんじゃなかったのか…僕はてっきり…』

『わたしもいじめてるように見えましたけど…』

『ボクも同感だ』

『ワシも同意見じゃねえ』

僕、ユリア、アイズ、おじいちゃんの思い思いの発言を聞き、ロナがまた溜息を吐く。

『…あんた達、揃いも揃って同じ発言しないでよ。エフォニエお爺ちゃんも』

『ふおっふおっふお…まあ落ち着いたようじゃし、お茶の準備でもしようかねえ』

『…お世話になります』

一連の騒動にほぼ動じず、落ち着いてお茶の準備をしようとするこのお爺ちゃんに思わず頭を下げて挨拶する僕だった。

『ふーん。そんな話乗ることにしたんだ…へー？』

とりあえず、森であった事とお城での出来事までを説明すると、ロナが見事に不機嫌になった。

何故不機嫌なのかさっぱりだが。

ちなみに、ユリアの自己紹介も一緒にしたのだが、ロナとアイズは相手が皇女でも驚きもしなかった。

元から知ってたのか、もしくは元々気にしない性格なのかまでは判断できないが：結構驚いた僕としてはちょっと納得いかない。
まあ、それは置いておくとして：。

『あの：何故にそんなに怒っておいでなのですかロナさん？』

『ふんっ！怒ってなんかいいわよ。ええ、ちつとも。これっぽっちも：ね！』

だんっと言う音と共に鉄製のティーカップがテーブルに叩きつけられる。

：なるほど、なんでロナだけ鉄製のティーカップかと配られた時に疑問に思ってたけど、こういう意味だったのか。

あのお爺ちゃんをよくわかってらっしゃる。

って言うか何でロナがこんなに怒っているのか僕にはまったく理解できない。

そんな中ユリアが申し訳なさそうにロナに謝る。

『あう：なんだかすいません』

『ユリアのせいじゃないわよ。元はといえばユキが全部悪いんだから』

『ちょっと待て！全部僕のせい！？』

『じゃあ、ユキはユリアのせいだって言いたいのか？』

『いや、そうは言ってないけどさ：』

でも、確かに僕のせい：なのか？あの場でもう少し僕が強かったら

…魔法が使えたら、状況が変わってた…のかなあ？
と、そんな事を考えているとテーブルの上にお茶菓子ドライフルーツだが載ったお皿が静かに置かれる。

持ってきたのは先ほどのお爺ちゃんだ。

『ふおっふおっふお…ロナちゃん。もう少し静かにしないとだめじやよ？』

『ううっ…すいません』

お爺ちゃんに言われて、気まずそうに俯くロナ。

『…凄い人ですね』

『ああ、まったくだ』

ユリアがこっそり小声で話しかけてきたので僕も小声で答える。
あのロナをここまで大人しくさせることが出来るのがすごい。

『さて…君がユキト君じゃね？はじめまして、ワシがエフォニエ・マタリアじゃよ』

『あ、ご丁寧にどうも…ユキト・ウォンスールです』

『お前さんたちはファールの使いきたんだってねえ？依頼の品は用意してあるからあとで渡そうかね』

『ありがとうございます』

『しかし…勝ち目はまったく薄いのによくその勝負を受ける気にな

ったなユキト君は』

僕とエフォニエさんとの挨拶が一段落したのを見計らってアイズが聞いてくる。

『まあ…まだ一週間は時間あるし、どうにかするよ』

そう、アイズに言われたとおり、まず勝ち目が殆ど無い。

こちらら初心者魔法使いで、元の世界では喧嘩ぐらいしかしたことがない。

こっちに着てから学校で勉強したり、実践訓練も何度かやっているが、現状で勝てるとは思っていない。

クール皇子の動きを見たときに思ったのだが、なんだか戦い慣れている感じがしたからだ。

『で、どうやって勝つつもりなのよユキ』

『…どうしようか？』

正直勝ち方は考えてなかったりする。

っていうかあんなデカイハンマーを振り回すような奴に簡単に勝てる方法なんてすぐに思いつかないと思う。

『まさか…その場の勢いで勝負受けたの！？』

『…いや、ちょっと思うところあって、な』

クール皇子と会った時に思った予想なんだが、たぶん当たってると思う。

『思うところ：ですか？』

なんの事ですか？と言った感じでユリアが聞いてくるが、確証がないので話すわけにもいかない、だからお茶を濁しておく。

『うん、まあ、それは置いておくとして：とりあえず魔法の練習かな？』

『そうだね、手数が増えることは戦略の幅が広がるからね』

アイズがそう言って、席を立つ。

『どしたのアイズ？』

『：いや、エフォニエさんには失礼なんなんだが：そろそろご飯にしないか？』

言われてみて気づく、そういえばお昼ご飯まだだったな。

と、その瞬間。

ぐぎゅるるる：というお腹の音が鳴る、もちろん僕じゃない。

音がしたほうを見ると、ユリアとロナが慌てて視線を逸らす：やっぱりお前らか。

『ふおっふおっふお：それじゃあ、お茶会はお開きにしてご飯の用意でもしようかねえ』

『あ、いえ、そこまでして貰うわけには：』

『なに、ワシもまだ食べてなかったからな、久々に賑やかな食卓になりそうでよろしい』

『…それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらいます』

そう僕が答えると、エフォニエさんがうむうむ笑いながらドアの向こうに消える。

『あ、わたし手伝ってきます』

『何もしないでいるのも悪い気がするし、ボクも手伝ってこよう』

そう言って、ユリアとアイズが席を立ち、エフォニエさんが出て行ったドアをあけ、二人も出て行く。
残ったのは僕とロナだけだ。

『…で？なんでアタシとあんたが残るのかしらね？』

『そう思うなら僕達も手伝いに行くか？』

ロナにそう聞いてみると、不貞腐れたような顔をして目を逸らし、こう返してきた。

『…言いたい事あるから別にいいわよ』

『そっか。奇遇だね僕も言いたいことがあるよ』

にっこり笑ってから答える。

そう、ずっと言いたい事がった。

『…ホントにホントに心配したんだからね？』

『わかってる。アイズからも聞いたし、予想もしてたから…だからごめん、それから心配かけて悪かった』

そう、ホントは一番最初に再会したときに言わなきゃいけなかった言葉だ。

そして、ポンポンと頭を軽く乗せる。

『だから泣くな』

『な、泣いてないわよ!』

『ふむ、そうか…だそうだよアイズ、ユリア』

『え!?!?』

僕が指摘した瞬間ドアの向こうから「わっ」と言うユリアとアイズの声が聞こえてきた。

ロナが慌ててドアのほうに目を向ける。

案の定、少しだけ開いていて、二人の服の端がちらちら見える。

しばらくして隠れても無駄だと思ったのか、おとなしく二人が部屋に入ってくる。

『ううう、いつから気づいてたんですかユキトさん?』

『えーっと、最初からかな? ユリアが料理の手伝いとかできそうになかったから不審に思ってたな』

『むぐっ…確かに料理はしたこと無いですけど、でも食器の用意ぐらいはできたかもしれないじゃないですか!』

『いや、お前なら余裕で皿落としてガシャンガシャン音出しそうだし、その音もなかったからな』

『わたしそこまで不器用に見えますか!?!』

僕がユリアをからかって遊んでいると、今度はアイズとロナが言い争いをはじめた。

『ふーん。アイズったら良い度胸してるじゃない…ねえ?』

『いや、ボクは何を話してるのか気になってね?』

『その結果がユリアと揃って二人で盗み聞き?』

『そんな、だって気になるだろう!?!自分の好きな人がどんな話をしているかとか!』

『ど、どさくさに紛れてなんてこと口走ってるのよアイズ!』

スパアンという思い切り良い音と共にロナの平手がアイズの頭に直撃する。

うん、ホント良い音だった。

『夫婦みたいなノリツツコミですね〜』

『だなあ』

『あんた達も揃ってそんな事言っていないで謝りなさい!』

『『はいはい。ごめんなさいロナ(さん)』』

『ハモってる！？なんでそんなところが息ピッタリなのよあんた達は！？』

と、場が混沌^{カオス}となりつつあったが、エフオニエさんがドアから顔だけ出して、鶴の一声を入れる。

『ふおっふおっふお、お前ら手伝わんなら飯抜きと判断して良いのかな？』

『『『大変失礼しました！今すぐお手伝い致します！』』』

なんだかんだ言っているの間に仲良くなってるよな僕達…まあ、誰が主な原因かわからないけど…と、ずれてる様なずれてないような事を考えながら、いそいそと台所に向かうことにした。

合流（後書き）

ご意見・ご感想をお気軽に書いて貰えると嬉しいですよ。

街巡り（前書き）

ちよつと遅れましたが、なんとか完成したので投稿します。来週はわかりませんが、この調子で投稿したいと考えていますので応援等よろしくお願いします。

街巡り

なんだかんだとありつつも、無事に少し遅めの昼食をエフオニエさんと一緒に食べ終え、僕達4人はウィンベルの街並みを歩いてみる事になった。

こうなった理由は2つある。

1つ目は、まだ僕達全員がこの街を自由に歩いたことがないため、非常に興味があるからだ。

僕は言わずともわかるとおり、初めて来たからだし。

ユリアは前に聞いたとおり、お城から出たことが少なかったから。ロナとアイズも何度か来たことはあるらしいが、そんなに詳しくないからだ。

そこでひとまずエフオニエさんから依頼されていた菓をいくつか受け取り、ここらの道を聞き、挨拶してから店を出て、4人でお喋りしながら市場のように賑やかな路地をぶらぶらと散歩することになった。

この路地は食べ物系を売っているらしく、美味しそうな匂いが鼻腔を擽る。

肉がたっぷり詰まったウィンナーを吊るしている露店やら、香辛料らしき物が詰まっているビンを売っている露店もある。

香ばしいパンの匂いもするのでもしかしたら先のほうにパン屋さんでもあるのかもしれない。

並んでいる露店は実に多種多様なのだが：僕が先ほどから探している露店は遠くまで見渡してみても見当たらない。

そう、甘いものだ。露店は所狭しと路地に並んでいるというのに、甘いものを扱っている露店だけが見当たらない：果物やドライフルーツといったものは見かけるのだが、僕の中の洋菓子の定番といったクレープやらケーキといった人工的なデザートといったものがないのだ。

『（…ってまさかとは思うけど…）』

ある嫌な予感を感じてしまい、前を歩いている女の子二人に恐る恐ると言った感じで問いかける。

『ねえ、ロナ、ユリア』

『うん？何よユキ』

『なんですか？ユキトさん』

『果物以外の甘いものって言ったなら何を思い浮かべる？』

問われた二人は立ち止まってしばらく黙考したあと、二人揃って告げる。

『『砂糖？』』

『いや、そうでなくて…まあ当たりっちゃ当たりだけど、うーん』
これだけじゃあわからないので、もっと具体的に聞いてみることにした。

『…じゃあズバリ聞く。ケーキとプリンどっちが好きだ？』

『けーき？ぷりん？』

『ってなんですかそれ？』

『……………OK把握した』

二人の見事な反応にがっくりする。

そっか…ないのか、まあ、学食でデザート項目がフルーツ関係だけだったときに薄々感じていたけどさ。

うーん、ちょっと材料探してみても自分で作ろうかなあ？

これでも平日に暇なときは家でケーキやらプリンやらを作っては、妹や友達に配ったりしたので、そこそこ自信はある。

…プリンにかかせないバナビーンズがあればいいけどと少し不安はあるが。

そんなことをつらつらと考えながら、露店をぶらりぶらりと見て周っていく。

ふと、疑問に思っていたことがあったので前を歩いているユリアに聞いてみる。

『ところで今更なんだが…ユリアってお城出てきて良かったのか？』

『はい？なんでですか？』

首を傾げてこちらを見つめてくるユリア…ってわかってないのかこのお姫様は…（汗）

『いや、お前一応この国のお姫様だろ？勝手に出てきて大丈夫なの

か？』

すると、首を傾げていたユリアは今度は頬を膨らませてこちらを睨んでくる。

『む：一応つてところが気になりますけど、まあいいです。ちゃんとお父様から許可は取ってますからだいじょぶですよ』

『そっか』

まあ、許可をとってあるなら問題ないだろう。

：いつ取ったのが疑問だが：念話か？それともあの着替えの時か？と僕が色々と考察していると今度はアイズが話しかけてくる。

『そういえばユキト君』

『うん？何、アイズ』

『君は元の：つとじゃなくて前はどんな武器を使っていたんだい？』

アイズが何かを言いかけて、改めて聞いてくる：たぶん、元の世界ではって続けようとしてやめたんだろうな。

『そうだね、正直言うとも何も使って無かったよ？使ってたのはこの手だけ』

『：その割にはナイフの扱いが慣れていたように見えたが：』

『あー：まあ、ナイフは、ね：』

まさか友達に話を聞いただけです。とは流石に言えない。
あいつの話は規格外過ぎるからなあ：話を聞いただけでこの慣れようだ。

ちなみに本当に練習したことはない、ナイフを握った覚えもない。
いや、料理で包丁は何度も何度も握ってるけどさ。

『うん？：まあ、それなら武器はナイフを探そうか？』

『そういうわけでもないんだけど：まあ、武器売ってるところ行つてからにしようか？』

そう、理由の2つ目は僕の武器探した。

あの森でナイフを投擲して、回収できなかったため買っておきたいし、何よりこれから試合をするのだからちゃんとした武器が必要だろうという話になったからだ。

まあ、正直なところ僕は武器自体はどうでもよかったりする。

ナイフはまあ、使い方によっては結構便利だから護身用の意味でも一本は持っておきたいけど、

僕は剣やら槍やらといった、ちゃんとした「武器」を持ちたいとは思っていない。

理由は単純で武器をきちんと使いこなせる自信がないのもあるが、あまり血を見たくないからだ。

先ほども言ったように、元の世界では拳だけで喧嘩してたし、使ったとしても鉄パイプやら木の棒だったりで、相手に致命傷を与えないようにしていた。

けど、これからはそんな甘い考えが通じないかもしれないと漠然と感じてしまう。

あの森で初めて魔物と出会った事が良い例だった。

気を抜けば殺される…あの時はそんな事を実感してはいなかったが、一歩間違えたら殺されていたかもしれない。

と、本当に今更な話なのだが今になってだんだんと怖くなってきた。

『（僕も…ユリアも…）』

ちらりと、前を歩くロナと談笑しているユリアを見る。

殺されていたかもしれない…そう考えてしまうと全身が震える。

そこまで考え、少し背筋が寒くなったところで慌てて頭を振って考えを吹き飛ばす。

『（とつとつと…いけない、いけない）』

これ以上嫌なこと…アレを思い出さないようにを、考えないように思考をせき止めて、俯いていた視線を前に移す。
視線の先には人ごみ…ではなく。

『……………』

『ってどわああ？』

どアップのユリアの顔だった。

ユリアが目の前にいるとは全然思っていなかったので慌てて仰け反り、その場に尻餅をついてしまう。

するとユリアも驚いたのか、

『あわわわわわ…』

手をバタバタさせて、倒れないように必死にバランスを取る。

安定したのか胸を押さえながらユリアが言う。

『び、びっくりしました』

『そ、そりゃこっちのセリフだ。どうしたんだよ急に』

僕も思わず胸を押さえつつ、聞き返す。

『いえ、その、用があったわけじゃないんですけどお…』

『あんたが浮かない顔してたから心配してたのよ』

『ロナちゃんっ！そうはつきり言わないでくださいよ！恥ずかしいじゃないですか！』

『何を今更恥ずかしがってるんだか…あんたお爺ちゃんの店出るまであの格好だったじゃない』

『アレはそういう問題じゃないですよ』

恥ずかしそうにしながらもロナをポカポカと叩くユリア。

そしてそれを見ながらニヤニヤしているロナ。

それを見て、僕は思わず噴出す。

『あ、酷いですっ！人がせっかく心配してるのに笑ってますよこの人！？』

『いや、最初は友達になれるかわからないって心配そうに言ってたやつが今じゃすっかり仲良しになって他の人の心配なんてしてるから、ついな…』

『むう…だって心配になるくらい思いつめた顔してましたよ？ユキトさん』

腰に手をやりながら呆れたように言ってくるユリア。それを聞き、狐に抓まれたような顔で僕は聞き返す。

『…そんな顔してた？』

『してました』

『してたわね』

『してたように思えるぞ』

3人がうんうんと頷きながら言ってくる。

うーん。そんな顔してたんだろうか？全然自覚してなかったんだけど…。

ここは誤魔化すか。

『まあ、たいしたことじゃないから気にしないでいいから…っと、この辺りじゃないか？』

そう言っで一足先に路地の先へ行く、後ろの3人がじっとした目で見てくるが、スルーする。

路地の角を曲がると、先ほどより人通りが少し減った。

エフォニエさんに聞いたところによると、ここらが武器店など多いらしい。

『…意外と多いわねお店』

ロナが路地を見渡してうんざりしたように言う。

確かに多い。ざっと見ただけで20店以上はあるように見える。

路地に出ている露店も入れると4〜50はあるようだ。

お国柄ってわけじゃないんだらうけど…。

『っていうか多すぎないか、流石に』

『たぶん、少ないほうですよここは？大陸の南に位置するクレインっていう街では街全体が武器店を開いてるって聞いたことあるぐらいですし』

『じゃあ、まだ少ないほうなのか…でもこの数はなあ…』

流石に骨が折れる、と言うかうんざりする。

『…悪い。3人とも他の場所周ってていいぞ。流石に時間かかりそうだ』

そう言って、一步前に歩き出す。

僕が探している武器なんだし、3人まで付き合う必要は無いだろう。

『あら、別にアタシ達のことは気にしなくていいわよ？』

『そうそう、武器を見るのも勉強になるだろうしね』

ロナとアイズがそう言って僕の肩をポンと叩く。

どうやら付き合う気らしい…別に一人で見て周るぐらいいいんだけどなあ。

この二人は武器なんて必要ないだろうし、無理に付き合う必要もな

いと思うんだが…。

『それに、こういう所ではたまにアクセサリーとか売ってるお店もありますから、わたしも付き合いますよ』

『…そっか、ありがとな』

ユリアがあっけらかんと言いつたので、僕も腹を括弧することにする
…いや、そこまで気にすることじゃないけどさ。
3人の心遣いに感謝することにした。

武器探し（前書き）

遅くなって本当にすいません。予想以上に書く事になり、遅くなり
ました（＞＜ あともう知っている方もいるかもしれませんが、活
動報告をそれなりに書いていますので、更新の目安として、閲覧し
ていただくと嬉しいです。

武器探し

『ごめんくださいと…』

路地に並んでいた武器を売ってるお店を見つけ、僕は声をかけながら店の中入る。

すると、髭を生やしたおじさんが厳つい表情でジロリとこちらを睨みつけてきた。

だが、すぐに何も言わずに右手にしていた剣に目を落とす。

どうやら、剣を磨いている最中だったらしいく、おじさんの左手にはタオルのような布が握られている。

邪魔しちゃ悪いと思い、こちらに一礼してから無言で店内に目を向けことにした。

店内は明るく、眩しいぐらいで、天井には電球があるのだが、電気：じゃないみたいだ。

詳しいわけではないのだが、電球から生えている配線は糸のように細すぎるし：あれじゃあ電気が通ったとしても僅かだ：まさかとは思うけど、魔力式なのか？と珍しく思いながら見つめる。

視線をさらに移す、おじさんが座っている前には木でできたカウンターがあり、壁には剣、槍、斧、ナイフ、弓といった典型的な武器が所狭しと飾ってあったり、立てかけられたりしている。

：杖みたいな武器が無いみたいだけど、ここが純粋に武器店だからかな？

壁の一角にナイフが飾ってあることに気づき、その内の1つを手にとってみる。

『（ナイフは：まあ、これでいいかな？）』

手に取ったのは装飾がまったくされていないシンプルなナイフだ。刃が15cmぐらいで前に使っていた物より少しだけ長く感じる。周りに人がいないことを確認してから、試しに軽く振ってみる。……うん、悪くないと思う。

『おじさん、これいくら?』

『…銅貨10枚だ』

ぶっきらぼうにおじさんがそう言うと言と手を突き出す。10枚ってことは…1000円ぐらいか? 学校の購買部では銅貨5枚だったけど…まあ、愚痴っても仕方ないか。

手のひらに銅貨を載せ、代金を支払う。

購入したナイフを、今まで使っていたナイフの鞘に入れてみると、すっぽりと収まった。

どうやら鞘だけ予め大きめに作ってあったらしい。

さて、これで当初の目的は達したわけなのだが…他にめばしい武器が無いかと探してみることにした。

皇子が持っていたデカイハンマーをこの小さなナイフで受け止めきれ自信はない。

まあ、それ以前に受け止める気なんてさらさらないけど。

『……………』

壁に飾ってあるナイフ意外の武器を一つ一つ、じっくりと目を凝らして見つめる。

武器の良し悪しは…はっきり言って僕にはわからない。

まあ素人だから別にそこらへんは気にしていないけど。
だが、それ以前に…。

『（なんていうか…不思議な気分だなあ）』

ついこの前まで普通の学生だった僕が、こんな武器を実際に見ている現状が俄に信じられない。

ゲームとか本とかで一応知識としては知っているが、実物を目にするというのは変な感じだ。

試しに無造作にツボに放り込まれていた柄に綺麗な紋様が装飾がさ
れている剣を一本引き抜き、片手で構えてみる。
はて？意外と軽い？

『（剣って鋼とか鉄とか使われているはずだから重いもんだと思っ
てたんだけど…案外軽いんだな）』

そう思いつつも、適当に振ってみる。

ひゅんひゅんっひゅばっという風を切る音が店内に響く。

音を聞いていたらしいおじさんがこちらに目を向けて驚いたような
顔をしている。

うん？驚かせるようなことしてないはずだけど…なんだろう？と思
いつつも、こういう感じに注目されるのはなんだか恥ずかしいなあ
と思いつつ、そのまま剣を振り続けてみることにした。
ひゅばっという音と共に縦、横、斜めと振ってみる。

『おい、その坊主。これ、切れるか？』

今まで興味無さそうに剣を磨いていたおじさんが、そう言って何か

を投げてきた。

切れるかどうかはわからないが、投げてきたものを切ればいいと判断して。

キャッチせずに空中で一刀両断する。

ジャリンツという金属音と共に放物線を描いていた何かが真っ二つに切られ、床に落ちる。

床に目を向けてみると、鈍く光っている金属球が真っ二つになっていた。

『ほう、坊主。案外やるな、それでその球を切ったのはお前が初めてだよ』

『…いえ、誰でも切れるかと思うんですが…』

『そのボロボロ剣でか?』

言われてみて慌てて剣を見てみると、刃の部分がボロボロだった。
：なんで切れたんだ僕? まさかとは思うけど、友人トークと異世界移動が原因とかないよな?

だとしたら僕はどんどん人外になっているという嫌な疑惑が浮上するのだが…。

つと、今はとにかく誤魔化しておくか。

『…ぐ、偶然かと』

『偶然で切れるなら、武器屋はいらなくなるな』

『…ですよね』

そりゃそうだ。

こんなボロボロの剣で硬そうな金属球切れるぐらいなら武器屋なんていらなくなる。

持っていた剣を元のツボに戻すと、おじさんが話しかけてくる。

『お前何もんだ？』

『ふつーの学生です』

『学生にしちゃあ腕が立ちすぎてるな…まあいい』

そう言い終ると、興味が失せたのか手元の剣に目を落とすおじさん。
…追及はいいんだろうか？

『…いいんですか？』

『喋りたくないなら喋らなくていいさ』

『…ご好意感謝します』

そう答えてから、なんだか居辛くなってきたので、店を出ようと出口に足を向ける。
すると、背中から声をかけられる。

『だが、1つ言いたいことがあるとすれば…』

『すれば？』

『またのお越しをお待ちしてます…ぐらいだ』

『ここのナイフ：良い出来みたいですから、また来ます』

振り返っておじさんとお互いにニヤリと笑いかけ、店を出る。うん、良い買い物した。

そして、目の前に出ている露店の前まで歩き、座り込んでいる女性二名にからかい気味に声をかける。

『：お気に召す物は見つかりましたか？お二方？』

『ちょっと黙ってて、ユキ。今良いところだから』

『すみませんユキトさん。もう少しだけ見させてください』

こちらを見向きもせず^{アクセサリ}に一心不乱に小物に目を光らせる二人組み。
うーん：まだしばらくかかりそうだな、こりや。

『：アイズ。悪いけど、もうしばらく見てもらってもいい？』

『構わないよ。ただし、あんまり遅くならないようにね』

アイズは露店に並べられている小物には興味が無かったらしく、暇そうに露店の支柱に背中を預けていたアイズに声をかけ、小物露店から遠ざかる。

実はあの店に入る際に小物露店の前を通ったら、見事にロナとユリアが食いついた。

邪魔するのも悪いかと思い、護衛：というか無駄遣いしないようにと、お目付け役としてアイズを残して僕だけ店に入ったのだ。

まあ、あれだ。女性は飾り物が好きって聞くし、無駄遣いさえしなければ問題ないだろう。

『(さて、どこ周ろうかなあ…)』

適当に路地を歩きながら、露店に出ている物も物色していく。さっきの露店もだが、流石に武器ばかり置いてあるわけじゃないらしい。

先ほど二人が見ていたような、ブローチ・ネックレス・ペンダントのような小物が置いてある露店もあれば、大小様々な頑丈そうな鎧が置いてある露店もある。

露店を見ながらも道沿いに並んでいる店舗のほうにも目を向けてみる。

ガラスのショーウィンドウの中に高級そうな鎧が置いてある店もあれば、使える人間いるのかとツツコミたくなるような大きな剣が飾ってある店もある。

だが、しばらく道沿いに歩きながら見て周っても僕の興味をそそる物がなかなか見つからない。

なんていうか、こう…この魔法世界特有の武器ってないかなあ。

そんな事を考えながら、路地の角にある露店を覗いてみると、キーホルダーのようなアクセサリが敷物の上に並べられていた。

ただ、今までの小物店と違い、一つ一つが鮮やかな色で、剣・槍・鎌などの形をしている。

ちょうど路地に出ている露店もここで最後だったので、試しに見てみるかと思い、露店の前に座り込んで赤い槍の形をしたキーホルダーらしき物を手にとってみる。

『(キーホルダー…みたいだけど…)』

手のひらに簡単に収まるような小さな物なのに、何故か細かいところまで妙に精巧に出来ている。

これだけが特別なのかな？　と思い、他の青い剣やら緑の鎌の小さな小物も手にとってみるが、どれも同じ様に精巧に出来ている。

まあ、アクセサリーつてもものは大抵精巧にできてるもんかと無理やり納得してみる。

『お、そこのお兄さん探し物かい？』

キーホルダーを手にとって僕が首を傾げていると、露店の店主らしいお姉さんが笑顔で声をかけてくる。

額に鉢巻を巻き、手首には包帯のような物を巻いている20代ぐらいのお姉さんで、なんだかカッコよく見える。

『お姉さん。これキーホルダー？』

『お姉さんとは嬉しい事言ってくれるねえ、あとそれはキーホルダーじゃなくて、魔工石だよ』

『魔工石って？』

『なんだ。知らないのかい？』

怪訝そうな表情でお姉さんが言い、敷物の上に並べていたキーホルダーの1つ：青い剣を手取る。

そして、お姉さんがキーホルダーを握り締めると、いつの間にか手には青く光る1mほどの剣が出来ていた。

『おおお？』

『ホント、知らないのね。これは魔工石って呼ばれていて、魔力を流し込むと石の形状に魔力を構築するのよ、だからコレだと青い魔法の剣ができるわけ』

説明しながらお姉さんが軽く剣を振り、ブウンという音と共に剣が青い軌跡を描く。

なんていうか：ライ○セイバーみたいだな。

まあ、アレみたいにならないうけじゃないうけ。

『切れ味とか耐久力とかどうなってるんですか？』

『切れ味と耐久力は魔力によるかな？注がれる魔力が多ければ切れ味もいいし、耐久力もある。逆に少ないと切れ味も悪いし、すぐに壊れるわよ』

『へえ…やってみてもいいですか？』

『構わないわよ。実際に手にとって貰うのも宣伝になるしね』

そう言われ、手近にあった緑色の槍を手にとって見て、試しに魔力を注いでみる。

すると手元に緑色に光る2mほどの槍が構築された。

槍の種類はよくわからないけど：ランスってやつなのかな？と、考えながら魔力供給を止めると、元のキーホルダーに戻る。

それをしげしげと見つめてふと呟く。

『なんていうか、魔法って凄いなあ…』

『うーん。そこまで驚かれるような品じゃないよ？どの街でも一店ぐらいはお店があるぐらいだし』

『僕から見れば凄い物ですよ』

確かに、こっちの人にはなんでもない珍しくない物かもしれないけど僕にとっては珍しすぎる物だ。

『で、それ買う？』

『あゝうん。これ一個いくら位ですかね？』

そろそろ所持金が厳しいかなあと思いつつ緑色の槍を元の場所に戻す。

宿代の事も考慮しないといけないので派手な出費は避けたいのだ。

『なんだ。お兄さんお金少ないの？ならまけてあげるよ。どれぐらい残ってるの？』

『…何故に！？』

『話し相手になってくれたから…かな？ここ路地の端っこでお客さんの目につきにくいからさ』

言われみ見れば確かにここは端っこで人通りが少ない。

所持金を見せながら、もっと人通りの多いところで露店出したらいいのにと口にする、お姉さんは苦笑いをしている。

『まあね、確かにお兄さんの言う通りなんだけど…国のほうから色々と言われててねえ』

国から？なんかあったのだろうか？と思ったが、目が合い「聞いて

欲しくない」という感情が読み取れたので追求するのをやめる。
向こうは場を察したと思ったのか、お姉さんがうんうんと頷く。

『よしよし、賢い子はお姉さん好きだよ。御代はこれぐらいでいいわ』

そう言ってお姉さんが笑いながら財布から銅貨を7枚摘み出す。
これの相場がどれぐらいか知らないけど、よかったのかなあ？と疑問に思う。

『…それじゃあ、コレをお願いします』

さつきからずっと気にはなっていたけど、取ろうか迷っていた物を
手に取り、お姉さんに手渡す。

『お、お兄さんがさつきからチラチラ気にしてた奴だね。プレゼン
トにでもするの？』

『気づいてたんですか…じゃなくて、今度試合…のようなものをす
ることにしたんで武器が必要なんですよ』

『へへ。試合…ねえ。はいこれ』

『どもです』

端のところに金属製の小さな輪が取り付けられたキーホルダーを受
け取る。

『ま、若いうちは頑張りなさい色々と、お姉さん応援してあげるか
ら』

『重ね重ねどうもです』

お互い笑って挨拶してから、露店から離れ、もと来た道を戻る。これでもう買う物はない。あとは魔法を練習して頑張るだけだ。

『…勝てるといいんだけど』

そんなことを一人ごちて、キーホルダーを指で遊びながらさらに歩く。

三人と別れた場所まであと少し…という所で前方が何やら騒がしく、先ほどもで無かった人混みが出来ていることに気づく。

移動はしてないだろうし、強引にかき分けて入ろうかと思ったが、人混みに入る前に一番外側に居た20歳ぐらいの青年に何があったのか尋ねてみる。

『どうかしたんですか？』

『何かの揉め事らしいよ？』

『…揉め事、ですか』

真っ先に友人達の顔が浮かび、嫌な予感がひしひし湧き上がってくるのを感じる。

あの友人達が関わってないといいなあとは思うけど、無駄な考えなんだろうなあ。と、思いながらひとまず礼を言って、その場から少し離れた路地に入り、

適当に足場になりそうな所を幾つか見つけて、躊躇することなく飛び上がり、足場を幾つか経由して屋根の上に着地する。

周りに人がいないかをざっと確認してから、問題の人混みに屋根の上から目を向け、そして思わず嘆く。

『嗚呼、やっぱり…』

額を手で抑えながら、なんでこう僕の嫌な予感って当たるんだろうなあ。と心の中で嘆く。

視線の先にはつい20分ほど前に分かれたばかりの女の子二人と男の子が何やら柄の悪い兄ちゃん二人と怒鳴りあっている。会話は聞き取れない、距離がありすぎるからだ。

『（もうちょい近づくか…）』

あと10mといった所まできたところでどうも様子がおかしいと感じる。

アイズが前に出て兄ちゃんと相対しているのだが、相手の兄ちゃんの目が妙に泳ぐのだ。

そして、兄ちゃんの目を見て把握した。

『（…時間稼ぎ？）』

こんなに遠距離から相手の感情を読んだことはなかったのだが、もう少しだけ時間を稼ぐという思考が読み取れた。

何が目的だ？と急に怖くなってきて、少し注意深く辺りに見渡して、ようやく気づく。

一番後ろに居たユリアのさらに後ろの人混みの中の一人が、何やら怪しい詠唱^{マジック}をしているのを。

武器探し（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしております。

トラブル（前書き）

すいません。予定よりもかなり遅くなりました（＞＜）でも納得がいくまで仕上げましたので、どうぞ楽しんでください。それから、感想を受け付ける（制限なし）に変更しましたので、ログインしていない方でも感想を書けるようにしました。なので、気が向いた方は感想お願いします。

トラブル

『ちいっ』

思わず舌打ちして屋根から飛び出す。

一気に下に軒連ねていた露店の柱や屋根を足場にして、一気に距離を縮めようと足を懸命に動かす。

だが、そうしている間にも人混みの中にいる怪しい人物による詠唱は続いているようだ。

徐々にその人の周りが空き始める。どうやら周りの人もおかしいと気づきはじめたらしい。

それでも、ユリアはまだ気づかずに目の前の喧嘩にオロオロしている。せめて周りの人間が悲鳴でも上げてくれれば気づくだろうにと切実に思う。

詠唱内容は：距離がありすぎて未だに聞き取れない。

だが、既に頭上に手を掲げて3mほどの青白く光る槍を作り出している。

アイズが前に使ったことがある魔法に似ている。

系列が近いのだろうか？でも、だからと言って大丈夫とは全然思えなかった。

僕の場合はローブを着ていたからこそ、あのダメージで終わったんだ。でも、今のユリアは何も羽織っていない。ローブを身に着けていないんだ。

『（まずい！このままじゃ間に合わない！）』

さらに足に力を入れ、一気に露店の屋根から飛び出す。

ぐしゃりという屋根の一部が拉げる音が聞こえたが、気にしている余裕は一切無い。

怪しい詠唱をしている人物が手を振り下ろすのと、僕がユリアの後ろに着地したのはほぼ同時だった。

『え？ユキトさん：！？』

背後に着地した僕に気づいたのか、ユリアが僕のほうを振り返り、息を呑む声が聞こえる。

そりゃそうだ。目の前にもう攻撃魔法が迫ってるんだから。

一直線に迫ってくる槍をどうしようか一瞬だけ考える。

盾は詠唱が間に合わない、ナイフを取り出している暇もない。だから、すぐに僕の中で答えが出る。

全身で受け止める…これ以外思い浮かばなかった。

『ぐう…』

魔法が直撃する、ドンツという音と体全体からミシミシという嫌な音が聞こえる。

なんとか勢いが弱まった槍を体全体で支えながら、右手首に下げたおいた、先ほど買ったばかりの白い剣の形をしたキーホルダーに魔力を流し込んで剣の形状を構築、槍に突き刺すとうまく消えてくれた。

思わずその場に肩膝をつき、それと同時に魔工石の魔力供給を止めて剣の構築を破棄する。

倒れはしなかったが、正直体を投げ出したくなるような疲れが全身を襲う。

それを見て、すぐにユリアが傍に寄ってくる。

『だ、だいじょうぶですかユキトさんっ！』

『あはは…割と厳しいかも…な』

たぶん、肋骨が何本かやられたと思う。

口の中に血の味が広がる…うええ、なんか気持ち悪い。思わず咳き込み、血が地面に滴り落ちる。

『ユ、ユキ？ど、どうしたの！？』

ロナもこちらの騒ぎに気づいたのか、すぐにユリアの反対側に駆け寄ってくる。

『あちらの方に攻撃されたようです』

そう言ってユリアが魔法を放った人を睨みつける。

『え？ちょっ！だ、だいじょうぶなの？』

『だから、あんまり大丈夫じゃないんだってば…』

苦笑しながら口元を袖で拭い、ゆっくりと立ち上がる。

ユリアがすぐに肩を貸そうとしてくるが、片手で制して魔法を放った人を見る。

全身をフード付きの黒いローブで覆っている人だった。

男か女かは…わからない。遠目からでも口は見えていたのだが、鼻から上がフードを深く被っているせいで暗闇の中に居るみたいに顔

の輪郭も把握できない。

ただ、目が仄かに赤く光っているのだけがわかる。

『（人間…だよな？ だったら、思考を読んで…ッ！？）』

相手の目と合った瞬間。愕然とする。

思考は…確かに読めた。読めたのだが、絶対に認めたくない思考だった。

明確な殺意。

それだけしかなかったのだ。

『（こいつは、まずいかも…）』

背中に嫌な汗が流れ始め、無意識に後ずさりしそうになる足を必死に押しとどめる。

相手は殺す気できている。

それが非常に怖かった…あの時のように。

すぐに思考を切り替え、どうすればいいのかを考え始める。

相手はどうやら魔法使いみたいだし、詠唱さえさせなければどうにかなるか？ と考えるが、僕もアイズも魔法使いだが武器を使っている…油断は出来ない。

だが、すぐに決断することになった。

背後に居るはずのアイズのほうから、ガギインという金属音が聞こえたからだ。

首だけ少し振り返ってみるとアイズが剣でナイフを受け止めていた。柄の悪そうな兄ちゃんのナイフで、兄ちゃんのほうの目にも明確な

殺意を感じる。

まずいな…やっぱり仲間だったのか。

『ロナ、ユリア。すぐにアイズのほう加勢して！』

『で、でもっ！』

『こっちはいいからっ！』

ユリア達の返事を待たずに、腰に挿していたナイフを取り出し、黒ローブに切りかかる。

既に魔法で攻撃されたんだ、警察には…というか警察のような機関があるのかどうかは知らないが、正当防衛としてあとで納得して貰うしかない。

対して、相手の対応も早かった。

バックステップで一旦距離を取った瞬間、手元にいきなり3mぐらいはありそうな巨大な剣が現れる。

『（転送魔法ってやつか？だとしても！）』

この距離、勢い、相手の武器の大きさを考えればどちらが有利かなんて考える必要も無かった。

いくら先の一撃で怪我を負っているとはいえ、あんな鈍そうな剣は簡単に避けられる。

相手の振り下ろす剣を避け、一気に懷に飛び込み、首筋にナイフを突きつける！

『動くな。もう詰んでるのはわかるよな？』

『……………』

『……………ッ』

不意に嫌な予感が強まった気がして、バックステップで一氣に相手から距離を取る。

次の瞬間、さっきまで立っていた場所に黒ローブの持っていたはずの巨大な剣がズガアッという地面を裂く音と共に突き刺さる。

『（剣が勝手に動いた…わけじゃなさそうだな…）』

でも、どうやってと思いながら、注意深く相手の動きに気をつける。だが、そんな事を考えている最中に右側からさっきまで突き刺さっていたはずの巨大な剣が飛んできた。

『なっ！』

慌てて避けようとして、一瞬踏みとどまる。

避けたら…他の人に当たってしまう！

右手に持っていたナイフを左手に持ち替え、さっき消した魔工石に多目の魔力を流し込んで剣を構築して右手に持って構える。

顔に向かって飛んできた巨大な剣を屈んで少し避け、左手のナイフで剣の軌道を上にずらし、右手のブレードを思いっきり振る。

バギイーンという金属音が鳴り響き、巨大な剣が真ん中辺りで見事に断ち切れ、地面に突き刺さる。

『よしっ』

思わずガッツポーズ。

出来るかなあと不安だったんだが…まさか本当に出来るとは…などと、思っていると不意に黒ローブが顎に手をやる。

『……………ふむ』

『……………?』

『【我が魔力よ、顕現せよ、形状は槍、その役は貫通!】』

黒ローブが左手をこちらに向け、純正魔法を素早く詠唱、先ほどより一回り小さい槍を創り出し放ってきた。

直撃する寸前で右手のブレードで無害な上に弾き飛ばす。

…って咄嗟に切れ味がいい右手のブレードでやったけどよく出来たな僕。

『…なかなか良い腕をしているようだな』

『…そりゃどーも』

賞賛してくれるならこんな騒ぎ起こさないで欲しかったんだが…。まあ、向こうにも事情があるんだろうし、無駄な考えだな。

『…新しく護衛についた人間か?』

『違う、ただの友達だ』

流石に護衛と間違われるとは思わな…いや、僕の今の腕だとそう見えてもおかしくないのか?

『友か…あのお姫様にねえ』

『…別に变じゃないだろ』

『似合わないな』

『?』

『それは、あのお姫様には相応しくない、血まみれの鮮血こそ相応しい』

『…ふざけんな』

『うん?』

『あいつに鮮血なんて絶対に似合わないね』

何が目的なのか知らないけど、碌でもないことをしようとしていることだけはわかった。

どうしようかは決まった。

それがお望みなら絶対阻止してやる。

『拒むか』

『…拒むっていうか、阻むっていうか…まあ、どっちも似たようなもんだな…』

そう言いながらナイフとブレードを改めて構える。

…さて、勝てるかがちょっと不安だ。

さっきの巨大な剣は叩き折ったけど、魔法はまだ使えるはずだし…。

どうしたもんかなあ…と頭を悩ませる。

と、その時脇をすり抜けて、何かが黒ローブに向かって飛んでいった。

『ぐうつうわああ…』

ドンツという音と共に黒ローブが悲鳴のようなものをあげ燃え上がる…って燃え上がる!?

『…いや、いくらなんでも炎系ってやばくないか?』

『あら、だいじょぶですよ?』

燃え上がる様子を見ながら呆然と呟くと、背後からユリアの間延びした声が聞こえてきた。

振り返ってみると、笑顔のユリアが両手に1細い剣レイピアを持って立っていた。

さらに向こう側では、アイズが剣を支えに立ち、その隣ではロナが柄の悪い兄ちゃんを魔法で縛っているのが見える。

どうやら向こうは片付いたらしい。

『これでも十分手加減してあげてますから』

『…この惨状でか…』

勢いよく燃え上がる炎を見ながら呆れ果て、思わず構えていたナイフとブレードをおろす。

もう必要ないかな?

『それに、この程度じゃダメみたいですから…』

『…えっと、マジで？』

次の瞬間。燃え上がっていた炎が渦を巻き、掻き消える。

掻き消えた炎は、地面まで焼いていたらしく、黒ローブの足元は真っ黒だ。

だが、黒ローブの人物からは煙1つあがっていない。

『…どうやら、全然効いてないみたいですわね』

『ふむ、これでも結構効いたんだがねえ…』

苦々しくユリアが言っていると、黒ローブの人物がやれやれといった感じで呟く。

確かに、まったく効いてない…というのはおかしいだろう。

いや、待て、確かこういう事象が本に書いてあったな…えーっと…。

『…属性防御…ってやつだったっけ？』
エンチャントブロック

『ほう、君は博識ですね。この現象をみて一目で当てるとは…当たりますよ』

『…適当に言ったただけなんだけどな。でもその魔法は…』

『そうですユキトさん。その魔法は…』

ユリアがそう言って、両手に持ったレイピアを構える。

『くくく、そう実は失われているんですよ。この魔法』

面白くてたまらない：そんな感情が見えるような笑い声。
でも、その目から感じ取れる感情は殺意しかない。

『：じゃあ、なんでアンタは使えるんですか？』

『長く生きていると色々知識を蓄えるのも簡単でしてね』

『長く生きて：ですか、どれぐらい長く？』

『ざっと800年ちよつとですか？』

うん、なんか嫌な予感が一気に膨れ上がったな。

800年前っていうタイムリーな年代に心当たりがありすぎる。

『：さて、雑談はこれぐらいにして、今日のところは失礼させてもらいましょう』

ずぶり：と黒ローブの足元が不自然に歪む。

転送魔法の人間バージョンってやつか？なんにしても、ここまでされて逃がすわけにはいかない。

『逃がすかよっ！』

『逃がすものですか！【精霊よ、炎の弾丸となりて、敵を弾け、炎
弾！^{ショット}』
^{ファイア}』

黒ローブの人物に向かって僕がナイフを投げつけ、ユリアが呪文を詠唱して、レイピアの先端を黒ローブに向ける。

先端に赤い光が灯り、サッカーボールほどの大きさの火炎球が放た

れた。

だが、何か見えない壁のような物に阻まれたのか、黒ローブの目前で両方とも弾かれる。

『ふふふ、中々に楽しい余興でした。次はもっと楽しませてくれることを期待しましょう。では、ごきげんよう諸君』

何事も無かったかのように言い放ち、虚空へと消えた。

トラブル（後書き）

お読みくださってありがとうございます^^ 連絡なのですが、もしかしたら来週は今までの小説の手直しになりそうです。詳しいことは活動報告にて、ご連絡させてもらいますので、どうかご了承くださいませ^^

騎士団（前書き）

お気に入りが40件超えてることに初めて気づきました。皆さんありがとうございます。これからも頑張っていきますのでどうぞよろしくお願いします。

10月9日 追記…コメントにもあったようにちょっと説明不足なところがあったので加筆しました。

騎士団

『逃げられましたね』

焦げた地面を見つめながら、ユリアが悔しそうに言う。

『…まあ、今回は、良かったよ。逃げてもらえて…』

『何言ってるんですか！あんなの逃がしちゃ…ってユキトさん？』

後ろに居るユリアに振り返りながら、言葉を続ける。

『…何言ってるんだは、こっちの、セリフ、だよ…あんな、強い奴、相手になんて…』

『ちょ、ユキ大丈夫？』

異変を察知したのか慌ててロナが駆け寄ってくるのが見えるが…視界がぼやけはじめ、よく見えない。

…やっぱり、そろそろ限界か…とボケた頭で自覚する。

『…悪い、あと頼むわ…』

そう告げた瞬間、体から力が抜けて意識が遠のく。

『ユキトさんっ！』

意識が切れる間際に見えたのは、こっちに駆け寄って来ようとして

いるユリアの顔だった。

目蓋を開けると最初目に入ってきたのは蛍光灯だった。

『…どこだ。ここ？』

ゆっくりとベッドから上半身だけを起き上がらせ、そしてぐるりと周りを見渡す。

部屋に漂う微かな消毒液の香りと、僕がさっきまで寝ていたらしい真っ白いベッド、そして鮮やかな日差しが入り込む窓際。

『病院…か？でも…』

妙に近代的過ぎる。これじゃあまるで…。

『…元の世界に戻ってきたのか？』

声に出して誰かに問いかける、でも誰も答えない。そりゃ当然か…この部屋には誰も居ないようだし。

『……………』

ゆっくりとベッドから降りて、部屋のドアを開けて、左右に伸びた廊下を見つめる。

誰も…いない。入院患者も、お医者さんも、看護婦さんも。しかも、ここ意外の他の病室が見当たらない。真っ白な廊下が延々

と続いているだけだ。

と思っていると、右手のほうに1つだけドアが見えた。

不思議に思いながら、そのドアに向かって歩き出すが…どうも、足元が覚束ない。

薬のせいかな？と思いつつも、ようやくドアの前まで辿り着く。

『……………』

何故かドアを開けるのを躊躇う。

だが、開けなくてはいけない様な感じがして、意を決して引き戸を開ける。

部屋の中は先ほど居た部屋と同じような部屋。

ただ、一点違うのはベッドに誰か横になっている事だ。

顔は…見えない、白い布が被せられている。

見ちゃいけないと本能的に感じ取るが、手が勝手に動き白い布の端を掴む。

一瞬の躊躇のあと、思い切って白い布を捲り、寝ていた人の顔が見える。

見知った顔。何度も何度も会ったことがある人の顔。

…今はもうどこにもいない人の顔だった。

『うわあああっ！』

『ぎゃあっ』

慌てて飛び起きると、すぐ隣から悲鳴が聞こえた。
悲鳴がしたほうにゆっくりと視線を向けると、イスに座っていたユリアが驚いた表情でこちらを見ていた。

『び、びっくりしました…』

『はあ、はあ、はあ…ああ、ユリアか…悪い』

何度か呼吸を繰り返すが、動悸がなかなか治まらない。
まあ当然だと思う。あのときの夢なんてここ数年見ていなかったからだ。
と、僕があの子のことを思い出しているとユリアが心配そうに声をかけてくる。

『…随分うなされてましたよ。大丈夫ですか？』

『ああ、だいじょぶ、だいじょぶ…ってうん？』

額に浮き出ている汗を左袖で拭おうとすると、右袖まで一緒についてくる。

怪訝に思いながら両腕を目の前まで持ってくると、頑丈そうな手錠が付いていた。

『……………は？』

じゃらじゃらという音と共に手錠の鎖が揺れる。
城の牢屋に入れられた時に付けられた物と一緒に物だ。
まさかと思いいながらも恐る恐るユリアに問いかける。

『なあ、ユリア。ここどこ？』

『あはは…騎士団の牢屋ですよ』

苦笑しながらユリアがワンピースのポケットからハンカチを取り出し、僕の額を拭う。

改めて見るとユリアの手には手錠がされていない。

その事を聞いてみると、どうやら王族だから免除されたいらしい。

本来なら、牢屋に入る必要もないらしいのだが、僕が心配で一緒に入らせてもらったとか。

女の子に額をされるがままに触られるという状況を恥ずかしく思いながらも、そのまま周りに視線を走らせる。

ランプ等の明かりはないが、小さな溝から差し込む薄い光がぼんやりと見渡せる暗い部屋。

壁はレンガが敷き詰められているように見えるが、何故か一枚一枚が光沢が出ていて金属のようにも見える。

部屋に置いてある物は僕が寝ているベッドと、その脇にイスが一つ置いてあるだけで、それ以外の物は見当たらなかった。

『…あーもしかして、あの場で騒ぎ起こしたから…なのか？』

『わたしも抗議したんですけど、一応魔法使っちゃいましたから…強く言えませんでした』

しょんぼりと言うユリアに、そんなに気にしなくていいと声をかけ、少し前から気になっていた騎士団という組織のことについて聞いてみることにした。

騎士団のこと知らないんですか？と怪訝な顔をされたものの、今まで騎士団がない街に住んでいたからと適当にごまかした。

聞いてみたところ、どうやら騎士団とは僕たちの世界の警察のようなもので、街や村の治安を守っている一団らしい。

組織されたのは半年前で、一年前の戦争のせいで地方の治安が悪くなってしまうことから、それをどうにかしよう。という集団が現れた。それがこの騎士団という組織だ。

大抵の街や村に配備されており、主に治安維持が優先されている。戦争直後は犯罪も多発しており、治安維持は多くの住人から好意を得て、徐々に信頼も厚くなり、頼りにされていた。

だが、デメリットも存在した。

それは王家とは関係なく独立して動いている組織という点だ。

だから、皇女^{ユリア}の抗議も無視されたらしい。

そこまでユリアに説明され、なるほど、だからここに入れられたのかと納得する。

治安維持を最優先とする騎士団なら、まずは原因となった人物を拘束するのが自然だろう。

ああ、だから住民からの信頼も厚いのかと思いつながらベッドから降りようと足を床につける。

『…って、いたたたた…』

立ち上がろうとした瞬間に胸にズキリとした痛みが走り、思わずベッドに座り込む。

なるべく触れないようにシャツを捲ってみると、青黒い痣ができていた。

『じ、じっとしててください。まだ治療が完全に済んでるわけじゃないんですからっ！』

『そうよくギリギリまで治療したけど、まだ完全ってわけじゃないんだから』

ユリアが慌てて寄ってくると同時に、壁の向こう側から聞き慣れた声が聞こえてきた。

『その声…ロナか？そっちは大丈夫なのか？』

『全然大丈夫よ。一応アイズが前に出てくれてたからね。あと、ホントに治療済んでないんだからね？』

言い難そうにロナの声が聞こえ、溜息が聞こえてくる。それを聞いていたユリアが申し訳無さそうに呟く。

『すいません。わたしも本当は治療系が使えたらいいんですけど…わたしが得意なのって攻撃系ばかりで…』

『…そういえば、あの時の火炎球凄かったなあ…』

今思い出してみると、あの威力は凄かったと思う。

あまり思い出したくないが、学校の授業でクラスメイトが僕に向かって放ってきた魔法より数段詠唱が早かったし、炎の勢いも強かった。

それだけユリアと精霊魔法の属性相性が良いんだろうと思う。

『その娘、街でなんて呼ばれてるか知ってる？…爆炎の皇女とか紅の魔女なんて呼ばれてるらしいわよ？』

『なんていうか、それはもう…』

ぴったりだな。という続きを口から出す直前でなんとか呑み込む。
どんよりとした空気をユリアが放ち始めたからだ。

『…そうなんです。わたしってば火ばかり得意だから、そんな呼ばれ方ばかりされるんですよ。何度も何度も精霊陣を使って、新しく他の精霊魔法を覚えようとしても火の精霊さんしか姿が見えないんです。わたしだって水の精霊さん見たいですよ。使いたいですよ。でもなんでいつもいつも火の精霊さんしか現れてくれないんでしょう…おかしいです。わたしはこんなにも…』

暗い独り言と同時にぎゅりぎゅりぎゅりという嫌な音が聞こえ始める。

音の出所はユリアが持っていたハンカチからだ。

既に傍目から見ても、引きちぎれてもおかしくないほど力が加わっており、なんていうかハンカチが不憫だ。

『おい、ユリア。落ち着け。なんかハンカチがとんでもない事になってるぞ…』

思わず指摘するとユリアがはっとした表情になり、手の中にあるハンカチをまじまじと見つめる。

『…こんなことばかりするから水の精霊さんに嫌われるんでしょうか？』

『うーん。それはないと思うぞ？』

精霊魔法は一人一人適正があるって本に書いてあったし、ただ単に適正がないだけなんじゃないだろうか？

…まあ、精霊に性格があったと仮定してみると今の行動が嫌われる

原因になるかもしれんけど。

『…でも、よくよく考えるとロナが水の精霊使えるっておかしいよな。火のほうが似合いそうだし』

と、そこまで言ってしまったあと思わずしまったと口に手をやる。だが、聞こえてきたのは溜息だけだ。

『はあ…いいわよ別に。自分でも似合わないってわかってるから…』

『で、でもロナが癒してくれたんだな？ てっきり放置するとばっかり思ってたんだが』

烈火の如く怒ると思っていたら、案外しおらしい様子に戸惑う。

『そりゃあ…ね。今でこそ痣ぐらいになってるでしょうけど、最初はおもって酷かったのよ？ 心配したんだから…』

『…そっか。心配させたな。助かったよロナ、ありがとう』

『…って、な、何よ！ いきなりありがとうって…ちょっと、もう！ 調子狂うじゃないの！ まったく…』

慌てたようなロナの声とガターンという派手な音が壁の向こうから聞こえる。

たぶん、慌ててイスでも倒したんだろう。まったくわかりやすいやつだ。

と思いつながらくすくす笑っていると、ユリアがジト目で睨んでいるのに気づく。

『どした？ユリア？』

『べつに…どうもしないです』

『…その割には全身から不機嫌オーラが出てるように見えるんだが…』

『きのせーです』

『そ、そうか…なんか知らんが……その、悪かった』

何故か知らんが…えらい怒っているらしい。

おかしい、ロナが怒るのなら、まだわかるのだが…ユリアが怒っている理由がまったくわからない。

部屋の隅っこに座り込み小声でなにやらブツブツ言っている。

『…なんで自然にこんな空気出せるんですか…まったく…』

『ごめん。声が小さすぎて、なんて言ってるのか聞き取れないんだけど』

『なんでもないです！』

そう言ってこちらを睨み返してくるユリア…一体なんだっていうんだろう。

僕何かしたっけ？と思いながら首を捻る。

…うん、何もしてない、はず。

と、そこに扉を開く鈍い金属音が聞こえた。

それと同時に地面を踏みしめる靴の音がこちらに向かってくる。

『元気がいいなあロナ君は』

『ロイスさん!?!』

壁の向こうで驚いたようなロナの声が響く。

鉄格子の前まで行き、ロナが居るだろう牢屋のほうに視線を走らせると黒い制服を着た若い男性が目に入った。

『こちらの騎士団に異動されたんですか?』

『ああ、2ヶ月前にね』

楽しそうに話をする様子が見て取れる。

それを見て僕はロナに聴いてみることにする。

『なあ、その人知り合いなのかロナ?』

『あ、うん。知り合いっていうか…恩人っていうか…』

『はじめまして、ロイス・アーグレリスだ』

僕の前の鉄格子まで来て右手を出してくる。

鉄格子越しなんだが…こちらも右手を出して握手する。

『どうも、ユキト・ウォンスールです』

『どうだい。怪我のほうは大丈夫かい?』

『ええ、まだ少し痛みますが…』

『ふむ、もう少し我慢してくれ。あとでロナが治療できるように手配しておこう』

『あ、ありがとうございます』

てっきり放置されるかと思っていたが、どうやら治療は受けさせてくれるらしい。

挨拶がひと段落したところで、ロナがロイスさんに問いかける。

『ところでロイスさん。アタシ達あとどれぐらいここに居ればいいんですか？』

『ああ、あとはユキト君の事情聴取を取れば終わりだよ。こちらに来てもらっていいかい？』

『あ、はい』

そう答えると、ロイスさんが鉄格子の鍵を外す。

そこから僕とユリアが出ると、牢の戸を閉めながらロイスさんが呟く。

『…ところでユリア姫』

『…なんですか？』

ロイスさんの言葉に露骨に嫌そうな顔をするユリア：どうやら何を言われるのかわかっているらしい。

『国王が心配なさっているので一度城に戻られたほうがいいですよ』

『…そう、ですか…』

ふむ、いくら王家から独立してる組織とはいえ、少しは意見を挟める…のか？

確かに治安を守っている組織なんだから少しぐらいは王家が出資とかしてるかもしれないし…と思いながらも、僕もロイスさんに賛同する。

『ユリア。僕も一度城に戻ったほうがいいと思うよ』

『はあ………わかりました。一旦戻ります』

溜息を吐いて肩を落として出口に向かうユリア。

その後ろ姿が、なんだか妙に哀愁が漂っていたので声だけかけておく。

『じゃーまたあとでな。ユリア』

『はい…ってまたあとで？』

『弟さんのことで、まだ聞きたい事いくつかあるからな』

『…はい、わかりました！では、またあとで！』

ぱっと笑顔になって駆け足で出て行くユリア。

それを見送っていると、今度はロナがぼそりと言う。

『…女たらし』

『…待て。なんか今凄く不本意な感想言われたぞ!』

『ふん。知らない!』

女の子ってよくわからない。っていうか理解不能だ。

なんでさっきまで上機嫌そうだったのが急に不機嫌になるんだろう。

『…えーっと、もういいかい? ユキト君』

『あ、すみません。それじゃあよろしくお願いします』

若干、気まずそうに苦笑しているロイスさんに少し申し訳なく思いながら、答える僕だった。

疑い（前書き）

すいません。ちょっとだけ遅くなりました。そして、ごめんなさい。本当に投稿するギリギリまで手直したのですが、もしかしたら誤字脱字、または表現が変なところがあるかもしれません。どうかご容赦ください。

疑い

尋問は最終確認といった感じだった。

なんでも、既にあの場に居たアイズ達や野次馬にも話は聞いていたらしく、僕から聞きたかったのは本当に最終確認の意味だけだったらしい。

その為、僕の尋問には5分もかからなかった。

少し年老いた：40代か50代ぐらいの礼服を着たおじさんに質問される。

『…では、君が来たときには既に喧嘩が始まっていたのかね？』

『ええ』

コクリと頷く。

僕が姿を確認したときには言い争いがはじまっていたのは事実だ。

『よろしい。では、最後の質問だ。あの場から逃走した黒いローブを羽織った人間に心当たりは？』

『…ありません』

一応、予測はしている。

だが、ありえないと言われるのがオチだろう。

：僕の予想が当たっていれば、相手は既に死亡したとされている人間だ。

到底信じてはもらえまい。

『では、これにて尋問を終了する。お疲れ様ユキト・ウォンスール君』

『いえ、こちらこそ。お役に立てたのなら幸いです』

にっこりとおじさんに笑われて、こちらも微笑み返す。

手錠を外して貰い、ようやく自由になった腕を少し回す。

ずきりと胸が痛んだが、少しの痛みだったのであまり気にならない。まだ書類の整理があるとのことなので、僕だけが尋問室から出ようとして、ふと気になったことがあるので尋ねてみる。

『すいません。1つ質問いいですか？』

『うん？なんだい？』

『先に争っていたという柄の悪い兄ちゃんじゃなくて青年2人はどうなりました？』

『ああ、彼らならまだ牢屋のほうだよ。君の友達の…アイズ・ルートラ君にやられて、まだ目が覚めてないようだね』

『…そうですか』

『ただ派手に交戦したんだろう？』と思いつつ、礼を言って尋問室を出る。

『ん。無事に終わったようだね。それじゃあ行こうかうォンスール君。出口まで案内するよ』

廊下の壁に背中を預けていたロイスさんが、微笑を浮かべながら話

しかけてきた。

どうやら僕を待っていてくれたらしい。

『わざわざすいません』

『構わないよ。オレも仕事がある程度片付いて暇だったからな』

既に日が傾き、日差しは赤くなりはじめており、あと数十分もすれば真っ暗になるだろう。

そんな西日が差す廊下を二人で並んで歩く。

話題は自然とお互い知っているロナのことに移った。

『…それじゃあロイスさんがロナ達を救助したんですね』

『そうだね。オレとしてはあの時ロナ君が生きてたことがびっくりだったよ。何せ凄い火事だったからね』

なんでもロナの友達の家が火事にあい、その燃え盛る家の中で消火作業をしながら友達を守っていたらしい。

その話を聞いて、ロナらしい行動だ。と思ったのは秘密だ。

『あの時は本当に驚いたよ。まだ幼い女の子が二人の友人を火から守りながら魔法を行使してたのは…』

しみじみと腕を組んで言うロイスさんを見て、本当に凄かったんだなあと感じる。

『オレも精霊魔法は職業柄よく使うんだが、あんな幼い時期から使ってるのは珍しかったしね』

『えっと…確か精霊魔法って精霊が見えないと使えないんですよ？』

『ああ、そういうえば君も精霊魔法を使うのかい…って先ほどの質問を考えれば無粋な質問だったね』

『ええ、まだ試したことも無いんですよ』

興味はあったのだが、何分時間が無かった。精霊魔法を使うには、まず自身の適正がわからないと話しにならない。

精霊魔法の適正を計るには精霊陣という特別な陣が描かれた部屋が必要で、それは大抵の教会にある。

その精霊陣に自身の魔力を流し込むと、精霊が現れ、契約できるらしい。

『ふむ、興味があるんだったら行って見るといい。この街にも教会はあるしね』

『…時間あればいいんですけどね』

何せ、忙しい。

色々ありすぎてつい忘れそうになるが、一週間後には決闘なんて約束があるのだ。

…いや、手札を増やすのにはいいのか？
でも適正がなければ時間の無駄だしなあ…。

『行ってみるのも1つの手…か』

ぽつりと口にして、考えてみる。

精霊魔法は純正魔法と違って魔力消費が少ない。

これは精霊から力を借りるため、自身の魔力があまり必要がないからである。

：ならその分魔力消費が浮くし、手数は増やせるかもしれない。

そうこうしているうちに騎士団の出口に辿り着く。

ロナがまだ来ていないところを見ると、あちらはまだ時間がかかるのかな？

『それじゃあ、オレは仕事に戻ることにするよ。君の手荷物とかはその兵士が管理してるから声をかけて出して貰ってくれ』

『あ、はい。わざわざありがとうございます』

『いや、本来なら君が怪我を負う前に騎士団オレたちが出なくちゃいけないかったんだ。礼を言うのはこちらだよ』

『：それでも、色々とうございました』

背を向けて騎士団内部に戻っていくロイスさんに重ねて礼を言って、頭を下げる。

たぶん、色々配慮してくれたんだと思う。

あんな騒ぎを起こしておいて流石にこんな簡単に開放したりは普通はしないと思う。

それなのにこんなに簡単に出してくれたのは単にロナという知り合いがいたからだろう。

：まあ、皇女ユリアも絡んでるから王様も圧力を掛けてるだろうけど、まあそこは気にしない。

『さて、このまま待ってても暇だし、武器とか返して貰うかね…すいませ〜ん』

入り口脇のカウンターに居た鎧を着た厳つい顔のおじさんに声をかけ、牢屋に入れられる際取られた物を出して貰う。

ナイフと魔工石とローブと…あとは鞆だ。

自分の鞆の中身を確認したり、ナイフが刃こぼれしてないかをチェックしたりして時間を潰していると、ようやくロナとアイズが出てきた。

『随分と遅かったな、二人とも』

『…あはは、ちょっと色々あってね』

『ホント、色々あったわね…』

苦笑いしているアイズと、頬がひくついているロナを見て、何があったんだと問いかけたかったが、ロナの様子を見る限り聞けば地獄が待っていそうな気がしたので自重しておく。

『ま、それは追々聞くとして…今日はもう休まないか？宿は取ってあるんだろ？』

昨日から徹夜で人を一人抱えて歩いてウィンベルまで来て、牢屋に入れられたり、王様と会談したり、ユリアに乱入されたり、図書室で本を読んだり、皇子に決闘迫られたり、街中を歩き回ったり、ロナに殴り飛ばされたり、食事したり、武器を探したり、トラブルに巻き込まれたり、仕舞いにはまた牢屋に入れられたりと、流石に疲

れたと言うのが僕の本音だ。

…と言うか、よく耐えたな僕…（汗

『…そうね。たしかに今日は色々ありすぎて疲れたかも…』

『それじゃあ、早速宿に向かうとしようか？』

『あ、その前にロナ。悪いけど治療お願いしても良いか？』

歩いているときは特に痛みもなかったのだが、これから街中を歩くのなら、人とぶつかるかもしれない。

そのときのことを考えると今この場で治療してもらいたい。

『たしかに、あんまり放置してて悪化してもまずいし…治療を先にしましょうか』

そう言うと、手元に転送魔法で先端に青く丸い小さな水晶が付いた杖を取り出すロナ。

『ほら、傷見せて…うわゝ改めて見るとホント痛々しいわね』

『…仕方ないだろ、咄嗟に飛び込んだんだから』

『もうちょっと後先考えて行動しなさいよね…まったく。じゃあ、じっとしててね？』

ぽおっと杖の先端が青く小さく光り、ロナの口から呪文が流れる。

『【清纯なる精霊よ、我が友に清らかなる水を、空を舞う傷ついた翼に再び活力を与えたまえ、1水の抱擁^{ヒール}】』

胸にあった青黒い痣が、光が収まっていくのと共にみるみる綺麗になっっていく。

はじめて見る癒しの魔法におおくと感動しながら見ているとロナがふうっと息を吐く。

『よしと、これで終わりつと…ちよつと体動かしてみて』

そう言われ、ゆっくりと体を動かす…うん、痛みはない。

ロナとアイズから少し離れ、辺りに危険が無いことを確認してからナイフを抜く。

『よつと』

いつもより少しだけ動作を大げさにしてナイフを振り回す。

縦、横、斜め、中段、下段、上段と幾つか振ってみるが、痛みも違和感もない。

完全に治癒されたようだ。

『うん、大丈夫そうだ。ありがとロナ助かったよ』

『どういたしまして、次からはもっと気をつけなさいよ？』

『ユキト君もそれはわかってるつて…それじゃあ、日も暮れてきたし宿に行こうか？』

アイズがそう口にすると、僕もロナも頷き、返して貰った荷物を背負う。

大通りに繋がる狭い路地を歩きながらアイズと雑談をしていると自然と話は尋問の話題に移っていく。

『そういえばユキト君は聞かれたかい？黒ローブを羽織った人間のことを』

『ああ、聞かれた聞かれた。まあ、殆ど会話しなかった…わけでもないけど知らないって答えたけどね』

『…会話をしたのかい？』

『した。でも、気分のいい会話とはいかなかったけどな』

『まあ、問答無用で魔法を放ってくる人間だ。気分のいい会話なんて期待できないだろう』

『…あの発言は流石にキレそうだったけどな』

口にするだけでムカムカしてきた。

ユリアを血で染めるだなんてさせてたまるかってんだ。

…うん？なんか違和感あるな僕。こういうキャラだったわけ？と、自分の心境を疑問に思っていると、ようやく大通りに出て人通りが一気に増える。

そんな人通りの多い大通りを先導するアイズとロナに着いていきながら、あの時の言葉を思い出す。

『（800年ちょっと前…ね）』

あいつは確かにそう言った。

そして、既に失われているという属性防御の魔法。
エンチャントブロック

たぶん、間違いなく800年前の魔王降臨に関わっているのだろう。

：魔王の手下なのか、魔王本人なのかは、まだ判別できないが狙いが皇女ユリアだというのはわかった。
英雄召喚を恐れての行動かもしれないと考える。

だとしたらこれからも皇女ユリアが狙われる確率が高いだろう。

今すぐに狙ってくる可能性は低いだろうが、次に狙ってきた場合守りきれぬかが怪しい。

ああいう人間は、次回に絶対に勝てるように備えて準備をする人間だ。油断は出来ない。

『（そこらへんの事も踏まえてユリアや王様に警告しておくしかない…か）』

所詮は一般人で皇女ユリアにとって友人でしかない僕はどうしても踏み込めない領域がある。

そんな物事の深いところまで踏み込めずに友人を危険に晒してしまうのが少しだけ歯痒かった。

疑い（後書き）

短くてもいいのでご意見ご感想をもらえると今後の参考になりますので、気が向いたらよろしくお願いします。

教会（前書き）

すいません。結局木曜日は時間がなくて定時投稿となりました。それからPVが8万超えていてびっくりしました。これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

教会

一晩寝て、起きて腕時計を見てみると、既に昼だった。

『…よ、ようやく起きたか。ユキト君…』

隣のベッドに目を向けてみると、アイズがぐったりした様子で僕を見ていた。

妙に疲れているように見える…はて？昨日はもっとピンピンしてた気がするんだが。

『どしたのアイズ？なんか妙に疲れてるように見えるんだけど…』

『…君を何度も起こそうとしたんだけど、なかなか起きなくて疲れただけだよ』

『あー…悪い、アイズ。言い忘れてたけど、僕寝起き悪くてさ…』

妹にも両親にも散々言われ続けて治らなかった癖だ。
既にどうしようもないと諦めてる。

ってそんなことは今重要じゃなくて…。

『で、起こそうとしたって事は何かあるの？』

『…君。昨日のこと完全に忘れてない？』

『……………あ、あゝやっぱ』

すっかり忘れてたけど、今日は色々今後の予定を立てるためにこの宿の一階にある食堂に集まることになってたんだった。

もちろんユリアにも昨日の夜のうちに念話で連絡して了解を取ってある。

…連絡しなかったらなんか言われそうなのだ。それはもう色々。でも約束した時間って昼前じゃなかったか？と、もう一度腕時計を見る。うん、既に12時過ぎてるね。

『…なあ、アイズ』

『なんだい？』

『既に遅刻じゃない？僕達』

『そうだね』

『……………』

じゃあ、なんで君はそこまで落ち着いていられるんだろう？と不思議でしようがないんだが…。

『簡単なことさ、正直に話せばロナもユリアさんもわかってくれるだろう』

『…どうだろう？』

アイズの言葉を頭に入れて想像してみる。

ごめん、ロナに殴られて怒られるという想像しかできないんだが。

『ま、とりあえず下行くか。…絶対殴られるだろうけど』

『…まあ、少しは弁護してあげるから、あまり落ち込まないほうがいいぞユキト君』

そう言って苦笑いをするアイズだったが、僕はあんまり期待しないほうがいいと直感で悟った。

周りの視線が…痛い。

と言うか、うん、皆さんの顔が見るのがはつきり言って辛いです。はい。

『ふうん？それで？こんなに遅くなったわけね？』

『…あい、仰るとおりです』

仁王立ちするロナの前に僕は大人しく正座している。

正座している場所は宿の一階で、もちろん他のお客もいるため視線が痛い。

ちなみに僕の顔は所々腫れている。

理由はお察しの通り、ロナにボコボコに殴られたからだ。しかも、主に顔を重点的に…だ。

『ロ、ロナちゃん。流石にそれ以上殴ったらユキトさん死んじやいますよ』

『そ、そうだよロナ。これ以上は私も見てられないぞ?』

これ以上見てるのが辛かったらしいユリアとアイズがようやく止めようとしてくれた。

ううう、本当はもっと早く止めて欲しかったです。

だが、ロナは鼻を鳴らすと、とんでもないことを口走った。

『まだ大丈夫よ。わたしは癒しの魔法が使えるんだから、もうちょっと殴っても元に戻るわ』

待て！

え?何?まだ殴られるの僕!?

と言うかこれだけ殴って怒りを発散してるくせに怒りが収まってない!?

そんな言葉が頭の中をぐるぐると駆け巡る。

そして、もしかしたらまだ殴られるかもしれないと思うと、自然と体がガクガクと震えだす。

『え、えーっとロナちゃん。ホントに?まだ殴るの?ユキトさんがクガク震えてるみたいだけど...』

『殴るわ』

愛想笑い...というか微妙に引き攣った顔でユリアが改めて聞くと、ロナが短く答える。

その反応を見た僕は...もうこれはダメだ、しばらく近づかないほうが身のためだ。と直感する。
なので...。

『これ以上殴られてたまるかつ！今日はもう一人で行動させて貰う！』

そう叫び、素早く立ち上がって一気に宿の出入り口に走り、扉を開け、表の路地に躍り出る。

『あ、こら！待ちなさい！この卑怯者！』

なんか後ろから聞こえるが気にも留めずに路地を全力で走り抜ける。しばらく後ろを振り返らずに走り続け、5分ほど走りまわってからようやく足を止める。

後ろを振り返るが、特に追ってくるような気配はない。撒いたのか？

『…まあ、逃げても結局あの宿に戻らなきゃなんのだが…』

げんなりしながら走った道を戻ろうと一歩踏み出す。
が、路地を曲がったところでふと思いつく。

『（…たまには一人でぶらつくか？）』

確かに今後の予定を立てる予定だったが、ロナがああ調子じゃ何も決まらないだろう。

ならば、一人で自由に動いても問題ないはずだ。

悲しいことだが…ユリアとアイズには犠牲になってもらおう。

『…そういえばこっちの世界に着てから一人で街をぶらつくのって始めてかも』

エルクワールに来たときはロナとアイズに隅々まで案内してもらった。

そのことを思い出すと、どれだけ皆と一緒に過ごしてきたかを実感する。

だが、あんなに怒ったロナのこと思い出すと、全然ロナの事わかってなかったんだなあとげんなりする。

…今後は気をつけよう。皆のためにも僕のためにも。

『ま、それは置いておいて…とりあえず散歩しよっと』

気分を切り替えて意気揚々と路地を歩き出す僕だった。

なるべく宿の近くには寄らないようにしていると、市場のような場所に出た。

昨日皆で歩いた時のような路地だが、この路地は甘い香りが強い路地だ。

並んでいる露店を覗いてみると、果物やらお花やらがたくさん並んでいる。

美味しそうな赤いリンゴがあったので、店番をしていた若い兄ちゃんに銅貨1枚払って1個だけ買う。

『んぐ…このリンゴ結構美味しい』

路地を物色しながら、リンゴを軽く服で擦ってから齧りつくど、じゅるりと果汁が口一杯に広がる。

一気に芯のところまで食べきり、近くにあったゴミ箱に捨てる。

『…：そーい、や、バニラビーンズとか置いてあるかな？』

プリンでも作ろうかと思っていたのを思い出し、試しに探してみる。もちろん、これでロナの機嫌を治して貰おうという魂胆も含んでいる。

だが、露店を幾つか周ってもバニラビーンズのような物が見当たらない。

やっぱりないかなあと半ば諦めていると、似たような香りが鼻についた。

どこからだろう？と思いつながら辺りをキョロキョロと見渡すと、どうやら左の小道の間にある花屋からのようだ。

覗き込んでみると、イスに座っていた12歳ぐらいの男の子がこっちを見る。

どうやら彼が店番らしく、くりっとした目が特徴だ。

『お、兄ちゃん探し物？』

『そんなところかな？ちょっと見せて貰っていいかな？』

『おう！彼女へのプレゼントなら包装までちゃんとやってみせるぜ？』

『彼女はいないし、プレゼントでもないんだがな…あと子供に任せるぐらいなら自分でやる』

『子ども扱いするなー！』

勢いのある喋り方に苦笑しながらも綺麗に活けてある花の一本一本香りを嗅いでみる。

だが、どれも違う匂い。

ここじゃなかったか？と思っていると右端のほうに小瓶が並んでいるのが目に入る。

『…こっちの小瓶は？』

『こっち？って、ああ。蜜の小瓶ね』

『蜜？』

首を傾げながら小瓶を1つ手に取る。

蓋はコルク栓がしてあるが、注ぎ口が付いてて醤油差しを連想させる形状だ。

『知らないの兄ちゃん？花の蜜だよ。花を専用の機械で搾って、ろ過したのがそれ』

なるほど、ハニシロップ 蜂蜜じゃなくて花蜜フラワーシロップってところか。

じゃあ料理にも使えるかな？と思い、試しに香りを嗅いで見るとプリンに近い匂い。

『じゃ、これ頂戴』

『あいよっ！銅貨10枚な』

『高っ！ってよくよく考えると相場はこれぐらいなのか？』

『そうそう、そういうこと。はい、商品』

一瞬躊躇したものの、欲しい物は欲しいので諦めて銅貨を手渡し、

小瓶を受け取る。

うう、大分懐が寂しくなったなあ…ぐすん。

『仕方ない…か。あ、そだ。君教会の場所知ってる？』

『教会？ああ、ここの裏手にあるよ。案内しよっか？』

『いや、商売の邪魔をする趣味はないし、行き方だけ教えてくれればいいよ』

そう答えてから、行き方を身振り手振りで教えて貰う。

『ん、わかった。ありがとな。え…つと…』

『ラムってんだ。覚えててくれよう兄ちゃん？』

『…肉？』

『…何言ってんだ兄ちゃん？』

わけがわからないといった表情でこちらを見る少年に流石に肉の名前？と聞き返すのはまずかったかと苦笑する。

いやだって、ラム肉思い浮かべちゃってさあ…仕方ないじゃん。

少年に手を振って露店を後にすると、その足で教会に向かう。

目的は昨日聞いた精霊の適正を調べるためだ。

時間は空いてるし、やることも特になかったため別に構わないかと思っただけの行動だ。

そのまま路地を右へ左へ行ったりしながら歩いていくと、ようやく

教会らしき建物が見える。

元の世界で教会なんて見たことないけど、小説や歴史書とかに載っている写真とそっくりに見える。

と言うか十字架が館の一番上にあるからわかりやすいけど…キリスト教とかなんだろうか？

などと、一瞬どうでもいい考えが頭を過ぎったが、考えなかったことにして敷地に入る。

教会の扉を開けようとして手を伸ばしたところで、幾つかの気配を感じて扉から離れる。

バンツという大きな音と共に勢いよく扉が開かれ、5〜6歳ぐらいの子供達は何人か出てきた。

子供達は僕に気を止めることもなく、敷地内で遊び始める。

それに驚きながらも『そういうばこの見るの久々かもー…』とその光景を暫し観賞。

じつくりと精神的に癒された後、改めて教会内に入ろうと扉に手を掛ける。

が、

バアアンツ！

『ぐあっ！』

派手な音共に僕の視界が空に向き、体が宙に浮く。

嗚呼、空が青いなあ…そういえば今日は良い天気だ。

あっはっはっはっは…ってなんか視界に赤い糸みたいなのが見えるのは気のせいかなあ？

どさりという音が聞こえ、僕の体に地面に倒れる衝撃が走る。

これは別に痛くないのだが、先ほど扉に勢いよくぶつかった鼻の頭

はめちやくちや痛い。

って言うか鼻から何かが垂れている感覚がする…たぶん、さっきの赤い糸みたいなのは鼻血だったのだろう。

『おにーちゃん、だいじょーぶー？』

『へいきー？すっごいおとしたよー？』

『ちーでてるよー？』

先ほどまで遊んでいた子供達が心配そうに覗き込んでくる。

『…ああ、だいじょう…ぶ。たぶん』

鼻を押さえながら上半身をゆっくりと起こす。

うん、この鼻血どうするかなホント…やっぱりハンカチしかないか？ポケットからハンカチを取り出して仕方なく鼻を抑える。

って言うか誰が扉開けた？場合によっちゃあ…。

と思いながら扉に目を向けてみると、頭を抱えてしゃがみ込んでいる人物が見える。

『（あいつか、元凶は）』

そう思っていると、件の人物が立ち上がり、鼻の辺りを押さえながらぶつぶつ何か言っている。

身長が僕より幾らか高く、紫色の修道服を着た女の人だ。

髪はベールがかかっててわかり難いけど、肩にかかるくらいまでの青い髪でセミロングだ。

『うう、鼻ぶつけたよー…』

『いや、僕の場合ぶつけたとか言うレベルじゃないんだが…』

『あ、そ、そうだったよー。ご、ごめんなさいー』

慌ててこっちに駆け寄ってくる修道女さん。^{シスター}

だが、僕は今ものすごく嫌な寒気を感じた。

何故だろう？と思った瞬間、目の前でそれは起こった。

シスターさんが何もない地面でいきなり足を絡ませたのだ。

『あわわわわわっ！』

『うわっちょっ待ったああああああ！』

叫びながらもシスターさんの進行方向にいた子供達を抱えてなんとか後ろに飛ぶ。

結果、シスターさんが盛大に地面にぶつかったが、腕の中の子供…小さな男の子は無事だ。

『あうあう…また転んじゃったよー…』

『またって、あんた…』

『おねーちゃんはいいつもこうだよー？』

立ち上がった僕を見上げながら男の子が言う。

いつもってところがものすごく気になるが、今だけ気にしないことにして手を差し出す。

『ま、いいや。立てますか？』

『こ、これぐらいじゃ泣いたりしないもん！』

がばつと立ち上がるシスターさん…立ち直りは早いな。
差し出された手が虚しく漂っているが、うん。気にすんな僕。

『すみません先ほどはドアぶつけちゃって…この子達の後を追って
たらドアに気づかなくて』

『いえ、こちらにも注意してませんでしたので、あまりお気になさ
らずに…ってドアに気づかないって…あ』

そこまで言うてから、もしかしたら視力が極端に低い人かもしれな
いと思ひ至り、言いよどむ。

『えと、教会に用がある方ですか？』

『あ、はい。シスターさんは…この方ですよ？』

『そうですよ…あ、申し遅れました』

こほんと咳払いしてからにっこり笑うシスターさん。

『ウインベル教会、シスターのシフォンと申します。よろしくお願
いします』

そうして頭を下げるシスターさんだが、その拍子にボールがずるりと
地面に落ちる。

…大丈夫なのだろうかこの人と思う僕だった。

教会（後書き）

これもギリギリまで見直したのですが、もしかしたら文章的に変なところがあるかもしれません。どうかご了承くださいませ。

精霊陣（前書き）

大変お待たせしました24話目です。実はもう少し長くなる予定だったのですが、予想以上に文章量が多くなりそうだったのでここで切りました。なので最後が少し強引というか変なところで切れていると感じるかもしれません。どうかご了承くださいませ！><

精霊陣

とりあえず鼻血の治療もしたので、教会内に入らせてもらう。

扉を開けると中は礼拝堂のようで、長イスがきちんと並んでおり、部屋の中央奥には天使の様な像が見える。

その背後には日差しが差し込み鮮やかな色が映る綺麗なステンドグラスが見える。

ひとまず手近な長イスに座り、シスターのシフォンさんが持ってきた濡れたタオルを鼻に当てる。

ティッシュがあればなあ…とちよつと思うが、流石にこの世界になりだろうと苦笑する。

そんな事を考えていると、シフォンさんが心配そうに顔を覗き込みながら尋ねてきた。

『血…止まりました？』

『まだちよつと出てるかなあ…あ、止まった』

タオルを取ってみると血は止まっていた。

それを見てほつと息を吐くシフォンさん…やっぱり気にするよなあ普通は。凄い音と勢いで吹っ飛んだし、僕。

あれは…凄かったなあ。と僕が思い出していると気を取り直したかのようにシフォンさんが問いかけてきた。

『それで、今日はどのようなご用件でいらしたんですか？』

『あ、そうだった。教会こいって精霊の適正を調べるための精霊陣って

ありますよね？』

『ええ、教会の奥にありますが：適正検査を希望の方ですか？』

『はい』

『わかりました！それじゃあ準備してきますので、しばらくお待ちして貰ってもいいですか？』

『：お手伝いしましょうか？』

正直、この人だけに任せるのがめっちゃ心配なので進んで手伝いを申し出る。

だが、向こうはそんな事予想してなかったのか、両手を突き出して慌てはじめた。

『だ、大丈夫だよ？何度かやったことありますし：それにそこまでしてもらう訳には：』

『そ、そうですか、えと：じゃあ、外で待ってますね』

そう言って、タオルを返し、扉を開けて外に出る。

本音を言えば、中でシフォンさんの手伝いをしたほうが気楽なんだが：まあ、ここは彼女を信じるとしよう。

少しだけ敷地内を移動し、子供達が楽しそうに遊んでいるのを眺めながら教会の壁に背を預ける。

だが、

バン。

パリーン。

ガチャーン。

ドガシャーン。

『…おねーちゃんだいじょうぶー？』

『いま鐘おちたよー？』

…うん。信じたのはやっぱり失敗だったようだ。

予想通りの音と手伝っていたのだろう子供達の心配そうな声が聞こえて、苦笑しながら再び教会の扉に手をかける僕だった。

『…本当に、本当にすいませんだよ』

『…いえ、大した事ないですよ。これぐらいなら…』

涙目になりながら頭を下げ続けるシフォンさんを苦笑しながら見つめる。

そして、僕の前髪からポタリポタリと水滴が落ちる。

どうやら、精霊陣がある部屋に聖水を持っていくとしていて、その途中でぶちまけたらしい…僕に。

まあ怒ったりはしない、妹も結構こういう失敗していて、その被害を受けるのが大抵僕だったので慣れているのだ…全然嬉しくないが。

『だいじょーぶー？おにーちゃん？』

『うん、だいじょぶだいじょぶ。ありがとねタオル』

タオルを受け取り、頭を拭きながら少女に向かって微笑むと、えへーっとにっこり笑う少女。

うん、微笑ましいなあ…癒されるなあ…。

よくよく考えると、ここ最近喧嘩みたいなことばかり巻き込まれるから、こういうのが地味に癒される。

と、ほやーっと僕が癒されているとシフォンさんが声をかけてくる。

『子供、好きなんですか？』

『ええ、近所の子供の面倒みてたことがありましたから』

『そうなんですか？…っと、じゃあ準備が整いましたので、そろそろよろしいですか？』

『あ、はい。今行きます』

シフォンさんが先立って歩き始めたのでその後に着いていく。もちろん子供達に一度手を振ってから。

『…そういえば、結構時間かかるんですか？』

廊下を歩きながら前を歩くシフォンさんに尋ねる。

時間の事はロナ達にも聞いたことがなかったからだ。

まあ、時間がかかったとしてもやる事がないので結局やることに変わりはないのだが、あんまり長いとやる気が失せそうだ。

『そうですね…人によって違いますけど大抵の人は10分ぐらいですかね…長い人だと30分ぐらいですよ』

『結構早いんですね』

『ええ、実際はちょっとお話するだけですからね』

『お話…精霊とですか？』

やっぱり絵本とかで見た様な小さくて幻想的な存在なんだろうか？と僕は考えるが見当もつかない。

もし、絵本等に出てくるようなモノだったら雪菜が喜びそうだが…。

『そうですね…手順を説明しますと、まず部屋の中央にある杯に聖水を流します。それが溝を伝って部屋全体に行き渡ったら聖水に自身の魔力を流し込むことで精霊陣が発動します。そうすると徐々に部屋の空気が異界へと変わっていくのと同時に精霊が徐々に見えるようになります。会話はそこからですね』

『ふむふむ…なるほど』

空気が異界へと変わっていくというのがちょっと気になるが、別段問題はなさそうだ。

『で、説得もしくは交渉することで契約し力を借りれるようになるそうです』

『交渉…』

精霊相手に交渉ってできるんだろうか？まあ、どうやら先駆者がいるらしいし、出来るんだろうけどさ。

『あ、着きましたよ』

ギィイという音と共にシフォンさんが扉が押し開く。

ゲームとかでよく見るとどこか古い遺跡を連想させるような薄暗い部屋で中央に杯があり、床や壁には溝が刻まれ、溝は魔方陣を描いているようだ。

もちろん部屋の中は真っ暗でよく見えないのだが、壁が僅かに光っていて転ぶほどではない明るさだ。

『では、聖水をお渡ししますねー頑張ってください♪』

『お話するだけなのでしょう？じゃあ頑張る必要はない気が…』

苦笑しながらシフォンさんに答え、聖水の入った瓶を受け取り、部屋の中に入る。

『私は外でお待ちしてますので』

『わかりました。ではまたあとで…』

そう答えてから扉を閉め、中央の杯まで歩み寄る。

瓶の蓋のコルクを外し、杯に注いでいくと小さな杯は水を収めきれずに溢れ出し、床の溝に沿って水が張られていく。

その光景を見ながら足元に空になった瓶を置き、深呼吸。

…実は結構緊張していたりする。

相手が人なら緊張することは殆どないのだが、これから会うのは人

ではない一種の別の存在だ。

それが怖いわけではないと僕も思うのだが、変な汗が手のひらに浮かぶのは事実だ。

軽く服で擦ってから、もう一度深呼吸して、心を落ち着けてから、杯の中の聖水に右手を浸らせ：魔力を流す。

ぶわぁっと杯に溜まっていた聖水が水色に淡く輝く。

その光は溝に注がれた水に沿って床を伝い、壁を伝い、最後には部屋に刻まれた全ての溝が光りだす。

それと同時に、だんだんと空気がぼやける。

霧でないことは確かなのだが、視界がピントがずれたかのようにぼやけるのだ。

『これが、異界へと変わっていくってことなのかな？』

思わず呟いた声が空気に溶けるかのように消え、ぼやけた風景はどこか幻想的で綺麗に見える。

『さて、と：そろそろお出ましかな？』

徐々に光が凝縮していくのが視界の端に見える。

光る色は白で、凝縮が終わったのか、ふわりと空中に浮くと僕目の前まで飛んできた。

輪郭がしっかりしているわけではなく、光る玉が浮いているといった感じだ。

これが精霊なのかな？と思いながら恐る恐る話しかけてみる。

『えっと君が精霊：なのかな？』

『そうですね～お招き頂き、ありがとうございます～』

どこか間延びした声が光る玉から聞こえ、ふわりと僕の周りをゆっくりと回りながら声を発する。

『…それで、わたしはどうしたらいいのです？』

『どうしたらいい…って』

そりゃあ、契約して力を貸して欲しい…でいいのだろうか？
本には契約するとしか書かれてなかったし…なんか対応に困るな
と思う、苦笑しながらも実際に言ってみることにする。

『僕と契約して力を貸して欲しい』

『…えっと、具体的にどうやってです？』

『……………』

『……………』

詰んだかもしれない。

そう考えてしまってから脂汗がたらりと落ちるのを額に感じ、思わず叫ぶ。

『ちょっと、待てい！一応精霊なんだよな？なんでわからないんだよ！』

『そ、そんなこと言われても…わたし、呼び出されたの初めてです』

『…え、ちょ、待った。呼び出されたのが初めてって…どういこうと？』

『わたしは生まれて間もない精霊なんです』

『…属性は？』

『先ほども申したように、生まれたばかりなので…わからないんです』

申し訳無さそうに光が言葉を発して、どうしよう？とつい思ってしまう。

こんな状況は本に書かれていなかった。

まず書いてあったのは、精霊陣を使うことによって、火・水・風・土・光・闇の6種類の精霊を周囲に呼び出される。

そして、自分の適性によっては見えたり、見えなかったりするので、見える精霊と契約を結ぶ。

つまり、見えない精霊は必然的に契約が不可能とされており、その場合は諦めるしかない。

だが、この場合はどうなるんだろう？

精霊はこの世界の至る所にたくさん居るが、契約時…つまり、精霊陣を使用して呼んだ場合は、近辺にいる6種類の精霊が一度は呼ばれ、呼んだ人間の適性によって見えたり、見えなかったりする。

だとすれば、この子がわからなくても6種類の何れかの精霊なのだろう。

『はあ、どうするかなあ…シフォンさんに聞いてみてもいいけど、確か精霊陣を使っている間は他の魔法って…』

ただでさえ、今も右手は杯に溜まっている聖水に浸らせており、結構な量の魔力を流している。

その上さらに他の魔法：魔力消費が極端に少ない念話でも、使用するのは魔法の暴発が起こりそうでなんだか怖い。

となると、扉越しに聞くしかないわけなのだが…。

『…普通届かないよなあ…』

試しに扉に視線を向けるが、重くて厚そうな扉を目にしてすぐに諦める。

『（いつまでもこうしてられないし、今回は諦めるか？）』

そこまで考えたときに、くると僕のを周っていた光が僕の目の前に停止する。

『あの、契約方法が書かれている本とかはないんです？』

『持っではいたんだけど、今は荷物の中なんだよなあ…』

そう、宿の鞆の中だ。

持ってきておけばよかったのだが、荷物を取りに戻る勇気もなかったし…。

『…どんな本です？』

『ん～言葉にしづらいなあ…』

あえて言うならば5～600ページの本で背表紙が深緑、角に白い

鳶の模様が入っているぐらいか？

『じゃあ、手を出して、本をイメージしてくださいです』

『…こうか？』

言われたとおり、左手を突き出し、目を閉じて本をイメージする。

『…何も起きないんだが？』

『あのゝ魔力ぐらい流して欲しいんですが…』

『聖水に結構魔力流してるからちよつと難しいんだけど…』

『ほんの少しでいいんです！』

『…あいよ』

言われながらしぶしぶ魔力を軽く流すと、ブウンツという音と共に左手が急に重くなった。

それと同時に右手から流していた魔力がぶわっと広がる感覚と共にだんだん背筋が寒くなってくる。

『…うあつつ』

気を抜けばすぐさま暴走しそうな魔力をギリギリ制御しながら、左手のイメージに魔力を通す。

次の瞬間。トンツという音と共に左手の上に見覚えのある本が落ちてきた。

学校の図書室で借りた本の1つで、タイトルは『精霊のことがよく

わかる本』だ。

『おっと。ってこれ…転送魔法…じゃないよな？』

『そう、ですね。似てますけどちょっと違います』

『そっか…まあ、とりあえずっと…』

気になると言えば気になるのだが、今はそんなことより契約方法だ。左手で器用に本を開き、一枚一枚ページを捲っていく。

『…あった。んっと、お互いの魔力をひも状にして結合させる…かなんだ意外と簡単…じゃないなこれ』

さっき左手に魔力を軽く流しただけであの有様だ。
この状況で魔力を紐状にして結合させるのは結構厳しい。

『ああ、だから難しいって言われてるのかな。精霊魔法って』

『そうかもしれません。で、お兄さんどうします？』

『…………やる』

暴走する危険性はあるが、なんとかしてみせる。

と言うか、ここまでしておいて出来なかったら結構凹むので気合で乗り切ることにした。

…魔法って理論的なもんだと思ってたけど意外と根性とか気合とか精神的な面も必要なんだなあと思ふことを考える。

『わかりました。では失礼してっと…』

光の玉がそう答えると、するりと光っている糸が伸びてきた。僕も伸ばさないと。と思い一度だけ深呼吸して…意を決して伸ばす。

『うわ…これ結構きつつ!』

魔力を糸や紐状にして伸ばすのは普通は明確なイメージが必要なのだが、これは厳しいと思う。

先ほども言ったように右手に魔力を流している状態なので、意識を持っていかれるというか、視界がぐにやりと歪むというか…はつきり言って気持ちが悪い。

だが、光の紐が繋がった瞬間。気持ち悪かった感覚が軽くなる。成功したのか?と思いつつ、聖水に魔力を流している必要はもうないので、すぐさま右手を杯から引き抜く。

それと同時に光っていた部屋が元の風景に早変わりした。

『あー…気持ち悪かった…うええ』

すぐに良くなったとはいえ、嘔吐感のようなものは完全に消えずに少し残ったみたいで、思わず前かがみになってしまう。

『大丈夫ですか?』

『うん、だいじょぶ、だいじょぶ…すぐに良くなると…』

と、そこまで口にしてからあれっ?と思い、視線を上げる。うん? まだ精霊が見える?

『…精霊って陣なしで視認できたっけ?』

もちろん、もう魔力は流していない。

ならばもう精霊陣は機能していないはずなのだが…そう思いながら辺りを見渡す。

すでに聖水から零れ落ちていた光は消えていて、薄暗い室内が見渡せる。

怪訝に思いながら持っていた本を捲ってみる、が…やはりそんな記述はどこにもない。

契約したからと言って常に見えるわけでもないのはロナやユリアを見ればわかる。

『…じゃあなんで見えるんだよ僕…』

もしかして異通者だからか？と思ったが、もしかしたらこの精霊が特別なのかもしれないと思い、ひとまず外に出ることにした。

精霊陣（後書き）

えーっと、ここで少し読んでくださっている方に質問をしたいと思っています。活動報告をたまに書いているのですが、読んでくださっている方いらっしゃいますか？いらっしゃるようでしたら報告をやめておこうかと考えています。コメントや感想等で返事をしていただけたら幸いです。

変化（前書き）

2週間お待たせしました。ようやく完成したのでどうぞお楽しみください。あと、どうやら活動報告を見てる方は少数だと思いますので、今後は特別なことがない限り書かないようにします。でも、感想やレビュー等は励みになりますので、どうぞ暇になった方はよろしく願います。

変化

少し重い扉を押し開け、外に出るとシフォンさんが驚いた顔でこちらを見てきた。

「はて？ なにか変な事したか僕？」と自分の格好を見てみるが、特に変化はない。

『あの：精霊と契約しなかったんですか？』

『へ？ いや、ちゃんとしましたけど…』

一応精霊っぽいのと。

『あ、あれ？ もしかして私、鐘が鳴ったのを聞き逃しちゃいました？』

そう言っつて、シフォンさんが頭上を指差すので視線を向けてみると、大きな鐘が見える：もちろん動いていない。

『精霊と契約した場合はあれが鳴るようになってるんですが…』

『：あれ？ じゃあ何これ？』

そう呟き、視線を後ろ：扉の開いた精霊陣がある部屋に向けるとシフォンさんも隣から覗き込む。

それと同時に、ふわりと光が飛んできてシフォンさんの目の前に静止し、一言。

『あ、どうも。こんにちわ』

『……………』

光の玉からのんびりとした挨拶の言葉が発された瞬間、シフォンさんがピタリと固まる。

『…シフォンさん？』

『……………きゅう』

『ひいっ！ちよっちよっと！』

一瞬で気絶して、ふらりと倒れそうになるシフォンさんを慌てて支える。

『くっそ。ホント君なんなんだよお…』

涙声になりながら右手でシフォンさんを支え、左手で扇ぎ風を送る。

『ご、ごめんなさい…脅かすつもりはなかったんですが…』

『…まあ、そうだよな。挨拶しただけだもんな…君』

はあ…と溜息をついてから、いつまでもこうしてはいられないと思い、意を決してシフォンさんを背負う。

『うぐ…』

背負った瞬間思わず呻く。

僕より背が高かったからある程度予想はしてたけど…やっぱり重い。しかも、どうやらシフォンさんが着ている修道服は結構生地が厚かったらしく、人一人を背負っている感覚はせず、ずっしりと重い。…たぶん、この人自身が重いということはない…と思う。

『ま、負けるか』

ずるり、よたよた、ずるり、よたよたと廊下を歩く。

もうちよつと…もうちよつとで礼拝堂に着く…そうすればこの人も寝かせられるはず。

そう考えつつ一歩一歩前に足を進める。

『だ、だいじょうぶ？』

精霊…でいいか、とりあえずだけど。

精霊が僕の横まで飛んできて心配そうに声をかけてくる。

『大丈夫じゃないけど…君じゃあどうしようもないだろ？』

『…何か出来るかもしれないよ？』

『期待したいところだけど、失敗した時のことを考えると何もしないでくれるほうが助かる』

一応精霊みただから、何かしら魔法を使って体を軽くするとか、僕の力を増幅させてくれるとかを一瞬期待したが、万が一制御を誤った場合、被害を被るのは今気絶しているシフォンさんと背負っている僕だ。

それを考えると余計なことではして欲しくないのが本音だ。

『ううう…助けになりたいのに…』

精霊の不満そうな返事にちょっと言い過ぎたかなあと思う。
でも、ここで折れて飛ばされたり、怪我をしたりするのは自分か背
負われている人なのでぐっと我慢する。

そうこうしている内になんとか礼拝堂に繋がる扉を、両手が塞がっ
ていたのでゆっくりと足で押し開け、近くの長イスにシフォンさん
を寝かせる。

『ふう、これで一安心つと…さて、問題は…』

君なんだよなあと視線をふわふわ浮いている精霊に向ける。

『…どうしたの?』

『いや、君って精霊なんだろうけど、ホントなんだろうなあって思
ってね』

精霊なのに姿が一般人にも見えるって時点で既に精霊じゃない気が
する。
シフォンさん

まあ、それが本当に正しいのかはわからないが。

『…精霊じゃないの?』

『ほら、この人にさっき思いっきり姿見られてただろ? 精霊っての
は普通の人には見えないはずなんだよ』

『でも、そういう精霊もいるかもしれないよ?』

『…まあな』

本当にもしかしたらの話だが、今まで確認されていなかっただけでこういう精霊が居るのかもしれない。

目の前の精霊みたいに。そういうことならば僕も納得も出来る。

そんな事を考えていると外から子供の笑い声が聞こえてきた。

たぶん、外で遊んでいた子供の声だろう。

『?今の声は?』

『ああ、たぶん遊んでる子供達じゃないかな?』

『お子さんいらっしゃるんですか?』

『…流石にこの歳で父親と勘違いされとは思わなかった…』

僕：傍目からだ結構老けて見えるのだろうか?だとしたらかなり凹むんだが…。

『ちがうよ。たぶんだけど近所の子供達。この教会の周りで遊んでるんだよ』

『おお…』

なんとなく…だが、羨ましそうな声。

そっか、まだ生まれたばかりとか言ってたし、興味があるのかもしれない。

『行って見てもいいぞ?…あ、いや待った。ちょっとだけ待て』

嬉しそうに礼拝堂の出口に向かう光の玉を見てそれは流石にまずいか？と一瞬思ってしまった、思わず止める。
そして腕組みして一考。

『その姿じゃ人魂と間違えられるかもなあ…』

『そうなの？』

『うーん。人魂は言いすぎだとしても、変なのは確かだよ。光の玉が浮いてるようなもんだし』

『えと、じゃあどうしたら外に出ていいのかな？』

『それ以前に、どうにかできるのか？姿形を変えられたりする？』

『…光を固定して、外見を変えるぐらいならどうか…』

『すぐにできるの？』

『一応契約は結んであるはずですから…姿形をイメージをしてみてください。そうしたらそれに近い物になれるかも？』

『ふむ、じゃあちょっとイメージしてみるか…あと一応精霊でも生きてるんだから自分のことを”物”とか言うなよ？』

少しだけ精霊を嗜め、頭上のステンドグラスを見上げながら考える。

『（あれ？…でも変じゃない格好ってどんなのだろう？）』

ふわりと頭上を見上げていた目の前に飛んできた光を見ながらふと思う。

動物の形…いや、喋る動物ってところがダメそうだな。
何か物質を真似させるのも…結局喋る時点でアウトだし…ってよく考えるとどんな姿形であれ、喋る時点でアウトだな。
となると…。

『人間の形が一番妥当…か？』

一番怪しまれそうにないし。

人が喋るのは当然だろう、一部の人間を除いてだが。

そんな事を考えながら、適当に人の形をイメージしてみる。

すると、すぐに光が固まり始め、人の形を形作り、最後に目を瞑ってしまふほどの閃光が精霊から迸る。

光が止み、恐る恐る目を開けてみるとそこには…。

…見事に全身真っ白の人形がそこにあった。

ホント、見事な白さで人の形をしているだけで男か女かさえも判別できない。

目もないし、口もない。髪の毛なんかないし、本当にただ光が人の形をしているだけ。

…あれ…？なんか某漫画の真理の扉の前に居るようなモノを彷彿させるような形だなあおい。あっはっはっはっはっは…。

と僕が自嘲していると、自信満々に精霊が胸らしきところを張って語りかけてくる。

『どうですか？こんな格好なら問題なしですか？』

『うん、ごめん。まじごめん。僕が悪かったからもう一度チャンスをくださいお願いします』

思わず地べたに土下座しながら謝罪を口にする。

適当な人の形を連想したとはいえ、これはなんていうかまずい。

人魂よりはましかと思うが…いや、もしかしたら悪化しただけかもしれない。

これは本当に地味に怖い。これではただ単に怖さがランクアップしただけで、子供に見せたらトラウマになるかもしれない。

目の前の姿形に反省しながらも、何か資料みたいな参考になりそうな物はないかと辺りを見渡す。

…ってまあ、礼拝堂なんだから何もないよなあ普通…。

と、礼拝堂の中央奥のステンドグラスの前に天使の像があるのが目に入る。

ゆっくりと近づいて、天使像を見つめる。

姿形は人間の女の子のようで、後ろ髪を二束に分け、端のほうを細いリボンで結んでいるようだ。

対になる翼が背中から生えており、頭天边には輪がある、所謂典型的な天使。

『（羽はいらないけど…まあ、参考にはなるか？）』

しかし女の子…かあ。いや、別にいいんだけど…なんか面白くないんだよな。

でも、かと言って男が好きなわけでもないし、口調もどちらかと言うと女の子っぽいし。

なので、このまま普通に参考にさせてもらうことにした。

天使像の正面に立ち、目を閉じて思考を集中させる。

先程とは違って参考になる天使像があるので、それを元に創造イメージしていく。

『（体は小さいほうがいいか…よし。あとの問題は…）』

頭…だ。

髪はもちろんのこと、目や鼻や口といったものが思い浮かばない。うーん。まずい。このままだと頭だけ光の玉になりかねない。

…それはそれで笑えるが、笑いが取りたいわけじゃないので却下。

どうしたものか…と記憶上に参考になりそうな人間がいなか適当に検索してみる。

だが…。

『（ものの見事に当てはまらない…まあ適当に検索かけてるから仕方ないと言えば仕方ないけど…）』

『まだ決まりませんか？』

『ああ、ごめん。あとちょっとだから…』

じれったそうな精霊の言葉に苦笑いしながら、何か…記憶上で印象強いのはないか？と探してみると、案外浅いところで引っかった…が。

『だめだ。使ったら絶対殺される…』

ロナの笑顔（もちろん中身は怒り心頭）を参考にするのは流石にま

ずい。

：となるとユリアしかないか。あんまりじっくり顔見たことないから細かいところは覚えてないが。

そう思いながらも、出来るだけ顔を思い出していくとイメージが定まった。

『じゃあ、これでやってみてくれ』

『はいです』

そう、精霊が返事をするのと先程と同じように光が固まり始め、小さな人の形を形作り、最後に目を瞑ってしまうほどの閃光が精霊から迸り、光が止んだ時には小さな女の子が浮いていた。

身長は20cmぐらいで、髪は長髪だが、ストレートロング。

顔はユリアにそっくりなのだが、細かいところが違う。

アレンジとして目元を少しやわらかくしたのだが：結構良かったみたいだ。

ただ、創造したのとは三つ違いが出てきた。

一つは先に言ったように身長だ。

さっき見かけた子供達ぐらいの身長がいいなと思って創造したのだが、これでは人形レベルだ。

まあ、こっそり見るだけなら問題ないだろうと思うので、これはよしとしておく。

次の違いは色で、全部真っ白なのだ。

一応色々イメージしたときに様々な色も創造したのだが、反映されなかったらしい。

髪も白、肌の色もちろん白。

まあ、この辺りは問題と言えば問題なのだが、そこまで深刻ではな

い。

：あんまり見かけないだろうが、こういう人が居ないってことはないだろうし。

でも、一番の違いは：服だった。

僕はこの世界の一般的な街服：シンプルなシャツとスカートを思い浮かべたのだが…。

なぜか日本史の教科書とかに載ってた：巫女服だった。

普通は小袖（白衣）に緋袴を履くはずなのにどっちも真っ白なので白装束か白衣にも見える。

『どうですか？今度はちゃんと変じゃありませんか？』

『だいじょぶだいじょぶ。服以外は』

うん、まあ、なんで巫女服なんだ？とか、見ようによっては死に装束にも見えるから軽く不吉じゃね？とか、ツツコミたいところは山ほどあったのだが：うん、まあそれ以外は大丈夫：だと思う。たぶん。

それにこっちの世界の人はこの衣装のこと知らないだろうし：問題ないはず。

まあ、別に知られてもどうってことはない：と思う。一部の人間以外は。

『じゃあ、これで大丈夫なんですネー外行ってきます！』

『あーまあ、ほどほどに：な？』

嬉しそうに顔を綻ばせながら精霊が出口に向かう。

その様子にちょっただけ僕も嬉しくなり、シフォンさんが起きるまで子供の相手をするか思い、精霊の後を追うことにした。

挿入話：友達（前書き）

とりあえず、まず謝罪を：先週は色々事情があって投稿できなくて待っていた方には本当に長らくお待たせしてしまつて申し訳ありませんでした。それから一つお知らせを、まだ修正途中ですが、作中に登場するキャラの一人称が被りすぎてわかりにくいのでは？という指摘を友人から受け、思い切って全部修正することになりました。なので来週は今まで投稿した本文を修正することになります。次話は出来る限り投稿するようにしますので、何卒よろしくお願いします。

挿入話：友達

どうしてこうなったんだろう？

この状況にオロオロしながら、わたし、ユリア・ホワイト・ウィンベルはそんな事を思う。

目の前には最近：と言うか昨日知り合ったばかりの少女がいる。

名前はロナ・ポナルルと言って、わたしの国ウィンベル帝国から南に行ったところにあるエルクワールの学生さんらしい。

身長はわたしより高くて：と言ってもわたしが同世代の方に比べて極端に低いせいなんだろうけど、そこは気にしない。

オレンジ色の髪を頭の横で二つに結んであり、顔立ちは同姓のわたしから見ても凄く可愛いと思う。

だけどその彼女は今。

ものすごく怒っている。うん、もう、この場が宿屋さんのロビーだ
っていうのを忘れてしまうぐらいに。

『ほう？じゃあアンタはちゃんと起こそうと努力はしたわけね？』

『…はい』

『嘘偽りないわね？』

『…はい』

ロナちゃんの目の前では同じく昨日知り合ったばかりのアイズ・ルトラさんが正座して尋問を受けてる。

と言うか、何故正座？と疑問に思うのはわたしだけじゃなく、周りに居る宿泊客の皆さんもらしい。

皆唾然とした：というより首を傾げている。

そして、なんだか既視感を感じるなあ：と思う。

さっきも同じようにユキトさんが正座させられてたし。

っとそんなこと気にしてる場合じゃなかったですね。そろそろロナちゃんを止めないと。

『ロ、ロナちゃん。そろそろ周りを気にしたほうが：』

『まだ大丈夫よ』

『いえ！既に周りの方々が物凄く居づらそうにしていますが！？受付の方も困った顔なされてますし！』

相変わらずのロナちゃんの態度に涙目になりながら必死に説得する。ロナちゃんがアイズさんから視線を外して周りのお客さんを見回した後、受付の人を見やる。

周りのお客さんは目を逸らし、受付の人は見られた瞬間にビクリと体を震わせ、思わず苦笑。

決定的な証拠だった。

『はあ：わかったわよ。もう』

しぶしぶといった様子でロナちゃんが肩を落とす。どうやらようやく怒気を収めてくれたようです。

『まったく。ユリアは優しいわねえ』

『え？いえ、普通の反応だと思うのですが…』

『私もそう思う』

『全然違うわよ。ちゃんとあそこのお客さんのことまで考えて止めてくれたんでしょ？』

『あう…ばれてましたか…』

だってあっちで赤ちゃんを抱いてるお母さんがこちらに来辛そうにしましたし、仕方ないじゃないですか。

そう思ってから、件の赤ちゃんを抱いているお母さんのところまで行って、挨拶。

『すいませんお騒がせして…』

『いえいえ、仲が良いのね。あの二人』

『そうみたいです』

先程とは違ってどこか楽しそうに喋っているロナちゃんとアイズさんを見ながらお母さんが微笑む。

朗らかなお母さんだなあと思いつつ、わたしが意外と皇女として気づかれていないことに微かに安堵する。

…ってこれ。意外と問題なんじゃ…王族として国民に認知されていないって結構問題なんじゃ…ま、まあ、今は気にしないでおきましよう。うん。

気を取り直して抱かれている赤ちゃんを覗き込む。

うわあ、やっぱり赤ちゃんはいつ見ても可愛いなあ。わたしも欲しいなあ。

いつかわたしも結婚できるかなあ？

まあ、その為にはユキトさんに勝って貰わないとだめなんだけど…。

『（でも…勝てるのかな？ユキトさん…）』

森で見た戦い方と、クールの弾を避けたことから可能性としては高いんだけど…心配だ。

もちろん現状からは助けて欲しい。

でも、それ以上に彼には怪我とかして欲しくない。

『（…あ、あれ？）』

確かに助けては欲しい。でもそれ以上に怪我をして欲しくない？…友達だから？

はて、何か引つかる。

何が引つかかっているんだろう？と真剣に考えながら赤ちゃんを指であやしているとロナちゃんとアイズさんがこちらに来た。

そして、わたしと同じようにロナちゃんが赤ちゃんを覗き込む。

『わく可愛い』

『そうだねえ、私達も欲しいものだ』

『何、ナチュラルに、恥ずかしい事を、口走ってんのよ！』

ロナちゃんがアイズさんの懷に潜り込んで、右手を一閃。

あの…皆さん。今、お聞きになりましたか？

なんか、アイズさんの体からグシャツとかいうイヤな音が聞こえたんですが…。

ってアイズさんがゆっくりと膝について蹲ってる…だ、大丈夫かな？

『あ、あの…アイズさん？大丈夫ですか？』

『…な、なんとか…な』

物凄く苦しそうな顔でこちらを見るアイズさん。

本当に大丈夫か怪しいんですが…まあ、本人が言うなら大丈夫なんでしょう…たぶん。

『いいわねえ…青春みたいで』

この一連の行動を見ても殆ど動じない、このお母さんはすごいなあと思う。

…ってわたしのお母様も似たようなものかと思い直しつつ、話を進めることにする。

『えと、気を取り直して…これからどうします？』

『そうねえ、ユキは後でお仕置きするとして…わたし達もどっか行く？』

『…あの、その前に治療して頂けると嬉しいのですがロナさん』

『え…もうちょっと反省して貰わないと…』

ぐったりとした表情のアイズさんを見て流石にわたしも治療してあげたほうがいいんじゃないかと思う。

『ロナちゃん。流石に可哀想だよ。治療してあげようよ、ね?』

『うーん。仕方ないなあ…ほら、アイズじつとしてて…』

そう言っで、転送魔法で杖を取り出し、アイズさんの腹部に手を翳すロナちゃん。

うんうん。なんだかんだ言いながらちゃんと治療してあげる辺り、やっぱり優しいなあ。

…そうだよ、友達なんだから心配するのは当たり前だよ?

だからわたしがユキトさんを心配するのも友達だからで別に変じゃない…はず。

って、なんでこんな風に心の中で言い訳しているのかが、自分でもよくわからない。

『…っと。よし、これでOKね』

『…ありがとう。ようやく痛みが消えてほっとしたよ…』

『ま、自業自得だけどね』

やれやれといった感じで両手を広げ、杖を戻すロナちゃん。それを見ながらお母さんとわたしが小声で呟く。

『あらあら、照れ隠しみたいね』

『ですね』

『そこっ!間違ったことを口にしないっ!』

耳ざとく聞きつけたロナちゃんが目を吊り上げてこっちを睨む。
それをくすくすと笑いながら見つめて、一頻り笑った後赤ちゃんを
抱いたお母さんは、

『そろそろ用事の時間だから、またね』

と言って、宿の出口に向かった。

それを見送りながら、わたしは改めて聞くことにする。

『それで、これからどうします？』

『…暇なんだし、街の中をぶらぶらするのもいいけど…何か目的が
欲しいところね』

『そうだねえ…流石に当てもなく歩くのは昨日ので十分だし…』

立ち上がったアイズさんが苦笑いしながら言い、わたしも同意する
ようにうんうんと頷く。

『それじゃあ、暇つぶしに依頼でも受けてみよっか？』

『依頼ですかあ…』

これでも一応皇女という立場だったので依頼することは多々あった
が、受けたことはあんまりない。

だからこそ、やってみたいという気持ちはあるのですが…。

『でも大丈夫ですかね？』

昨日のこともあるので、しばらくは身边を注意したほうがいいと忠告してくれたのが、ユキトさんだ。

そのため、お父様が一応わたしの周りに身边警護の人を配置してくれているらしい。

陰ながら警護しているせいが見たことないんですが…。

『流石に昨日の今日で仕掛けてくるとは思えないし、大丈夫よ』

『そうそう、それに危なくない依頼を受ければいいんだし、問題ないと思うよ』

『それならいいんですけど…それじゃあ、早速行きましょうか？』

そう言うてから、わたしは先立って歩き始める。

すると、背中からロナちゃんが問いかける。

『そうね…ってユリア、掲示板の場所わかるの？』

歩き始めたわたしの足がピタリと止まり、苦笑いしながら振り返って、一言。

『……………すいません』

『……………まあ、最初から期待はしてなかったから別にいいわよ』

ロナちゃんが溜息を吐いて首を振る…うう、ごめんなさい。

だって、以前依頼を受けたのは1年以上前のことだし、街の中は馬車で移動したりしてホントに歩かないんだもん。

この前お城から飛び出したときも、荷馬車の中に隠れてたから街中は殆ど見なかったし。

…って今更な話ですけどいくら荷馬車の中でローブに包まってたからとはいえ、あんな簡単に出国できちゃってよかったんでしょうか？

『って今度はどしたの？ 難しい顔して…』

『いえ、割とわたしの国って危ない状況なんじゃないかなあと再認識してたところです』

帰ったらお父様に進言したほうがいいのかも知らない。

そんな事を考えていると、アイズさんがわたしを追い越して振り返る。

『私が知っているから問題ない、案内しよう』

『…あれ？ アイズ知ってるの？』

『前にエルクワールで依頼を受けたときにここで報告に行ったからね。覚えてるよ』

そう答えてから、宿のドアを開け、こちらを見る。

『今すぐ行くかい？ 結構近いはずだけど…』

『…あ、わたしは今すぐ行きたいです』

素直に挙手しながら答える。

実は結構無理を言ってお城から出ていて、本来なら今日はダンスの練習をしているはずの日なのだ。

しかも、昨日のこともあるので今後余計にお城を出にくくなるのだ。

だからまあ、今日はたくさん遊んでおきたい。

『ま、じっとしてるのもアホらしいし。行きましようかユリア』

ロナちゃんがそう答えてアイズさんの後を追う。

躊躇なくわたしの手を握って。

『……………くすくす』

『…どうしたのよ今度は笑い始めて…』

アイズさんが先を歩くのを追いながら、ロナちゃんが首を傾げる。

『いえ、なんでもないですよ？』

家族以外の人に何の躊躇もなく手を握られたのは初めてなんです。なんて口にしてしまったら泣いちゃいそうだったので、わたしはくすくす笑うことでごまかす。

そう、本当に初めて…。

他国の結婚式に出るときやお城で何か催しがあると、大抵皇女は格わたし式ばったドレスを着るのが通例だ。

そして、そういったドレスを着るとなると一人では流石に難しい。だから大抵メイドさんにお手伝いしてもらうのだが、それでも手に触れるという行為には一瞬躊躇される。

それは王族という立場上仕方のないことだし、別に今はそれが嫌というわけではない。

だが、同じ人間で、わたしより年上の人に、手を握ることさえ、躊躇される。

それが幼い頃のわたしは悲しかった。

まだ何も知らなかった頃のわたしは何故とお母様に尋ねたこともある。

その時お母様は寂しそうな顔をしながら、わたしを抱きしめてこう言ってくれた。

『貴方もそのうちわかるようになるわ』

その言葉通り、数年経った頃には理解できるようにはなった。だが、理由がわかったとしても悲しさは消えなかった。

一生、皇女という扱いが変わることはないのだから。

事実を受け止めるのは嫌だったが、いつしか諦めてしまっていた。

でも、今は違う。

同じ立場で、同じ目線で、対等な位置で接してくれる友達が出来た。そのことが凄く嬉しく思った。

『人…少ないですね』

掲示板の前まで来たのはいいのだが、人が疎らだ。

あんまり来た事はないのですが…以前はもっと居たような気がするのです。

『良い依頼がないんじゃない？あとはまあ…偶然？』

ロナちゃんがあははと笑いながら掲示板の前まで歩き、くるりと振り返りながら言う。

『さてさて、簡単なのはあるかなあ…っと、そういえば二人とも何か希望とかある？』

『私は特にないな』

『わたしも特にはないですね〜』

『ま、それ以前に戦闘系の依頼受けるわけじゃないんだし、希望も何もあったもんじゃないけどね』

そう言いながらロナちゃんが掲示板に向き合い、上から順に読み上げていく。

『草むしり、お使い、本の整理作業…あ、新作料理の味見とかいいわね〜』

『…わたし、なんだか嫌な予感がするのでやめたほうがいいと思います』

『私も同感だ。新作と言うからには奇抜な味付けがあるかもしれない』

『そんな、たかが料理の味ぐらいで大げさな…』

と、ロナちゃんが笑うがアイズさんは首を左右に振り、一言。

『…以前聞いた話によれば、新作の味見をした人が倒れたことがあるそうだ』

『…さって他の依頼はつと…』

何事もなかったかのように他の依頼を探し始めるロナちゃん…うん。流石にわたしも味見で倒れたくはないなあ。

『宿の受付、手紙の配達、レッドウルフの討伐…ってこれは戦闘系だから却下…って、あ』

ロナちゃんが手に取っていた一番下にあった依頼内容が書かれた紙を取ってしまった。

『あちやく。貼りなおさないと…ってあら』

『どうかしたのかい？』

『これなんてどう？子供の遊び相手だって』

そう言いながら取ってしまった紙をこちらに持ってきて広げる。

依頼内容は名前の通り、子供達の遊び相手募集。

場所は教会。人数は3〜4人。報酬は銅貨20枚。備考欄に子供好きの方お願いします。と書かれていた。

『のんびりした依頼で良いかもしれませんね』

自然と顔が笑んでしまう。

これでも子供の相手は結構好きなのだ。

『アイズは?』

『いいよ。特に異存はない』

『じゃ、これにしょっか。すいませ〜ん。この依頼受けたいんですけど〜』

そう言いながら、笑顔で受付まで歩いていくロナちゃん。
それを見送りながら、少し気になった事があったので聞いてみる。

『アイズさん。ちょっといいです?』

『うん? なんだい?』

『ロナちゃんっていつもあんな感じですか?』

『ああ、いつもあんな感じだよ』

『…そこに惚れました?』

『ノーコメントと言っておこう』

『くすくすくす、そうですか』

お互い顔を見合わせて笑いあう。
たぶん、あの笑顔に惹かれたんだろうなあと思いながらロナちゃんを眺める。

依頼を受理されて嬉しそうにこちらに歩いてきている。

その顔は見てるとこっちまで嬉しくなるような、どこか安心する笑顔だ。

だからこそ大事にしたい。

こんな素敵な出会いに感謝をしないと、心からそう思った。

挿入話：友達（後書き）

追記…来週の投稿は深夜12時を予定しております。ご容赦くださいませ。

お菓子（前書き）

まずは、謝罪をいたします。先週は皆さんに勘違いをさせる結果になつてしまい、大変申し訳ありませんでした。自分としては夜中に次話が投稿できたら投稿すると言ったつもりだったのですが、どうやら説明不足だったようで、夜中に来ていただいたたくさんの方々。本当に本当にすいませんでした。今後このようなことは一切ないように頑張りますので、よろしくお願いいたします。

お菓子

しばらく子供たちの相手を人形化した精霊としてしているとシフォンさんが目を覚まして教会から出てきた。

最初、小さな人形状態の精霊を見た瞬間彼女の言った言葉は…。

『す…』

『す……？』

『……………？』

彼女の言いたい事がわからなくて、精霊と顔を見合わせて首を傾げる。

だが、次の瞬間。

『すっごく可愛いんだよー！』

『ひゃあっ』

『おおう』

笑顔で飛びついてきた、勢いよく。

だが、そんな勢いよく飛びつかれて、小さな精霊が支えきれなくなる。

目の前の光景が見てられなくて周りの子供達と共に目を瞑ってしまう。

次の瞬間、バツタンという派手な音が広場に響き渡る。

恐る恐る目を開けてみると、シフォンさんが地面に倒れていた。

『だ、だいじょうぶですか？シフォンさん』

『う、うううう…』

流石に今のは痛かっただろうと思い、慌てて駆け寄って起こしてあげると、今度はシフォンさんに押しつぶされた精霊が見えた。地面にべったりと張り付いてる。

『漫画みたいな潰され方してるな…お前』

『…漫画って意味はわかんないけど…かなり不本意なと言われてる気がする』

不機嫌そうな声で精霊が言葉を発して、むっくりと起き上がる。

ぺらぺらの紙みたいになっていたが、一回息を吸い込むような動作をすると風船みたいに膨らむ…いや、ホント、なんでこんな漫画のキャラっぽいんだこの精霊は…。

『だいじょうぶ？』

『うん、だいじょうぶだいじょうぶ。それじゃあ、鬼ごっこの続きしようか？』

小さな男の子が心配そうに精霊に話しかけ、それに笑って答える精霊。

子供達からかなり好かれたらしく、すぐにわぁっと精霊の周りに子供達が群がる。

それを見て、もう大丈夫かな？と思い、広場の端にある井戸から汲み上げた水でタオルを濡らし、シフォンさんに手渡しながら話しかける。

『シフォンさん、少し台所借りてもいいですか？』

『はい？構いませんけど、夕飯の仕度ですか？それにしてはちょっと早いような気がするんだよ？』

濡らしたタオルで顔を拭き、修道服に付いた砂を手で掃いながら、首を傾げるシフォンさんに苦笑しながら答える。

『いえ、ちょっと子供達用に甘い物でも用意しようかと思ひまして』

『甘い物って…ドライフルーツですか？それでしたら教会にきちんと保管してありますけど…』

そこまで言われて、少し考え込む。

『ふむ…シフォンさん』

『はい？』

『お料理得意ですか？』

『え？はあ、まあ苦手ではありませんし、得意と言えば得意だよ？』

『じゃあ、ちょっとだけ手伝ってください』

『構わないけど…何を作るんだよ？』

『うーん…僕の国に伝わる食べ物です。とだけ言っておきましょうか？』

そう言っ、僕は笑いながら教会のドアを開け、思いついてから精霊に声をかける。

『ちょっとだけ子供達の相手たのむぞ？』

『了解』

と、どこかのんびりした声で応じる精霊だった。

『おお』

『ど、どうかしました？』

『い、いえ。ちょっと感動してただけです』

『…普通のどこにもある家庭の台所だと思うんだよ？』

怪訝そうな目でシフォンさんが見てくるが、僕は気にしていられなかった。

科学的じゃない台所なんて本当に資料の写真以外で見たことがなかったのだ。

だからなんていうか：そう、未知の遺跡を発見した学者のように興奮するのだ。

台所の姿形はどこか似ていても全然違うのだ。
水が出そうな蛇口や流し台のようなどころはある程度一緒なのだが、冷蔵庫のような長方形の箱は配線のようなものはまったく見えないし、フライパンを熱したりできるようなコンロのような所に至っては鉄製の丸い輪が配置されているだけで、ガスがでるようなところは見当たらない。

『これは冷蔵庫：なのかな？でもこの穴は？』

『魔冷库見たことないんですか？ここに指を入れて魔力を流し込むんだよ？』

どうやらこれをするだけで冷気が2～3週間持つらしい。
電気も使わないし、環境に優しいなあと感心する僕。

『えっと…これは？』

『コンロって言って、炒め物とかする時の場所だよ。火力の調節はこっちのつまみで、ちょっと一般魔法使うだけだよ』

そう言ってシフォンさんが指先に火を点して、鉄製の丸い輪に触れると輪に沿って火が点る。

つまみを試しに回してみると火の大きさが変わった。

ここはどこか似通ってるな：魔力使う時点で別物な気がするけど。

うーん、すごいなここ。

と思いながら、シフォンさんに断ってから魔冷库：って面倒だから冷蔵庫でいいや、冷蔵庫の中から卵と牛乳の瓶をいくつか取り出す。

『砂糖ってどこにあります?』

『えっと…確か、その棚の一番上…だったかな?』

自信なさそうにシフォンさんが食器棚の一番上を指す。

ホント使っていないんだな砂糖。と思いながら食器棚の一番上を漁り、砂糖が大量に入った袋を取り出す。

『あとは…えっとこのカップ使っちゃっていいですか?』

『うん、大丈夫だけど…一体どんなの作るんだよ?』

不安そうに材料を見渡すシフォンさん…まあ、食べた事もないようなものを今から作るわけだから不安にもなるか。

『まあ、見ててください。結構美味しいの作るつもりですから』

『はあ…大丈夫ですか?』

『大丈夫大丈夫。さて、やるとしますか!』

まずは、カラメルソースと…鍋に砂糖と水を入れ、熱し始める。徐々に香ばしい匂いが辺りに漂い、煙が出始める。

『ちよっ、焦げてませんか!?』

『あゝ大丈夫大丈夫。こういう風にして作りますので気にしないでください』

慌てているシフォンさんを宥め、鍋蓋とコップに入ったお湯を両手に持つ。

鍋にお湯を投げ入れ、砂糖が飛び散る前に鍋蓋を被せる。

ジュウウウウ…という音が響き、音が収まってから鍋蓋を取ると、綺麗なカラメルソースが出来上がっていた。

火を止め、少しだけ鍋を揺るとカラメルソースが揺れる…うん、これぐらいならいけそうか？と思いつつ、少しかき混ぜておく。

『これは？』

『カラメルっていうソースです』

不思議そうにカップに注がれていく液体を見つめるシフォンさんに適当に答えながら、空になった鍋を軽く洗う。

『あ、熱いですから触らないようにしてくださいね』

『り、了解です』

指を突っ込もうとしてたので少し慌てて忠告する。

『今度は牛乳を弱火で暖めてつと…』

洗った鍋に牛乳を注いで、コンロの上に置いておく。

その間にボウルを取り出し、卵をいくつか割って入れ、カラザを取り、砂糖を入れる。

『これ混ぜといってもらえますか？』

『あ、うん。わかっただよ』

ボウルをシフォンさんに渡して、かき混ぜを頼む。
鍋を覗き込むと、少し泡立ちそうだったので火を弱める。

『混ぜ終わりました〜』

『あ、じゃあこっちに持って来てください〜』

ボウルを受け取り、暖めた牛乳が入った鍋に注ぐ。
懷からここに来る前に買ったフラワーシロップを少し入れる。
甘い芳香が鼻腔を擦る。

『あ、いい匂い…』

『さて、カラメルソースのほうは固まったかなって…』

カップを持ち上げ、軽く揺すってみると、どうやら固まったらしい。

『ん、だいじょぶそう。あとは注ぐだけって…』

鍋を傾け、中身をカップに次々に注いでいく。

『これでよしって…あとは…』

オーブンを使おうかと思ったが、ここは手軽に蒸し器を使う事に
して、カップが入りきらなかったので2つ用意する。
そして、弱火で着火と。

『あとは待つだけで完成です』

『ふえ〜…結構簡単なんです〜…つてところで』

『はい?』

『なんていう食べ物なんですか?』

『あー、名前言ってなかったですね。プリンっていう名前なんですけど』

『プリン、ですか〜』

不思議そうに言いながらシフォンさんが蒸し器を眺める。

『あとは僕だけで十分ですから、シフォンさんは他の仕事してていいですよ?』

あとは固まるのを待って冷蔵庫で冷やすだけなので手間はかからない。
ならば、シフォンさんには別の仕事をしてもらった方がいいだろう。

『…あの小さい人形さんとも遊んでいいですか?』

『…ご自由にどうぞ』

『行ってきますだよ〜』

スキップでもしそうな勢いでシフォンさんが台所を出て行く。
その後姿を見送りながら、精霊に謝る。

『…悪い、精霊。大変かもしれないけど頑張れ』

まあ、死ぬ事はないだろうけど…。

と、思いながら近くのイスに座り、息を吐く。

実は久々に腕を振るえたので結構満足してたりする。

しばらくして蓋を取り、カップをチェック…うん。固まったな。

あとは冷蔵庫に入れてって、すぐに入れるのは流石にまずいか？…
あーでもこれ、魔法で動いて冷やしてるんだっけ？…まあ入れちゃ
うか。

『あとは待つだけっと』

冷蔵庫の扉を閉め、ふうっと一息吐いて、イスに座り、テーブルに
突っ伏す。

うーん、おかしいなあ。そこまで疲れることしてないはず…ああ、
そっか…そういうえば、精霊陣使った時に結構魔力消費して…たっけ？

『だからかあ…ああ、やばい。ホントねむ…』

うう、ダメだ。目蓋が重い…ちょっとだけ…寝るかあ…。
そのまま突っ伏して意識を飛ばす事にした。

『だ…で……………そ……………と……………』

『…って…ここの……ん…じゃ……………』

『でも、………のは…っ…ま……んじゃ…』

…なんか、聞こえる…うう、でもまだ眠い…。
もうちょい…寝るう…。

『Z Z Z Z』

『起きんかつ！このっ！ド馬鹿っ！』

『ぐえっ！？』

頭に激痛が走り、眠気が一気に吹き飛ぶ。
慌てて起きて周りを見渡すと、見知った顔が並んでいた。

『あれ？ユリア？それにロナとアイズも？どうして教会こいに？』

『アタシ達は依頼で来たのよ。そしたら、外に居た教会の人があんなが来てるって聞いて台所こしまで来たの。で？あんたはなんでここにいるの？』

『僕は精霊陣を使い…って、さっき殴ったのお前だろロナっ！』

『いえ？蹴っただけけど…』

『さらっと予想以上のことしてた！？』

『…ところでユキ、アタシまだ今朝寝坊したこと許してないんだけど…』

目元が暗くなり、指の関節をパキパキ鳴らし始めるロナを見て、これはまずいと確信する。

なので、さっさと話題を変えることにした。

『ま、まあ、落ち着けロナ！話せばわかる！…たぶん』

『覚悟は出来たみたいね…』

ロナが腕を振りかぶる。

それを見て、流石にもうダメだと諦め、素直に食らうことにした。

次の瞬間、ドゴォツという音と共に頭にきつい痛みが走る。

うん、いてえ。

普通に痛い。頭の頂点が痛い。

『で、ユキト君。君は台所こしで何をしてたんだい？』

台所を見渡していたアイズが僕を見て声をかけてくる。

『いつつつつ…ああ、ちょっとお菓子を…』

『お菓子？』

殴られたところを擦りながら言うと、ユリアが首を傾げる。
ああ、そっかお菓子っていう言葉自体が普及してないのか。

『ああ、デザートデザートのほうが伝わりやすいか』

『デザートって…ユキトさん果物作れるんですか？』

『あーそっか。概念から違うのか…まずはその固定概念破壊しとくかー』

よいしょつと言って、イスから立ち上がり、冷蔵庫を開けてカップに軽く触れてみる…うん。十分冷たくなってるな。

『3人とも、外で遊んでる子供達連れてきて。美味しい物食べさせてやるからさ』

そう言ってキョトンとした顔をした友達3人に笑いかけた。

ロナ達子供達とシフォンさんと精霊を連れて食堂に戻ってきた。で、ロナ達とシフォンさんは不思議そうに目の前のカップを見つめている。

子供達はというと、殆どが興味深げにカップを眺めている。

『これが…お菓子？』

『そ、お菓子の中のプリンってやつだな』

テーブルの上にカップを並べながら答え、自分も席に着く。

『…食べ物…なんですよね？』

『…まあ、皆最初はそんなもんだよな』

ユリアが微妙な表情でこちらを見ながら聞いてくる。

：うん。なんていうかそういう顔で見られると困るんだが、僕も。そこまで不安がられるようなものは作っていないのだが：まあ、仕方ないと無理やり納得させる。

『とりあえず、食べ方は普通にスプーンですくって食べるだけなんだけど：』

説明をしながら周りを見渡す：誰も手をつけない。
もちろん精霊も。うん、仕方ないよね。

『じゃあ、まずは毒見ってことで僕が一口つと』

普通に一さじ掬って口に入れる：ってうわあ。なにこれ結構美味しい。

こっちの卵とか牛乳とか元の世界の物より質がいいのか、いつも作ってたものよりかなり美味しい。

その感情が表に出てたのか、イスに座っていた小さな男の一人が僕の顔を見て、目の前に置かれたカップを覗き込み、恐る恐る一口食べる。

『：あまくておいしい』

ぽつりと口にして、幸せそうに微笑む。

すると、それを見ていた他の子供達も同じように恐る恐るスプーンを動かし、食べ始めた。

『おお～：』

『わあ…』

『これは…うん。凄いな…』

人形化している精霊とロナとアイズが驚きの声をあげ、もう一口と口に運んでいき、

『甘くて美味しいです』

『初めて食べる味ですね』

ユリアが嬉しそうにスプーンを口に運び、シフォンさんのほほんと微笑む。

『（よ、よかった）』

実はちょっとだけ、不安だったんだよね。

初めて食べる味だろうから拒絶されるかと思っていたのだが…どうやら杞憂だったらしい。

皆が美味しそうにプリンを口に運んでいく。

ああ、なんか懐かしいなあ…。

ぼんやりと思い出すのは家族やクラスメイトに色々配ったときのこと。

皆の嬉しそうな顔と今日の前にいる子供達とユリア達の顔が少しだけだぶる。

でも、今はどんなに頑張っても会えない人達。

それが少しだけ、ちょっとだけ、寂しかった。

特訓（前書き）

PVが14万アクセスを超えて、ユニークが2万5千人を超えました！>< と歓喜につつまれている作者です。ちよっただけ投稿が遅くなってしまう申し訳ありませんでした。これからも頑張りますので、よろしくお願いいたします。

特訓

プリン作成から丸一日、今日はここウィンベルから少し離れた草原に來ているのだが。

その若々しい緑色が一面に広がっている草原を僕は必死に駆ける。たまに石が転がっていて転びそうになるときもあるが、そんな事を気にしている余裕が今の僕にはまったくくない。

一瞬でも気を抜けば餌食となる：何のって？そりゃあもちろん。

アイズの魔法攻撃。

僕が走った後を追うように、ドォンッドォンッドォンッ！という爆音と共に雑草と地面が抉り取られる。

『ほらっ！もっと早く走らないと！』
【汝、弾丸となりて、敵を弾け、
弾！】
『^{ショット}』

アイズの声と共に再び10個の青白いキューブがアイズの周辺に生み出され、すぐさまこっちに向かって飛んできた。軌道を読み、必死に足を動かし、体を捻る。

『ッ
【汝、矢となりて、敵を射抜け、矢！】
『^{アロー}』

いくつかは避けきれたが、避けきれなかった分を魔力を矢の形状にして突き刺すタイプ、アローで迎撃。

白い矢が空中に5本出来上がり、襲ってきたキューブに突き刺さっ

て爆発する。

『【汝、楔となりて、我が前の輩を縛る戒めとなれ、鎖！】
チェイン』

その後アイズを戒めるための魔法を続けて詠唱。

白い魔方阵が空中に幾つも現れ、魔力の鎖が飛び出しアイズに絡みつく。

『よっ…と！』

アイズが動けなくなったのを確認して、手首に下げていた魔工石に魔力を流し込んで剣を構築。
ブレード

その後、一気に距離を詰める。

だが、あと15mといったところでアイズがチェインを引きちぎり、こちらに向かって持っていた獲物を振りかざす。

『ッ【汝、力を糧に我が前に示せ、盾！】
シールド』

攻撃が間に合わないと判断して魔工石を手放して剣の構築を破棄、すぐさま詠唱してシールドを展開。

直後。アイズが振った木槌がシールドに直撃して、シールドごと後方に吹き飛ばされ、ごろごろと地面を転がる。

『【汝、楔となりて、我が前の輩を縛る戒めとなれ、鎖！】
チェイン
止めだよ！【汝、弾丸となりて、敵を弾け、弾！】
ショット』

先ほど僕が使ったものと同じチェインが僕に絡みつき、地面に縫いとめられる。

そして先程より魔力を込めたのか、一瞬で20個以上のキューブが生み出され、僕に向かって飛んできた。

『ツ間に合え！【汝、力を糧に我が周囲に示せ、壁！】』

チェインを引き千切れないと判断してそのままバリアを展開、注げるだけの魔力を流し込む。

直後。僕の周囲が直撃したショットの爆発に包まれた。

『うん、大分良くなったね』

近くの大きな木に寄りかかり、こちらを見ながらアイズが言う。
だが、それに対して僕は草原に寝転びながら大声で叫ぶ。

『いや、全然良くなってないし！むしろいじめられてる気がしますけどねえ！？』

止めが酷かった。

相手を動けなくする魔法のチェインで拘束したあと、魔力を多めに注ぎ込んだおかげで数が増したショットの追撃…正直よく防げたと思う。

『そうは言っても、実戦じゃあもっと酷いことになるかもしれないよ？』

『…まあ、そうなんだけどね』

あの程度のことに対応できないとクール皇子には勝てないかもしれない

ない。

そんなことはわかってはいるんだけど…。

『…これで勝てるのが怪しいんだよなあ』

そう、一応アイズに木槌で武装してもらっているが、相手の動きを見て真似しているわけではない。

まあかと言って実際に皇子に相手して貰うわけにも行かないんだけど…。

『確かに…ボクもちょっと不安だけどさ…』

アイズもどうやら不安らしい。

『ま、やめるわけにもいかないけどね…さて、アイズもうちょっとき合ってよ』

『いや、まだ魔力が回復しきっていないだろう？とりあえずコレの捌き方の練習がいいんじゃないかい？』

そう言って、アイズが木槌を担いでこちらに歩いてくる。

うーん。確かにさっき使った分の魔力は減ってるし、槌の動きや間合いは実際にやってみないとわからない。

『そうだね、とりあえずそっちを…』

と起き上がりながら言いかけて、表情が青ざめる。

アイズの背後からスフィア状のショットが30以上の数で飛んできたからだ。

『アイズっ!』

すぐさま飛び出し、アイズの腰を掴んで突き飛ばす。

とっさのことで反応できなかったのか、アイズが木槌を放り出してごろごろと草原を転がり、僕も突き飛ばした反動で反対側にごろごろと転がる。

直後、さっきまで僕が寝転がっていた場所が爆音と共に跡形もなく吹き飛んだ。

もうもうと砂煙が上がるのを呆然と見ながらも、すぐに立ち上がり、敵なのか?と緊張しながら、辺りを見渡す。

だが、目に入っただのはおじいさん一人。

『…エフォニエさん?』

『ふおっふおっふお。うむ、なかなか良い反応じゃの』

茶色の民族衣装を揺らし、笑いながらエフォニエさんが歩いてきた。手には木製の長杖も持っている。

『…っていきなり何するんですかっ!死ぬかと思いましたよっ!』

『大丈夫じゃ。手加減はしたしの…それに、この程度の攻撃を避けきれんでどうする?』

『…確かに』

『いや、アイズ。そこ納得するところじゃないから。普通に避け切れなかったら吹き飛んでたから』

一見まともに見えるのになんでこういうところだけズレてるのかな
あと思いながらアイズにツツコム。

『まあそれは置いておいて…どうしていきなり攻撃してきたんですか？』

アイズが改まってエフォニエさんに問いかける。

『なに、ロナちゃんに頼まれての。お前達の特訓相手というわけじゃ』

『特訓相手ですか…あの、でも、お店のほうは…』

『もちろんロナちゃんに任してきたわい』

『GJです。エフォニエさん』

ロナまで来てたらうるさくなるだろうと思っていたところなので好都合だ。

一応、草原（こい）に来ていることだけは教えていたが、来ては欲しくなかったからこっそり宿から抜け出して来たぐらいだし。

…いや、仲間外れとかにしているわけじゃないんだけど、横からあーだこーだ言われるのは目に見えてたんだよ。ホントに。

『何っ！だとしたらロナ一人で店番をしているんですか！？』

『あー…アイズ。心配なら行ってきたでもいい…』

『もちろん、そうさせて貰う！』

だつと走り出したかと思うと、すぐに点のように小さくなるアイズの後姿……うん。早かったな今は。

『……しかし、ロナちゃんなら悪質な客ぐらい一人で撃退するじゃろうに』

『……ですよー』

なんかいちやもんつけてきた客を簡単にふっ飛ばしてる絵が簡単に頭に浮かぶ。

それぐらい強いから問題はないと思うんだけど……。

『ま、ここ最近二人つきりにさせてなかったし、いいんじゃないですかね』

『うむ、それもそうじゃの。ところでそろそろ始めても良いかの？』

『良いですけど……ホントに大丈夫なんですか？』

いくら特訓だからといって老人を相手にするのはちょっと気が引ける。

『なに、小僧の相手なんぞ、わし一人でどうとでもなるわい』

『ホントに大丈夫かなー……』

『まあ、まずはお互いの実力をわかるために……どれ、軽く一戦しようかの』

そう言うてから、エフォニエさんが杖を持った手を上空に掲げる。

『【我が魔力よ、顕現せよ、形状は槌、その役は打撃、形ある物としてこの世に生まれ出でよ！】』

純正魔法の詠唱。エフォニエさんの手に光が集まり、杖を軸にした緑色の巨大な槌が出来上がっていた。

『ふむ、まあまあな出来具合じゃの。さて始めようか』

『…やってみますか』

そう答えてから、手首に下げていた魔工石に魔力を流し込んで剣を
構築した。^{ブレード}

『ぜえっぜえっぜえっ…』

肺がいくら酸素を取り込んでも満足しない。

なんて文字で書けば簡単に一行で済むが、マラソンをしたことがある人間は大抵わかるはずだ…。

めっちゃくちやつらいということ。

『ふむ、身体能力はそこそこ、といったところじゃの』

『…僕としては、貴方のような、ご老体が、なんでそんな、スピー

ドで、動けるかって、所が疑問だよ』

ばたりと、先ほどとは打って変わって草原に倒れこむ。
正直生きた心地がしなかった。

懷に飛び込んだと思ったら、既に姿がなく、気づいた時には背後から槌の一閃。

距離を取れば、先の一撃のようにショットの大量砲撃。

どちらもぎりぎりで回避・防御が間に合ったからよかったものの、直撃してたら意識飛んでたぞ絶対。

と、安心したのもつかの間。

今度はこちらの番だと言わんばかりに、エフォニエさんが特攻。
至近距離からの槌の連続攻撃。

しかもショットを体の周りに滞空させ、自身に隙が出来そうになったらそれでカバーするといった本格的な業の数々。

正直なところ、ホントにおじいさんなのかと疑いたくなってきているぐらいだ。

『わしは魔法による肉体強化をいくつかしておるからの、それよりもじゃ』

『?』

『おぬしは使わんのか? 肉体強化。結構便利なんじゃが: 適性がないのかの?』

『: いや、単に知らないだけです』

魔法で肉体強化できるなんて初耳だった。

まあ、それ以前に今まで必要なかったから誰も言い出さなかったん

だろうけど。

『ふむ、詠唱文も知らないようじゃの、どれ。これでも暗記しておきなさい』

そういつて、エフォニエさんの手に一冊の古びた本が現れる。

『20分もあれば暗記できるじゃろ。それまでは休憩しようかの』

『…はい』

20分で暗記できるかはわかんないが、出来なければ先ほどと同じように遊ばれるだけだ。

…と言うか、暗記したとしても僕が使えなかったら同じように遊ばれるんじゃないだろうか？…うん、考えないようにしよう。

木の根元に座り込んでから、転送魔法で取り出したのかお茶の準備をしているエフォニエさんの横目に、受け取った本…タイトルは『肉体強化魔法全集』という本を開いてページを捲っていく。

なるほど、これも純正・精霊と分けられてるのか。と、どこか納得しながら読み進めていく。

純正の場合は全体的な性能強化。

魔力を全身に張り巡らせて、筋力・脚力・反応強化が見込めるのと、魔力を硬化化させることで全身を武器とすることが出来るわけか…って、なんか某魔法先生の漫画を思い出してしまうんだが…漫画の読みすぎかもしれない。

ま、まあ、あまり気にしないでおこう。うん。

精霊の場合は限定的な強化。

火・水・風・土とそれぞれ強化が違っていて、
火は純粹に筋力の強化・水は反応の強化・風は速度の強化・土は防
御の特化。

ユリアと出会った時に使ったのはこれと似たタイプだろう。

他にも色々と種類があるが、総合的に能力が上がるのが純正魔法で、
限定特化させるのが精霊魔法と言った感じだ。

『純正魔法の詠唱文はつと…』

今僕が使えるのは純正魔法だけだ。

精霊とは契約したが、当の本人は昨日子供達と遊びすぎたのか、未
だに宿でぐーすか寝ている。

…まあ、この場に居ても使えるかは怪しいが。

読んでいた本をパタリと閉じて、エフォニエさんに返し、立ち上
がって詠唱開始。

『【我が魔力よ、我に纏いて、力を与えたまえ、形状は衣、その役
は強化、形ある物としてこの世に生まれ出でよ！】』

リインツという鈴のような音が響き、白い光が僕の全身に広がる。

『ふむ、案外時間がかかるかと思っておったが、センスだけはある
ようじゃの』

ふおっふおっふおと笑いながら手に持った湯のみを傾けるエフォニ
エさん。

確かに、成功したように見えるのだが…まだわからない。

ちょっと動いてみるか？

そう思って、足に力を込めて、ダンッ走り出した瞬間。

視界が吹き飛んだ。

一瞬で流れていく景色と風を切る音。

酸素呼吸もカバーしてあるのだろうか、これだけ速く走ってもまったく息苦しくもない。

草原を駆け抜け、ウインベルの水堀と城壁のそばまで走り、跳躍。水堀を飛び越え、一度だけ城壁の壁を蹴り、30mはあろうかという城壁の真上まで一瞬で飛び上がる。

そのことに驚きながら、城壁の上に着地、さらに疾走。警備をしていたらしい兵士脇を高速で駆け抜け、こちらに気づくこともなく兵士の姿が後ろに流れていく。

城壁の端まで走り、勢いを殺さず、跳躍。着地。

そのまま元来た草原を走りぬけ、お茶を飲んでいたエフォニエさんの傍まで着てからようやく足を止めた。

『…おぬし、本当に今回が初めてか？遠目から見ておったが、警備兵にも気づかれなかったじゃろう』

『いや、そのことには僕も吃驚しました。』

『しかし、そのスピードで動き回れるなら相手を圧倒することなど簡単じゃろうて』

『だいいいんですけど…勝てるのかまだ不安でして…』

『まあ、勝てる勝てないは別としてやってみるしかないじゃろうて。大事なモンがかかっておるのじゃろう？わしは一年前はそうして戦争に参加しておったわい』

カッカッカツと笑うエフォニエさん。

『あれ？：エフォニエさん、一年前に終わったっていう戦争に参加してたんですか！？その歳で！？』

『うむ、あれは酷かったのう：今の若い者達には経験させたくないもんじゃわい』

どこか遠いところを眺めるような視線でエフォニエさんが言う。
あんまり聞かないほうがいいかな？と思い、特訓の再開でもしてもらおうかと考えたが、先にエフォニエさんが口を開いた。

『東のアストリア王国と西の帝都ウィンベル：その国同士の争いだったのじゃが、最後には神様との戦争になってしもうたからの』

『：神様？』

『おっと。ちと喋りすぎたわい。そろそろ続きをしようかのう』

言い過ぎた。と言った感じで口を手で塞ぎ、お茶の道具を片付け始めるエフォニエさん。

『（しかし：神様、かあ。）』

元の世界で宗教には入っていなかったが、それでも居るのだろうか
そういう存在が？と思う。

だがまあ、異世界で、さらにその世界に飛ばされて、しかも魔法や魔物が存在する時点で、神が居ても全然不思議じゃないと思ってしまうのは、この世界に慣れてきた証拠なのだろうか？と苦笑する。

だけど、元の世界に戻ったらこの世界のギャップが大変そうだと感じる僕だった。

約束の日（前書き）

お気に入り件数100件超えたー>< と、かなり吃驚している作者です。この調子で頑張っていきたいと思っていますので応援等よろしくお願いします。あと、今回はちょっと短めです。

約束の日

『ふわあああ…』

体を起こさず、ベッドに寝転んだ状態で欠伸をしながら全身を一度伸ばす。

以前にも言ったような気がするが、僕は寝起きが悪い。

おまけに血圧も低いらしいので僕の朝は、どうにもボンヤリしがちだ。

そんな寝ぼけた状態に区切りをつけるように勢いをつけてベッドから起き上がり、もう一度全身を伸ばす。

うん、起きた。と思いながら枕元に置いておいた腕時計を見る。

時刻は7時34分：結構なタイムだ。

こちらの世界に着てからも休日はいつも10時から11時ぐらいまで寝ていたので珍しいとも言える。

隣のベッドを見やると、アイズが行儀よく寝ていた。

視線を外し、今度は部屋を見渡す…と言ってもまあ、宿屋の部屋なので家具は殆どない。

机とその上に置いてある小さなランプと大きなベッドが二つずつ。それだけだ。

そのまま窓の外の風景に視線を移す。

窓の淵にとまっていた白い鳥が羽をばたばたと動かし、一気に羽ばたいて飛んでいく。

身体を動かしてベッドから降りて窓際まで歩く。

もちろん、アイズを起こさないようにだ。

そして、あまり音を立てないように慎重に鍵を開け、ゆっくりと開く。

窓を開けると一層太陽光が強くなり始めた気がした。
空に視線を移し、目を細めて空をしばし眺める。

『うん。今日も良い天気だ』

そう言ってから深呼吸。そして…。

『よし、頑張って皇子に勝つとしますか！』

勢いよく、自分の頬を叩いた。

制服よし、ローブよし、魔工石よし、予備のナイフよし…うん、武装関連は問題なし。

全てを身に着けてから、軽く腕を振る…うん、筋肉痛とかもないし…良好良好。

流石に昨日まで5日間ぶっ続けて特訓を行っていたので、筋肉痛とかになってたらどうしようとか不安だったのだが、杞憂だったらしい。

しかし…それより心配だったのはエフォニエさんだ。

僕とアイズが特訓していると、すかさず特訓場所に来てくれて相手を務めてくれたのだが、流石にご老体に何度も何度も相手をしてもらうのも、無理して来てもらうのも気が引けるとその旨を告げたの

だが。

『なあに。散歩のついでじゃから気にせんでよい』

と言って結局5日間相手をしてくれたのだ。

：今頃腰とか痛めてないといいんだけど：と思いながら今度は床に置いておいた鞆をベッドの上に載せ、中身を漁る。

財布よし、携帯よし、ハンカチよし、腕時計よし、学校の図書室から借りた本よし、着替えその他諸々も忘れ物なしと。

ちょうど今日が約束の日で、帝都ウィンベルに滞在できる最後の日でもある。

決闘が終わったらすぐにここを発ち、エルクワールに戻らなければならない。

だから、今のうちに帰る準備とこの部屋を出る準備をしておかなければならない。

『ユキト君、荷物のほうは大丈夫かい？』

アイズも持ち物を整え終えたのか、荷物を部屋の出口脇に置いてから声をかけてくる。

『うん。だいじょぶ。アイズのほうは？』

『ボクも大丈夫だ。それより：その、勝てそうかい？』

アイズにもこの5日間相手をしてもらった。

：まあ、エフォニエさんが来た時は店番に立っているロナのほうに行っていたが。

それでもかなり助かっている。

『うーん。どうだろね。でも…』

鞆の蓋を閉め、肩から提げる。

『負けるつもりはさらさらないよ』

そうニヤッと笑ってから付け加えた。

部屋を出ると、ちょうどロナも隣の部屋から出てきて、『おはよう』とお互いに挨拶。

その後、廊下を通り、階段を下りて、店先に出て掃除をしていた宿の主人に3人揃って頭を下げ、お城への路地を歩き始めると、ロナが口を開いた。

『そういえば、ユキ。あれからユリアと連絡取ってるの?』

『うん? ああ、たまに寝る前にちよつとだけ念話で…』

最初はなんだかよくわからんが、かなりテンパってる心理状況で念話してきたせいか、会話内容が凄かったなあ。

と、歩きながら会話内容を思い出してみる。

『…うん、凄かったなあ』

『なんで急に遠い目して黄昏てんのよ』

『あー。人間って焦ると凄いだなあと思い出してたところ』

『はあ?』

わけがわからないといった感じでロナが首を傾げる。

いやあ、軽くトラウマになるレベルの話だし、言わないほうがいいだろう。

と言うか、僕もぶっちゃけ思い出したくない。

『まあ、元気にはしてるみたいだよ。今日も結果を見届けるために訓練場に来るだろうし、会えるんじゃないかな？』

『そっか。よかった。ちょっと小物で似合いそうなのあったからプレゼントしたかったんだ』

嬉しそうにロナが言い、小物が入っているだろう小さな紙袋を鞆から取り出し、ひらひらと僕の目の前で振って見せる。

それを見て、僕はちよっとだけほっとしていた。

いくら分け隔てなく友達になれるロナと言っても、やはり限界はあるだろう。

それが、皇族となると…と、少しだけ心配はしていたのだが、やはり杞憂だったらしい。

『でも、気に入ってくれるかわかんないぞ？』

『えー大丈夫よ絶対。ねえアイズ』

『うむ、ボクも大丈夫だと思うよ』

『なんだ。アイズも一枚噛んでるのか』

『その…悪巧みに加わってるような言い方はやめてくれないかユキト君』

と、和やかに雑談しながら、お城に向かって路地を進んでいく。
路地の角を曲がったところでまたロナが口を開く。

『でー？ 実際勝てる見込みあるの？』

『うーん。まあ一応？』

見込みがないわけじゃあない。

伊達にこの5日間頑張って特訓してはいない。

『しっかりしなさいよーユリアの人生かかってるのよ？』

『…いや、人生まではかかってないような気がするんだけど…』

『何言ってるのよ。今の状況は人生損してるとしかアタシには思えないわ』

『……………』

いや、まあ、確かに人によってはそう見えるかもなあ。
でも…

『ま、それもまた一つの見方だな』

今説明しても納得しないだろうなコイツ。

『何言ってるのよ。誰がどう見ても不幸にしか見えないわよ』

『あーはいはい。そうですねーその通りですねー』

だからまあ、とりあえずこの場合は適当に話を切り上げ、話を切り替えることにする。

『そういえば今気づいたんだけどさ…あいつどこよ？』

『あいつって？』

『精霊』

『ああ、まだこの中でぐっすり寝てるわ』

そう言って立ち止まり、肩から提げていた鞆の蓋を開けるロナ。

アイズと揃って鞆の中を覗き込んでみると、畳んだタオルの上に小さく丸まって眠りこけている真っ白な巫女姿の精霊が一名。

その様子を見て僕とロナとアイズが口を開く。

『…と言うか、はじめて見た時も聞いたけど…ホントにこれ精霊なの？』

『さあ…本人はそう言い張ってるけど…』

『でも精霊って普通は見えるものじゃないだろう？』

アイズがそう言い終わり、3人揃って無言で顔を見合わせ、無言で蓋を閉じる。

『ま、あとでまた考えましょ』

『だな』

『だね』

そうこうしている内に小さく見えていたお城がだんだんと大きく見え、大きな城門が目に入ってくる。

到着すると城門脇に居た門番さん二人は最初訝しそうにこちらを見いていたが、僕が皇子と約束していることを告げると、すぐに門を開けてくれた。

場所は予めユリアに教えて貰ってあるので迷うことはない。

わき道を通り、中庭を通り抜け、少し開けた広場のような場所を通り抜けると、お城に使われている白いレンガとは別の赤褐色のレンガで出来た大きい建物が目に入ってきた。どうやら、あの建物が目的地の訓練場らしい。

『…どこから入るんだろ？』

『さあ…』

壁は見えたのだが、入り口が見当たらない。

そのまま左へ壁に沿って歩いていくと、どうやらこの壁は緩やかな曲線を保っているようだ。

もしかしたら円形のドーム状に出来た建物なのかも…と思いながら歩き続けていると、ようやく入り口らしき場所が見えた。

建物の中に入ると、今度は左右に道が分かれている。

どっちに進もうか？と3人で悩んでいると、ちょうど灰色の鎧を着た兵士らしき人が通りかかった。

『その3人。ここで何をしている』

『あ、すいません。クール皇子に呼ばれてここに来た者なんですけど…』

『ああ、君か。話は聞いている。案内しよう』

そうやって先を歩き始める兵士さん。結構歩くスピードが早いので慌てて僕たちもその後を追う。

『しかし…君勝てるのかい？』

『え？』

『いやあ、結構城の中で噂になっててねえ』

苦笑いしながら兵士さんがこっちを見る。
って噂って…。

『あの…そんなに噂になってるんですか？』

『ああ、城の殆どの兵士やメイドたちも知っているよ』

うへえ…またアイズの時みたいに観客とかいないといいんだけど…。

……無理か。っていうか諦めよう。

と、僕がげんなりしているとロナが口を開いた。

『やっぱり皇子って強いんですか？』

『そりゃあ強いよ。たぶん將軍も敵わないんじゃないかなあ』

『そ、そんなに強いんですか…』

ロナが驚いたように兵士を見てその後、どうするのよ。と言った感じにこちらを見る。

いや、そんなこと言われてもなあ…結局はやるしかないし。

『まあ、頑張ってくれよ少年。皆期待しているんだから』

『…できる限り頑張ります』

もう色々と諦めたいけど…と心の中で嘆きながら答えた。

右に曲がったり、左に曲がったりしながら通路を進んでいると、小さな小部屋に通された。

闘技場の控え室って感じだなあ…殺風景だし。

『じゃあ、合図があったらこちらから出てください』

『…はあ。わかりました』

そう言われて、小さなベンチがあったので荷物を床に置いて座る。

『お友達の方はこちらのほうへどうぞ。観客席がありますので』

そう言って、兵士さんが別の出口のほうに歩き出す。

『あ、そうなんですか…じゃあユキ。絶対勝ちなさいよ?』

『ユキト君。頑張りましたえ』

二人が笑って小部屋から出て行き、僕一人が取り残された。

『さて、と…』

ゆっくりと立ち上がり、ちょっと緊張しているようだったので全身の筋肉をゆっくりと解してゆく。

そうこうしている内に、先ほどとは別の兵士さんが部屋に入ってきた。

『準備は終わりましたか? 皇子が中央でお待ちです』

『そうですか…わかりました』

兵士が出て行くのを見送り、軽く全身をチェック…そして。

『よし、頑張りますか!』

気合を入れて、部屋を出た。

決闘（前書き）

すいません。一時間ほど投稿が遅くなりました。実は気に入らないところを直前まで手直ししてたので…お待たせしてしまって申し訳ありませんでした。

決闘

部屋を出ると、円形の広場の様な場所に出た。

社会の教科書に載ってた中世のコロシアムのような形で、向こう側まで距離があるのでかなり広いと思われる。

物珍しさも手伝って、おおーと思いながら辺りに視線をやり…肩を落としてげんなりする。

『（観客…多すぎないか？）』

コロシアムの外周は基本的に壁になっていたのだが、一段高いところに3つの観客席スペースが設けられていた。

その観客席の一つは兵士の格好をした人達で埋め尽くされ、もう一つはメイド服を着た人達で埋め尽くされている。

恐らく先ほどの兵士さんが言っていた、噂を聞きつけた集団なのだろう。

…しかし、どれぐらいの人数がお城で働いているのかは知らないけど、お城がもぬけの殻って状態になってないだろうな？と若干不安になる。

そして、最後の1つの観客席にはアイズとロナがぼつんとイスに座ってこっちを見ていた。

ロナと視線が合うと、ニヤリといった感じで笑い、アイズがその様子を見て苦笑する。

やれやれと思いながら視線を僕が出てきた小部屋の向かい側に向ける。

背は僕と同じぐらいの灰色にも銀色にも見える髪 of 青年がこちらに向かつて歩いてくる。

最初に会ったときは高そうな礼服を身につけていたが、今は頑丈そうな灰色の金属鎧に赤いマントを羽織り、そして落ち着き払った表情をして、僕の前に立ち、一言呟く。

『よし。じゃあ、早速始めようか』

『挨拶もなしにそれかい』

げんなりしながらクール皇子に突っ込みを入れる。

『冗談だ。まだ姉ちゃんが来てないからな』

『あー：そういうえばヴァイオリンの練習が入ってるって言ってたな』

昨夜ユリアと念話で会話したときに言っていたのを思い出す。

『まあ、気長に待つか…』

と、言った瞬間。しんと空気が張り詰めた。

先ほどまで観客席から聞こえていたざわめきがピタリと止まる。

なんだろうと思いつながら観客席を見渡してみると、兵士もメイドもイスから立ち上がり皆、頭を下げている。

ロナとアイズが居た観客席に視線を移すとユリアが歩いてくるところだった。

王様との謁見中に飛び込んできた時と同じグリーンのドレスを纏い、髪は宝石が幾つか埋め込まれたティアラで飾っている。

こういうところを見ると、やっぱりユリアってお姫様なんだなあと

思っていると、のんきな会話が聞こえてきた。

『あ、ユリア。やっと来たんだ』

『ごめんね、ロナちゃん。ちょっとヴァイオリンの練習が長引いちやってて…』

『……………』

うーん。ダメだ。ユリアには悪いけど、やっぱりお姫様って気がしない。

やっぱり友達って認識のほうが強いせいか。

思っていると、ユリアがこちらに視線を向け、にっこり微笑みながらこちらに向かって手を振る。

『ユキトさーん。がんばってくださいーい』

『……………』

のほほんとした声がコロシウムに響く。

それと同時に軽いざわめきが観客席に広がり、視線を感じる。

観客席を見渡すと、軽い嫉妬の視線と興味の視線が僕を見つめていた。

『（…まあ、これだけ親しくしてれば興味も沸くか）』

と感じていると、強烈な嫉妬の視線を前方から感じて、視線を戻す。なんか…めっちゃ殺気を含んだ目で僕を見ってくるクール皇子が居た。

あ、やべっこれ死亡フラグ立ってるんじゃないかと、さらにげんなり

しながら思う。

『…では、そろそろ決闘を始めさせてもらってもよろしいかの？』

兵士やメイド達のざわめき中、よく通る声はつきりと聞こえた。声が聞こえた方：ユリア達がいた観客席にいつの間にかいかにも初老といった感じのおじさんが立っていた。

様々な色彩で紋様が描かれたローブを羽織り、髪は茶髪に白髪混じりだ。

『俺は問題ない』

『僕も大丈夫です』

『うむ、では始めるとしよう。両者誓いを申せ』

誓い？と怪訝に思いながら視線をクール皇子に向けると、先程のような嫉妬の視線は消え、真っ直ぐこちらを見て姿勢を正したクール皇子が口を開く。

『俺、クール・リミリア・ウィンベルは全力で持って戦い、俺が負けた時、ユキト・ウォンスールとの約束を果たす事をここに誓う』

おおーちゃんと言うのか…うん、これは期待できそう。って僕も言わないと…。

『僕、ユキト・ウォンスールは全力を持って戦うことをここに誓います』

これでいい…かな？

『両者。それでよいな?』

『問題ない』

『大丈夫です』

『では、両者構え』

審判のおじさんが構えと言った瞬間、クール皇子の手にハンマーが現れ、両手で握る。

それに習い、僕も短剣を腰から引き抜こうとして、一瞬迷った後、手首に下げていた魔工石を握って魔力を流し、剣を構築する。

『では、始め!』

開始宣言と共に僕は地面を蹴った。

『いくぜっ!』

先手必勝!とばかりに俺は左手を突き出し、魔力を球状に固め、それを愛用のハンマー…『アインレリック』で叩き出す。

アインレリックの形状は木槌に近い。だが頭の部分はワイン樽の様にかなりデカイし、柄は身長以上の長さを誇る大きな槌だ。

柄の端に黒い魔法玉が詰め込まれており、これは魔力を増大し純粋に力や破壊力を増すための物だ。

そして、小さい頃から暇を見つけては常に練習している、魔力を球状に固めるこの魔法『魔力球』は他人には見えない。

これは元々無色の魔力を練り上げて固め、それを飛ばすことで相手に察知させずに攻撃できる。

もちろん詠唱もいらないから気づかれずに創り出すことが出来るし、察知魔法と呼ばれる警戒用の魔法でも反応が出ないというかなり優れた技だ。

今までこれを避けた人間を俺は二人しか知らない。

一人は俺の師匠。もう一人は…目の前の男だ。

最初にこれを目の前の男…ユキトが避けた時、かなり驚いた。

師匠でも3発目からようやく対応したというのに、ユキトは1発食らっただけで即座に対応したのだ。

奴は勘だと言っているが、正直怪しいと俺は思う。何故なら…。

フェイントやブラフも含めた魔力球を10発以上放っているというのに、今も余裕で避けているからだ。

体を反らしたり、屈んだり、時には右手の剣で弾いたりして避け続けているが、基本的に余裕がある様に見える。

『くそつてめえ！どうやって避けてやがる！』

苛立ち紛れに叫びつつも攻撃はやめない。

『色々理由はあるけど、明かすつもりはない!』

今度こそ、直撃。と思ったコースで魔法球を飛ばすが、またしても半身を逸らすことで避けるユキト。

『(なら、これでどうだ!)』

魔力球6発を横一列に配置。空中に固定。それを一薙ぎして一斉に飛ばし頭を狙うと同時に駆け出す。

案の定、上体を反らして避けるユキト。だが、俺が狙っていたのはその避け方だ。

魔法球の後を追うように駆け出していた俺はユキトが上体を反らした瞬間、獲物を真っ直ぐに振り下ろした。

しかし、避けきれないと判断したユキトは、

『【汝、力を糧に我が前に示せ、盾!】^{シールド}』

呪文を早口で唱えて左手を翳し、白い盾が現れる。

だが、盾が意味を成さないのは初対面の時にわかりきっている。

よって、俺は盾を壊してユキト本体を叩き潰すためにそのままの勢いで盾を叩きつける…だが。

ガイイン!という音と共に、アインレリックの頭の軌道が逸れ、同時にドスン!と言う地面を叩く音が辺りに響く。

盾に叩きつけたはずなのに、盾は健在したままだ。

『(たった一週間近くでそこまで盾の強度が上がるのか!?)』

予想外過ぎて、しばらく…と言っても時間にして3秒にも満たない時間だったが、俺は呆然としてしまう。

そして、その隙を逃さないと言わんばかりに、ユキトが右手に握っていた剣を横薙ぎに振るってきた。

だが、俺が着ている鎧はそれなりに強度が高いし、何よりこの程度で貫かれる心配は毛頭ない。

ガギンッ！という音が剣と鎧から響き、当たった瞬間に小さな火花が散る。

剣が弾かれ、微かに右手が痺れたのか、顔を顰めるユキト。

その顔を見て、ようやく呆気に取りれていたのが解け、慌ててインレリックを横薙ぎに振るう。

またも盾が壊れずユキトが吹き飛び、ごろごろと地面を転がっていく。

その様子を見ながら、俺はインレリックを何度か左右に振るう。違和感は…ない。いつも通り、いや。いつも以上に調子が良いと言ってもいい。

だけど、先ほどは盾を突き破れなかった。

これは本気の本気で討ちかからないといけない。そう心を改め、転がっていくユキトを追撃すべく、地面を蹴った。

まずい。そう思ったときには既に遅かった。

咄嗟とはいえ盾で防いだが勢いを殺す事もできずに、そのままごろごろと地面を転がる。

『けほっ…うええ、砂が微妙に口に入っただけ…』

素早く立ち上がり、涙目になりながらも何度か口の中に入った砂を吐き出す。

そして視線をクール皇子に移すと、怪訝な顔をしながら何度かハンマーを振るっている。

どうやら、盾で受け止められたことが相当不可解だったらしい。

と言っても実際のところ特別なことは何もしていなかったりする。ようは受け止めるから割れるのだから、受け止めずに受け流せばいい…そう思って、僕は盾をわざと斜めに展開して、力点をずらして受け流しているに過ぎないのだ。

『（まあ、説明したら絶対突破されるだろうから言わないけど…）』

そんな事を思いながら、右手をぶらぶらと何度か振るう。

先ほど剣で鎧を切った瞬間、痺れてしまっていたが、少しずつ感覚が戻りつつある。

『（まず、あの鎧が邪魔だな）』

そう思っていると、クール皇子が突撃してきた。

どうやら魔力球での攻撃は無駄だと判断したらしい。

まあ、これも反則的な方法で避けてただけで、クール皇子の思考を読んだだけである。

視線をずっと合わせ続けなければいけない上に、撃ち出される瞬間を読まないと即座に直撃していたと思う。

ハンマーの横薙ぎを背後に飛ぶことで避け、エフォニエさんに教わった魔法を試すことにする。

『【我が魔力よ、守りし鎧を切り裂く刃となれ、その刃をもって鎧を破壊せよ、鎧破壊！】
アーマーデイズトラクション』

左手に白い光に包まれ、それをそのまま目の前のクール皇子が着ている鎧に叩きつける。

次の瞬間。バキャンッ！と耳障りな音が盛大に響き、着ていた頑丈そうな鎧が木っ端微塵に吹き飛んだ。

『…は？』

クール皇子が自分の懐を見つめて間拔けな声を発する。

その反応を見た僕もキョトンとする。

え？あ、あれ？実戦で使ったのは初めてなんだけど…これ結構メジャーな魔法じゃないの？なんで観客席の人間までポカーンとしてるの？と、いまいち状況がよくわからない。

と、今のうちにと。

アーマーデイズトラクション
鎧破壊の反応は予想外だったが、いつだったかのアイズのように首筋にナイフを突きつける。

ようやくナイフを突きつけられたことに気づいたのか、はっとした顔でこちらを見て、表情を歪めるクール皇子。どう転んでも、避けられる距離じゃないのは明白だが、一応聞いておく。

『…まだやります?』

『…くそっ! 降参だ!』

降参と言う言葉を聞いた瞬間。ほっと一息吐いて、僕はナイフを引いた。

決闘（後書き）

はい、なんとか書き上げました。今回は初の試みが多かったので、投稿が遅くなってしまった事を深くお詫び申し上げます。初の本文中の視点変更は如何でしたでしょうか？初の試みなのでこれについての感想が一番聞きたかったりします。

さて、今回の投稿に4週間も空けてしまいましたが、最近は仕事が忙しかったりするので、どうしても執筆時間が取れなかったりします。ですが、これからも出来る限り頑張っていきたいと思っていますので、これからも応援等よろしくお願いします。

言葉（前書き）

な、なんとか完成しました。実は投稿する10分前まで手直ししてたのですが、結局終わりませんでした（涙　なのでもしかしたら誤字脱字があるかもしれませんが、生暖かい目で見てもらえると幸いです。

言葉

『そこまで、勝者。ユキト・ウォンスール！』

審判をしていた初老のおじさんが一拍遅れて宣言すると、途端に呆けていた観客達が騒ぎ出した。

何を言っているのか細かい発言は声が折り重なることで判別できないが、「凄い」やら、「今のはなんだ」やら、そういった発言が聞こえてくる。

そういった声を聞き流しながら、僕は溜息を吐く。

『（な、なんとかなったー…）』

吐き出すのは安堵の溜息。

正直な感想を言うと、本当に何とかなってよかったと思う。

戦法は卑怯極まりない方法だったからだ。

相手の目を逐一見ての戦術の先読み分析。

エフォニエさんに教えて貰った呪文は何故か異常発現。

『（でもまあ、戦術をあんまり広めずに勝てたし、よかったよかった）』

少なくとも肉体強化魔法や、アーマードイストラクション鎧破壊以外の教えて貰った魔法など、その他に自力で考えたり、編み出したり用意しておいたりした手札は使わずにすんだ。別にバレても問題はないと思うのだが、今後は誰が見ているのかわからないうちは手札を不用意に晒すつもりは毛頭ない…影でこっそり練習はするだろうけど。

そんな事を考えながら、ナイフを腰の鞘に仕舞い、剣の構築を破棄する。

すると、クール皇子もハンマーを消滅させてから話しかけてきた。

『約束だ。これからは攻撃しないと約束する』

『ええ、たぶん最初は手を出しそうになるだろうけど頑張ってみてください』

苦笑いしながら考えを伝える。

たぶん、最初の一人は犠牲になるだろうと僕は予測している。

『大丈夫だ。一度した約束は必ず守る』

『おお。これはホントに期待できそう』

思わず小さく拍手。

そうしていると、真剣な表情でこちらを見つめてくる。

なんでそんな顔で見えるんだろうと疑問に思っているとクール皇子が口を開いた。

『なんで：何故お前はそこまでする？』

『はい？』

言葉の意味がよくわからない。

『”友達”はここまでするのか？』

『します』

即答する。

その発言に驚いた表情をする皇子…その表情を見て、やっぱりこの子もかといふ思ってしまう。

『皇子、無礼を承知で発言させて頂きます。どうかご容赦を…』

『かまわん。それから改まった口調は気分が悪くなるからよせ』

『では、いつも通りに…。皇子にはもっと周りの人間を信用するようにしたほうが良いと思ってます』

『俺は側近共には気を許しているつもりなのだが…』

『そういう意味ではないです。もっと単刀直入に言えば…友達を作れと言うことですよ』

『友達…』

たぶん、この子は姉のことばかり気にして、友達を作るという考えも持たなかったと予想してたのだが…見事に的中していたらしい。

姉だけを見ていれば、周りのことにも目を向けられない…だからこそ知って欲しいと思う。

『皇子。いつかは貴方が国を支えるような事があるかもしれません。しかし、その時信用できる友人や家族がいないと簡単に潰れてしまいます』

少ししか話をしたことがないが、あの王様はそう簡単に倒れるとは思えない。

だが、絶対に倒れないとは言えないし、万が一ということもある。そして、その時この一人ぼっちの子が国を一人で支えられるかと問われると、心許ない。むしろぞつとする。

恐らくユリアも手伝おうとするだろうし、まだ会った事もないが王妃様も支えてくれるだろう。

だけど、それだけじゃ足りないし、どうしても溝が出来てしまうと思う。

だから早いうちから友達というものを作って欲しいと思う。
大事な時に相談したりできる友達というものを…。

『（…そういう意味ではあいつは当てはまるのかもな…）』

元の世界の学校の悪友を思い出し、苦笑しながら続ける。

『だから、できるだけそういう方を作るように努力してみてください。これは僕からのお願いでもあります』

『…そうか、わかった努力してみよう』

『そうしてください』

話を終えて、決闘が終わった時とは違う溜息をほっと一息吐く。
わかってもらえてよかったと…心からそう思う。

『（これで僕の役目もおしまいっ…）』

会話は聞こえていないだろうけど…と思いながら観客席にいるユリ

アに視線を移す。

『やったー』と嬉しそうにロナとはしゃいでいるユリアを眺め、よしと踏ん切りをつける。

『さて、と。それじゃあ僕たちはこれで…』

『む？どこへ行くのだ？』

『どこって…自分の街に帰るんですけど…』

流石に帰らないとまずい。主に学校の授業が。

『ふむ、時間がないのか？』

『と言うか、今から帰っても間に合うかどうか…』

週明けの授業…寝ないといいんだけど…いや、たぶん寝るな。ロナ以外は。

『姉ちゃんに今、念話で聞いたのだが…歩きでエルクワールなのか？』

『そうですそうです』

今から街を出て、森を休みなしで歩けば、たぶん明け方にはエルクワールに着くだろうと見積もっている。

ちなみに休みなしで歩くことに關しては、既にロナとアイズに話をつけてある。

まあ、当然のようにロナは夜に弱いため途中から僕とアイズが交代で背負うことになっているし、二人には後日食事を奢ることで納得

して貰っている。

『そうか、姉ちゃんが寂しがりそうだな…』

『それはまあ…』

たぶん、そうなるだろうけど…今の僕にはどうしようもない。

『でも、最後の別れてわけじゃないですから。会おうと思えばいつでも会えますよ』

4年前のあの時のような事が起きない限り、二度と会えないなんてことはないと思う。

『それもそう…だな。それじゃあ元気だな、ウォンスール』

『皇子、お言葉ですが。友達なら名前で呼んでほしいものなのですか？』

『友達？俺とお前が…か？』

クール皇子の表情が驚いたような顔をしたあと…うーん。と思案する顔に変わる。

『何ですかその顔は…ちょっと傷つくんですが』

『いや、すまん。嫌というわけではないのだ。ただどう反応しているものか迷ってしまっただけ…』

初めての友達に対してどう反応すればいいのかわからない…ああ、

本当にこの子友達いなかったんだなあと思いながら肩をすくめる。

『…それに、友達なら俺のことを「皇子」と呼ぶのはおかしいだろう』

ふむ、言われて見れば確かに…。

『それもそうですね…では、』

こほんと咳払い。そしてにつこり笑って、右手を差し出しながら言う。

『これからよろしく。クール』

『うむ、こちらこそだ。ユキト』

そう、お互い笑いあって握手することになった。

『さって、じゃあ帰るかね』

『ちょっとお待ちになっていただけませんか？』

『うん？ユリア？どしたの？』

いつのまにか観客席から広場のほうに降りて、こちらにゆっくりと歩いてくるユリアが声をかけてくる。

後ろには先ほど審判をしていた初老のおじさんとロナとアイズもいる。

『お母様が一目お会いしたいと言っていますのでちょっとだけ時間を割いてもらえませんか？』

『…お母様？』

お母様：ユリアのお母さん？ってことは皇妃様…だよな？

なんでそんな人が…と思いながら、「だいじょぶかな？」と言った視線で後ろの二人を見る。

『うーん。急ぎたいのは山々だけど、急いでも夜通し歩くことは決定事項だし、ちょっとぐらいいいんじゃない？』

『ボクも同意見だよユキト君』

『そっか。じゃあ会いに行ってみるか』

そう答えると嬉しそうに笑うユリア。

『じゃあアタシ達は門のところで待ってるわね』

『あ、ボクはちょっと席を外すよ。皇子が話があるようだから』

『皇子と？』

『すまん。ロナ・ポナルル嬢だったか？少しの間彼を借りるぞ』

『別に構いませんよーじゃあまた後でねユキ、アイズ』

ぶんぶんと手を振ってから広場の出口に消えるロナ。
それを見送ってからアイズが口を開く。

『ではボク達も行くとしましょうかクール皇子？』

『ああ、じゃあまたなユキト』

ロナのあとを追うようにアイズとクールも出て行き、いつの間にか
審判のおじさんも居なくなっていて、僕とユリアだけが広場に残る。

『それじゃあ、わたしが案内しますので、もうちょっとだけ一緒に
すね』

『そうだな、あと遅れたけどおめでとユリア』

『もう！ユキトさんのおかげなんですよ？お礼を言うのはこっちで
すよ』

両手を握ってぶんぶんと上下に振るユリア。

うん…まあ、喜んでくれてよかったよかったとちょっと照れながら
思う。

訓練場を出て、城に入り、廊下を通り、一週間前にも見たことがあ
る扉の前に立つ。

王様と会った謁見の間だ。

『さあ、こちらですよ』

ユリアが意気揚々と扉を開け放つ。

一週間前は何の知識もなく入った部屋だが、今は違う。明らかに皇族がいるという部屋。だから心の準備ぐらいはさせて欲しかった。

『あら、来たようね』

聞こえてきたのはどこかのんびりとした声。

一週間前とほぼ変わらない部屋の中で一点だけ違う。

前回は王様が座っていた椅子に女性が座っていた。

部屋に踏み込み、ある程度歩いたところで跪き、頭を垂れる。

そして顔を上げ、一目見て驚く。

王様の年齢を尋ねたことはないが、少なくとも30代後半から40代ぐらいのはずなのに、女性が20代後半ぐらいに見える容姿なのだ。

王様の表情からは年齢は何えたが、目の前に座っている女性は見当もつかない。

『（ああ、だからユリアの身長が小さい…のか？）』

遺伝なのかも、と思ったあと。ここは異世界だったということを出す。

まだあまり年齢を尋ねたことはないが、年齢と容姿が合わないなんてことはさらにありそうなので、あんまり気にしないことにした。

王様と同じように身長や体格は椅子に座っているせいでよくわからない。

だが、座高は低いので椅子の背が見えるのでそこまで身長は高くない。

いと思われる。

服装も王様と同じように豪華ではないがどこかサッパリとした白いドレスを着て、そして鮮やかな銀髪に頭には白金色の王冠を着けている。

って思わず、まじまじと観察してしまった。と今更になって焦っている。と皇妃と目が合い、にこりと笑われる。

『うふふ。そんなに珍しいかしら？』

『いえ！すいません！珍しいわけじゃなくて…そのお綺麗だなと…じゃなくって！』

自分でも何を口走っているのかわからなくなり、慌てて頭を下げる。背中に冷や汗が流れているのが感覚的にわかり、顔が赤くなっているのを自覚する。

『…ユキトさん？』

…なんだろう。ものすごく冷たい声が聞こえる…。声がしたほうに顔を上げてみると、ユリアが冷ややかな目でこちらを見ていた。

『えと…僕、何かしたか？ユリア？』

『いえ、してませんけど…なんかイラッとしました』

『なんか理不尽なことで睨まれてる！？ってすいません失礼しました！』

思わずツツコミを入れてしまっってから慌てて謝る。

忘れちゃいけないけどここは謁見の間だ。失礼のないようにしないと…。

『うふふ。いいのよ別に本当なら別の部屋がよかったのだけれど、側近の方々が納得してくれなくてね』

世間話をするかのような声で言われ、部屋の端で控えていたらしい側近の方々がコホンと咳払いをして、思わず僕も苦笑いする。

…未だにユリアが睨んできているが、今だけスルーすることにした。

『では、改めまして。皇妃のアルテ・リミア・ウィンベルです。よろしくねユキトさん？』

のほほんとした空気に皇妃の声が響いた。

言葉（後書き）

近況なのですが、最近忙しいせいか投稿が後れがちです。なるべく努力していきますので、これからも見捨てないで頂けると幸いです。どうぞこれからもよろしくお願いします。

別れ（前書き）

とりあえず短いですが投稿。謝罪等は後書きにてさせていただきます。

別れ

『えと、こちらこそはじめまして。ユキト・ウォンスールといいます』

再び頭を下げ、そのまま待つ。

『顔をあげて下さいなユキトさん。貴方のことは娘からよく聞いていて一度お話してみたかったから呼んでみたの』

『そう…ですか』

顔を上げ、皇妃の目を見ながら答える。

よく聞いていて…どんなこと喋ったんだろう？と思った矢先に皇妃が口を開く。

『なんでも、随分と親しくしていただいたとか。主に露店での事とか』

『ぶふっ』

何言い出すんだこの人！と思わず噴出し、ユリアを軽く睨むと目を逸らされる。

服の事を喋ったのか、実際に見せたのかは知らないが…後者でないことを祈りたい。

『…大した事はしておりません』

どちらにせよ、こう言って逃げるしかない。

と言うか、これ以上この話題を追求されたくない。

『うふふ、謙遜なさないで下さいな。これからも娘と仲良くしてあげてくださいね』

『えと、出来る限りは』

これからしばらくは別れるのだから、こう答えるしかない。
その言葉に満足したのか、笑顔でさらに問いかけてくる。

『そうそう、それから娘をかけてクールと戦ったのよね？どうなったのかしら？』

『え？えーっとその…』

色々と認識が間違ってるんだが、どう答えたものかと少し迷う。
だが、答える前に部屋の隅に控えていた側近が玉座のほうへ歩み寄る。

『皇妃様。お楽しみのところ申し訳ありませんが、そろそろご公務のお時間です』

それを聞くと側近のほうに視線を向ける。

『あら、もうそんな時間なの？仕方ないわね』

のほほんとそう言って玉座から立ち上がる。

『ユキトさん。貴方はこれから南のエルクワールに帰るんですね』

？学生さんなのかしら？』

『はい、そうです』

『学校の名前は…エルクワールでしたっけ？何年生なのですか？』

『え？…ええと、一年生ですが…』

なんでこんな事聞くんだろう？

と、僕が首を傾げていると、ふむふむと目を閉じて頷き、にこりと笑う皇妃。

『ふむ…なるほど、わかりました。では、道中お氣をつけて…』

『ありがとうございます。それでは、これで失礼します』

立ち上がり、頭を下げ、素早く謁見の間から退室する。

ガチャリという音が響いてドアが閉められ、思わずほっと息を吐き出す。

『き、緊張した…』

『そういえば、お父様のときは緊張してませんでしたよね？』

『いや、あの時は何もかもがいきなり過ぎて緊張とかしてる状況じゃなかったし…ってユリアも出てきたのか』

『ええ、だってお見送りたいじゃないですか』

『ま、いいけど…しかし、なんで学年まで聞いてきたんだろ？』

どうでもいいと思うんだが…。

歳が気になったとか？…いやでも、こっちの世界の学校って学年と年齢は関係ないしなあ。

『ユリア、理由わかる？』

『いえ、全然わかんないですよ？』

お互い首を傾げて考えるが、思いつかない。

『まあ気にしてもしようがないし、城門のところまで行こうか』

『…はい。そうですね』

しよんぼりとした感じで答えるユリア。

…しばらく会えないんだし、こうなっちゃうのも仕方ないか。

『ほら、しよぼくれてないで行こうユリア』

『しよ、しよぼくれてなんて…なんて…なんて…』

だんだん語尾が弱まっていき、じよじよに目が濡れはじめるのを見て、慌てて頬を掴んで思いっきり引っ張る。

『ふにやつ！にやにしゅるんでひゅかつ！』

って思わず掴んだけど…意外と伸びるなユリアの頬って…まずい、これ面白い。

『……………』

『むほんでこんにゃにひっぱらひやいでくだひやいよー!』

両手を振り回し始めたので手を離すと、両頬をぐりぐりと擦り始める。

『ううう、痛かったです』

『ふむ…』

僕はというと、まじまじと自分の手を見つめ、ぼそりと呟く。

『感触が意外と悪くなかった…』

『ぼそつと不吉なこと言わないでください』

ささつと距離を取るユリア…うーん。割と好みの感触だったからもう一回ぐらい…。

『嫌です!』

『…まだ何も言っていないんだけど…』

『顔を見ればわかります!』

…顔を見ればわかるって、そんな顔してたのか僕。とちよつと凹む。

『まったく、脈絡もなくこんなことしないでくださいよ』

『いや、ちゃんと理由あるぞ？ユリアが泣きそうだったから、仕方なく…あ』

ついぼろつと本音を言ってしまい、思わず顔を逸らす。

『…ま、とりあえず行くか』

『りょーかいです』

ちらりとユリアの顔を見ると案の定ニヤニヤ顔だ。

けどまあ、気分が少しだけ晴れた様なので…ちよつとだけむかつくが、今は気にしないことにした。

『あ、やつと来た。ユキ遅いよー』

『まあまあ、時間を指定してなかったのはボクたちも一緒な訳だし』

『うむ、遅かったなユキト』

城門の近くでロナとアイズとクールが待っていた。

それに片手を挙げながら答え、皆が待っているところまで走る。

『ちよつと色々あったから時間かかったんだよ』

『母上の話とはなんだったんだ？』

『これからも娘と仲良くしてくださいって話だよ…たぶん』

よくわからない質問もあったが、総じて仲良くしてくださいって話だったし、変なことは言われてない。

だから、まあこの答え方で間違いはないはず…。

『ふむ、そうか…じゃあ杞憂だったな』

『うん？何が？』

『いや、どうやら姉ちゃんが学校に通うかもしれないって話があったからな。だからもしかしたらユキト達の通う学校に入学する話なのかと思ってたんだよ』

『え？そうなの？』

『って、姉ちゃん知らなかったのか…』

クールとユリアが話しているのを聞きながら、僕は嫌な予感を感じる。

ああ、だからあの皇妃はあの時あんな質問をしたんだろう。面白いと言う理由とかじゃなく、娘のためを思って。

だからまあ…今後の展開を予想すると思わず溜息が出る。

『はあ…』

『どうかしたのかい？ユキト君？』

『いや、フラグが立ったなあと憂鬱になってただけ』

『ふらぐ?』

『気にしないでくれ。と言うかこれ以上喋りたくない…』

げっそりとしながら俯く。

でもまあ、別にユリアと居ることが嫌なわけじゃないのでそれほど気にするほどでもないか?と前向きに考えていると、ロナが僕の肩をつついてきた。

『ほら、ぼーっとしてないで、そろそろ行くわよユキ』

『ん、ああ。時間そろそろやばいか』

ユリアとクールに気づかれないように腕時計をこっそり見てみると、既に11時を指していた。

うん、そろそろ出ないと明日の朝に間に合わない。

：朝に間に合わないって変な言葉だけど。

『それじゃあユリア、クール。またな』

そう言うてから、手を上げる。

『おう。またどこかでなユキト、アイズ』

クールも手を上げ、僕とアイズとハイタッチ。

『ロナちゃん。またどこかでね』

『うん、またねユリア』

ユリアはロナと抱き合い、挨拶を済ませる。
城門から出てお城を振り返ると、まだ門番の人と一緒に手を振ってくれているユリアとクールルの姿が目に入る。

ロナとアイズと顔を見合わせて、少し笑ってからお互いの姿が見えなくなるまで、手を振り続けた。

別れ（後書き）

えーっと、ホントお久しぶりです。何だかんだで年末年始は色々と忙しかったため、書くのも投稿するのも遅くなってしまい、待ち望んでいた方々は本当にすいませんでした（＞＜ 次回からは余程のことがない限りは1・2ヶ月待ちなんてことにはならないので、これからもよろしく願います（≧w≦ノ

追記…次回更新時に暇があったら章管理しようかと思っています。

学校生活

エルクワールに戻ってきて早一週間。

特になんの変哲もない日常を僕は送っている。

：いや、ホント普通ですよ？7時に起床、7時半には寮の食堂で朝食を摂り、朝8時半までに登校する。

午前は座学を真面目に受け、午後は実技訓練を必死になってこなす。うん、極めて普通だと思う。こんな当たり前のことを失敗する学生がいるとは思えないほどだ。

まあ一部不真面目な学生は簡単に失敗するだろうが、それは置いておくとして…。

それじゃあ…

『なんで僕は朝っぱらからこんなダッシュをしなきゃいけないんだろうなあっ！』

大声で怒鳴りながら校舎に向かって走る。もちろん全力疾走だ。

走りながら首を少し後ろに向けてみると、アイズと先ほどまで一緒に居た男子女子の集団が僕と同じように必死に走ってきているのが見える。

おかしい。いつも通りなら既に教室で図書室から借りている本を読んでいるぐらいに暇があったはずなのだが…どうしてこうなった？と、ちよつとだけ現実逃避に朝の様子を思い出してみる。

『おはようユキト君。今日もいい天気だよ』

『うん？ ああ、おはようアイズ。食堂で会うなんて珍しいな』

僕がお世話になっている寮の一階は食堂になっていて、平日も休日も大抵営業している。

だが、アイズは実家から学校に通っているので食堂で会うのはかなり珍しい。

四角いトーストを齧る手を止めて、目の前の席に座るアイズを見る。

『いや、少し相談したいことがあって…って、その前になんなんだ、その赤い液体は』

『うん？ これ？』

トーストに塗られた物とテーブルの上に置いてある瓶を指差しして答える。

『いちごジャムだけど…』

『…じゃむ？』

『ああ、そうか…ジャムの知識もないんだよなあ。この世界…』

バターもあるにはあるのだが、僕は朝食と言ったらジャムパンだ。だからまあ、食堂の厨房を借りてジャムを自作したのだが…あの時おばちゃんたちが変な目で見てたのはこれが原因か…。

はじめて見る物なんだから、ああいった反応するのも仕方ない。

『まあ、百聞は一見に如かずって言うし、とりあえず口に入れてみる』

『…美味しい…のか？』

『アイズって、意外と甘い好きだし、気に入ると思うよ？はい』

そう言いながら瓶の蓋を開けて、スプーンを突っ込み、アイズに手渡す。

恐る恐るといった感じで口に含み、動きを止める。

『どう？』

『…驚いた。これは…美味しいな！』

『って、しーっ！声大きいってアイズッ！』

慌ててアイズの口を塞ぎながら辺りを見渡すと、思わず叫んだアイズの声に反応したのか、食堂で食事していた何人かがこちらを見ている。

『ほら、大声出すから皆迷惑して…』

『いや、そういった感じじゃなさそうだぞ？』

『…は？』

言われて見て改めて周りを見渡して、視線が合った何人かの思考を読む。

うん。確かに違うな。迷惑って言うか…。

『興味…かな?』

『ウォンスール君』

『うん?』

声がしたほうを向いてみると見覚えのあるクラスメイトの男子生徒がテーブル脇に立っていた。
転入したときに少し話したような気がするけど、普段はあまり喋ったことはない。

『や、おはよう』

『う、うん? とりあえず…おはよう』

『その、僕もそれ一口食べてみて…いいかな? さっきからずっと気になって…』

『え、ああ、うん。それは別に構わないけど…』

そう答えてから、別のスプーンをテーブル端の箱から取り出し、瓶からジャムを掬って手渡す。

スプーンを受け取り、しばし観察。

その後ぱくりと口に含み、表情が一気に変化し、そして…。

『美味しい!』

『おおう』

満面の笑みで手作りジャムを味わっているクラスメイトを見て、ほんわりとした気持ちで思わず見とれる。

ああ、なんかこの顔見るの久々かも…近所の子供にクッキーやらなんやら配ったときの反応と良く似てる。

『あの…ウォンスール君』

『はい？』

今度は背後から小さな声。

振り返ってみると、同じく見覚えがあるクラスメイトの女子生徒。

『あ、あたしも食べてみて…その、いいかなあ？』

『いいよー』

軽く応じると、すでに用意してたのかスプーンを瓶に入れて口に運ぶ。

するとすぐに顔が緩む。

『おお…甘くて美味しいかも』

そう言ってうっとりとした表情でスプーンを口に含んでいる。

その様子を見て、遠まわしに観察していたらしいまわりの人間が一気に集まってきた。

『ボ、ボクもいいかな？』

『わ、わたしも！』

『じゃ、じゃあ俺も!』

特に断る理由もないので、いいよと答え、全員が口にスプーンを突っ込む。

『ほわあ…』

全員が同じようにとろける。

うん、なんていうか…皆幸せそうですね。

と、思いながら皆を見つめていると壁に掛けてある大きな壁時計が目に入り、直後に頭が真っ白になる。

『…なあ、皆。時間だいじょぶかな?』

全員がほわあとした顔で時計のほうに振り向き、そして全員揃って体がビクリと震えて硬直。

そんな中、食堂の入り口から管理人のおじいさんの声が聞こえてきた。

『お前さんたち、こんなところにいいんかの? もう8時20分過ぎ取るんじゃないが…』

それを聞いた瞬間食堂に居た全員が悲鳴を上げた。

というわけだった…なーんだ。思い出せば簡単なことじゃないかー
あっははははー。

『…って笑い事で済むわけあるかあっ！』

『…すまない。ボクが大声を出したばかりに…』

『謝罪は後でいいから、足を動かせ！』

ようやく横に並んだアイズに大声で怒鳴り返す。
キレてはいないが、かなりキレそうな状況だ。

と言うか、ぶっちゃけ僕がキレそうになる状況とは結構珍しい。

でもまあ、理由が理由だ。純粹に怖いだけなんだ。

遅刻が？ いやいやいや、遅刻自体は別に構わない。1度や2度で成績に影響があるわけじゃないから別にいいんだ。
問題は…。

『うふふふ…貴方たち遅刻しましたねー？』

昇降口に足を踏み入れた瞬間、バチバチという雷音と共に声が聞こえる。

目の前にはにこやかな顔をして小さな本を取り出す通称【妖精先生】フェアリーティーチャー
リスナ・ウォンテッド。

見た目は手のひらぐらいの大きさの妖精なのだが、ちゃんと教員用の紺色のキャリアスーツを着て、金色の髪はきつちりと後ろで束ね、背中には4枚の薄緑色の翅が生えている。

普段は2年生の担当教師らしいが、最近遅刻防止キャンペーンに乗り出したらしく毎朝昇降口を見張っている。

『あ、あの…リスナ先生。これには深い事情が…』

『でも遅刻しましたよねー？』

ニコニコと笑っているリスナ先生だが、目が笑っていないのは一目瞭然だ。

うう、やっぱりダメか…。

アイズに視線を向けると、彼はもう諦めたらしい。潔く目を瞑って処罰が下るのを待っている。

背後をちらりと振り返ってみると、皆がつくりと肩を落としながらも整列している。

…ああ、楽しかったなあ学園生活…とか思いながら僕も目を瞑る。

『うふふ…皆さん理解が早くて助かります…ではでは…』

目を瞑っているせいで様子はわからないが…音は聞こえる。

バチバチという雷音と共にバラバラという何かが捲れる音…恐らく、愛用の魔法書がぱらぱらと勢い良く捲れあがっているだろう。

『覚悟、決めてくださいね？』

ちよっただけ先生の声色が変わった瞬間。

雷撃魔法っぽいのが僕らを襲った。

『うう：朝っぱらから酷い目にあった：』

『ま、遅刻したならしょうがないわね：ご愁傷様』

机に突っ伏して体力の回復を図っていると、ロナが僕の机の近くまで来ていた。

別のクラスの癖にわざわざ様子を見に来てくれたらしい：暇な奴だ。少し放れた席の方を見てみると意識がないらしいアイズが目に入る。どうやらあちらの方が酷い目にあっただけらしい：南無。

『やっぱりアレね。リスナ先生怒らせたらダメね、うん』

『：そうだな。ホントに死ぬかと思ったし：しかし、あれだけの電撃魔法で衣服がまったく焦げてないのはどういうことなんだ？』

『リスナ先生は精霊魔法の先生だからねえ：属性系はお手の物なんじゃないかな？』

『：って今思い出したけどあの詠唱無しで魔法使ってたな：』

詠唱無しで魔法発動はかなりの技術と修練が必要と物の本に書いてあった気がする：どんだけスペック高いんだよあの先生、と溜息を吐く。

『ところでユキ。精霊学の教科書持ってきてる？』

『持ってきてるけど：お前忘れたのか？』

『うん。昨日の夜予習やってたから机の上に忘れてきちゃった』

『ん、そっか。ちょっとまってろ…今』

出すから、と続けようとした瞬間。

さっと精霊学の教科書が横から飛び出てくる。

『ボクが貸そう』

誰？　と思いながら本が出てきた方に視線を向けると、憔悴しきった顔のアイズがぶるぶる震えながら教科書を手に持っている。

『……………』

『……………』

『……………』

僕とロナは呆れた目でアイズを見つめ、アイズは無理に笑顔を浮かべ始める。

…いや、アイズ。ロナのためっていうのはわかるけどさ…。

『…はあ、ありがたく借りとくわアイズ』

呆れた目を解かずにロナが教科書を受け取ってから教室を出て行く。そしてロナが教室から出て行ったと同時に床に崩れ落ちるアイズ。床に倒れているアイズに向かって僕は言う。

『…無茶しやがって…』

『…男とは…見栄を張るものだ…ガクッ』

そこまでしなくてもいいだろうよ。とは思っても気を使って僕は口にはしなかった。

午前は座学なので比較的安全だ。

だが、午後は実技なので比較的怪我をしやすい。

そう。こんなふうに。

『お前らさつきから卑怯すぎるだろっ！』

森の中を必死に駆けながら大声で怒鳴る。

『仕方ないだろー？』

『これも授業なんだし』

『頑張って逃げてね』

クラスメイトの男子生徒2人と女子生徒1人が口々に言う。

今日の実戦授業は【複数の敵に追われた時の対処法】と【複数の人数でターゲットを追う時の対処法】だ。

だからまあ、彼らの行動は間違っってはいない。

『ほらほら。怒鳴ってる暇があるんだったら反撃したら？』

と、女子生徒がほんわか口調で言ってくるが、手に持っている1.5 m程の長弓ロングボウには既に黄色の魔法の矢が番えてあり、少しでも隙を見せた瞬間狙い撃ちされるのは目に見えている。とてもじゃないが反撃できるはずがない。

：ついでに言うところの状況でニコニコと満面の笑みで走ってくるこの状況がかなり怖かったりする。同じように追従している男子生徒2人のほうを見ると、こちらも笑顔だが見事に顔が引き攣っている。

追われる立場なんだが…心からご愁傷様と言いたい。

『つと』

余計なことを考えていたせい、木の根に足をひっかけそうになって、慌てて意識を戻す。

が、そんな油断を見透かしたかのように、顔の横を黄色の閃光が駆け抜けた。

驚いて足を止めてしまい、しまったと思いながら顔を顰める。

『ふふふふ、追い詰めましたよ？』

ざざっ…と追従していた男子生徒2人が女子生徒を追い抜き、僕を取り囲む位置を取る。

『（うん、良い位置取り…逃げられないなコレは…）』

すかさず、右手の魔工石に弱めに魔力を流し込んで剣を構築する。弱めの魔力なのは訓練だからだ。

『……………』

『……………』

『……………』

『……………』

無言で過ぎていく時間。

3人ともタイミングを計っているんだろうけど、安易に踏み込めな
いってのがわかってるんだろうなあ…。

もちろん、飛び掛ってきた瞬間斬りつける心積もりだ。

けどまあ、このまま待っていても埒が明かない、なので。

『先手必勝つと！』

左手を掲げて、一般魔法の光源魔法を使う。

これは主に灯り用の魔法だ。しかし、使い方を変えれば一瞬だけ照
らすフラッシュ効果により目くらましにも使える。

…まあ、全部エフォニエさんの受け売りなんだが。

3人とも一瞬の閃光を予想してなかったらしい。

目元を隠すように手を翳している。

その隙を逃さず、一気に左にいた男子生徒に飛び掛る。

まずは大きな両刃の斧バトルアックスを持っている小柄な子だ。

斧の柄辺りを狙って剣を下から振りぬき、手から斧が零れ落ちた瞬

間、がら空きの腹に蹴りを入れる。
男子生徒の体が勢い良く吹き飛び、背後の木にぶつかってぐったりと座り込む。

『（よし、まず1人！）』

『ちい！』

フラッシュの効果から立ち直ったのか男子生徒の1人が斬りかかって来た。

持っているのは片手用の曲剣。シヨテル

…あんな曲がった剣どうやって持ち運んでるんだろう？と思いつつ、相手の袈裟斬りを背後に飛んで避ける。
着地した瞬間、足首に鋭い痛みが走る。

そして地面に突き刺さる黄色い矢。
背後をちらりと振り返ると、ロングボウを構えた女子生徒がこちらを狙っている。

『降参しますか？』

『…それもよさそうなんだけど…なっ！』

右手に構えていた剣で地面を抉って土を飛ばす。

狙いは目の前にいるシヨテルを構えている男子生徒の目。

土が飛んでくると予想してなかったのだろう、まともに食らって頭を振ろうとしているのが見える。

そして土が目当たった瞬間勢い良く振っていた剣を振り向きざまに背後に投げつける。

『きゃっ』

水平に回転しながら飛んでいった剣はロングボウの本体に当たった。壊れてはいないようだけど、突然の衝撃に思わず悲鳴を上げてロングボウを落とす女子生徒。そして当たったのを確認した瞬間、短く呪文を詠唱。

『【汝、刃となりて、敵を切り裂け、刃！】^{ブレイド}』

返す手刀で背後に白い三日月型の刃が飛び、ようやく土を掃ったらしい男子生徒の顔に直撃。

『ぐあ…』

…顔に当たたのはまずかったか？でも狙ったわけじゃなかったし…まあ、あとで謝っておこう。

ブレイドが当たったのを確認してから振り返り、体勢を整えようとしている女子生徒の前に立って短剣を首に突きつける。

『降参しますか？』

先ほどの彼女の真似をしてみたのだが…やるんじゃなかった…（汗意外と恥ずかしい。

『そ、そうします〜近距離戦は勝ち目薄そうだし〜』

カランツというロングボウが地面に落ちる音と共に女子の声が妙に辺りに響いた。

『ふむ、特に問題はなさそうだよ』

『そうですか…よかった』

ミストさんが患部から手を離しながら言い、それにほっと一息吐く僕。

先ほどの実技訓練で蹴った男子生徒がなかなか起き上がらなかった
ので、肩を貸して保健室まで送り届けたのだ。

『だから、大丈夫だって言っただろー？そんな柔な鍛えかたしてねえよ』

無然とした様子で言う男子生徒に思わず苦笑い。

『いや、だって心配じゃないか。いくら【訓練リング】してるって
言ってもさ』

【訓練リング】というのは実技訓練で必ず配られる金属性の腕輪だ。
両手両足に装着することによって、死なない程度に魔法や身体の攻
撃能力を弱めてくれる。

それに付け加えて、持っている武器の刃に薄く魔力を張り、切断力
や打撃力等も弱めてくれるという訓練にはもってこいの魔法具だ。

『死なないから大丈夫だって、まあここまで連れてきてくれたのは
感謝するけどな』

『…やっぱり痛いのはどうにかしてほしいよなあ…』

『…それについては全面的に同意する』

男子生徒と顔を見合わせてお互い苦笑い。

いくら【訓練リング】をしていると言っても、痛いものは痛いのだ。

『それも訓練の一環ですからね。仕方ないですよ』

『…まあ、剣やら斧やらが当たっても痛くなかったらおかしいからな』

ミストさんが答え、男子生徒が笑って付け足す。

『それじゃあ僕は先に帰るなー？もう訓練終わってる時間だし』

『おう、俺はもう少し休んでから帰るわー』

『お疲れ様でした。ユキト君また明日』

手を振ってくる2人に苦笑しながら保健室を出る。

『さて…と今日も屋上行きますかね』

そう1人ごちて屋上に向かう。

別に誰かが待っているわけじゃないが、あそこの空気はかなり好きだったりする。

階段を登り、ドアを開け、屋上に足を踏み入れる。

西日が差し込んでオレンジ色に辺りが染まっている。

『んー…温かい』

ベンチに座り、ほっと一息。

午後はかなり戦ったので疲れた。

『（ちよこつと寝てから帰るかね…いつも通り）』

これが…今の僕の日常。

転校生

『と、いうわけで転入してきました。ユリアです』

目の前の光景に僕は思わず、がっくりと机に突っ伏す。

『…ああ、ちょっと分かった自分がたまらなく悲しい』

『ユキトさん？』

『まあ、わかってはいたんだけどね。こういうオチって、予想できてたとも。でも…認めたくないことって、あるよねえ？』

『ユ、ユキトさーん？』

『…はああああああ』

『なんか凄い溜め息吐かれました！』

隣の席に座って挨拶してきた少女…いや、一応「一国の姫」は、僕の溜息に勢い良くツツコミを返してくる。

そんな様子を見て、僕はもう一度だけ溜息を吐く。

『はあ、まあいいか。久しぶり、ユリア』

『…1ヶ月ぶりに会ったというのに、ものすごく失礼な前置きがあったと思うんですが…それについてはスルーですか。ユキトさん』

一応、一国のお姫様でもある、ユリア・ホワイト・ウィンベルがげんなりとしたあと心配そうな顔をする。

『あの…ご迷惑でしたか？』

『いや、迷惑とかじゃ全然ないんだけど…なんだかなあと』

『ううう…じゃあ、どうしたらよかったですかあ…』

涙目でぽかぽか叩いてくるユリア。

それに苦笑しながら、左手を突き出し、叩かれないように距離を取る僕。

『あー悪い悪い、悪かった。だからやめてくれ。地味に痛い』

『ひくどくいくでくすく』

『わかった。わかったから。今度埋め合わせに何か甘い物作ってあ……』

げるから。と続けようとした瞬間。言葉を止める。

その様子を見て、ユリアがどうしたの？といった風に首を傾げる。

『お、ようやく気づいたかい。ウォンスール君』

『あー…はい。気づいたと言うより、思い出したが正しいですけど…』

首をぐったりと下に向けながら、言葉を発する。

『?どうかしめました?』

『いや、周り…見てみ』

言われてユリアがハテナマークをつけた感じで辺りを見渡す。

『皆さん見てらっしゃいますね』

『そう、ここ教室なんだから、いちやいちやするのは程々にな。ウ
オンスール君』

ニヤニヤしながら、担任の教師…リピス・シエルト先生が言うてく
る。

魔法の腕は確かだというのに、服装の趣味に関してはさっぱりな中
年の担任教師だ。
今だってヨレヨレの紺色スーツが妙に浮いている。

それを見ながら、頬杖について苦笑いしながら僕は言う。

『別にいちやついてる訳じゃないんですけどね…』

『『『いやいやいや、それはないわー』』』

クラス全員からのツッコミだった。

えー?と思いながら頬杖をやめて、先ほどの一連の会話を思い出し
てみる…うん。

『ないわー』

『いやいやいや、ユキト君。何も知らない人から見ればその反応の

ほうがいいわーだと思っぞ?』

アイズまでもがツツコミを入れてくる。

む、そういう風に見られるっておかしいなあ…大した事してないはずなんだけど。

『それで? ウォンスール君。ユリアさんと知り合いなの?』

窓際の席に座っていたショートカットの女子生徒が聞いてくる。

『あーうん。一応友達』

『あ、ひどいです。一応友達って』

『一々、目くじら立てるなって…』

今度は僕がげんなりしながらユリアにツツコム。

その様子を見ていた、廊下側のサバサバ系の男子生徒がニヤニヤしながら指摘する。

『もしかして…恋人同士だったり?』

『いやあ、恋人同士だったらもうちょっと違う反応するだろ?』

苦笑しながら僕が言うと、『だよなあ』と言った空気が教室に広がる。

『むう…恋人同士だったらもうちょっと違う反応するんですかあ…』

…なんか、ユリアがぶつぶつ言ってるようだけど…まあいいや。深

くツツコまないでおこう。

『さて、新しい仲間も増えたことだし、質問は休み時間にして張り切って今日の授業を始めようか』

そう言って、リピス先生が歴史の教科書を叩いた。

休み時間に入った瞬間、周りの生徒達が一斉に僕の隣の席に押し寄せてきた。

『ねえねえ、ユリアさん。前はどこの学校に通ってたの?』

『いえ、わたし学校に通うの初めてなんですよ。勉強は親やメイ…じゃなくって、知り合いに教えて貰ってて…』

『このクラスに入ってきたって事は近距離系?』

『えっと、精霊魔法も使えますよ』

『武器は? 何使うの?』

『お気に入りのレイピアを2本使ってます』

『髪すっごく長いよね〜いつぐらいから伸ばしてるの?』

『えと、そうですね〜…』

先ほどこらずっと質問責めにあっているユリア。
表情は笑っているし、質問にはちゃんと答えてはいるのだが…。

『多いな』

『多いよなあ…』

窓際のアイズの席まで避難してユリアの席辺りを眺めながらポツリと呟く。

隣のクラスからも来てるんじゃない？っていうぐらいに人が多い。

『まあ、ユリアも美少女って言っても過言じゃないからなあ』

『そうだねえ』

見た目は悪くないと思うし、それなりに人気が出るのも納得だ。
しかしまあ、久々に会ったので面と向かって喋りたかったんだが、
しばらく自重したほうが良さそうだ。

『んー…こうやって眺めているのも暇だし、ロナのクラスにでも遊びに行くか？』

『…あれを放置して行くのかい？』

アイズが呆然とユリアの周りを指差ししながら言う。

『いや、魔物に囲まれてるわけじゃないんだから問題ないだろ』

『…ユキト君。キミ、たまにひどいよな』

はあ。と溜息をつきながらアイズが言う：失礼な。

ただ、ロナのところに行くのは賛成なのか、否定はしないアイズ。連れ立って教室を出て1つ教室を挟んだ隣のクラスまで歩くと、途中で女子生徒の声が耳に届く。

『そういえば、こっちのクラスにも転入生来てるんだっけ?』

『そうそう、結構カッコイイ男子だってゝ見に行ってみようか?』

そう言って小走りで僕達の前を抜けていく女子生徒達を見ながら僕はぽつりと口に出す。

『意外と多いんだな。転入生って』

『いや?結構珍しいほうだよ?』

『その割には多いようだけどな?』

そう口々に言い合いながらロナのいる教室のドアをがらりと開けた。

『お前に交際を申し込む!』

扉を開けた瞬間。その叫びが教室と廊下の空気を凍らせた。

僕は目を瞬きさせてから、今の発言をしたのだろうクラス中から注目されている人物を眺める。

燃えるような赤い髪に精悍な顔立ちの青年だ。

真剣な顔をしてロナの机の前に立っている。

『…え?』

ロナが僕と同じように目を瞬きさせる。
どうやら事態についていけないらしい。

まあ、目の前でいきなり交際申し込まれたら、呆然とするのかもしれないが…。

『へーロナって結構モテるんだなあ』

静まり返った教室に僕の声が妙に響く。

すると件の青年がこちらを見て、目が合った。

一応「ども」と手を上げて挨拶すると、向こうも手を上げて挨拶する。

うん…どうやら気が合いそうだ。と、笑っているとようやく正気に戻ったのかロナが僕の前まで早歩きで近づいてきた。

『ばっ…ち、違うわよ!』

『違うって…何が?』

『アタシがモテるって話!』

『いや、実際モテてるじゃん』

こいつとそいつに。と隣で呆然としているアイズと転入生らしき人物を指差す。

『だから、誤解だってば。いくらなんでも一目惚れなんて…』

『恋は突然って言うぞ?』

『だ〜か〜ら〜』

と僕とロナが言い争っている、件の人物がこっちに走ってきていきなりロナの手を取った。

『俺のこと嫌いなのかっ!』

『え…いや…あの…その…』

ボンツと音を立てて真っ赤になり口調がしどろもどろになるロナ。こいつ変な所で初々しいなと思いつつニヤニヤしつつ事態を見守る。

『べ、別に嫌いってわけじゃなくて…その、まだお互いよく知らないわけだし…』

『別にこれから知り合っていけばいいだろ』

『ユキは黙ってなさい!』

『はいはい』

うん。やばい。楽しいなあ。最近ご無沙汰だったが、やっぱりロナでいじくると楽しい。

『と、とにかく! アタシはまだアンタのことをよく知らないわけだ

し！すぐに返事はできない！』

『それ以前の問題だ！』

隣に居たアイズがいきなり吼えた。

『ロナは僕のものだ！勝手に人のものに手を出すな！』

『いつから！アタシは！アンタの！ものに！なったのよ！』

手近にあった教科書を手に取り、スパン、スパン、スパン、スパン、
叩かれたアイズは蹲りながら涙目でロナを見上げて、さらに叫ぶ。

『そ、そんな！黙って見てろっていうのかいロナ！』

『そうは言ってないけど！いきなり人のものとかなんとか言うのやめなさい！』

『じゃあどうしたらお前と付き合えるんだよ！』

『あーもう！そんなのアタシ知らないわよ！』

ついにロナが処理しきれなくなったのかキレた。

ぎゃあぎゃあ言いながら3人で言い争いを始める。

そんな様子を僕は黙ってニヤニヤしながら見つめる。

うーん。被害がないっていいなあ。

『…なら勝負すればいい』

『…………誰?』

いつの間にかロナの隣に黄色の髪を三つ編みにした少女が立っていた。

だが、僕の問いに少女は首を振る。

『…それは後で。とにかく』

そう言って少女はアイズと転校生の間に立って、同時に指差す。

『…二人で勝負。勝った方がロナと付き合える。それでいいんじゃない?』

『ちょっと!ミア!やめてよ!』

ミアと呼ばれた少女は、顔を顰めながらロナを見つめて、こう言った。

『…だって、さっきから煩い。本が全然読めないんだもん』

『うつ…それは悪いと思うけど、アタシのせいってわけじゃ…ないのか…』

がっくりと頭を垂れながら額を押さえるロナ…ああ、気づいたか。

『望むところだ!ぜってー勝ってやろうじゃねえか!』

『それはこっちのセリフだ!』

転入生とアイズが睨み合う。

なんか、とんとん拍子で話が進んだなあ。と思っていると、だんだんと静かだった周りの人間が騒ぎ始める。

『おっし、じゃあ俺が担任に連絡してきてやるよ』

『あ、じゃあ私は新聞部にこの情報流してくるわ』

うん、皆お祭り騒ぎだな。僕の時もこうだったのかもしれない。

『あゝもう！なんでアタシってこんなに風に巻き込まれるのかしら
…』

そんなことを言いながらロナが床にしゃがみ込む。

いや、いつもの事じゃないか？と心の中でツツコミ、教室内の騒ぎを遠巻きに見つめていると、先ほどのミアと呼ばれた少女がこちらに来て声をかけてきた。

『…貴方は？どうするの？』

『うん？何が？』

『…アレ。参加しなくていいの？』

少女が睨みあっている二人を指差す。

『え？なんで？僕は別にロナのこと好きってわけじゃないから参加する理由がないはずなんだけど…』

『…でも、この前ロナのことを賭けてアイズと勝負してなかった？』

『あー：アレは成り行きだったからなあ：』

今じゃもう懐かしいレベルなんだが：とにかく誤解を解いておく。

『とにかく、僕は不参加だよ。さっきも言ったけど特に好意があるわけじゃないしね』

『…ふうん』

物珍しげにこっちを見てくるが、それ以上言ってこないの『じゃあ僕はこれで：』と言って教室に戻ることにした。
一応未だに睨みあっているアイズに声をかけていく。

『先に教室戻ってるぞ！アイズ？』

『どうぞ！お先に！』

『：怒られても知らんぞ？』

そう言い残してから教室を出る。

と、出た瞬間誰かとぶつかりそうになって慌てて立ち止まって謝る。

『あ、すいませ：ってユリアか』

『あ、こちらこそって：ユキトさんでしたか。ロナちゃんいます？』

ようやく質問責めから開放されたのか？と思ったが、彼女の背後に何人かクラスメイトがいることから途中で抜けてきたなと適当に予想する。

そんなことを考えていると、ユリアが教室を覗き込む。

『あー…そこでしゃがみ込んでるのがロナ』

『え？なんでしゃがみ込んでるの？ロナちゃん』

そう言ってロナの隣に同じようにしゃがみ込むユリア。

『なんでって…あれ？ユリア？なんでこんなところに居るの？』

『お久しぶりです。今日転入してきたんですよ…それよりどうかしたの？』

『色々あったのよ…ホント色々と…ううう』

『わっ急に泣き始めないでくださいよう』

ロナがユリアに抱きついて泣き始める。

まあ、本気で泣いているとは思えんが…。

ユリアがロナの背中を優しく擦りながら「何があったんですか？」と困惑した目でこちらを見てきたので、簡単に事情を説明する。

『わ…告白されたんですかぁ…大胆な方っていらっしゃるんですねえ』

『ま、そんなわけで泣いてるってわけよ』

『でもロナちゃんって別に好きな人いるって言ってませんでした？』

『ぐす…だから困るのよ。こういう決闘って。ユキのときは大したことなかったけど交際はちょっと…』

『まあそうだろうな。それはちよつと…』

ご愁傷様だ。と言いかけて慌てて口を閉じる。
なんか言ったらロナがまた泣き始めそうだったのでやめる。

『でもなあ、ロナも悪いと思うぞ？はっきりとフツてやらないと、こいつらはわからんぞ、きつと』

『うっ…それは、そうなんだけど…』

言いずらそうにロナが口元を押さえる。
まあ、フるっていうのも勇気いるよな。

『むゝ、ユキトさんどうにかしてあげられないんですか？』

『どうにか…って言われてもなあ…』

腕を組んでちよつと考えてみる…うーん。

手っ取り早いのはやっぱりフツてやることだと思ふんだが…それは不可だし。

好きな人がいるって公言するのも、この二人が暴走しそうだしなあ。
などと色々と考えていると、ぽんつとユリアが手を叩く。

『あ、じゃあこんなのどうですか？』

『どんなの？』

『ユキトさんが参戦して勝っちゃえば丸く収まるじゃないですか』

『よっし、ユリア。その案もう一度深く考え直そうか』

なんか話が変な方向に転がったので、だらだらと汗をかきながら速攻でツツコム。

しかし、こちらの様子を少しも気にせずにユリアがさらに言う。

『だって、そうすれば丸く収まるじゃないですか。ユキトさんが勝てばお二人も強くは言えないでしょうし、ロナちゃんはユキトさんなら全然安心でしょう？』

『なんか…さらっと貶された気がするんだが…』

『そこは気にしちゃダメですよ。で、どうですか？この案』

先ほどまでぐすぐす泣いていたロナが顎に手をやって少し考えて短く呟く。

『…いいかも』

『いや、僕が全然よくないから。っていうか巻き込むなよロナ』

『お願い！今回だけでいいからっ！』

『ユキトさん。ちょっとぐらいならいいじゃないですか』

客観的に見て可愛い女の子二人にお願いされて、断れる人っているんだろうか？

…あ、でもあいつなら余裕でばっさり断るな。

たぶん、『うぜえ』の一言で断ち切りそうだ…まあ、僕には一生無理だろうけど…。

『…はあ。やっぱり巻き込まれるのか…』

げっそりしながら頭を落とす僕だった。

勝負法（前書き）

かなりお待たせしてしまつて申し訳ありませんでした。＜＜

勝負法

『で？どうやって勝負するの？』

未だに睨みあっている二人に問いかけてみる。

ああん？と言った感じで今度はこちらを睨みつけてくる二人…お、
落ち着けお前ら。

『だ、だから！何で勝負するんだ？』

若干びくびくしながら再度問いかけてみる。

『そんなのマジックバトルに決まって…』

『…るわけじゃないな。確かに』

転校生が勢い良く言おうとして…止まり、アイズが続きを言う。
…なんだかんだで息合うんじゃないんだろうか、この二人。

『だろう？じゃあ、他の勝負したらいいじゃないか？』

これが僕の考えた。

転入した頃は知らなかったのだが、魔法学校では色々と勝負する方法がある。

僕とアイズがやった実戦戦闘を主体とした魔法戦闘…所謂マジックバトルは魔法学校ではオーソドックスな勝負方法だが、何もそれだけが主流なわけじゃない。

出現するのを破壊し、破壊した的の数で勝負するターゲットブレイク。

特定のコースを走りながら、あらゆる場所から出現するのを破壊し、破壊した的の数と所要時間で勝負するブレイクレース。
ペアを組み、同じく相手のペアを掃討するペアバトル。

などと他にも色々ある。

だから必ずしも個人の魔法戦闘だけで勝負しなくてはいけないわけじゃない。

だが、ミアと呼ばれた少女が口を挟む。

『…でも、マジックバトルは一番単純でわかりやすい』

『…まあね』

様々な点から総合的に判断できる分マジックバトルは両者の力量を比べやすい。

『でも痛い思いとかしたくないんだよなあ…』

前にも言ったが【訓練リング】をしているとはいえ、痛いものは痛いのだ。

と言うか、一番嫌な思い出がある。

何度かあったのだが訓練リングの仕組みを利用した魔法戦闘だ。

訓練リングをしているとはいえ、痛みはある。そして一定以上の痛みを何度も何度も食らうと意識を絶たれるのだ。

それを利用して相手の意識を奪うのがノックダウンバトルだ。

『ああ、だから他の勝負を提案したのねアンタ』

『当たり前だよ。痛い嫌だし』

ロナがなるほどといった感じで手を叩く。

本当にアレだけは勘弁して欲しいと切に思う。

『…ユキト君、君はどうしたらいいと思う？』

『ん？ 僕？』

アイズが聞いてくるが、僕は正直マジックバトルやノックダウンバトルじゃなければなんでもいい。

だが：前回のように、周りの人間が観客に周って高みの見物っていうのは面白くない：なので。

『バトルロイヤルとかやったらどう？ もちろんこのクラスとうちのクラスで』

バトルロイヤルはクラス単位で戦闘する形式の魔法戦闘だ。

ルールは簡単で、お互い【訓練リング】を装着し、自由に戦闘する。勝利条件は相手クラスの全滅か、リーダーの戦闘不能で決まる。

『でも、それじゃあ3クラス必要になっちゃうんじゃないですか？』

『それじゃあ2クラスから10人ぐらいずつ借りて3チームに分ければいいかな、それでどう？』

一クラス30人だったはずだからこれでバランスが取れるだろう。

『担任に聞いてみないとわからないけど、たぶん簡単に承認するでしょうね。うちの担任お祭り大好きだし』

『…だね』

ロナとミアが苦笑しながら答える。

『そういえば、ロナ達のクラスの担任の先生と会ったことなかったなあ』

ロナに会いに行くということ自体が少なかった為、僕は未だに会った事がない。

その先生には担当教科がないらしく、担当の先生が休みのとき代わりになるらしい。

それに、聞いた話だとかかなり自由奔放な方らしい。
正直ちょっと会って見たかったりする。

『…会わないほうが良い』

『そうね…ユキは会わないほうがいいかも…』

ミアとロナがぐったりとしながら言う。

『自由奔放な先生って聞いてるけど、でも授業中に突然「飽きたから自習」とか言う先生じゃないだろー?』

実を言うと僕の中学の頃お世話になった担任の先生がそうだった。

授業中に教科書を読んでる最中。突然朗読を止め、何事?と思った

次の瞬間。

『だるい。飽きたから残り自習な』

と言い放ち、呆然とするクラス全員を放置して、窓際の日当たりのいい場所を陣取り、椅子に座って眠り始めた。

4～5分経ってから慌ててクラス委員長が起こしにかかったが、授業終了のチャイムが鳴るまで結局起きなかった。

『（懐かしいなあ…そういえば元気かなあ、井坂先生）』

時たま授業を放り出すような先生だったが、授業の進め方や教え方は良かったのでクラスの皆からは慕われていたのをぼんやり思い出しながら、二人の様子を見る。

『……………』

『……………』

『え？何？ちょっと待て、なんだよ二人して苦虫を噛み潰したような顔して…』

嫌な予感を感じながらツツコム。

すると二人はぐったりと俯いて溜息を吐く。

『…ありました授業放棄』

『あれには驚きを通り越して呆れたわ。しかも2時間連続』

『えー……………ん？』

思わず言葉が漏れたあと、ふと何かが引っかかる。

『なあ、その先生ってもしかして女性だったりするか？』

『…うん。そう』

『髪が淡い緑色でいつもぼさぼさなのよね』

ミアさんが答え、さらにロナが細かい特徴を述べ、嫌な予感がさらに膨れる。

『今職員室にいるよな？』

『…居ると思います』

『だらけて寝てるわね絶対』

その行動にも嫌な予感をビシビシと感じながら、『僕ちよつと会ってくる』と言い残して教室を早足で出る。

『え？ユキトさん！？この状況で教室を出ますか！？』

ユリアがなんか叫んでいたが、スルー。もっと重大な事がある。

階段を駆け降り、職員室の前まで来る。

一瞬だけノックを躊躇して、思いっきり顔を叩いてから、ノックを2回する。

『失礼します』

『おお、ウォンスールか。珍しいな職員室来るなんて』

ちやうど職員室を出ようとしていたリピス先生が声をかけてくる。
：よくよく考えてみると転入してきたときの一回だけだな、僕が職員室に入ったことがあるのって：（汗
とまあ、それは置いておくとして：。

『ちょっとお会いしてみたい方が居まして：』

キヨロキヨロと職員室を見渡してみると、机に突っ伏している先生らしき人が目に入った。

『ああ、もしかしてカサイ先生に用があつたのか？』

僕の視線を追って、目に入ったらしい。

『：ええ、とつても』

につこりとリピス先生に笑いかけると、先生の顔が引き攣った。
：自分でも気づいているが、相当怖い笑みに見えたのだろう。

そのまま、おたおたしているリピス先生の横を通り過ぎて突っ伏している先生の隣まで来る。

さて、髪の色が若干違うが：髪の色は同じだし、雰囲気も完全に知っている人のものだ。確定だろう。

そう判断した僕は、そのまま当時使っていた寝ている先生を起こす殺し文句を言うことにした。

『…目の前に激怒した校長が…』

『ぎゃあああああああああああああああ』

悲鳴をあげて椅子から転げ落ちる先生。

直後。『いったあ！』と叫び声が職員室に響く。

何事？と言った感じで職員室に居る先生と生徒が一斉にこちらを見るが、気にせず先生に声をかける。

『お久しぶりです。井坂先生』

『いててて…ああ、なんだ。お前か水城…って何故お前がここに居る！？』

床に座り込んだままこちらを見上げた井坂先生が呆然と呟いた。

『それで？お前はどれぐらい前にこちらに来た？』

『1ヶ月…じゃないな。もう2ヶ月前ぐらいにこちらに…先生は？』

『私は1年ほど前だな、教師の飲み会の帰り道にな』

屋上のフェンスにお互い寄りかかりながら状況を報告する。

『1年…僕達が卒業したあとぐらいですかね？』

『そうだ。生徒卒業記念の飲み会の帰りだったな』

懐かしそうに話す先生。

『飛ばされた当初は普通に帰ろうと思っていたんだが、案外こっちの生活も悪くなくてな』

空気は美味しいし、酒も飯も美味しい。結局そのまま居ついたと語る先生。

魔法の勉強はあまりしてはいないらしいが、向こうに居た頃の経験がこっちでも生かせたらしい。

『お前は帰りたいのか？』

『妹が心配なんで…』

そろそろ2ヶ月経つが、大変な最中だろうということは想像に難くない。

『そうか…まあ、何か手伝えることがあれば手伝ってやろう』

『あはは…まだ何にも掴めてないですけどね』

帝都ウィンベルで少しだけ情報を掴んだが、まだ全然足りていない。結局帰り方がわからないままだからだ。

『確かに…こっちに飛ばされてくる人がたまにいるそうだが、帰りが普及してるわけじゃないようだな』

『ええ、そこなんですよ。ウィンベルでも異世界からの勇者の情報
を調べようとしたんですが…』

意図的に消されていたことを伝えたと、先生は考え込む仕草をした。

『我々のような人間が帰っては困る…という見方もできるな』

『そうですね…僕達を残すメリットと言ったら…あちらの世界の情
報か、こちらに来たときに発現した強い魔力ってところですかね』

うーんと井坂先生が伸びをしたあと、はぁと溜息を吐く。

『めんどくさいな。本当に』

『…先生、ホント変わってないですね』

苦笑しながら自分も伸びをする。

『お前もな。ところで話は変わるんだが…さっきからこちらを睨ん
でいる子はお前の知り合いだな?』

『ええ、最初から気づいてます。でもすいません。睨んでいる理由
は僕もわからないです』

さっきから屋上のドアからこちらの様子を伺っている人物…ユリア・
ホワイト・ウィンベル。

声は遠すぎて聞こえてないだろうけど…なんでこちらを睨んでいる
のか、全然わからない。

『まあ、大体読めるがな…』

『え？まじですか？なんであんなに睨んでくるんです？』

理由が全然わからなかったので勢い込んで聞いてみる。

『うむ、まあ若さゆえの過ちと言う物だ』

『先生。意味がわかりません』

『まあ、そのうちわかるから。とりあえず呼んで誤解を解いてやれ』

『はあ…』

誤解ってなんだろう？と、よくわからないままユリアのほうを振り返り、おいでおいでと手招きする。

一瞬。ぱあっと嬉しそうな顔をするが、すぐにむっとした顔に変わり、そのままとてとてこちらまで歩いてくる。

『ユキトさん。酷いですよ。あの状況で逃げるなんて…』

『いや、うん。まじでそれは悪かった…ってそのことで睨んでたのか』

『…それだけじゃないですけど…もういいです』

ぷりぷり怒りながら、腰に手を当てて溜息を吐くユリア…わ、訳がわからない。

『えと、それでこちらの方は？』

『ああ、ロナのクラスの担任の先生。で、僕の中学…じゃなくて、昔居たところの先生でもある』

『よろしく。カサイ・マルグリットだ』

そういつてにいつと笑って左手を差し出す。

『あ、そうだったんですか…てっきり…』

『?てっきり?』

『なんでもないです! ユリアです! よろしくお願いします!』

なんだか慌てた様子で左手を差し出し、お互い握手する。

『ああ、聞いてるよ。お姫様こちらこそよろしく頼む』

『あ、やっぱり皇族だって知ってるんですか』

『前々から知らされていたしな…で? お前は早速仲良くなった友達第一号ってところか?』

『いえ、ウィンベルに行くときに会って、その仲です』

ほう…とニヤリと笑う先生…何故だろう。ものすごく嫌な予感がする。

『魔物にでも襲われてるところを助けたか』

『…ホント、なんで先生そこまでピンポイントでわかるんですか?』

たまーにこの人。その場にいたんじゃないかって言うぐらいに知ってることがある。

まあ、あれだ。変な電波でも受信してるんじゃないかっていうのが中学時代のクラス全員の見解だ。

『ところで、ユキトさん。バトルロイヤルの了解はとりました？』

『ああ、そういえば聞くのすっかり忘れてたな』

『なんだ？魔法戦闘か？リピス先生からは何も聞いていないが…』

不思議そうにするカサイ先生。

順を追って一連のことを説明し終わると、先生はニヤリと笑う。

『それはそれは…うむ、楽しそうだな。許可しても構わないが…』

『？何か問題でも？』

嫌な予感を感じつつ、先生に問いかけてみる。

『いや…もつと楽しくしようじゃないか』

これはまずいかもしれない…僕はこの瞬間そう思った。

勝負法（後書き）

ちよつと色々と構成に迷ってしまつて長引いてしまい、待っていた方々は本当に申し訳ない＞＜

今後の構成等はそこそこ大丈夫だと思いますので、これからお付き合ひよろしくお願ひしますゝ

準備期間（前書き）

遅くなりました＜＜ 謝罪等は後書きでしますのでとりあえずどうぞ！

準備期間

『うむ、許可しよう』

『やはり貴方もそう答えますか、こちら腕が鳴ります』

『……………』

正直、呆然とするしかなかった。
僕の横でユリアが苦笑している。

『でも、本当によろしいんですか？校長先生？』

おっとりとした空気を漂わせながらユリアが口にする。

…そう、校長先生なのだ。目の前に居る人が。

禿頭で口の周りが白い髭だらけで優しい目をしているところが特徴のおじいちゃんなのだが、今はそんなこと本当にどうでもいいと思ってしまうほど呆然としていた。

『何、生徒同士の争いごとには極力つつこまん方針での。それに…カサイ先生が考えることはいつも楽しいことじゃからの』

ふおっふおっふおと笑う校長先生…いやあ、ホント観る側は楽しいんだらうけどさ。

『死人が出る可能性があってもですか…』

『なんの。ちゃんと安全対策は講じるじやろうて、それに生徒にも良い刺激になるじやろう』

『（…絶対狂ってるこの学校…）』

そう思わずにはいられない僕だった。

『では、許可を頂きましたので早速準備に取り掛かせていただきます』

お前らも出るぞ。と小声で声をかけられ、ユリアと共にお辞儀をしてから校長室を出る。

『ふむ、やはりあの御仁はわかってらっしゃる』

部屋を出ると晴れ晴れとした表情でカサイ先生が言う。

『僕としてはわかってほしくなかったです…』

『で、でもでも。あんなに大規模にしちゃってよかったんでしょうか？』

ユリアが大丈夫でしょうか？とカサイ先生の顔を窺う。

『何、校長先生も言っていたように生徒には良い刺激になるからな。むしろこういう機会をもっと与えるべきだと私は考えているよ』

『だからって…全クラスを巻き込まなくても…』

そうこのバトルロイヤル。

なんと1年生の6クラス全部を巻き込んだ戦いに発展したのだ。

一日の授業が全て終わり、ロナの教室の前まで行き、事情を全て話した。

『と、言う事だ』

『…流石に冗談、よね？』

『残念ながら本当なんです』

ふらりと頭を押さえて壁に寄りかかるロナ。

『あ、悪夢だわ…』

『ああ、流石に今回は同情する』

『と言うか、アンタが扇動したわけじゃ…なさそうね』

『冗談言うな。僕だったらむしろ逆に事態を縮小させる方向だ』

『それに、もう避けられないですよ。こうやってプリントまで配られちゃあ…』

ユリアが折りたたんでいたプリントを広げてこちらに見せる。
そこには一週間後に行われるバトルロイヤルの詳細事項が記載され

ていた。

『手が早いわね、流石カサイ先生』

『そっちのクラスがまだ配られてないのは先生がサボってるからか
…ホント変わってないな先生』

中学校時代もよく忘れて、委員長に怒られていたのを思い出す。
重要なことならちゃんとしてほしい。

『しかもご丁寧に明日から当日まで授業までお休みかあ…徹底して
る』

『あの人、やる気ある時はホント行動力高いからなあ』

『…さっきから気になってたんだけど…ユキってカサイ先生と知り
合いだったの?』

『僕もついさっき気づいたところ。ちょっと前の恩師だよ』

びっくりした顔をして小声で聞いてくる。

『…それって向こうの人?』

『そう』

『ふーん…あの人もユキと同じ異通者なんだ』

『何の話してるんですか?』

ユリアが寄ってきて首を傾げる。

『いや、別に大したことじゃ…』

『む、大したことじゃないならわたしにも聞かせてくださいよ』

『じゃ、じゃあ。ユリアには内緒の話！』

『ええええ！？』

しょんぼりと肩を落とすユリアを見てロナが慌てる。

『いや、その、ね？ユリアにはまだちょっと早い話っていうか…』

『ど、どんなこと話してたんですか！？』

吃驚した様子で僕に視線を向けてくるユリア…うん、ごまかすにしても、もうちょっと考えろよと言いたい。

『あーもう、とにかくそれは置いておくとして！ユキ勝算あるの？』

『勝算も何も…相手の戦力もわからんのにどうしろと…』

ユリアの持っていたプリントを借りて近くの机に広げる。

わかっているのは相手が2クラス分の人数が2チームあるということとだけだ。

チーム構成も全部ランダムに決められているらしく、出席番号を適当に割り振ってあるだけだ。

『あ、わたしはユキトさんと同じチームみたいですわね。リピス先生

が気を利かせてくれたらしくて…』

『…そういえばユリアって強いのか？』

前に市場で暴れてた時は少ししか見なかったから正直実力など全然わからない。

『うーん…剣は護身術として習っていたぐらいですね。精霊魔法はそこそこ勉強してますから多少なりとも役には立てる…と思いたいです』

『そういえば火系使えるって言ってたな』

治療系が多い水とは相性が悪いらしいが…まあ、指摘はしないでおこう。

『でも、さすがにバレるんじゃないか？お姫様だって』

『?どうしてです?』

『んー…ユリアの知名度にもよるけどさ、精霊魔法の火系が得意・黒髪のロングなどの容姿とか、そういう特徴でバレそうじゃないかなあって僕は思うんだけど…』

むしろクラスの連中にもバレてるんじゃないかと思うんだが…そういえばそういう騒ぎにはなってなかったな。

意外と大丈夫なのか？

『あ、じゃあこれなんてどうです?』

そう言って両手首に結んでいた白いリボンを解き、左右から適当に髪を拾って結う。

ふむ…ロナと被らないようにちょこっただけ結うことにしたのか…。

『ど、どうですか？』

…うん。悪くはないと思うんだけど…。

『悪くはないんだけど、なんかこう、なあ…ロナとどうしても被るって言うか…』

『うっ…確かにそうかもしれないけどっ！これ以上どうしろと…』

『…この際色々アレンジしてみたら？三つ編みとかポニーテールとか』

『すいません。三つ編みの仕方わかんないです』

こりゃだめだ、と判断してロナを見る。

あちらもそう思ったのか、はいはいと言って手をひらひら振る。

『じゃーこの残念な箱入り娘の容姿はアタシがどうにかするわ。どうせ他にすることないし』

『残念な箱入り娘！？』

『うん、頼んだロナ。お前だけが頼りだ』

『あのっ！わたしが残念な箱入り娘っていうのは確定なんですか！？ねえっ！』

なんか必死な顔してユリアが肩を揺すってくるが目を逸らしておく。
…まあ、別に三つ編みできないぐらいで残念とは思えないけど。そこはスルー。

『メンバーの確認や指令系統やコンビネーションとかも明日以降の課題、武器とかの装備は問題なし…あとは』

あとは結局のところ個人の戦力アップを図るしかない。
1+1は2になるが、1を2にするのも3にするのも個人の努力しただいだ。

『魔法の練習ぐらいしかできることない…よなあ？…でも、なあ…』

実は、ここ最近伸び悩んでいたりする。
魔法も覚えられるモノは覚えたとし、修練もかかしていない…んだけど…。

『…そういえば行き詰ってるとか言ってたわね、ユキ』

『そうなんですか？』

実は一度ロナに相談したこともあるぐらいだったりする。

ロナに相談してしまう辺りが既にかかなりの異例の事態だということが判ると思う。

『…ユキ、今物凄く失礼なこと考えなかった？ねえ？』

『いや、考えてない考えてない。というか尖った鉛筆を首に突きつけるな。地味に怖いんだよ』

ぴたぴたと首に突きつけてくる鉛筆を手で払いのけていると、今度はユリアが口を出してきた。

『うーん…じゃあ、わたしとロナちゃんと一緒に練習してみませんか？』

『これ…意味あるのか？』

場所は校庭の端の端。

別に中央のほうでもいいんだけど、まあ、なんというか、気分的に。と言うか、放課後たまに1人で訓練してるのと大して変わらないと思うんだけど。

『…あれ？知らないんですか？ユキトさん。精霊魔法使い《わたし達と一緒に練習してる…》』

『練習してる？』

『精霊魔法が使いやすくなるんです』

『ユリア。その説明じゃ意味わかんないわよ』

ビシリと手でツツコミを入れるロナ。

『まあ、確かに精霊魔法は覚えたいんだけどさ…使えないんだよな』

あ
』

実を言うと、エルクワールに戻ってきてから精霊魔法を何度も練習したのだが、一度も発現していない。

相性が悪いとかそういう可能性もあったのだが、一通り全属性の初級魔法をやってみてだめだったのだ。

どうやら帝都ウィンベルの教会で契約したのは失敗だったらしい。

『実は精霊魔法使い同士は同じ場所で訓練すると能力が向上しやすいのよ』

『…聞いたことないんだが…』

『アンタ精霊学の授業何聞いてたのよ…』

これ見よがしに溜息を吐いてロナがこめかみを押さえる…いや、ちゃんと聞いてたってば。たぶん。寝てはなかったし。

『精霊魔法っていうのは、主に周囲の精霊から力を借りるっていうのは知ってるわよね？』

『うん。確かそのおかげで自身の魔力消費量を極小に抑えることができるんだよね？』

『そうそう。じゃあ「共鳴」ともなきは？』

『…ごめん。わかんない』

『ちょっと前に習ってるはずんだけど…まあいいわ』

近くに落ちていた小石を拾い、ロナが地面に何かを描き始めた。

『「共鳴」っていうのは精霊^{アタシ}魔法使い達が魔法を使い始めると、精霊が辺りの精霊を呼ぶ現象のことを指すの』

がりがりという音と共に丸い円が地面に描かれる：半径5mぐらいか？

そんなことを思っていると今度は円にそって何か文字を描き始める。

『学者の話だと精霊同士が協力し合ってアタシ達を助けるために呼ぶらしいけど：まあその辺はどうでもいいわね』

：いや、どうでもいい話じゃないと思うんだが：まあ、今は突っ込むまい。

『周囲に精霊が集まることで、精霊魔法の制御がしやすくなる。これがさっきユリアが言ってた能力の向上がしやすい理由ね』

『ああ、なるほど。だからユリアとロナがいると精霊魔法の使いやすさが上がるわけか』

『そういうことなんです』

ユリアのほうに視線を向けると、あちらさんも何か地面に描いている。

『：ところでさっきから気になってたんだけど。それ何描いてるの？』

『ああ、自分で考えたオリジナルの精霊陣ですよ？』

『へえ…オリジナル』

教会で精霊陣を見た時は暗くてよく見えず、溝が掘り込んであって魔法陣が描かれているということしかわからなかったのだ。

聖水を流して光ったところは見たが、すぐにぼやけてしまったし。

興味を持ってロナとユリアの足元の地面を眺める。

ロナのは…なんか大小様々な十字架や星を描き込んであり、ユリアのは…これ歯車と葉っぱか？が噛み合う形で描き込んでいる。

『なんというか…関連性一切ないんだな』

『そりゃそうよ。そのときの気分で変えるのもありだし、決まった形なんてないもの』

『へえ…って、じゃあなんでこんな必要なんだ？』

『…んーわかりやすいからが正しいかしら？』

『わかりやすい？』

『まあ、見てなさいって…行くわよ？』

精霊陣を描き終えたらしく、握っていた小石を放り投げ、おなじみの杖を取り出すロナ。

『【我が使役する精霊よ、その姿を我が前に顕現せよ、サモンエレメンタル精霊召喚！】』

りいんという鈴の鳴るような音があたりに響く。

それと同時にロナの足元に描かれていた精霊陣が水色に薄らと光ります。

『さて、わたしも：【我が使役する精霊よ、その姿を我が前に顕現せよ、サモンエレメンタル精霊召喚！】』

ユリアも同じ呪文を唱えると、同じように鈴の鳴るような音が響く。しかし、足元に描かれていた精霊陣はロナと違ってオレンジ色に光りだした。

『ああ、なるほど。これが陣に集まってきている精霊の色なのかな？』

『そういうこと、ほら。アタシの陣の色がユリアの火属性と混ざってきてるでしょ？』

言われて見てみると、陣の所々がオレンジ色が混ざり始めている。ユリアのほうも同様で、水色が混ざり始めていた。

『へえ、結構綺麗なもんだな』

『見惚れるのはいいけど、アンタもやってみなさいよ精霊魔法。これだけ精霊力が集まってきてるなら苦手な属性でも少しは使えるはずよ？』

『…ええー、これ見ただけでも十分楽しかったんだけど…』

実は結構満足してたり。

『何のためにアタシ達が集まってるのよ…ほら、さっさとしなさい』

『うーん、わかったよ。とりあえず…【炎よ、その猛る力で辺りを
照らせ、火光！】^{キャンドル}』

火属性の一番初級の魔法を唱えてみる…これは小さな炎で辺りを明るく照らす魔法なのだが、やっぱり何も起こらない。

『んー…おっかしいわね。普通なら使えると思うんだけど…ユリアのほうはどう？』

『わたしですか？ちよつとやってみますね。【水よ、その清廉なる
雫をこの手に、水雫！】^{ウォーター}』

ユリアがそう唱えると、右手の指先に10cmほどの水球が生まれた。

ちなみにこの魔法も一番初級の魔法で、ただ単に水の塊を作るだけの魔法だ。

『わたしは使えますねえ…どうしてなのでしょう？』

そう言いながら、手近な木の根元に水球を投げるユリア。

『ねえユキ。あの子が原因なんじゃない？』

『あの子って…あーあいつか』

精霊生りたて。真っ白けっけ。巫女っぽい。と言う存在を忘れかけてたりした。

いや、実際寮に帰ってから居る事には居るので少しぐらい喋った

りはするのだが…なんだか存在感が薄いのだ。

『そういえばあの子、精霊さんだったんでしたっけ？』

『うん。そうなんだよなあ』

外見を変えてからは精霊っぽく見えないが…。

『…サモンエレメンタル精霊召喚で呼べちゃったりして』

『まさか…まあでもやってみてもいいかもな』

ユリアが笑いながら言い、僕も冗談半分で苦笑しながら地面に精霊陣を描いてみようとする。

が、特に思い浮かばない。想像力ないからなあ。

『んー…適当に適当に…』

ロナが放り投げた小石を拾い上げ、思いつくままに地面に線をひく。

『…剣、翼、十字架…ってちょっと描きすぎじゃない？かなり複雑になってきてるわよ？』

ロナがそう言ったので『え？そう？』と答えながら小石を止める。言われて見て絶句…なんかえらい大量に描かれていた。

『剣が交差して2本、それに対を成す翼が2枚、それを囲むように十字架が…12本？時計みたいですね』

うん、確かに…得に意識して描いたわけじゃないんだけど…。

兎に角完成はしたわけで、早速やってみることにする。

『【我が使役する精霊よ、その姿を我が前に顕現せよ、サモンエレメンタル精霊召喚！】』

詠唱し終わった途端にバチツという雷音が鳴る。

え？と思った瞬間。さらにバチバチバチツという雷音が鳴り響き、精霊陣の上で青白い光が瞬く。

『ちよっと！ユキ何したのよ！』

『知らないってば！兎に角離れたほうが…』

そう言いながら近くに居たユリアの肩を押して精霊陣から離れる。ユリアの顔が赤くなってる気がしたが、気にせず4〜5mほど離れる。

『あのっユキトさんちよっと恥ずかし…』

『恥らっとる場合か！』

さらに雷鳴が鳴り響く。

『ねえ、あれってユキの精霊じゃない？』

精霊陣の上には見覚えのある真っ白いのが浮かんでいた。

準備期間（後書き）

えー、作者です。うん、えっととりあえず本当に遅くなって申し訳
ありませんでした。実生活が忙しかったのもあったのですが、別作
を書いていたのも問題でした。

別作のほうはひと段落したのでそのうちアップするかもしれませんが。
兎に角、今後どうぞよろしく願います＞＜

名前と事情（前書き）

更新遅くなって申し訳ない……って毎回言ってるような気がする。
とりあえず、後書きで報告させて貰います。

名前と事情

放電現象のようなものが起きているのを呆然と見ていると、不意に精霊が口を開く。

『……………』

だが雷音が酷くてよく聞こえない…なのでもう2～3歩だけ近寄ると、ようやく聞こえた。

『ううう…まだ眠いよ』

『『……………』』

思わず近くに居たロナとユリアの2人と顔を見合わせ、アイコンタクト。

1秒後、とりあえず1発殴ろう。

そう3人で結論を出して、つかつかと精霊の元まで歩み寄り…容赦なく殴ることにした。

ゴンッ。

『いったーい！何するの！』

殴られた頭を押さえながら精霊が叫ぶ。

ついでに殴った瞬間、放電現象のようなものが消えたが、こちらがそんなことを気にするわけではない。

『いったーい！じゃない！脅かすなよ！』

憤慨しながら精霊にさらに詰め寄る。

『そうですよ！地味に怖かったんですよ！』

ユリアも言ってくるが、精霊との距離は開いたままだ。

どうやらホントに地味に怖かったらしい…でもそんな様子殆どなかったように見えたけどなあ。

『ま、まあまあ。落ち着きなさい二人とも。元はといえばユキが呼んだから呼ばれてきたわけだし』

え？と思いながらユリアと一緒に振り返る。

あの、ロナが、止めに入った…だと！？

『…アンタ達。思ってることがもろに顔に出てるわよ？』

頬をひくひくさせながらロナが言い、ユリアと共に慌てて目を逸らす。

うん。もうちょい表情を誤魔化す訓練したほうがよさそうだ。割と本気で。

『で、ユキ。なにか変わったところある？』

『あ…いや。特に何も変化ないな…』

試しに精霊魔法も詠唱してみるが、やはり発現もしない。

『ホントに変化ないですね』

『やっぱりできないのかねえ』

『でも、精霊自体は召喚されてるし？…精霊魔法が使えないわけじゃないと思うわ』

なにかあるわよ方法が、と続けながら精霊を肩に乗せるロナ。

『それにしても久しぶりね…えーっと、精霊ちゃん』

『普段は寮の中に籠りっきりだからなあ…こいつ』

主に寝てたり、転がってたり、浮いてたり…うん。いつも何やってるんだろうね、こいつは…(汗)

『…閉じ込めてるんですか？』

『いや、自主的に引き籠もってる…そこ、疑いの目でこっち見るな』
じとつとした目でこちらを見るユリアに釘を刺す。

『なんだかいつも眠いの〜』

ふわわわ…と欠伸をしながら精霊が言う。

『それ以前に精霊さんって寝るんですか？』

『いや、一応寝てる場所は度々目撃してるんだが…』

『いえ、そうじゃなくて…寝る必要あるんですか？って意味です』

『?』

意味がよくわからず、首を傾げる。

するとユリアが人差し指を立てながら口を開く。

『厳密に言くと、精霊っていう存在は生き物じゃないはずなんです、だから食事したり寝て休んだりっていうことが必要ないはずなんですよ』

『でも、今眠そうにしてるよな。この前も僕の部屋で夜食食べてたし』

『だからおかしいんじゃないですかって言ってるじゃないですか』

『ふむ…』

契約してエルクワールに戻ってきてから、一応珍しいということまで調べてみようと思書館で関連書籍を探してみた事もある。

だが、結局何も掴めず今に至る。

本当に変な精霊だ。

『あと、一番重要なことをユキトさんに聞きたいです』

『ん? 何々?』

重要なことって何だろうと思いつながらユリアを真剣に見やると、口を開いてこう呟いた。

『なんでこの子に名前つけてあげないんですか?』

『…ああ、言われてみれば…』

ころっと忘れてた。

『たしかにいつも、「お前」とか「こいつ」とかじゃ嫌だよなあ』

そう言いながらロナの肩に乗っている精霊の頭を撫でる。

『可愛い名前つけてあげましょうよ』

『…可愛いよりカッコイイじゃないんだな』

まあ、見た目女の子っぽいから可愛いのが似合っているんだろうけど。

『………トリカリクライトラス2世』

『ちょっと待ちなさい、そこ』

『え?』

ロナに待ったをかけられ、思わずそちらを見る。
一体どうしたんだろう?

『それ、本気で言ってる?』

眉間に人差し指を当てながら聞いてくるが、何故止められたのかよくわからないまま答える。

『もちろん本気で言ってるんだけど…』

ユリアとロナと精霊がはぁ。と溜息を吐き。

『却下よ』

『却下ですね〜』

『それなんか嫌〜』

3人揃って却下された!?

ううう、なんだよ。結構真面目に考えたのに…。

もしかしてとは思っていたが、やっぱりネーミングセンスないんだろうか僕。

子供の頃飼っていた犬にも思いついた名前をつけようとしたのだが、家族全員から猛反対されたのを思い出す。

…今後はもっとよく考えてみるかと思いはするが、吉と出るかは微妙だ。

と、それよりも今はこいつの名前だ。

『じゃあ、二人はどんなのが良いと思うんだ?』

『え? うーん。そうね…』

『うーんと…』

二人が腕組みして難しい顔をする。そして、1分ほど経った瞬間に同時に手を打つ。

『『ミーちゃんなんてどう?』』

『いや、犬猫の名前決めてるんじゃないんだぞ？っていうか同じ名前思いついたのかよ！？』

さすがにそれはないだろうと突っ込む。

『でも、かと言ってユキの名前をつけるのは絶対ダメよ。既に名前じゃないもの』

そこまでひどいのかよ。と辟易しながら、他に良い名前がないか精霊を眺めながら考えてみる。

ふわわわわ…とまた欠伸をして目を細める精霊。

真っ白…小さい…白巫女服…女の子…長髪…だめだ、適当にキーワードを挙げてみたけど思いつかないや。

『いつその事”名無し”にするか？』

『それ、あんまり変わらない気がするー』

ぶんぶんと首を振る精霊。

うーん…と考えていると、ふと巫女服の帯の部分が目に付く。

『あ、結び目…結ゆいっているのはどうかな？』

『結ちゃん？あ、それいいかも』

『可愛い名前ですし、良いかもですね』

二人も結構気に入ったらしい。

本人…いや、本精霊はどうなんだろう？

と、精霊に視線を向けなおすとキラキラした目でこちらを見てくる。

『それがいい!』

『じゃあ、決定。お前の名前は”結”な』

苦笑いしながら、ぽんっと精霊の頭に手を置く。

だが、次の瞬間。意識が飛んだ。

『…は?』

何の前触れもない突然の自体に慌てて周囲を見渡す。

だが、ロナもユリアもいなくなっているし、少し離れたところに建っていた校舎も近くに生えていたそこそこ大きな木も無くなっている。

かわりに広がっているのは草原。

夕日が差し込み、オレンジ色の光が辺りを照らしている。

『どこだ?ここ…』

そう嘆いて、呆然とする。

さっきまで校庭に居たはずなのに、一体何事なのだろうか。
とにかく、じっとしていても何も判らないのでその辺を歩いてみよ

うと思い、一歩踏み出す。

『ようやく、お話できますね』

『え?』

声が聞こえて、歩き出そうとしていた体の動きを止める。

もう一度周りを見渡してみるが、声を発した人物は見当たらない。

『気のせい…じゃないかな?』

『はい、声だけで失礼しますが、ようこそです』

どうやら声だけらしい。

会話は可能っぽいので、そのまま声をかける。

『とりあえず質問いいかな?』

『どうぞです』

『まず、ここはどこ?そして君は誰だ?』

『お答えします。まず、ここはどこでもない場所です。場所と言うより空間と言いましょいか』

『…ああ、そうなんだ』

だからいきなりこんな場所に出たのかと、理解はした。

精霊の頭に軽く手を乗せただけでこの空間に放り込まれたのは納得できないが。

『そして、わたしはつい先ほど貴方が触れた精霊で、前回召喚された英雄です』

『……………はい？』

たっぷり10秒ほど固まってから問いかける。

『あはは…驚くのも無理はないですねゝとりあえず事情をお話しますので楽になさってください』

『…あ…うん。了解…』

なんか色々と呆然としながら草原に寝っころがる。

『…楽になさってくださいとは言いましたけど…寝る方は初めて見ました』

『いや、うん、悪い。僕も色々と動揺してるみたいだ』

指摘されて、胡坐をかこうとして、正座にする。

『…今度は正座ですか、中々礼儀正しい方…なのかな？』

『さ、さあ…？』

相手が年上かさえもわからないし、正座が正しいのかさえもわからない。

『では、改めまして。お名前つけてくださってありがとうございます』

した』

『あー…でも、前回召喚された英雄ってことはちゃんと元の名前があるんだよね？』

『ええ、小日向美野里こひなたみのりっていう名前でした』

『…と言うか英雄って女の子だったのか』

『はい、でもお気になさらなくて結構ですよ？既にこの世界にはわたし自身は居ませんし』

『…それは、元の世界に還ったってことか？それとも…』

その先を口にしようとして、思いとどまる。
だが、あっさりと向こうが答えてくれた。

『あ、大丈夫です大丈夫です。ちゃんと無事に還りましたから』

『そっか』

ちよつとほつとする。

まさか、帰れなくてそのまま永住とか、もしくは…うん、その先は考えないでおこう。

『つて、うん？還ったのになんでここにいるの？』

『えつとですね、還る際にはみ出た魂が精霊になったのですが…意味わかります？』

『…いや、全然わからん』

精霊自体についてはさっぱりわからない。

図書室で少しは調べたとはいえ、専門的なところまでは読んでいないからだ。

『ではでは、すこし長くなりますが、ご静聴願います』

話をまとめると、こうなるらしい。

800年前に出現した魔王が起した災いに対し、帝都ウィンベルの王族は英雄を召喚することで対応した。

その際、こちらの世界によばれたのが、この精霊の元となった1人の少女。

少女は仲間と共に魔王が居るとされている居城を見つけだし、無事に剣と魔法を使って退治した。

脅威は去り、世界は平和になり、あとは少女が還るだけ。

だが、少女が還る際に1つだけアクシデントが起こった。

こちらの世界を冒険しているうちに、魂が成長したため、世界と世界を渡る際の通り道を通れなかったらしい。

その為、少しだけ魂をこちらの世界に置いて行く事となった。

『で、その残った魂が君なわけね』

『そうですそうです』

『…じゃあ、なんで僕のところ？』

ここが一番聞きたいところだ。

『んー…ただの偶然だと思いますか？』

質問を質問で返され、少し悩んだあと答える。

『…物事には必ず意味があるって友人がよく言ってたんだけど、僕もそう思う。だから僕のところ君が来たのは必ず意味があって、何か理由があるんだよね？』

『ふふふ、聡い子は好きですよ』

そう言ったあと、少し間を空けて精霊が話し始める。

『まず、倒したはずの魔王が生きている。という可能性が出てきています。心当たりありますか？』

『…なくもない』

ウィンベルでトラブったことを苦々しく思い出しながら答える。
すると精霊から「はぁ」と溜息を吐く声が聞こえた。

『むう…ちゃんと倒したと思ったんですが…』

『封印したとかじゃないのか』

『封印しただけじゃ根本的な解決には至りませんからね。誰かが解いちゃっても困りますし。だから討伐したはずなんです』

でも実際800年前の人物に会ってしまっている。

800年も生きていられる種族は、僕の調べた限りでは居ない。
となると、人間をやめて体を改造したという魔王ぐらいしか思いつ

かない。

討伐に失敗したことは明白だ。

『まあ、生きているなら討伐するだけです。そのために貴方のところに来た…と言うのが本当のところですよ』

『いやいやいや。僕なんかより強い人はたくさんいるだろう』

なんで僕なんだと冷や汗を背中に感じながら突っ込む。

だが、知っているとはかりに精霊は答える。

『そうですね。貴方より強い人はたくさんいらっしゃいます。ですが、わたしの能力スキルを使えるのは貴方ぐらいでしょう』

『……異通者…だからか？』

心当たりはそれぐらいしか思いつかない。

『ええ。確かにこっちの世界で異通者の方はそこそこいらっしゃいますが…タイミングよく精霊陣を使ってくれる人が貴方しかいませんでした』

『なん…だと…』

ってことはアレか。あの時精霊陣を使わなければ、僕はこの面倒事に遭わずにすんだはずなのか。

そう考えてしまうとずいぶん落ち込む…なんてタイミング悪いんだ僕…（汗）

『まあ、どちらにしろ貴方に助力を求めていると思いますが』

『え？なんで？』

『だって中々いませんよ？貴方みたいに戦う事に慣れた向こうの世界の人って』

『…………何故だろう。納得したくないのに納得できてしまう』

確かに無駄に色々知っているし、訓練されていると思う。主に友人のせいだ。

だが、このまま魔王討伐に参加させられるわけにはいかない。僕が望んでいるのは速やかな帰還である。

『でも、魔王討伐なんてしたくないんだけどなあ』

『ええー、それじゃあずっとこの世界に居るつもりですか？』

…うん？

『…え？普通に還ればいいんじゃない？』

『その魔王が持っている力のせいで世界と世界を繋ぐ道が閉ざされているんですが…知らなかったんですか？』

『はあ！？』

初耳である。というか、え？なんで？と言うのが本音だ。

『え？じゃあ…今のまま還ろうとしても？』

『世界と世界を隔てる壁に衝突して戻ってくるだけですわね』

『…ってことは、還るためには魔王を倒すしかない…のかよう』

両手を地面につき、愕然としながらほんの少しの希望を持って精霊に問いかける。

『そうなりますので、諦めてくださいな。それからよろしくですよ』

嬉々とした声音でさら々と残酷に告げられた。

名前と事情（後書き）

はい、ご愛読ありがとうございました。そして2ヶ月近くも待たせてしまい。申し訳ありませんでした。

…というか、ホントすいません。

ここ1ヶ月ほど会社が忙しくて、家に帰って寝るだけという習慣になっしまいました。

PCをつける暇もなかったので、今回の更新は本当に遅くなっしまいました。

今後はもっと早く更新したい…というのが本音なのですが。生憎と今現在も会社が忙しく、執筆に時間が取れる気がしません（＞＜

ですが、出来る限り時間を取って今後も更新を続けて行きたいと思っていますので、どうか暖かい目で見守ってくださいると幸いです。

では、次回の更新でまたお会いしましょう！

能力

『はあ…』

『まーまー、仕方ないじゃないですか元気出しましょうよ』

そんなやりとりをして、肩を落とす。

『それじゃあ、お話続けますね？』

『…この空気で話を続けようとするのは凄いなあ』

呆れた目をしつつも苦笑する。

相手がどこにいるのかわからないので見渡すだけだ。

精霊…結に感化されたのか、僕もポジティブに考えることにした。

どうせこのままでは還れない。ならば、もうやるしかないだろうと。

『と、言っても殆ど説明しちゃいましたが…何か質問は？』

『んつと…まず、魔王がいる場所って判るか？』

『…ぼんやりと気配と方角を感じるぐらいならできますが、はつきりとは…』

声が申し訳なさそうに謝る。

まあ、判ってたら苦労しないわな。

『そっか…じゃあ次。元々精霊魔法を使うために結と契約したわけ

なんだが、僕に精霊魔法の行使は可能？』

『はい、わたしと触れ合っていれば行使可能です。属性は全部使えます』

『…は？』

勉強していたことを思い出す。

精霊魔法は一人一人適性があり、全種類を使える人間は本当に極小人数らしいということ。

『全部って…そんな才能あったのか僕』

『才能があつたってわけじゃないですよ？わたしがサポートして初めて使えますし』

『ふうん。そっか』

『才能ないって言われたのに、平然としてますね〜』

別に才能がなくても構わないんだが。

僕が目指しているのは強くなることじゃなくて、平穩無事に元の世界に還ることだし。

『まあ、全部使えるっていうのは目立ちますから、何種類か使えてっていう設定にすればいいんじゃないですか？』

『ん、それ採用』

全種類の精霊魔法が使えると知られたら流石に騒がれるだろう。

そういうことを避けるためにもそういう設定は必要だろう。
：誰にも見られていないなら全力行使するが。

『あと、使えるのは貴方専用の能力スキルですね』

『スキル？魔法…じゃないのか？』

『ええ、かなり便利ですよ』

『へえ、じゃあ詳しく教え…』

そこまで言いかけた瞬間。視界が歪む。

ゴミでも入ったかな？と思いつながら目を擦るが、あまり変わらない。

『？あら、もう時間ですかね』

『時間？』

『急遽創りあげた空間ですからね。あんまり長い時間固定できないんですよ』

『…じゃあ。質問タイムは終わりかな？』

もう少し色々聞きたいことがあったんだけど…。

そう思っていると、精霊が陽気な声で答えた。

『いえ、向こうで結わたしに問いかけてくれればちゃんと答えますよ』

『え、じゃあ何のためにこの空間用意したんだ？』

本気で理由がわからなかったので素で問いかける。

『わたしの存在は特殊ですから、あの場で説明するのはまずいかなあと思います』

『…ああ、たしかに…』

ユリアとロナに見られても大丈夫とは思いますが、秘密っていうのはどこから漏れるのかまったく予想がつかない。
事情を知っている人間は極力減らしたほうがいいだろう。

『…それに、ユリアちゃんに知られると質問責めになりそうですし』

『…あーうん、光景が簡単に目に浮かぶ…ありえるな』

英雄話が大好きなお姫様だ。

英雄と知ったら絶対に朝から晩まで質問責めだろう断言できる。

『それじゃあ、残りは向こうでお話します』

『ん、わかった。色々ありがとな』

そう言った瞬間。視界が真っ白に染まった。

気づいたら、ロナの肩に乗っていた結の頭に手を載せた状態だった。

『ユキ?』

『ユキトさん?』

『…え、どうした?』

『いや、アンタが急に動かなくなったんでどうしたのかと思って…
つていうか何気に手が重いんだけど…』

ロナが鬱陶しそうに顔を歪ませるのを見て、慌てて手をどける。

『ああ、ごめん。ちょっとぼーっとしてた』

『ふふふ、わたしの頭の触り具合がよかったんですよきつと』

えへんと、胸を張る結。

『いや、そうじゃないんだが…つていうか時間とか経ってなかったのか』

『特殊空間でしたから』

『え? 何の話ですか?』

ユリアが不思議そうに首を傾げる。

『いや、なんでもない。こっちの話』

『えーなんですかそれ! 気になるじゃないですか!』

憤慨してユリアが詰め寄ってくるが、説明のしようがないので目を逸らす。

『ほらほら、結の名前も決まったことだし、改めて練習再開するわよ』

ロナが杖を掲げて言う。どうやらどうでもいいらしい。

『ああ、そうだな』

『むう…でもユキトさんどうするんですか？使えないんじゃない？』

『うーん。たしかにそうね…』

ロナが困ったように僕を見る。

『あ、じゃあ僕は適当に見学してるよ。見てるだけでも勉強になるし』

『だめよ。やってみれば出るかもしれないし、片っ端から魔法詠唱してみなさいよ』

『えー…』

そう答えながら結を見る。

どうしようと目で訴えるとニツコリ笑う。

『（あ、わたし念話もできますから喋れますよ？）』

『（ああ、こうやって会話もできるのか…でもどうしようか？）』

『（んー…今後のためにも練習しておいたほうがいいですよ。使いたい属性とかありますか？）』

『（特になんだなあ…）』

正直全部使えるというなら全部練習したいぐらいだし。

『（むう…優柔不断ですねーじゃあ今回は火にしておきましょうか）』

『（あいよ、了解）』

そう答えると結が浮かび上がり、僕の肩までふよふよと飛んできた。そのまましっかりと僕の左肩にしがみ付く。

『あら？そこだと危ないわよ？結ちゃん』

『だいじょぶですー』

『まあ肩なら別に大丈夫か。ユキ、一応気をつけなさいよ？』

『うん了解』

歩きながら答え、自分で描いた精霊陣の上に乗る。

『（そういえば、このまま使って大丈夫か？）』

『（問題ないです。でも変に思われても困りますし、ちょっと細工しましょうか）』

細工？と思いつつ、結を見ると薄らと光り始めた。
目を凝らさないと判らないレベルだ。ロナもユリアも気づかないだろう。

『（えい）』

短い声と共に、結が手を振ると僕が描いた精霊陣がオレンジ色に光りだした。

だが、ロナとユリアの精霊陣のように鮮やかには光ってはいない。

『（これでいいよ。光はフェイクだから）』

そう言われたので、このまま使ってみることにする。

『じゃあ、まずは…【炎よ、その猛る力で辺りを照らせ、火光^{キャンドル}！】』
ぼっという音と共に突き出していた指先に小さな火が灯る。

『おお、できたできた』

そう言いながら指を少し動かしてみる。

消えもせずに指先を追うように火が追従してくる。

うん、魔力もそんなに減ってない…これが精霊魔法ってやつかあ。

『つて、ユキできるじゃない』

『あれ？でも精霊陣は動いて…？』

精霊陣のそばまで寄ってきて、陣をなぞるユリア。

『動いてはいるけど…精霊力が少ない?』

『…精霊力って精霊魔法の源だよな? たぶん、僕にはあんまり使えないからこんな感じなんじゃないかな?』

そう言って、適当に誤魔化す。

…ってさっきから僕、誤魔化してばかりだな…(汗

『そう…なんででしょうか?』

『んー…アタシもそんなに詳しいわけじゃないし、でもまあ出来るんだしいんじゃない?』

『そうそう、使えるんだし問題ない問題ない』

適当に答えながら、ふらふらと指先の火を彷徨わせる。

意外と火が消えない…と言うかコレたしか命じないと消えないんだっけ。

試しに『消えろ』と念じてみると。ふっと火が消えた。

『よっし、ユキも使えるようになったみたいだし。バシバシ練習するわよ』

『『おー』』

ユリアと結が掛け声を合わせた。

『疲れた…』

『ですね』

寮の自室のベッドに寝転びながら嘆く。

あれから2時間ぶつ通して精霊魔法の練習を続けた。

いくら自己魔力の消費が少ないとはいえ、魔法を連続で使用するの
は精神的に疲れる。

『でも、大分慣れたんじゃないですか？』

『まあ…ね』

慣れというか、コツみたいなのは掴んだ。

精霊魔法を使えもしなかった頃に比べれば十分な収穫だ。

収穫で1つ思い出す。

そういえば結が僕専用の能力があると言っていたのを思い出し、跳
ね起きてベッドの上に座り込む。

『そうだ。能力^{スキル}について教えてくれないか？』

『あ、まだ説明がまだでしたね…ううんと』

ふよふよと空中を浮遊していた結が考え込む仕草をする。

『なんか問題あるのか？』

『いえ、そういうわけじゃなくてですね…ちょっと量が多いんですよ』

『…どんだけあるんだよその能力^{スキル}って…』

呆れながら言うのと、結も同感なのか苦笑いで答える。

『とりあえず、日常生活でも便利なスキルを幾つか教えますね』

そう言ってから机の上に放っておいた手のひらサイズの生徒手帳の前に立つ結。

『これ、使ってもいいですか？』

『ああ、殆ど使ってないし。他人に見せる物でもないしな』

『じゃあ、ちょっと失礼しまして…と』

机の端にあった羽ペンを物質浮遊魔法を使って浮かべ、手帳に書き込み始める。

しばらくぼーっと待っていると。『ふう…』と言って結が魔法を解除し、ペンが机の上に落ちる。

『どれどれ…』

書かれていたのは1ページだけで項目は3つ。

上にスキルの名前が書かれており、その下に詳細が書かれているようだ。

【索敵】

周囲を探索する。

【隠蔽】

自身の存在感を薄くする。

【増幅】

威力等を底上げする。

『【索敵】 【隠蔽】 【増幅】 ね…索敵と隠蔽はなんとなくわかるけど増幅って?』

『同時使用で効果が発揮するタイプですね。呪文詠唱をしながら発動させて威力等を増幅する能力です』

『しかし、使えるのかコレ?…あと3つだけなら多いって程じゃ…』

いまいちメリットが把握できない。

増幅はまだわかるが索敵とか隠蔽とか必要あるんだろうか?

『む、なんですかその言い草は、かなり重宝するんですよ?あと3つしかないのは、ただ単にわたしが疲れただけです』

『いや、うん、特殊な条件下では使えるんだろうけどさ…あと途中で諦めるなよ』

『まー試しに使ってみるといいですよ。そうすれば有用性がわかるはずです』

『使用法は?』

『使用するって念じれば使えますよ』

ふむ…んじゃ、試しに…。

”能力【索敵】発動”

スタートアップ

そう思った瞬間。キンツという金属的な音が頭に鳴り響き、頭に何かが入り込んでくる。

情報が直接流れ込んでくる感じで、自分の周囲に何があるのか、どんな人がいるのか、そんな情報が入り込んでくる。

ってなんかぼやけた感じだな…もっと強く念じればハッキリするのかな？

そう思い、かなり強く念じてみる。が、

『うえええ…』

吐きそうになって思わず口元を押さえながら呻く。

先程よりもっと明確な情報が頭の中に流れ込んでくるような感覚で、はつきり言って気持ち悪い。

『あ、索敵は強く念じちゃだめですよ！意識持ってかれます！』

慌てた様子で結が言い、もっと早く言えと目線で訴える。

吐き気に耐えながら、念じる力を縮小させると情報が送られてくる量が少なくなり、吐き気がようやく止まる。

…倦怠感が残ったが。

『ふーん。なるほど、なるほど…』

情報を一定量を頭に取り込むと距離感が掴めるらしく、しばらくすると大体わかった。

だが…何と言うか。

『どうですか？使えるでしょう？』

『…使えるには使えるんだろうけど…どうせなら視覚的にもっと判りやすい感じに使えればいいのになぁと』

そう嘆いた瞬間、頭の中に黒い円形の図が生まれ、白いグリッド線が敷かれた。

予想外の事態に思わず固まる。

その様子を怪訝に思ったのか、結が尋ねてくる。

『？何かしました？』

『いや、これどう説明したらいいんだ？』

思わず手のひらを額に押し付けながら答える。

『結。質問なんだが、索敵ってレーダーみたいに頭の中で視覚化できるか？』

『いえ、そんなこと出来ないと思いますが…もしかして、出来たんですか？』

『…出来ちゃってるんだよなぁ』

なんなんだこれ。

この中央の白い点は…僕だよな？この青い点は結っぽいし…じゃあ

周りの緑色の点は寮に住んでいる人かな？

『うーん。わたしもスキルの仕組み詳しく知っているわけじゃないですから、なんとも言えませんが…出来るならいいのでは？』

『まあ、便利そうだから別にいいんだけど…』

なんていうか…凄くゲームっぽく見えるんだよねあ。

ゲームという単語で思いついた仮説があったので結に問いかける。

『なあ結、この世界の事ってどこまで知ってるんだ？』

『基本的なことなら…って、ゲームとかの世界じゃないですよ。ここは言うならば別の空間世界、異界です』

『やっぱりそうだなあ…どう見てもゲームっぽいけど』

既にテンプレ的なものが揃い始めているのでゲームの世界にでも迷い込んだんじゃないかと危惧してしまう。

そんな事を悩んでいると、不意に結が肩を叩く。

いつの間にか机の上から肩のところまで飛んできていたらしい、顔は心配そうな顔だ。

『…ところで、寝ないでだいじょぶなんですか？』

『へ？』

『そろそろ寝ないと明日がまずいと思うんですけど…』

結に言われて枕元に置いておいた腕時計を見る…12時過ぎてる！？

明日は例のバトルロイヤルの事を説明するために急遽学年集会が開催されることになっている。

そのため明日は少し早く起きなければいけないのをすっかり忘れていた。

『うあっやばい！じゃあ僕はもう寝るよ。おやすみ結』

『はーい。おやすみなさいです。ユキさん』

『お前もそう呼ぶのかよ…まあいいけどさ…』

なんでこいつもロナも略して呼ぶかなあ？
そんなことを考えながらベッドに横になった。

能力（後書き）

毎度遅くなってしまうし訳ないと心から思っている作者です。

うん、今回はもっと早く更新できていたはずなんですけど…ここ一ヶ月また会社が忙しくなっちゃったのですよ。家に帰ってきたらもう寝る事しかできないとかね…ちよっと酷い＞＜

まあ、最近ようやく落ち着いてき始めたので、もしかしたら更新が少しだけ早くなるかもしれません。

こんなダメダメな作者ですが、もしよろしければもう少し、もう少しだけお付き合いしていただけると嬉しいです。

では次回またお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0592j/>

異界を旅する者

2011年10月23日04時38分発行